THE KAIZO

改造

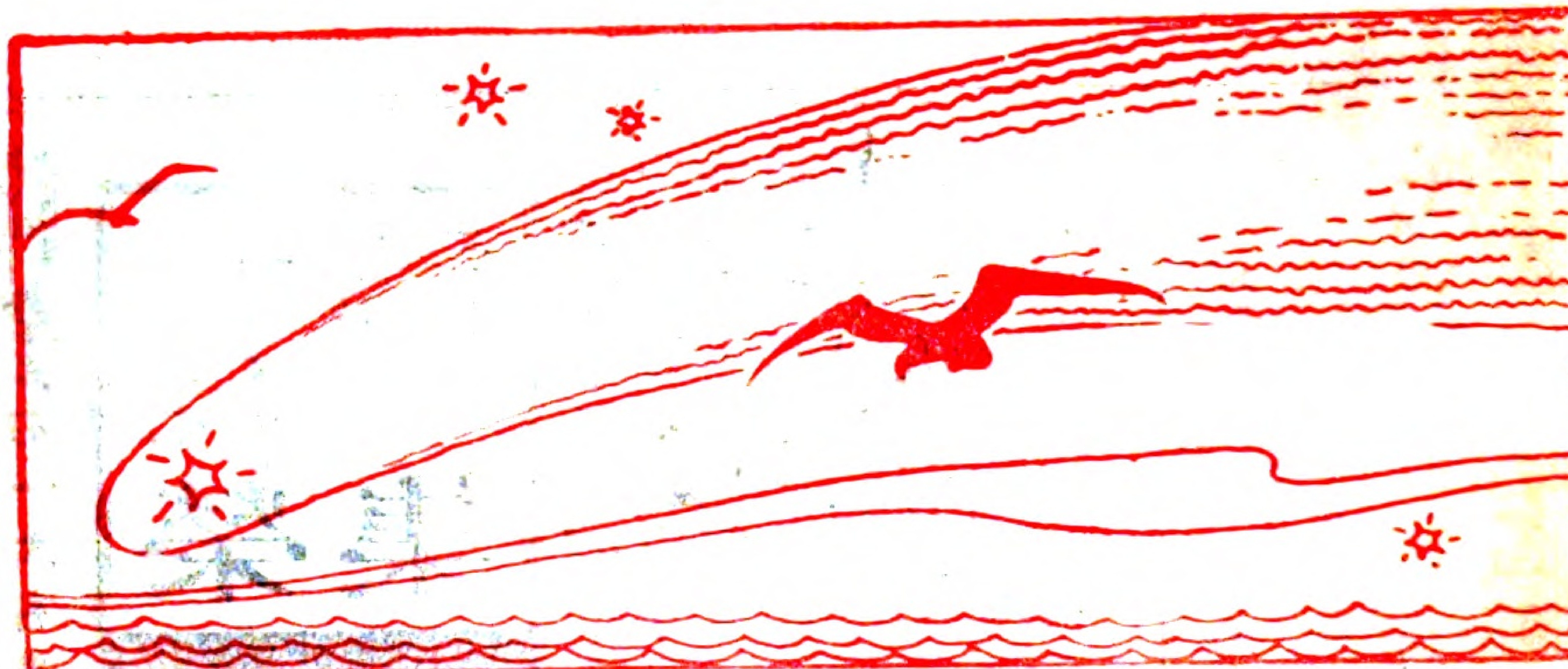
拾壹月号

1921





改造十一月號目次



加能作次郎氏著、岡　落葉氏裝幀（四六判、羽二重表裝、箱入、金箔押 紙數三五四頁價貳圓拾錢送料拾七錢）

（最新刊）

處女時代

豊麗の肉體を有し、既に婚期に達して青春の血に燃えて居る處女が戀を得んとして得る能はず、幾度かならんとして成らざる結婚の悲しみに焦躁の心は徒らに募り行き、抑へがたき性の誘惑と鬪ひつゝ懊惱苦悶せる處女の心理を作者獨特の情味ある筆を以て深刻犀利に描寫せる名作は此長篇「處女時代」である。其他「法界娘」「躑躅」等の諸作何れも文壇稀有の名篇として喧傳せられたものである。

ストリンドベルヒ原著　柳　英彦譯（四六判、細活字印刷、參八五頁 定價壹圓七拾錢、送料九拾錢）

ブリウッツクの完譯

青卷

現代の聖書と呼ばる、世界的文豪の名著！

諸威の大學者デアーエル氏本書を評して曰く近代のあらゆる聖典よりも活大で、ユーランの如く雄大であり、豫言者イザヤの如く義憤に燃え、バイブルの如く穩密の靈に滿たされ、あらゆる小說よりも面白く、あらゆる論說よりも鋭く、カバラ神祕哲學の如く神祕であり、スコラ哲學の如く論說鋭敏であり、ルツソオの懺悔錄の如くに眞實であり、何人も匹敵すべからざる獨創の印象を有す。

東京市麹町區飯田町壹の貳　株式會社　天佑社　（振替東京一〇一二八番）（電話九段長一一七三番）

島崎藤村先生誕辰五十回 記念出版 全十二巻 豫約刊行

藤村全集



藤村全集成る！　我が文壇の巨匠島崎藤村先生が、今年誕辰五十回に會せるを機とし、其の全作を年代順に輯めて十二冊の大巻となし、以て後世に遺すの定本たらしめんとす。先生は、我が日本文壇に於ける詩の創始者にして、當時の作は、實に我が國民的情熱を謳へる代表的國民藝術なりき。而して詩より小説に轉ぜる先生は、いかに小説界に新境地を拓きたるか。當時勃興し來りたるリアリズムの精神が、いかに力强く先生の諸作の裏に活かされたるか。更にまた、先生の最近の作品が、新しき生命の創造とも云ふ可き人格的藝術の典型として、いかに崇高なる魂の苦闘を示せるか。又、先生の感想隨筆の類が、いかに深き叡智と豊かなる情懐とを以て充たされたるか。是れ何人の前にも餘りに明かなる事實ならむ。こゝに本全集を刊行するに當り、我が新文學の主産物として、我等が時代の光榮を不朽に傳ふるものとして、周ねく天下の智識階級に薦むる所以也。

東京市麹町區内幸町一丁目
電話銀座七八三番
振替東京二九八八八番

豫約募集

第一巻 詩と散文

第二巻 詩と散文。千曲川のスケッチ。創作六篇。

第三巻 破戒。創作二篇。

第四巻 春。

第五巻 創作十七篇。新片町より。

第六巻 家。

第七巻 創作十七篇。生ひ立ちの記。

第八巻 創作十篇。後の新片町より。

第九巻 佛蘭西の旅にて。櫻の實の熟する時。

第十巻 海へ。幼き者へ。ふるさと。

第十一巻 新生

第十二巻 エトランゼエ。創作二篇。飯倉だより。年譜。

申込期限 十一月三十日

體裁

各冊四六大版紙數(約)六百頁
背皮布表紙、天金。特製極美本
用紙佳良、印刷鮮明。毎巻著者の肖像(コロタイプ版)挿入

略規

一、非賣品 豫約者にのみ頒つものとす
一、拂込 毎月拂金參圓八拾錢
　一時拂金四拾參圓五拾錢
　送本料(一冊市内六錢。内地拾貳錢。臺・樺・朝・支十九錢。外國三拾八錢)
一、申込 參圓八拾錢を添へ申込む事
　此申込金は最終の會費に當つ。
一、配本 大正十一年より向一箇年間
　毎月一冊宛全十二冊

内容見本及規定 申込次第進呈す 左記に申込あれ

豫約申込所

東京市牛込區矢來町
電話番町八〇七 八〇〇八番 八〇〇九番
振替東京一七四二番
新潮社

麹町區内幸町一丁目
電話銀座七八三番
振替東京五二三九八
國民圖書株式會社

東京日本橋通四丁目
電話本局五一番
振替東京一六一七番
春陽堂

藤村全集刊行會

実業之日本社長　增田義一新著

最新刊

思想善導の基準

定價壹圓五拾錢　四六判總布
郵税八錢　函入三百五十頁

危い哉、危い哉、近來我國民の思想著しく動搖し、今にして之が善導を計らざれば益惡化するの惧あり。著者常に我帝國の現狀を慮り、思想の動搖を憂ふること切なり。玆に椽大の筆を呵して世の青年諸君の迷夢を醒し、其歸趨を知らしめんが爲本書を成す。東西幾多の活實例を拉し來り、古今の金言名句を引き、諄々として諭ふること恰も慈父の愛子に對するが如く、而して所說急激に流れず、保守に失せず、歐米の大勢に鑑み、我國情を顧み、而も新時代に順應すべき健全なる思想を鼓吹す。論旨堂々、愛國の熱情全卷を貫き、一讀肅然として襟を正さしめずんば非ず。眞に是れ國民思想善導の基礎標準にして、危機に瀕せる我思想界は本書によりて始めて救濟されん。世の青年諸君は勿論、經世家教育家父兄諸君の愛讀を望む。

暗澹たる我が思想界に一大光明は投ぜられたり

内容一斑

國民思想の善導……思想問題の取扱方……戀愛心理に感染する勿れ……社會の重大病根……荒み行く人心の良藥……進んで難局に當るの氣魄……人を動かす力……心の偉力……興國民の彈力……新努力主義……新人今後の鍛錬……消富論……人格價値の錯誤……精神生活の價値……精神文明への反省……精神の抵抗力を強くせよ……民心を如何に指導すべきか……新士道の提唱……人生淨化の必要……其他十數篇

東京京橋南鍋町　實業之日本社　振替東京三二六番

堺利彦先生著

樂天囚人

四六判箱入
定價一圓八十錢
送料十錢

此書は狂暴、不平、怨恨、嫉毒、殘忍、無耻、悖逆、を以て世に目せらるゝ社會主義者が人の子として親として夫として友として將た人類の一員として宇宙の一分子として如何なる態度を持するかを其獄中生活に於て卒直に露骨に赤裸々に發揮せる者之を一言すれば社會主義者の安心を語れる者。附錄、小說『白頭の戀』あり。

堺利彦著
賣文集
定價一圓 送料十一錢

堺利彦著
ルソー自傳 **赤裸の人**
定價九十錢 送料八錢

カウツキー原著 堺利彦譯
社會主義倫理學
定價一圓五十錢 送料十錢

中島德藏著
ヴント **倫理學綱要**
定價二圓 送料十錢

バーナード・ショウ作 堺利彦譯
人と超人
定價九十錢 送料八錢

幸德秋水著
基督抹殺論
定價一圓三十錢 送料十錢

ゴルハム原著 久津見蕨村譯
基督教罪惡史
定價一圓二十錢 送料十錢

高島米峯著
現代世相批判 **癪の蟲**
定價一圓八十錢 送料十錢

東京市小石川區原町 振替東京一五六八六 丙午出版社
東京小石川區原町 振替東京一三五三 鷄聲堂



==((改造十一月號))==

活人費の刪減と軍備費の增加

株屋が大臣となる以上、教育費の刪減なぞは當然來るべき運命のみ二枚舌を攻めるに勇氣と忍耐を缺げる教育家諸君の頭上にはモツト甚い辱が落ちかかつて來るだらう。理想もなければ、人格的操守もなき現代の政治家は學問や、人格やが人類を率ゐる基本であることも知らないのである。無知の國民はまだ僻村、陋地に充滿するに拘らず一千五百萬の教育費の大斧鉞は少々痛いことである、現代の政治家によつてはこの一千五百萬の刪減にドレだけ自分の腦漿を痛めた結果であらう、頭の惡いものには兎に角仕方もない譯である。

一軍艦の建造を中止すれば三千萬の黄金が浮び出る、二ケ師團を廢止すればそこに幾千の金が浮び出る、安田のやうな高利貸でないものでも直に分明する問題だ、教育事業は活人だ、活人の費用を刪減して

機關の擴張を計るの理由は何れにある、平和聯盟の會議にサーベルが飛出し、チヨン髷の將軍がノコ〳〵出掛ける不思議な時代だ、大學の昇格騷ぎに僞教育家が上下する時代だ、こうなると二部教授がナンだ、義務教育延長がナンだと云ひたくなる。囚はれたる教育家よ、勇氣なく、時代思潮を解せざる教育家よ、諸君への辱めは今後モツト深刻になるであらう、諸君は遲鈍を以つて過せられておる、舊世界の人として過せられておる、そんなことでどうして活人の大事業が完成されやう。新たなる世界へ、道德的な世界へ、それは諸君の手によつてのみ導かれる、それは學童に對して軍備の縮少が平和への道程としての一歩であることをよく〳〵諒解せしむることだ。



アインスタインの宇宙論と思惟の究極

理學博士　石原純

一

私たちはこの現實に生きて審さにそのありの儘の姿を見てゆきますと、そこにすべての完たきものを見出し得ないことに、しみじみと悲哀を感ぜずにはゐられません。深く考へるものに取りてそれはまた堪へ難い苦惱なのであります。永遠なるものへの憧がれ、究極なるものへの理想を求めることは、ほんとうに私たちのいのちの救ひでなければなりません。

私たちはこの現實に何故に完たきものを見出し得ないかを尋ねて見ることが必要です。それは恐らく現實にはたらく

私たちの個性そのもの、從つてまた對象に接受する感性そのものに於ける缺陷に基くのでもありませう。私等は自分たちの貧しいいのちのなかに、完たきものの俤を探りもとめて、その究極としての普遍的な神性を想像し、敬虔な祈禱をもつて之を思慕讃仰することによりて、そのはるかな理想への道を辿らうとしてゐます。なほまた私たちは個々の異れる感受性のなかから永久的な不變的なものを抽き出して、あらゆる自然の相を確實に認識することに努めてゐます。この認識の成果としての自然科學はその絶對的な普遍的な意味に於て、直に私たちの理想的神性に屬する知識でなければなりません。かやうにして科學に於ける崇高嚴肅な感じは宗教に於けるそれと相通ずるものであることが了解せられるでせう。そこに私たちは自分等の思惟の究極の向ふ處を仰視することが出來ます。

二

究極なるものを求めてゆくとき、私たちは先づ自分等のいのちの棲息する現實の宇宙の大さと深さとその内容の細かさとに眼を惹かれずにはゐられません。あの燦然としたおほくの星を包容する天空はどこまで大きく廣いのでありませうか。顯微鏡下に錯雜するいろ〳〵な物質の組織はどこまで細密なのでありませうか。私たちは次で現象の諸相をながめます。さうしてそのあらゆる變轉を現前する時相は果して何れの遠きに始まりて、いつまで續いてゆくのであらうかを思ひ究めますと、そゞろに神秘の世界に導かれずにはゐられません。

併しながら神は現實を離れて天上に孤立するのものではないのです。私たちの勝手氣儘な想像がほんとうの神を生むものではないからであります。私たちの普遍的な思惟の究極こそ神の知識と合致するものなのです。私たちのひたすらな努力が之に向ふときに、いままで神秘のかなたに閉ぢられてゐたものもやがて私たちの現實のまへに啓かれるやうに

なるのです。さうしてぼんやりとしてゐた想像の幻影が、寧ろ瞭きりした實在のすがたとしてあらはれるやうになります。思惟の究極を必然なるものとして私たちに持ち來すときに、私たちはしみじみと科學の驚異を自分ながらに感得せずにゐられません。

三

「今日の幾何學者は無限の距離に於て實際に存在する空間の性質に關して何ごとをも知りません。彼はこの現在の空間が永劫の過去及び未來に於てどんな性質をもつかを知りません。………彼は只此處と現在とに於けるものとしてそれを知つてゐるだけです。けれど彼の範圍を超えて今何ごとをも知らない彼處と彼時とがあります。やがては夫れを知るときが來るでありませう。」

これは今から五十年前に新らしい幾何學の研究者であつたクリッフォードが云うた言葉でした。その當時の人々に先だつて彼は既にユークリッドの幾何學の成り立つ空間とは異つた性質をもつた一般の空間について多くを知つてゐたのです。併しそれが私たちの經驗する實在の空間とどんな關係をもつてゐるかはまだ當時に於ては判りませんでした。

細微な物質の究極として私たちは、分子や原子や電子を知るやうになりました。それらはたとへどんないゝ顯微鏡でも見ることが出來ないし、またその一つびとつを取り出すことも出來ませんけれど、いろ〱な現象から推してそれらの存在はもはや疑ふことの出來ないものとなつてしまひました。數十年前の「假說」はいまではもう實在的な事實となつてゐるのです。電子の研究は日毎に精細になつて來ました。直接に物指をあてゝ測ることは出來なくとも私たちは電子の球の直徑が凡そ 0,0000 0000 0000 37 糎（センチメートル）ばかりあることを知つてゐます。電子の一粒を天秤に載せなくても、その

質量が 0.0000 0000 0000 0000 0000 0000 0002 瓦程であることを測定することが出來ました。かやうにして小さな究極の世界はかなり私たちに親しくなされました。

之に反して限りなく大きな宇宙の空間に關しては私たちの知識は著しく貧しさを感じます。どんな優れた望遠鏡をもはや或る星よりももつと幽かな光を送るものを見出すことは出來ません。さうしてそれらからは光の外に何の物理的作用をも私たちに傳へては來ないのです。私たちはどうしてそれよりも遙かな宇宙の限界を知ることが出來るでせうか。私たちが現に觀測してゐる最も遠い星は螺狀星雲といふものであつて、その距離は恐らく百萬光年（一光年は光が一年間に通過する距離です）ぐらゐであらうと思はれてゐます。これ程な遠い空間のかなたにもはや星が一つも存在しないとはどうしても考へられないことです。それならばどこまで星が擴がつてゐるでせうか。若し星の擴がつてゐる場處が或る距離までで終るとしたならば、それを踰えて何もない空間がやはりどこまでも限りなく續いてゐるでせうか。

空間から更に時間に移つてゆきますと、私たちは尚ほ一層直接の知識を得る手段が限られてしまひます。私たちは過去へも未來へも一歩も踏み出す事が出來ません。只過去に何事があつたかは、僅かに記錄の存する限り知ることが出來るだけです。地質學的に若くは天文學的に遺された現在の狀態のなかにその記錄を讀み得るとすれば、それによりて辛うじて稍遠く溯ることが出來るでもありませう。けれどその外にもう何の手段も見出せないのです。未來に亘りてはその最も近い明日でさへ私たちは絕對に經驗することが出來ません。どうしてこの世界の始と終とを究めることが出來るでありませうか。

私はこゝで次の重要なる事項に注意を喚び起したいと思ひます。若し自然法則が單に經驗的事實を統一した關係に過ぎないならば、之から私たちの經驗を超越する範圍に對し或る結論を導くことは全然無意味に歸するでありませう。經

驗の達し得ない處に尙ほ自然法則が意味をもつためには、之に相當する理由がなくてはなりません。卽ち自然法則は經驗的事實に合致すると云ふことの外に、尙ほ思惟の或る要求を滿足することが必要なのであります。之れあるがために私たちは思惟の究極として超經驗的事實を豫察することが出來るのです。

四

自然法則の滿足すべき思惟の要求は何であるかと云ふことに對して、私は絕對、普遍、實在、必然などの諸性質を自然に附與すべきことに外ならないと解したいと思ひます。之等は皆同一性質の種々のあらはれとも見做すことが出來るのですが、要するにそれが自然を直接に神に屬するものとして認め得る最も適切の表徵であると私は信じます。相對性原理が自然法則の絕對性を由來すべきことを私は既に論じました。この意味に於て私はその原理を自然法則の體系の基礎におくことの至當であることをも思ふものであります。

狹く限られた空間及び時間のなかで私たちの經驗的事實と一致する樣に見出された自然法則は、之を限りなく廣い範圍に押し擴げたときに尙ほ誤を生じないかどうかは、頗る注意しなければなりません。地平面上に描いた小さな三角形がユークリッド幾何學に從ふこと、卽ちその內角の和が二直角であることを經驗したとしても、地平面をどこまでも廣く想像したときに、それは最早ユークリッドの平面ではなくて、却つて之と異つた球面になることを見出すでせう。地平面の極めて狹い部分しか經驗し得ない觀測者にとりて、之が球面であることを結論するためには、地球構造に關する必然的な或る指導原理が必要であつたのでせう。私たちの宇宙に對するのも之と全く同樣であります。

いろ／＼な理論の可能性がある場合に、經驗に依ることなしに、どれが最も適切であるかを判斷することは極めて困

雜な問題です。私たちは宇宙論の如き場合に多くかやうな難しさに逢着しなければなりません。

五

私はアインスタインの宇宙論を述べる前に先づボルツマンの宇宙論を簡單にこゝに説明しておく必要があると思ひます。

ボルツマンは墺國に生れた人で十九世紀後半に於ける最も偉大な理論物理學者の一人です。彼は熱力學の原理から氣體論の研究に入り、遂に統計力學を大成して自然現象の非可逆性の説明を見出したのでした。

熱力學第二法則は自然現象の非可逆的であることを示してゐます。自然に於けるあらゆるエネルギーはみんな摩擦や抵抗のために熱のエネルギーに變つてゆきます。さうして熱はつねに溫度の高い處から低い方へ移動して行つて、平衡狀態をつくらうとします。熱が到る處に平均されてしまつた後には、もはやエネルギーの移動は起さうとしても起らないのです。エネルギーは失はれなくとも自然はかやうにして終に死滅してしまはなければなりません、斯う云ふ自然死滅の説は熱力學の經驗から論結されたものでありましたが、之はその死滅のみをもの語るだけであつて、自然創生の因由には少しも觸れてゐません。何の原理に從つて自然は今在る狀態に導かれたのでありませうか。この原理が何か求められたとしてもそれは熱力學の法則に矛盾しはしないでせうか。之は恐らく物理學の歴史にあらはれた最も困難の問題の一に違ひなかつたのです。

ボルツマンは自然の非可逆性を「偶然」の法則によりて説明しやうとしたのです。すべての物質はたくさんの分子から構成せられてゐます。それらの分子が相互作用のもとに自由に動き得るとしたならば、それらの取るべき位置や運動の

狀態は偶然の法則に支配せられてゆくでせう。若し拔刑の狀態が著しく偏極したものであつても、それはだん〳〵と平均されて行つて、遂には一樣な狀態になるのでありませう。之が謂はゆる熱平衡に外ならないのです。この見方から云へば熱力學の法則は、自然が偶然の法則に從つてその最も起り易い有樣に導かれると云ふことに歸するのであります。自然現象がその一定の方向にのみ經驗的にあらはれると云ふのは、それがあらゆる可能の變化のうちで最も多く實現し易い偶然さをもつてゐるからなのです。この偶然さの實現する程度は現象に與かる個々の分子の數が多ければ多い程、非常に增大します。實際に物質の分子の數はその分子量をaと假定しますと、a瓦（グラム）中に1000 0000 0000 0000 0000 0000個程もあるのですから、今申しました偶然さはその度を驚くべく增して、殆ど必然的に現はれると謂つてよい位です。熱力學の第二法則の意味が斯樣なものであることが明らかにされたのは、まことに著しいことであつて、個々の分子間の現象が悉く可逆的であるに拘らず、その多數の集合體系の上に於てのみ非可逆性のあらはれることを極めて自然に解釋することが出來たのです。

併しながら熱力學の法則は要するに偶然の法則に從ふものである以上は、たとへその實現する偶然さが非常に確かであるとは云つても、尙ほその本質上、他の物理學の法則の絕對に必然なるものとは性質を異にしてゐるのです。さうして或る極めて稀な場合には之に反する現象が實現し得ることをゆるさなければなりますまい。之は偶然の法則からの當然の結果なのです。解り易い例を玆に引いて見ますと、たとへばたくさんの人間の生存してゐる私たちの社會集團のうへで、それらの人間がどれ程の壽命を保つべきかを偶然の法則から計算するならば、それに基いて生命保險の豫想が安全に成り立つことを私たちは經驗してゐます。人間の數が多ければ多い程その安全さは增すのです。けれどもどんなに確實に生命保險は成り立つにしても、それは畢竟偶然の法則に支配されるのであつて、從つてすべての人間がその豫想

された壽命をもたない偶然さも決して零ではないのです。ボルツマンが指摘したやうに、地上のあらゆる人間が同時刻に自殺をすると云ふ偶然さの如きも決して絶對にないとは云ひ斷ることは出來ません。どんなに稀有な場合だとしてもそれが起る偶然さはやはりいくらかは存在してゐるのです。若し人間の數の極めて少ない範圍に限つてしまふなら最早平均壽命の計算を個々の場合に當て嵌めることが困難になるのは明らかでありませう。物理現象に於ても同樣です。分子の數の極少ない部分を觀察するなら、熱平衡の狀態から外れる事實をいくらも目擊することが出來る筈です。水を充した器のなかでその平衡狀態では到る處密度も溫度も等しくなければならないにも拘らず、その極めて小さな各部分を取ればそのなかの密度や溫度が平均の値から外れてゐることは、敢て驚くに足らないのです。ブラウン運動の現象や蛋白光の現象の如きは之を明確に証明するものとして注目されました。

廣大な宇宙を眼に入れますと、そのなかの個々の要素が尨大なだけに、之が全體として偶然の法則に支配されて、一定の熱平衡の狀態に向ふことは益確實になりますけれども、併しそのいろ〳〵な部分に於て、平均狀態から外れる樣なことの起り得る偶然さは決して絶對にないとは云はれません。從つてそれはどんなに稀有なものではあつても、いつかさう云ふ場合が實現しないとは限らないのです。ボルツマンはこゝに世界の創生の因由をもとめたのでした。限りない大宇宙の何れの處かに或る偶然さをもつて平衡ならざる狀態があらはれてゐるならば、それは一つの自然現象の世界がそこに發生したものなのです。その世界に生存する知的生物はそのなかの現象を觀測して、現象が平衡狀態に近づくやうな時の方向を過去より未來への方向と判斷するでありませう。かやうにして各の可能な世界のなかで自然現象は常に一定の平衡狀態に向つて進むやうになります。さうして熱力學の法則がそこに成り立つのです。

ボルツマンの大宇宙は時の始終を超越したものです。このなかに自然の創生と死滅とは偶然の法則に從つてあらはれ

るのです。私たちは分子論の生んだこの偉大なる結論を深く味ふときに、莊嚴なる科學に於て思惟の究極の到達する彼岸を、今更に遙かに望觀し得るよろこびを感ずるでもありませう。

六

アインスタインの宇宙論に就いては私はこの誌上に既に數言を費したことがありました。それは彼の相對性萬有引力論から導かれたものであります。そこには私たちの嘗て想像だもしなかつた關係、即ち宇宙の空間そのものと、之を充す全物質との必然の結合が導かれた點に於て異常なる驚異に値すると云はなければなりません。

ニウトンの萬有引力論は宇宙の全天體がその或る一點を中心として集團をつくることを要求しました。この中心を遠ざかるに從つて空間における天體の密度は漸々に減じてゆくと假定されなければなりません。若し然うでなければ萬有引力の強さが無限の遠方で無限に大きくなつてしまふのです。この結果は或る場處で引力の大さが不定になるでありませう。併し之を避けるために前述のやうな集團を假定するとすれば、それは何故に宇宙の無限の空間のなかに孤立してゐるかと云ふ疑問に對して、答へに窮しなければなりますまい。何故ならば若しこの集團がボルツマンの大宇宙のなかに於ける一つの世界であると解するなら、之だけが宇宙の全物體でなくて尚ほ他にも同樣な集團のたくさんに存在することをゆるさなければなりません。さうして更にそれらの全體を考慮したときに、やはり最初に於けると同樣の困難に衝き當ります。之に反して若し全宇宙のなかに私たちの天體の集團のみが孤立するとすれば、それはたとへ偶然に存在してゐるとしても永久に保たるべきものではありません。集團の外方にある天體のうちにはその自分の運動のために永久にこの集團を去りて遠く散逸しゆくものがたくさん在るでせう。さうして終には悉くの天體が宇宙に一樣に散つてし

まふより外ありません。これがボルツマンの理論に合する平衡狀態なのです。つまりニウトンの萬有引力論による天體分布の密度は限りない宇宙の空間に平均したときに無になつてしまはなければなりません。

アインスタインの宇宙論におきましては、天體を全宇宙に一樣に散在すると見なしたときに、その平均密度が零でなくて有限の値をもつてゐることが許されるのです。それにも拘らず萬有引力の强さは到る處に無限大にはなりません。この結果がどこから由來するかと云ひますと、彼の理論によれば物質の存在する場處ではその空間が或る曲率を有する樣に歪むからなのです。物質の平均密度に應じて宇宙の全空間は一樣の曲率を得ますから恰も二次元の球面のやうに、宇宙は平均に於て三次元の球空間をつくります。從つて宇宙は有限の體積をもつて居り、そのなかの一點から引かれた直線（最短距離をあらはす線）は之を延ばすと有限の長さをもつて元の點に戾つて來るのです。尙ほ彼の理論から計算すれば、この球空間の曲率半徑は宇宙の全物質の質量に比例するものであつて、夫れ故に若し物質が全く存在しないとすれば球空間は凝縮して一點に歸してしまひ、又物質が多ければ多い程、之を容れる空間が大きくなるのであります。

この關係は極めて興味ある想察を私たちにゆるすものであります。宇宙の空間と之が包容する物質との相互の關聯に就て、誰が意味なしに看過ごすことが出來たでせう。併しながら私たちが尙之に關して深い省察を行ふときに、そこに多少の疑問が起らずにはゐません。宇宙の曲率半徑は種々の事情から恐らく太陽と地球との距離の 10 0000 0000 0000 倍程あるだらうと想像せられます。之れだけの球空間をつくるためにはそのなかに存在すべき物質の總量は非常に大きくなければなりません。私たちが諸天體の總質量をいかに大きく見積つても到底之に充分であるとは思はれないのです。つまりアインスタインの理論を肯定するためには、私たちが現に觀測するすべての天體以外に遙かに尨大なる物質が宇宙に存在することを假定しなければなりません。之が疑の一つです。尙ほまた或る星から發した光線は球空間を一廻り

して丁度反對の極に焦點をつくりますから、一つの星に對する影像がもう一つ成り立つわけです。併し光線が球空間を一廻りするには凡そ 20 0000 0000 光年を費しますからこの影像は現在の星の位置に相當するのではなく、之だけの年數以前に於ける星の位置に相當する場處にあらはれます、夫故若しこの影像の位置と現在の星の位置との差異を測れば、その期間に於ける星の絶對運動が判るでせう。之のことは相對性原理と矛盾するものではないかと云ふのが疑の第二です。勿論實際には光線は途中の屈曲や散亂によりて正しい影像をつくらないかも知れませんが、それがために上述の理論上の矛盾は決してなくなりはしません。

第一の疑は單に觀測的事實に關するものですが、第二の疑は星の影像が實際にあらはれるかどうかと云ふ事實上の問題を措くとしても、尚ほ純粋に理論上の矛盾に關聯してゐます。私はこの矛盾の原因を考慮して、アインスタインが宇宙の全物質が相對的に靜止せる座標系（觀測者）を假定したのに歸すべきであると思ひます。かやうな座標系は既に他の座標系に對し特種のものであつて、之が絶對運動を表徴すべき前提となつてゐるのであります。さうしてこの假定は相對性原理それ自らと相容れないものでなければなりません。私たちはこの假定を取り除くことによりてアインスタインの宇宙論を變改する必要を認めるのです。

七

アインスタインの宇宙論におきましては、空間の球狀性を導いてありますけれども、之に反し時間は無限に長く續く直線的の性質をもつてゐることを假定してゐます。すべての自然法則に關して相對性原理は空間と時間との對稱的な性質を示して居り、空間の三次元と時間の一次元とを合せて想描せられたミンコフスキーの四次元の物理學的世界は、あ

らゆる方向に等しい性質をもつ特徴を認められてゐたのですが、それにも拘らずアインスタインの宇宙論に關して、この四次元世界の特質は失はれたと云はなければなりません。換言すればこの四次元世界は、時間の方向にのみ無限に長い擴がりをもつて居り、之に反し空間の方向には之が球空間をつくるために有限にせられてゐますから、この圓柱的世界のなかで私たちは絕對的に時間の方向を決定することが出來るわけであります。この意味に於て完全な相對性が失はれて、絕對時間がゆるされてゐるのです。このことは相對性原理の本質上の問題としてアインスタインの宇宙論に疑を挾む餘地をつくるものです。

　時間と空間との完全な相對性はミンコフスキーの四次元世界の全體に球狀性を與へることによりて、容易にその實現を期することが出來ます。ド・ジッターはこの假定によりて一つの別な宇宙論をつくりました。こゝには空間に於ける直線と共に時間の長さも有限になります。私たちが時間的にどこまでもその經程を趁うてゆくと考へますと、未來の極致はいつの間にか過去の極致と相連つてゐるのを見出すでありませう。そんなことは無稽なことであると排してはいけません。歷史は繰返さないと云ふ經驗は極めて小さな時間に就てのみ得られたものです。誰が宇宙の全壽命の如何を經驗的に斷言し得るでせう。ボルツマンの宇宙論は既に時間の過去と未來との方向の絕對でないことを敎へました。さうしてジッターの時間有限論は之と相容れるものであることを今知ることが出來ます。

　ジッターの理論によりますと、或る一人の觀測者から見て各處の時計の進みは必ずしも等しくはありません。遠方にゆけばゆく程、そこの時計の進みは彼に遲くなつて見えます。彼に對して球空間の反對の極に當る場處になりますと、時計の進みは全く零になります。即ち彼から見て其處では時間が少しも經過しないことになります。そこではすべての現象がいつまで待つても進行しません。光の速度もそこへゆけばやはり零になつてしまひます。夫れ故或る一點から發

した光は觀測者に對する球空間の反對極を超えて先へ進むことは出來ないのです。從つて前に述べたアインスタインの理論と異なつて、星の影像はもはや球空間に再び實現することはありません。

この點に關してはジッターの理論はアインスタインのに比して合理的であるやうに思はれます。併しこの理論では宇宙の全物質の平均密度は零にならなければなりません。從つて世界空間が一定の曲率をもつて球狀になるのは、物質の存在のためでなくて、世界空間それ自體の性質と見做さなければならなくなります。アインスタインの宇宙論にあらはれた空間と物質との微妙な關係はこゝに再び消滅させられてしまふのでした。

ジッターの理論はそれだけから云うては不合理を含んではゐないのですけれども、「物質の存在しない空間は思惟することが出來ない」と云ふことを主張するマッハの哲學を信ずる人々に取つては、空間と物質とを互に偶然の存在とすることに不滿を感ずるでもありませう。さうして彼等には尙ほこの兩者の相關を說明するアインスタインの宇宙論への執着を感じさせます。それがたとへ相對性原理との矛盾を含むとしましても、之を犧牲にして、即ち相對性原理を全宇宙に對してでなく、只限られた範圍にのみ成り立たせても空間と物質との關係を保持しやうとでもするでありませう。ジッターの理論とアインスタインの理論との取捨は、後者の觀測的事實に對する疑問を暫く論外にすれば、各の哲學的論據の何れかに傾くかによりて決せられるのであります。

八

アインスタインとジッターとの兩宇宙論を概敍した後に、私は別にもう一つの私見を茲に附け加へて見たいと思ひます。

私は相對性原理をどこまでも徹底的に成立せしめたいと思ひます。この點に於てジッターの說に左袒するものであります。併しそれと同時にマッハの主張を次のやうに意味を撰めて參酌しやうと思ふのです。「何等の物理的對象なしに空間を思惟することは出來ない」と。私は物理的對象として通常の物質と共に輻射エネルギーを認めるのが至當であると思ひます。後者のなかには光、熱、電磁氣の波動並びに萬有引力の波動が數へられるので、之等は物質と同樣に質量を有つてゐると解せられます。只物質は各の任意の座標系に關する每にその運動速度や惰性的質量の數値を變へるに反し輻射エネルギーはどんな座標系を取らうとも之等が一定の量値を與へる特質をもつてゐるのです。若し宇宙空間にこの二種の物理的對象が存在してゐるとするならば、その平均狀態はどうなるであらうかを考慮してごらんなさい。或る偶然に選んだ座標系に對してすべての物質の平均の運動速度（嚴格に云へば速度二乘の平均値の平方根）が一定の値をもつとすれば、他の座標系に對してこの速度は異つた値をもつでせう。私たちはすべての座標系のうちからこの速度の零になるやうなものを特に選定することが出來ます。併し之は明かに座標系の相對性に矛盾するのです。私たちはこの矛盾を取り除くために是非とも物質の平均密度は零であることを假定しなければなりません。之に反して輻射エネルギーに就て同樣の考察を行ひますと、その質量の平均密度が有限な値をもつてゐても相對性と相容れ得ることは容易に解せられるでせう。

この假定のもとに四次元の世界空間を球狀であるとしますと、この球の曲率半徑は輻射エネルギーの總質量に比例すると云ふ結論に導かれます。物質の總質量は之に比して度外視せられる程小さいので、宇宙空間の擴がりと必ずしも關係しないのですけれど、輻射エネルギーの總量が之に代りて空間と密接に關係するやうになるのです。この結論は次の事實を考へ合せると、尙ほ肯定に都合がいゝと思はれます。

物質の有する熱エネルギーと輻射エネルギーとは相互に交換して熱平衡を保つことが出來ます。物質の總量は最初與

へられた限り增減することが出來ないのに反し、輻射エネルギーは溫度が增すと共に增大するのです。世界空間の擴がりはこのエネルギーの量を定めると共に從つて亦宇宙の平均溫度をも決定するものでなければなりません。絕對溫度が零となるとき、世界空間は同時に零となつてしまふでせう。そこに何の變化も起り得ないのです。平均溫度が高まると共に之が活動を容れる世界空間が擴がるのです。マツハ及びアインスタインが物質に就て考へたことを、こゝではエネルギーによりて置き代へたのです。さうしてこの事は丁度ボルツマンの宇宙論と相照應すると云ふことをも考へ及ぶとそこに私は更にこの論の深い重大な意味を感ぜずにはゐられません。

九

私は以上に於て私たちの思惟の究極として到達すべき宇宙論の梗概を述べました。そこには未だ決斷すべき二三の論議が殘されてゐるために、唯一の見解には導かれませんけれども、併し既に多くの驚くべきものを含んでゐることは認められたでせう。自然現象に於ける普遍的な經驗的事實が、嚴密な哲學的論理の枠に嵌め込まれて自然法則の體系をつくるときに、そこには既に經驗的事實を超越した思惟の作用が含まれてゐることが悟られます。經驗は極めて狹く限られた範圍に於て、いつも近似的にしかなされないのです。私たちは之を理想的に完全に補足し、純粹に抽象して、自然科學をつくります。さうして科學の普遍性や絕對性はそこに生れて來ます。私たちはかやうにして現實から神の世界へと近づくことが出來るのです。思惟の究極としての彼岸を望むときに、私たちは自分みづからのなかに存する神性を見出し得られるでありませう。神は現實を飛び離れて存するものではありません。天國はほんとうに私たちのなかに在るのです。妄想のなかに生きないで、ひたすらに敬虔なる現實の歩みを續くることが神へ近づく唯一の道であると私は思ひます。

宇宙論を說明するに當りてこれだけの感想を附記します。

白、黄、黒人の本質的社會合作

杉森孝次郎

人は、古往今來、一人としての自己に出發して、一人としての自己に歸着する。けれども、その過程は、今人は古人に比し、來人は、望むらくはまた今人に比して、多人だ。人は、人際協力としての社會を發明し、それの不斷の成達に努力する。愛の範圍も、憎の區域も、この努力に伴隨して擴大する。集團主義の歴史、現實、及び將來は、人の發達の全圖を描かす材料としてさへも殆んど完全だ。個性の發達は、集團主義の發達を、その一面の必至條件とする。個人主義の覺醒に、その第一歩を踏みいだしたる近世が、國民主義を産み、社會主義を産み、組合主義を産み來たり、保育しつゝある過去及び現狀は、いさゝかも不可解でない。集團主義は、個性主義の原則の一方法だ。

現代の集團主義は、民族主義と階級主義に代表される。それらとならんで、同性主義もあり、同齢主義もあるけれども、民族主義と階級主義は、すくなくとも顯勢として、優越的乃至支配的位置に立つ。われらをして、先づ民族主義のかたちに於ける集團主義を檢せしめよ。

最近、問題となりつゝある華府會議は、民族主義のかたちに於ける集團主義の、最も手近かな例證として注意される華府會議發動の動機と趨向とは、新興米國民の對外發展の一策だ。米國民の經濟的勢力が、自治力なき支那に侵入延蔓の機會を求め造りつゝあるのだ。いはゆる非白人の運動は、昨今、新たに危機に瀕しつゝある。支那の政治的獨立は、漸くにして、最後の試驗を受けんとする。支那獨立の論理は、日本獨立難として展開する。日本亡獨立の論理は、九

億の亞細亞人が、及び恐らくは二億に餘まる黒人が、國際的、人類的、社會的自治、責任、創造の機會を、その可能とあはせて、不定限の將來に空送することだ。半世紀にわたる明治、大正の日本の興榮は、淵源必らずしも淺からざりし武士道的傳統、和魂的傳統の、返へり咲きに過ぎなかつた一哀話となるのだ。

軍國主義、帝國主義、侵略主義、最近の日本にあびせかけられる世界の雑聲の、一になんぞ誇大なる。わたし自身はまだアメリカを見てないが、歐洲、それも英獨を主としての話だが、その歐洲から日本へ歸つて、日本人の生活力、及びそれの成績の貧弱孤窮は、慘としてわたしの肉、心眼を打つた。大戰の結果、獨露墺は一時挫敗し、佛伊も重傷を負うたればこそ、世界富强國番附けの第三位あたりに、昨今の日本は、立てるが如き觀を呈するかも知れないが、これは、假象だ。幻影だ。錯覺だ。妄想だ。眞實の日本は、いまなほ殆んど原始的だ。白人諸帝國にくらべては、段ちがひではいひ足らない、恐らくは桁ちがひに近い弱小だ。到底、世界の危險を實現する力の自覺者でも、所有者でもない。摩天樓とマッチ箱といふ譬喩をよく聞くが、要領よくいへば、先づその邊だ。外觀は象徴だ。内質の力としての石油でも石炭でも、鐵でも、綿でも、食料品でも、ことごとくその象徴相當の實在だ。人口に於いても、日本のそれは、歐米獨立國民の全人口に比しては、物の數にも足りない。地上に於ける獨立諸國民のうちで、日本人だけ非白だが、その非白人の數は獨立白人の數に比すれば、競爭にも、喧嘩にもなれる數ではない。ことわつて置くが、名を獨立にして、實を獨立以下にしてをる多少の國民をば、こゝでは無獨立と同視した。

人類の祖先は一系らしい。人種と民族とは、地氣天候の影響だ。過去に於いてこそ、特殊の地帶に生まれたる人々はその地帶に成人し、老死する運命をも有したれ、今後、交通手段の無限に發達すべき渾圓球上に於いては、その運命はなくなる。熱帶アフリカに生まれ落ちても、溫帶に移住する便なからず、亞細亞の東端や西隅に生まれ落ち、住み通ほして

も、歐米の出版物を讀む便宜もある。交通手段の發達は、空間の意義を變改する。東西南北それが地球上の、人が往來し、居住する可能性を有する場處である限り、毫も本質的の差別を包含し、胚胎する條件ではなくなる。この現實及び可能が、われらに示唆し、乃至實に明告する一規範は、現在の低級人種と低級民族の改善だ。その質及び境の優化だ。向上だ。たとひ瞬間にしてその成績を奏しえないとしても、方針として、實行目錄として、現代人は、みづからが白人たると非白人たるとには拘泥せずに、早く非白人をして、せめて白人程度の自治力、責任力、創造力ある人たらしめる努力を拂べきだ。非白人をして、その人としての性能を十分に伸びしめる努力が、非白人、白人兩者にとつての一必要事だ。道德的一必要事だ。人格說も、個性論も、社會連帶主義も、この一事を閑却し、況んやそれに反對してよい理由は絕對的に不成立だ。

人は、本質的に、多少利己的だ。利己はよいが、その己が卑小であるならば、その人自身の本質的損失だ。白人は久しく地上を支配した。道德、文化、政治、經濟、武力の種々形式に於いてだ。現今の白人は、漸くにして、選民の甘夢に耽溺し込んだ。白人自身のため、人類全體のために悲しむべき兆象だ。中華民族の轍をふまんとするのだ。進步弱く創始乏しき將來を迎へんとするのだ。黃、黑諸種の蠻族が、その蠻質と蠻俗を超脱して、本質的に白人とくつわをならぶるに至ることは、白人の頹廢を防遏するために、恐らくは至上策だ。黃、黑人種に追ひ付かれてはならん、追ひ越されてはなほさらならんと省察するならば、白人向上の好刺戟といふべきだ。他面に於いて、黃、黑人は、文化力に於いて、すなはち人的眞價實力に於いて、白人に追ひ付いてはいけない、白人を追ひ越してはいけないといふ道德的論理は、絕無だ。決して成り立たない。なぜかといふに、人に向つて、善をなしてはいけない、大善をなしては一層いけないといふ要求なり、命令なりをさし向ける道德的論理はありえないからだ。人といふ人は、殘らず、その品性と知識才能の全人

格的內容に於いて、無限向上の理想を追うて邁進すべしといふのが、正しい道德的論理の最低限の一要件だ。

日本の擡頭は、白人以外の人類に、多少の自信と希望を鼓吹する可能性がある。先づ亞細亞についていふに、亞細亞がその住民たる亞細亞人の自治領でないことは、見るからに醜觀だ。惡狀だ。白人の亞細亞侵入がわるいのではない。亞細亞人の無自治がわるいのだ。環球上は一社會だ。その一社會內に、自治力なく、隨つて責任力なき部分があれば、自治力あり責任力ある剩餘の部分は、その無自治、無責任の部分を、おのが自治力、責任力の延長下に從ふべく努力する必然理由と當然理由がある。もしも人類が、本質的に人種別や民族別を固有し、そしてその人種別や民族別には、本質的に恒久的に性能の殊差が固有されてをるとするならば、黃、黑人は白人の器具の一種として生存し、白人は黃、黑人の使用者所有主として生存することは、來なほ今の如くに當然だ。正善でさへもあらう。けれども、その結論は、その前提が眞實でない故に不成立だ。白人以外の人類の無自治、無責任は、從來の事實ではあつても、將來の必然的可能ではない。當然的可能ではなほさらない。これだけの事理を承認しない人はあるまい。けれども、これだけの事理をただに承認すれば、白、黃、黑人間の形式的牆壁は、本質的異同を條件と改廢されねばならん。勞働運動と、民族運動と、人種運動と、婦人運動と、小兒運動との間には、唯一の原則が發見される。唯一の原則が確認され、確立されねばならん。その唯一の原則とはほかでもない。人の本質價の認識及び評價だ。

現在の事實としては、勞働者は卑下されてをる。勞働者の人的要素は認められず、勞働の分勞的價値も認められてゐない。勞働者自身にも、しばしば道德的自侮、自輕、自蔑がある。これは現在の事實だ。しかし、この現在の事實は、將來に存續すべきでない。現在の事實は、勞働者の場合に於いては、理想的將來を反示する。現在の黃、黑人、を見るにその白人に對する關係は、あたかも、勞働者が、その屬する國家的社會に於いて、いはゆる資本家に對する關係と多く

の共通點を持つてゐる。現在の資本家が、必らずしも品性、能力の本質價値によらず、外部的、偶然的優越によつて、勞働者を虐用するが如くに、現在の白人は、階級主義的に黒、黃人を虐使する場合がある。世界的富貴者と、生物學的白人と、生理學的男性と、年齡的長者とは、それ〴〵の部面に於いて、本質的文化人を壓迫しつゝあるのだ。人類の現存頭數は、約十六億だといふ。そのうちの優に過半數が、國際政治、國際經濟、隨つてまた國際文化の上に於いて、無自治無責任の狀態に、今後なほ放任されてよいと觀ずる人は、卑小にして根柢淺き人種道德や、民族道德には立脚してゐるかも知れないが、人類道德には、決して立脚してゐない人だ。けれども道德の可能は、人類的だ。人種的や民族的ではない。人種的や民族的でありえないではないが、それは、人類的の一內容、一派生、一適用としてだ。人類的とはいつても、その內容は人間だ。各人的だ。自由意思の單位としての各人的だ。人類的道德の基礎と權威とは、實に、個性的道德そのものにあるのだ。通性的道德を內含し、創造し、支配する個性的道德そのものにあるのだ。

最近、印度にも、アフリカにも、またアラビアにも、埃及にも、その他の非白人住地にも、多少切實な獨立運動が伸展して來た。一時の衝動として看過すべき事象ではない。世界の識者が、善導を要する一大可能として見るべきだ。白、黃、黒は、人類の外的、自然的一屬性の稱呼としては保存されても、人類の內的、理想的本性の象徵としては廢棄されべきだ。現狀に於いては、黃、黒人は、優數にして劣質だ。劣數にして優質な白人との競爭の興味に於いてゞなく、人類的乃至各人的個性の絕對理想の興味に於いて、われらは、その劣質を救濟すべきだ。敎育を第一方法としてだ。及び制度上の保護を加ふることによつてだ。國際經濟上の保護主義は、自國の產業能力を、關係諸國の產業能力と有効に、幸福に協力し、且つ競爭しうる程度に養成する一策として、始めて公認さるべき存在理由を有する。同じ原則を、われらは現在の黃、黒人に對して、多少適用すべき必要を認める。人類の文化能率を高めるためにだ。地上に、人類的特

殊部落、貧民街を、本質的に掃蕩するためにだ。狹き、しかしながら、與へられたる唯一の地球面を、家庭の如く、クラブの如く、一學校の如く、一教會の如く、人化し、聖化するためにだ。膚色や、境劃に個性をも、たましひをも捧げつくす人々の個性とたましひの、一になんぞさもしきや。

白人以外の人類のうちに於いて、せめてもの國際的自治、責任を現實に所有する民族は、日本人だけだ。獨立日本の、黄、黒人間に於ける地盤と勢力の擴張は、黄、黒人間に於ける國際的自治、責任のそれだけの創造だ。われらは、多少の瑕疵を現實の日本人に明視するにかゝはらず、そしてそれらの瑕疵をば、正直に瑕疵を認めて救除する努力を拂ふべきだと確信すると同時に、折角築き上げた、なけなしの國民的殿堂を、輕卒に取り崩したり、切りせばめたりする意思と企圖には極力反對すべき公正理由を認める。支那、西伯利に對する日本の發展といへども、これを世界人道の公理に照らして批判し、省慮することは善事だが、白人の聲のみに聽いて是非すべきではない。白人必ずしも世界人道の公理の完全代理者ではないからだ。そこに陋劣なる私心、私慾の多分に混入する可能も決して絶無ではないからだ。現實の日本には、その良心に於いて、聰明に於いて、隨つてきた、その制度に於いて、習慣に於いて、風俗に於いて、痛酷に不滿足に感せられる事實と部分がすくなくない。けれども、これらの事實と部分の認識は、われらをして、日本改造の必要と責任を緻いて感ぜしめある先件だ。われらは、その認識に刺衝されて、日本の改眞、改善、改美、改正の新努力に猛進すべきであるのだ。日本の退化でなく、進化の方途に、その認識は、われらを驅り進める。われらは、小惡をもなしてはならん。小邪をも去らなくてはいけない。しかしながら、大善をなすの健志が、同時に極めて必要だ。實をいふと、可能的大善をなすの目的意識に於いて、われらは、おの〳〵の小善をもなし、おの〳〵の小惡をも棄つべきであるのだ。今後の國際政局に當面し、當事して白人の發聲に、沒批判的に聽從することは、決して日本の國際的責任ではない。人類的

率仕でもない。人もし眞實の自己を棄てば、かれは、世界を創造する主動力をも、世界を救濟する中心能をもあはせ失ふほかない。

例へば華府會議の發程を見ても、われらは、そこに多少の遺憾を感ずべき事蹟を認める。そも〱、軍備制限問題と直接關聯の解決事項として、太平洋問題及び殊に極東問題を選擇した根據が不健全だ。軍備制限問題は、文字通りに國際的問題だ。列國が、共通に利害關係と興味とを有する問題だ。大戰後の米國が主唱者となつて、國際會議をその問題のために華府に招集するに不可はない。時務を知る政治的行動として、世界はアメリカにむかつて感謝と助成とを惜んではならん。けれども、太平洋問題及び殊に極東問題の討議解決を、國際軍備制限問題と一束にして國際會議に附せんとする米國の提案は、日本に於いて甘受すべき性質のものではなかつた。昨今、特定國間の問題をば、華府會議の題目としない日本の方針らしいといふ新聞記事が觸目する。どういふ意味か、精確には知らないが、わたし自身の考へるところでは、その方針は、殆んど意味をなさない。すでに、軍備制限問題と、太平洋問題及び極東問題との一束的國際會議の招請に受諾の返事を與へたる以上、特定國間の問題討議は約束濟みとなつたのではないか。乘車して出發してから、車室內を逆行しても、それは意味をなさない。迂濶に、輕率に乘車しない智慧と勇氣が肝要であつたのだ。軍備制限問題を專一の內容とする會議ならば喜んで應招し、太平洋問題及び極東問題をそれと一束に扱ふ趣旨の會議ならば謝招すべきであつたのだ。なぜかといふに、もしも軍備制限問題の討議解決のために、具體的國際關係の整理が先要または伴要條件であるとするならば、太平洋及び極東だけを選擇すべき理由がない。事實上、戰禍の再來を危險すべき區域は、殆んど地球上の全面を通じて厚薄なしに分布されてをる。かりに、太平洋及び極東が最危險の區域だと認めても、なほ且つ、それだけの理由で、今回の如き形式に於いて軍備制限問題と太平洋及び極東問題とを一束にして、米國から、日

本を含めての列國にむかつて公提することは、日本から見るならば、いささか禮儀をふみちがへた態度、方法として批判されねばならん。個人に非禮の行爲ありうるが如くに、國家にも非禮の行爲はありうる。時としては、早きに及んでその輕い被害者が、その輕い加害者に抗議して反省を求めることが、最も穩健な、平和的な方法だ。非禮呼ばはりは、件の問題の場合に於いて、恐らくは不必要に感情めく。されば、禮、非禮の問題としてゞなく、冷靜なる客觀的考察の結論として、軍備制限問題を扱ふために、先づ及び同時に決せられる要ある具體的國際關係は、太平洋及び極東以外にも、それらに劣らぬ强さに於いて多々存するの事實に、日本としては、米國の注意を呼ぶべきだ。いまはすでにその最適當の時機を失したとするならば、呼ぶべきであつた。けれども、日本は、今後の時間に於いて、新たにその主張を實現する努力をば怠るべきでない。太平洋問題や極東問題そのものが、見まがふべくもなく、立派に特定國間の問題ではないか。それが特定國間の問題でないなら、特定國間の問題とは、天下地上、果たしてなにを意味する文字であるか。殊に況んや、いはゆる太平洋及び極東のうちでも、米國の意向に從へば、極東の方が問題の主要位置を占むるらしい形勢あるに於いてをや。極東といへば、支那、西伯利、及び日本だ。支那は獨立の實に於いて缺くるところあり、西伯利は、それ自身の主權を有する地域ではない。極東とはいつても、國家的人格を確實に所有する要素は、日本だけだ。極東問題を國際公議に附する發唱者が、遠方の米國であることは、米國の自治力、責任力は有り餘り、日本の自治力、責任力は、實に不足してをることを論理的に明示する。もしも日本に、國際的自治力と、國際的責任力が、獨立國相當に大國相當に實存してをるなら、米國の發唱は侮辱でなければ喜劇であり、日本の受諾は、卑屈でなければ、やはり喜劇だ。侮辱、卑屈と呼べば、物々しく響き、喜劇と呼べば餘りに事もなげに響く。しかし、事實は、喜劇の方では決してない。國家は國民から成り、國民は人から成つてをるのだから、人に人格價値感情があるならば、國家にも、間接なが

ら人格價値感情があるにきまつてをる。極東問題を議すべく、はる〳〵ワシントンくんだりまで招集されることは、日本としては、決して面目ではない。日本が、不面目を不面目と百も承知しつゝ、替へがたい理由事情に餘儀なくされて、その不面目を表面上甘受するのだとするならば、國際思潮は、今なほ殆んど古の如く、随分險悪な要素を含むものと判斷される。日本の國際的責任は、日本自身の獨創的努力をまつて、始めて果たされるものであることは、この一事を見るにつけてもいよ〳〵明知され、確信される。

白人、及びその文化に對する理解と同情となき立ち場からは、從來もしば〳〵、亞細亞獨立が唱へられた。われらは、現代人は、白人、及びその文化に對する知識と、尊敬と、信愛との具備せる立ち場からして、随つて從來のとは、多少別種の意義に於いて、亞細亞獨立の偉大なる人類的價値に開眼すべきだと思ふ。黄、黒人は、現在、數に於いて高く、質に於いて低い。集團して始めていくらかの自衛力を實現しえよう。丁度、財力薄く、知識乏しき勞働者が、勞働組合を形成することによつて、資本家の專制に對抗しうる如くにだ。白人は、人類的生存欲、人類的發展心を有すると同時に、白人獨自の生存欲、白人獨自の發展心に燃えてをる。なに人も自利が先きだつ。黄、黒人にして、人類社會に於ける、或ひは國際的社會に於ける、自治、責任、創造に有能な民となり、人となることの道徳價を信じうるならば、かれらは、自助しなくてはいけない。全能全愛の神でさへも、自助しない者をば助けないといふ。白人が、いかに基督教信者であらうとも、自助しない黄、黒人をまで助ける大慈悲力をば持ち合はすまい。もとをただせば同じ人類の一子孫でありながら、その人類なかまに於いて、一身の計も立たず、義理をも果たしえず、積極的奉公など思ひもよらぬとあつては、省みて深い恥ぢではないか。自治なきところに責任はない。自治も責任もないところからは、しかしながら、創造もまた發生しない。印度人三億、支那人四億、かれらに政治的、産業的進運の途は、或ひは閉されてゐるかも知れ

ん。科學、藝術、思想の一路だけは、その修養の機會も、その發表の便宜も、十分に供給されてをる。それだのに、殆んど一人の獨創的貢獻者を、最近の印度人、支那人から、世界が、文化方面に於いて歡迎することが出來なかつたのは、われらに、甚深の意義を語る。ユダ人は別事情だ。黄、黒人の場合に於いて、政治的自治、責任もない民族間には、文化的創造さへもありえないといふ結論が成り立つ。

われらは、地上に、單なる生物學的意義に於ける人口の增殖をば、必らずしも欣求しない。第一に、食料に限りがあるからだ。けれども、文化學的意義に於ける人口の增殖をば、切實に欣求する。文化學的意義に於ける人口とは、人類社會に於いて、分勞を方法とする協力に有能な道德人をいふ。このやうな人の數の增殖は、文化能率の增大を意味する。人類社會に於ける、分勞を方法とする協力に有能な人は、人類社會に於ける、自治力と責任負果力のある人と同義だ。なぜかといふに、分勞の道德は自治だ。協力の道德は責任だ。十億にあまる黄、黒人をして、こひねがはくば、單なる生物學的意義に於ける人口たるにとゞまらしめず、進んで文化學的意義に於ける人口たることをえしめよ。人類の頭數の增殖には限度がある。個性開發し、文化進達するに隨つて、出産率は或る程度までは減却する生物學的必然性を有する。人類が、個性主義及び隨つて文化主義の信者たる限り、社會の人口は、決して無限增殖の可能をば有しない。

われらは、現存及び將來の全人口をして、個性主義、隨つて文化主義の信者たらしめねばならん。人口の全部を、文化學的人口として持たねばならん。この目的を達するための一先要條件は、全人類の政治的獨立だ。黄、黒人の政治的獨立は、その代表務だ。

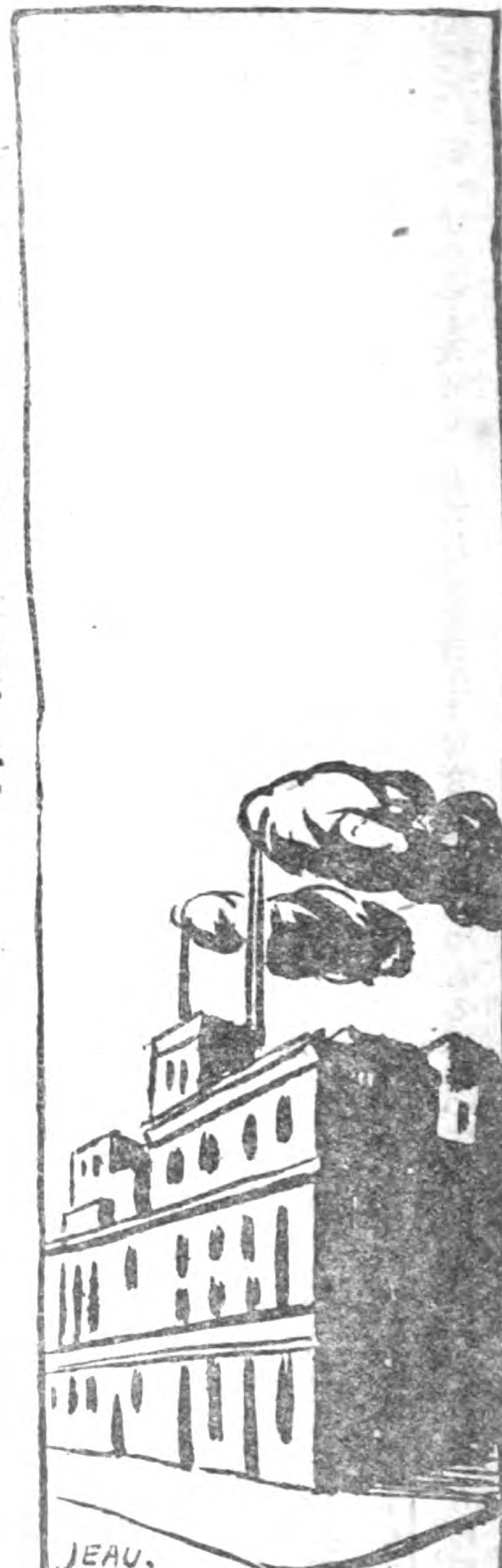
社會は、渾圓球上を通じてひとつほかない。一部の道德的及び智能的低級は、間接には全部の弱みだ。眞實に政治的自治力なき人々が、單に制度的に、政治的自治の機會を與へられても、その機會を正用し、善用しうる可能にない。わ

れらは、それ故に、黄、黒人の自治を希望するにあたつて、かれらの自治力の準備を要求する。廣義の教育が、くり返していふかたちになるが、最先始、且つ最根本の要事だ。近く支那人を見ても、遠く印度人や黒人を見ても、勿論われら日本人自身を省察しても、教育の餘地と必要が實に大だ。われらをして、先づわれらの心を造らしめよ。手と仕事とは、その結論として要求もされるが、必至もする。

黄、黒人の懐抱すべき理想としては、白人との協力も、白人に對する奉仕も、その一大要件でなくてはならん。けれども、協力や奉仕は、自棄や卑屈とは、本質的に別原則だ。本質的に反對の原則に支配される事實だ。例へば支那人にしても、日本人にしても、日本に對して自尊自敬するはよい。けれども、同じ支那人は、米、英等に對しても自尊自敬するでなくては、日本に對する自尊自敬も、無原則、無主義の現象として評價されねばならん。勿論、同種の批難は、日本にむかつても加へられる。強大國の前には卑屈し、弱小民の前には倨傲鮮腆するといふ傾向は、日本にも隨分ある。要するに、われらは、こゝでは特に亞細亞人としてのわれらをさすのだが、威張らず、へつらはぬ品性の持ちぬしとなる修養を積まねばならん。支那が、米國の後援を恃みに、日本にむかつて威張るのは、道徳的美觀でないのみならず、功利的賢策でもない。いまは亡びたるデニキン、ユーデニッチ、コルチヤツクの面々が、英米佛日の後援を恃みにレーニン政府をくつがへさんと企てた結果は、われらの記憶に新鮮だ。支那が要するものは、外國の援助にあらずして自助だ。日本を敵とするよりも、米國を友とするよりも、先づ自己を確實に所有することだ。日本も出直ほす必要が絕大だ。支那も出直ほす必要が決して淺小でない。支那も、日本も、國際的品性ある獨立國民となつて、亞細亞自治の一實行目録の成遂に誠心協力すべきだ。支那自立し、日本加勢せば、澎湃として滔天し來たる米歐人の侵亞を、道徳の道にかけて純眞化し、善美化することができよう。

支那、日本が、合して一個の組織せられたる社會體となることは、亞細亞獨立の條件として、すなはち亞細亞人の國際奉公の能率を高めるために、及び支那、日本兩國人の個性開發のために、極めて望ましい。個性の開發は、相手が或る程度以上の人的資格を有するならば、成るべく多種多様の個性に接觸する境遇下に實現される。精神的再生の要は、たしかに亞細亞全人口の眼前に迫まつて來た。國際的、人類的自治、責任、創造、全亞細亞人の、いはゞ臥薪嘗膽の銘語は、これでなくてはならん。臥薪嘗膽とはいつても、復讐の意味では決してない。われらは、復讐すべき白人を有しない。弱小なる現實の自己を、理想の鏡前に立つて本質的恥辱と認め、一日も早くその恥辱から超脱する努力としての臥薪嘗膽を主張するにほかならない。

社會主義と國民主義とをくらべれば、社會主義は、人爲の不合理的制度習慣を打破するに努め、國民主義は、生物學的一要素を、かなり強烈に含んでをるが故に、社會主義の方が意義多く、國民主義の方は不聰明、時代錯誤に見えるかも知れない。けれども、現代に於いては、人爲的階級別と、天爲的民族人種別とは、ふたつながら實在だ。しかも大勢力ある實在だ。われらの綜合的個性主義、すなはち綜合的社會主義の理想は、その兩實在を、ある通ほりに認識し、なるべき通ほりに改造する必要を、われらに警告してやまない。



資本增殖の理法と資本主義の崩壞（其二、完結）

福田德三

（十）

マルクスは云ふ、『資本制生產行程の本質は、餘剩價値の生產に在る、此餘剩價値は、支拂を受けざる勞働が體化せられ居る餘剩產物、又は、生產商品の該當均等部分として現はれる。此餘剩價値——其の一部が資本へ還元すること即ち資本の蓄積は、餘剩價値の此生產の不可離一部を成す——が資本制生產の直接の目的であり、又決定動機であることを忘れてはならぬ、從つて、生產を以て、其目的ならざること、即ち享樂若くは資本主に對する享樂資料の生產を以て、

其目的とするものなりと思つてはならぬ。……乍去、此の餘剰價値の生産丈けでは、資本制生産行程の第一幕たる直接生産行程が終るのみである。此行程に於て、資本は多かれ少かれ或る量の支拂はれざる勞働を吸收した、利潤率の漸落に現はれる處の此行程の發展に伴ひ、斯く生産せられた餘剰價値の分量は莫大なものとなる。ソコデ、第二幕が開かれる。全商品量、全生産物、即ち不變、可變兩資本を補充する部分も、餘剰價値となる部分も、何れも、賣られなければならぬ。其れを賣ることが出來ないか、賣れても一部分に止まるか、又は生産費以下の價格にしか賣り得ぬときは、勞働者の絞取りは、無論依然として行はれはするが、其絞取つたものは、資本主に對して餘剰價値として現實のものとはならぬ、絞取つた餘剰價値は全然現實せられないで終るか、一部分現實せらるゝに止るか、若くは、其資本の一部又は全部の缺損となるの外はない。即ち直接絞取りの條件と、其現實化の條件とは決して一致するものではないのである。兩者は時と處とに於て一致せざるのみならず、概念的にも一致せないものである。前者は、社會の生産力によつてのみ制限せられるものであり、後者は、各種生産業の比例性によつて、又た、社會の消費力によつて制限せらるゝものである。トコロが、社會の消費力なるものは、絶對的生産力によつて定められるものでもなく、乃至は、絶對的消費力によつて定められるものでもなく、社會大多數の者の消費を、より多くか、より少くか狹い範圍内に於てのみ可變的な最低限に制約する對抗的分配關係の上に立つ處の消費力によつて定められるものである。社會の消費力は、又た、蓄積の衝動、即ち資本の增大と、擴張楷梯に於ける餘剰價値の生産とを求むる衝動によりても制限せられる。是れ即ち資本制生産の法則であつて、此法則を定むるものは、生産方法其ものに於ける間斷なき革命、これに必ず伴ふ現在資本の價値消失、一般的競爭、並に、單に資本制生産を維持する手段として、之を爲さゞれば、其生産は滅亡することを防ぐが爲めに、絶へず生産を改善し、其の楷梯を擴張す可き必要之れである。從つて、市場は絶へず擴張せられねばならぬ、

其結果、市場の各種事情と之を支配する條件とは、彌々益々、生産者より獨立せる自然法則の形を取ることゝなり、從つて益々制馭し難きものとなる。資本制生産に内在する矛盾は、生産の外野を擴張することによつて、其調和を爲さんとする。乍去、生産力は發達すればするほど、其は、消費力のよつて立つ處の狹き根抵と矛盾せざるを得ざることとなる。……（資本論第三卷上册二二五、六頁）……資本制生産は絕へず此の内在的制限に打克たんと努力する、併し乍ら、之に打克つには、更らに此制限を新たに且つ偉大なる規模に於て提出する手段によるの外はない。卽ち、資本制生産の眞の制限は資本自らである、言換へれば、資本と其の價値增進とが資本制生産の出立點であり又た到達點であり、動機であり又た目的であることが、資本制生産の制限となるのである。更らに言ひ換れば、資本制生産の生産とは、資本の爲めの生産であつて、生産要具は、生産者の社會に向つての生活行程の間斷なき自己擴張形成の單なる手段でなく、其れ自らが目的であるのである。生産者大多數の絞取りと貧民化とに基く資本價値の維持と其價値增進の運動が行はれ得る制限は、資本が其目的を達する爲めに用ゐなければならぬ生産方法、生産の無限なる增進、自己目的としての生産、勞働の社會的生産力の無限なる發展を標的とする生産方法と絕へず衝突せざるを得ないこととなる。社會的生産力の無限なる發展てふ手段は、現存資本の價値增進てふ限られたる目的と、永續的衝突に陷るの外にないのである。從つて、資本制生産を、物質的生産力を發展し、之に應ず可き世界市場を作り出す爲めの一の歷史的手段なりとすれば、其は同時に、此の歷史的任務と、之に應ず可き社會的生産事情との絕へざる矛盾を含むものである、（同上二三一、二頁）

之れが、マルクスの資本增殖の理法に立脚する資本主義崩壞必然論の斷案である。從つて、此必然論の妥當、不妥當は、此の斷案中に含まれた理論を吟味することによつて之を決せねばならぬのである。マルクスは、此理論を打建てる爲めに、こそ、前段縷述した單純再生産、擴張再生産の二者に關する理論を以て、其の資本循環論の歸結としたのであ

る。此兩理論が、前人未到の新天地を開拓したものなることは、之を認める人の甚だ多からざるに拘らず、斷乎として一の疑を容るゝ餘地はないものと、筆者は確信することと前に言つた通りである。筆者の吟味は、其上に打建てられた資本主義崩壞必然論に於ける、其等理論の運用に就て始まるので、其以前に就て之を試むる必要はないのである、否、其は無用の事業である。

(十一)

マルクスは明かに云ふ、資本制生産は、享樂若くは資本主に對する享樂資料の生産を以て其目的とするものではない、餘剩價値の生産が其目的であると。此れは實に至言であつて、一語をも增減する必要はない。否、增減することは出來ない。然るに彼は、此の餘剩價値の生産丈けでは、未だ第一幕たるに止る、更らに第二幕が開かれねばならぬと云ふ、其第二幕とは、此く生産せられた餘剩價値の換價行程之れである。此換價行程をマルクスは平易に言現はして、生産物は凡て賣られなければならぬと云ふ。賣られなければならぬものは、獨り不變、可變資本の補充たる生産物のみでなく、餘剩價値となる生産物も亦然りである。ソコデ、次の結果が生ずる、資本主は、其生産行程に使用した勞働の一部を絞取つて、餘剩産物を自己の手に收めた丈けでは、何んにもならぬ、其れ丈けでは、彼は産物を其手に有すと云ふに止つて、資本制生産の目的たる餘剩價値の作り出しは、未だ完成せられず、從つて資本其れ自らの增大は實現せられないのである。賣ることが出來ても、其れが一部たるに止るか、又は生産費以下にしか賣れないときは、資本は增大しないのみか、却つて一部又は全部の缺損を來たすこととなつて、折角勞働を絞取つたことが、無意義に歸して仕舞ふ。資本さへあれば、勞働の絞取りは出來る、絞取つたものゝ換價即ち絞取りの現實化は左様は行かない。前者は社會の生

產力によつて制限せられる丈けであるが、後者は、社會の消費力によつて制限せられると。此く說明し來るによつて、マルクスは、右立論の當初に返つて來る。即ち絞取りの換價、現實化の上から云へば、生產は結局、享樂、消費によつて制限せられるわけになるので、無論享樂を以て目的とするものではないが、享樂せられることがなければならないもので、之を其必須の條件とするものだと云ふ結論に到達したのである。ソコデ、餘剩價値の生產を目的とする資本制生產は一方生產力によつて制限せられることは無論であるが、生產力が許しても、消費力が許さなければ、其目的を遂することが出來ないと云ふことになる。而して、社會の消費力は絕對的生產力によつて定められるのでも、絕對的消費力によつて定められるのでもなく、對抗的分配關係に立脚する消費力によつて定められるもので、同時に又た、蓄積の衝動によつて制限せられるものである。それが、資本制生產を支配する根本法則である、資本制生產は滅亡せさらんが爲めには、維持せられ得んが爲めには、絕へず、其生產物を賣らなければならぬ、賣り得る爲めには、絕へず、市場の擴張を圖らなければならぬ、ソコデ、市場事情は、生產者——勞働者を云ふ——から獨立して働く自然法則の形を取る。此法則は資本制生產の目的を現實化するに是非之を守らなければならぬものである。乍然其は他方に生產力の發達と矛盾する。此矛盾に打克つ爲めに取る手段は更に多々益々其矛盾を增大することとなる。約して云へば、生產力の增進と消費力の增進とが到達一致し得ない爲め、結局資本制生產は此矛盾の爲めに必然的に崩壞する外はないと云ふのである。マルクスは、此れを資本制生產の內在的矛盾であると云ふ。

資本制生產は果して此くの如き『內在的』矛盾を有するか、否か、內在的と云ふ意は、資本制生產其もの〻內に在ると云ふことでなければならぬ、消費と云ふ事は、生產の內にあるのではない、兩者は一致することあり、一致せざることあり、兩者が一致するときは、一見或は、消費は生產に內在するかの如くに見へるであらう、然し其れは內在ではな

く、一致である、兩者一致せざるときは、外見的にすら決して內在はしないのである。然らば資本制生產に於ては、兩者果して一致するか否か。經濟學の通說は、一國生產の範圍が、其消費によつて支配せらるゝと云ふ、卽ち生產と消費の一致を認めるものである。而して右の矛盾を指摘したマルクスは、其矛盾を內在的であると云ふのは、經濟學の此通說を取るものなのである。詳しく云へば、人間の經濟行爲を必竟人間欲望の充足を以て最終の目的とするものなりと云ふのであつて、其れに至る徑路は、種々複雜な迂回を爲すであらうけれども、結局は、生產の目的は消費にあるものとし、消費せられないものを生產することはあり得ないと認むるのである。リカルド及其學徒は、生產さへあれば、消費は必ず之に伴ふと云ふ、ジョン・スチュアート・ミルは、其有名な『資本に關する基礎定理』（原論第一卷第五章）に於て、產業は資本によつて制限せらる、而して事實に於て、產業は資本の制限まで達せぬことがあり得る。其れと共に、資本の增加は必ず勞働に對する需要を增し、而かも其增進には何等の限度はないと、極めて樂觀的な斷案を下したことは、經濟學を學ぶ人の誰も熟知する所である。マルクスは、之と反對に、資本の增加は產業擴張の可能を超へて起る、而して其れは勞働者の需要增加によつても、資本主の需要增加によつても伴はれなくなると、悲觀的に其必然論を主張して居るのである。ミルは、過超生產を頭から認めず、マルクスは、過超生產は、資本制生產に避く可からざる必然的現象なりとするのである。

過超生產は、生產を以て消費を最終の目的とするものと認め、生產の範圍は消費に依つて制限せらると認むるときは、資本の增殖を唯一最終の目的とする資本的生產に免る可からざるものなりと云ふことは、論理上當然である。何となれば、其れは一の『ペテチオ、プリンチピイ』（匿證伴爭）である。資本の增殖を目的とすると云ふことと、消費を最終の目的とすると云ふことは、論じ詰むれば、必ず矛盾撞着するに極まつて居る、論理上此れ位明白な事はない、唯一

最終の目的は一でなければならぬ、二つの唯一最終の目的なるものがあれば、其れは何時かは、衝突矛盾するに定まつて居る。マルクスが、資本制生産に内在すと云つた矛盾は、資本制生産に内在するのでなく、マルクスの論理の内に内在して居るのである。何故にマルクスは、此矛盾を其論理に内在せしめたか、答へて曰く、其れは、マルクスが、其理想とする非資本制生産の本質を以て、資本制生産の本質と混同せしめたからである。——即ち矛盾は人類社會に内在するのである——彼れは、資本制生産の自然法則を非資本的生産の自然法則の中に求めたのである。否、資本の增殖、其れへの手段としての餘剩價値の生産を目的とする資本制生産に、更らにより先きなる目的——即ち欲望の充足——を與へたのである。此のより先きなる目的と其手前の目的とは、早晚衝突するのは當然である。問題は、資本制生産に此くより進んだ目的を與へることが可能なりや否や、其れが妥當なりや否やに存する。其が妥當にして可能なりとすれば、マルクスの指摘した矛盾は確かに存する、然し其れは資本制生産に内在するものではない、資本制生産の範圍を超へた彼方にあるものと、其範圍内の目的との内外の矛盾衝突である、之に反し、其が妥當ならず、可能ならずとすれば、此くの如き矛盾は一向存せぬのであつて、ミルが、資本の增殖は無限に産業の擴張を可能ならしむと云つた說の方が資本制生産に就ては正しいこととなる可き譯である。

（十二）

此問題は、決してマルクスに始まるのではない、否、我々は、其最初の學問的解剖者を希臘のアリストテレースに於て有するのである。（此事は、經濟學研究所收の廿年前の舊稿『トマス・ダキノの經濟學說』以來、予が屢々論じた處である。左右田博士『經濟哲學の諸問題』にも此事に言及してある。）今試みに、アリストテレースの政治學第一卷から、當該箇所を摘出して

見よう。(ジョユウトの英譯とシュタールの獨譯とを折衷して譯出する。)彼は云ふ、財を獲得する術(クレマチスチック)の中の一種は、自然的のものであつて、經濟(エコノミワク)の一部分を成すものである。我々は、生活の必要品は既存のものと想像するか、又は經濟の術(エコノミワク)は、家族又は國家の共同使用の爲めに、生活必要品の諸へを供るかでなければならぬ。此は眞正の富の要素である。何となれば、善き生活の爲めに要せられる財産の分量は、無制限なものではない、ソロンは、其の詩の一篇に於て、「人に向つては富に何等の制限は定められてない」と歌つたけれども。制限は確かに定められてあること諸藝術に於ける如くである。何となれは、如何なる藝術でも、其要具は數に於ても大さに於ても決して無限ではない。而して富は、家庭又は國家に於て用らる可き要具の一定數と看做し得可きものである。かくて、我々は、家庭の主宰者又は政治家によつて實行せらるゝ財獲得の自然的技術あることと並に何故に然るかを知る。然るに、財の獲得(クレマチスチウク)には更らに他の種類がある、それは普通、而して正しく貨殖術(カピリック)と稱せらるゝものであつて、其れは、富と財産とは何等の制限を有せぬものなりとの觀念を事實に於て示すものである。

此は前者(自然的財の獲得)と密接の關係があるもので、屢々同一視せられて居る。乍去、兩者は甚だ異なつたものではないが、決して同一物ではない。前者は、自然によつて與へられたものであるが、後者は、經濟と技術とによつて得られたものである。我々をして此問題の檢討を次の考察によつて始めしめよ。凡ての物には二樣の使用法がある。二樣の使用法何れも物自らに屬するのであるが、其屬し方が違ふ、何となれば、第一の使用法は物に固有であるが、第二の使用法は非固有であり乃至は第二義的のものである。例へば、靴は之を穿つに用ゆる場合と、之を交換用に供する場合とある。此兩用共靴の使用法たるには相違ない　靴を有する者が之を得んと欲する者に、貨幣又は食物と交換して其靴を與へるときは、彼は其靴を靴として使用するには相違ない。然し其用法は靴の固有又は第一義的目的とする所ではな

い、何となれば、靴は交換の客體たる可く作られたものでないから。……故に我々は推論し得る、小賣商業は、貨殖術の自然的部分ではない、若し其れが自然的部分であるなら、人々は、其欲する所を十分に有するときは、交換を全く行はないことになる可き筈である。而して、最初の共同體即ち家族に於ては、此貨殖術は明かに無用である、其は社會が増加するとき始めて有用となるものである。何となれば家族の各員は、元來凡ての物を共用して居たから。………（政治學一ノ九、ベッカー校訂原文（ニューマン版による）一二五六b一二五七aに至る）自然的富と自然的貨殖術とは、異つたものである。其眞正なる形に於ては、此等は、經濟（エコノミック）の一部を成す、然るに小賣商業は單に交換によつて富を生産する術である。其れは貨幣と關連して居る、蓋し貨幣は、交換の始めであつて又た其の尺度又は制限となるものである。而して此種類の貨殖術から生ずる富には何等の限界もないのである。恰かも醫術に於ては、健康の追求に制限がない如く、又は諸々の藝術に於て、其目的の追求に制限なきが如くである。何となれば、此等は何れも、極限まで其目的を到達せんとするものであるから。（乍併、其手段には限界がある、何となれば手段に取つては、目的は常に其限界であるから）。其の如く此の貨殖術に於ては、其目的には、何の限界もない、其目的は假裝的の富、即ち貨幣の獲得である。之に反し、經濟（エコノミック）には限界がある、貨幣の無限なる獲得は、其の務も關知せざる所である。然るが故に、或點から見れば、凡ての富は、限界を有つものである、然るにも拘らず、事實としては、我々は其反對が行はれて居るのを見る、其故は、凡ての貨殖從事者が、際限なく其の貨幣の蓄積を增加するからである。此の混同の源は、此貨殖行爲の二種が密接なる關係を有するが爲めである、兩者共其の要具――即ち富――は同じ物である、其使用法は異るけれども。かくて兩種は混同せられる、兩法とも同一財產である、其異る所は、一法に於ては、蓄積が目的であるが、他法に於ては、蓄積より外に目的があること是れである。故に或人は、貨殖（クレマチスチック）が經濟（エコノ

ミック）の目的であると信ずる様になり、其生涯の全思想は、唯際限なく貨幣を増加するか、若くは、少くとも、其有する貨幣を失はざらんことを勉むるに集中せられる。此くの如き傾向が人々に起るのは、彼等が唯だ活きると云ふことのみを念とし、善く活きると云ふことに想到せないからである——昔の希臘にも、安田某の如き人間は居つたのである——而して、彼等の願望は、無限であるが故に、彼等は又た其願望を充たす可き手段も無限たる可しと希ふのである。…………かく吾人は貨殖術の中に不必要なるものあること、而も何故に人々が之を求むるかを説明した、其れと同時に吾人は、必要なる貨殖術なるものは、之とは異るもので、經濟の自然的一部であること、其れは食料の供給に關するもので、前者の如く無限でなく、限界を有するものなることを明にした』と。（同上一二五七b一二五八a）有名な英國のアリストテレース研究者ニューマンは、此一節を評論して『此問題は一見した所では、純學問的趣味のものたるに止まる様であるが、決して左様ではない、アリストテレースは、此研究を、徹底的社會改良 Sweeping Social Reform の出發點としたのである。……彼の目的はクレマチスチックを其自然に引き戻さんとするに在る』と。（『アリストートルの政治學』一八八七年刊第一卷緒論一二七頁以下）マルクスは、自然に引戻す手數を費やすまでもなく、此の不自然的貨殖術其のもの丶内に、矛盾が内在することを主張し、其矛盾の爲めに、此の不自然的貨殖經濟は、必然的に其自ら崩壞すと論ずるものであつて、アリストテレースをして言はしむれば、二種の貨殖術が餘りに密接に關係して居る爲め、之を區別することを忘れ、兩者を混同し去つたものなのである。アリストテレースは、自然的貨殖經濟には制限がある、其れは蓄積より先に進んだ目的——蓄積を手段とする——即ち人の生活必要品を得ると云ふこと是れであるとし、之に反し、不自然的貨殖經濟は、蓄積が最終の目的であつて、其より先きに目的がないから、之は無限に行はれるものであると說いで居る。マルクスは、資本制生産——即ちアリストテレースの不自然的貨殖經濟（カピリツク）——にも、矢張り蓄

積より更らに先きに目的がある。其れは社會の消費である。消費には限界がある。從つて此の不自然的貨殖經濟にも限界がある、然るに其れは無限に蓄積して行く、其處に矛盾が生ずる、其矛盾の爲めに、此の不自然的貨殖經濟は必然的に自ら崩壞すると主張するのである。アリストテレース正しきか、マルクス正しきか、此れ我々が考察す可き根本の問題である。

(十三)

アリストテレースが、不自然的貨殖經濟と名けた『カピリツク』は、即ち今日の經濟學の術語に於て云ふ『營利經濟』(エルヴエルブス・ヴヰルトシアフト)である、彼が經濟(エコノミツク)の正當なる一部を成す自然的貨殖經濟と云ふものは『非營利經濟』——ゾムバルトの造語では、欲望充當經濟、ベダルフス・ジツクングス・ヴヰルトシアフト——である。オツペンハイマーに言はせれば、前者は『純粹經濟』、後者は『政治的經濟』である。トガン・バラノフスキーに言はせれば、前者は『調和經濟』、後者は『對抗經濟』である。資本制生産、資本主義經濟は、營利經濟の最も代表的なものであるが、其外にも、封建經濟、奴隷經濟が之に屬することは、ゾムバルトが其『近世資本主義論』に於て詳論して居る通りである。非營利經濟、欲望充當經濟、純粹經濟の最代表的なものは、過去にあつては所謂『自足經濟』であり、將來の可能としては、社會主義經濟是れである。アリストテレースの所謂無制限なる不自然的經濟は、資本主義に於て、其絶好の代表者を有し、其の所謂自然的經濟は、將來の問題としては、社會主義經濟に於て、其典型を見出すのである。而して今日現在の經濟組織は資本主義組織である、アリストテレースの最も不自然的にして不必要なりとした貨殖經濟、蓄積最終目的の經濟である、此點までは、誰人も異論を容れない處である。問題は、其れから先に起り來る

のである。即ち此の最不自然的貨殖蓄積經濟たる資本主義の下に於て、生産は消費によつて制限せらるゝや又は其反對にアリストテレースの言ふ如く、其生産は、其貨殖（クレマチスチック）は、蓄積以外何物の制限をも被らさる無限のものなりや否や是れである。非營利經濟即ち過去の自足經濟と、將來の社會主義經濟に於ては、欲望充足が最終の目的である——故にゾムバルトは之を欲望充當經濟と名付けた——消費が其行き止りである、從つて、一切の生産は、消費によつて限定せられ、生産と消費とは、必ず一致す可き筈であると經濟學從來の通說の教ゆる如く、又たマルクスが前提したる如くである。此點に於ては、一の疑を容れない。而して、其はアリストテレースの言ふ如く、有限の經濟である、其下に於ては、無限なる蓄積と云ふことはあり得ず、無限なる資本の增殖と云ふことは起り得ぬは當然である。資本の增殖、蓄積の累加は、唯だ其れが消費し盡され得る點を限度として行はれ得る、而して此經濟組織の下に於ては、資本主義經濟に於ける如き無限なる蓄積の追求と云ふことはない、況んや其れが根本理法、自然法則たることは無論ない、從つて其間に何等の矛盾も起らない、何等の衝突も起らない——外の點は別問題である——是れ恐らくトウガン・バラノフスキーが此を調和經濟と名付けた所以であらうと思ふ。然るに現經濟組織たる資本主義經濟に於ては、自然法則的威力を有する資本增殖の理法が、生産を支配する、資本家を支配する、然るに此資本的經濟も、非營利經濟と全く同一に、消費を其極限とするものなりとすれば、其處に當然に根本的矛盾の起るは、殆んど多言を須たない、マルクスの擴張再生産論の如き緻密な立論は、殆んど蛇足と云ふ可きほど、當然な事となる譯である。かく、論じ詰めた結果、讀者は、問題の範圍が極めて平明なものとなつたことを看取せらるるであらうと思ふ。即ち、其れは、營利經濟も亦非營利經濟と同じく、結局消費を以て最終の限界となすものであるか否か、此れであるのである。

自足經濟に於ては、生産と消費とが悉く同一經濟單位内に行はれるか、其れが他の經濟單位と交渉するにしても、其

は例外に屬するのである。從つて、生產者と消費者とは、同一單位に屬する。されば、生產者と消費者との對抗は全然存しない。社會主義經濟に於ても、此對抗は存しない。其反對に、營利經濟に於ては、其凡ての形態を通じて、生產と消費とは、對抗せる二つの方面であつて、生產者たる資格と消費者たる資格とは、又た相對抗するものである。生產者たる勞働者は非營利經濟に於ては、悉く自己の經濟單位內に於て生產に從事するが、營利經濟に於ては、原則として生產者たる勞働者は、自己の經濟ならざる他人の經濟單位――企業――に於て、生產、勞働に從事するのである。ソコデ、次の差異が生ずる。非營利經濟に於ては、經濟主體は、原則として、自ら又た一の生產者、勞働者であるが、營利經濟に在つては、經濟主體は、生產勞働に直接與らない、其從事者は、單位以外の者であり、單位以外から從屬關係又は雇傭關係に於て拉らへ來つた者である。從つて其等の外來者の消費は、其經濟主體の單位內に於ては行はれない、生產經濟以外に於て行はれるのである。生產經濟は、其生產物の一部は、無論自己經濟消費の用に供するが、他の一部は、其經濟以外の消費に充て、更らに他の一部は、マルクスの所謂餘剩價値となる可く換價せられる、今日の資本經濟に於ては、其れ等は何れも直ちに、其經濟の生產物に就て行はれるのでなく、全生產物は、悉く價格に換へて賣られた上にて、始めて右の如き割當が行はれる。從つて事情は稍複雜となつて、一寸其眞相を捕捉し得ぬのである。反之、封建經濟や奴隸經濟は、此換價行程に必ずしもよらないで濟むから、其事情は割合に平易である。

(十四)

奴隸制度の下に於ては、奴隸は一の生產要具である、從つて、其消費は、假令、奴隸主の經濟單位內で行はれるとも、其は本質的には、其經濟單位の消費ではない、恰かも、飼畜の消費は其經濟單位の消費でないのと同じである、從て其

れは、所謂生産的消費であること、原料の消費、器具の銷耗と全然同一である。生産的消費は生産と其範圍を同くする、生産が擴張すれば、擴張した丈け、生産的消費は擴張する、其れの限界は、生産其もの以外にはない。即ちミルの云つた如く、資本の增加は、無限に勞働に對する需要を增すものである。奴隷の消費を生産の必要が制限すると云ふのは、奴隷に代ふるに、牛馬を以てし、又は動力を以てする場合に能く現はれる。奴隷よりも牛馬を使ふ方が利ありと見るときは、奴隷主は、從來奴隷の食料に充てゝ居たものを減じ、牛馬の飼料に充つ可きものを增す、之れが奴隷消費を制限することになる。此制限によつて、奴隷主は生産の結果を增大する、從つて自己の消費量を增すことが出來る、即ち生産要具たる人間の消費を減じて、生産主體たる人間の消費を增すことになるのである。此の轉換が大規模に行はれ、奴隷の數を著しく減じ、從つて奴隷用の消費を著しく減ずることが出來れば、タトへ、奴隷主が奢侈極まる生活をするやうになつても、猶は全體の上に於ては、人間消費の總量は又た著しく減ずることにもなり得る。而して、生産物は著しく增加する、即ち消費は著しく減じて、生産は著しく增し得るのである、此場合は、生産は、消費の爲めに少しも制限せられて居ないのである。此理が行はれたからこそ、奴隷經濟は資本制經濟の起る以前に於て、久しき間人類社會致富、貨殖の最有力な方法の一であつて、其爲めに、經濟上驚く可き諸〻な事業が成し遂げ得られたのである。

同一の理は、複雜な資本制生産に就ても考察し得られるのである。資本制生産に於て、奴隷に該當するものは、雇傭勞働者である、彼の消費は、奴隷制度に於ける如く、其外形に於ても、雇傭主たる經濟主體の單位内に於ては行はれぬ、其れ以外に於て行はれる、而して、直接生産物の一部を與へられるのでもなく、又た現物を支給せられるのでもなく、多くは貨幣賃銀として支拂を受け、之に換へて流通市場に於て、生活要品を買入れて其勞働者の家計即ち其經濟單位内に於て消費に充てるのである。ソコデ、問題は、支拂賃銀に集中する。

奴隷の消費の減少に當るものは、此の支拂賃銀額の減少である。此點に就てゾムバルトが所謂唯一の試を爲したトウガン・バラノフスキー氏は、支拂賃銀額が著しく減少し、而して資本主は自らの直接消費を少しも益さないで、餘剩產物を悉く資本形成用に充てると云ふ極端な場合を假定し、而してマルクスの再生產理論に立脚して、次の樣な推算をして居る。（『マルキシズムの理論的基礎』一九〇五年二二四頁以下）支拂賃銀の減少率を毎年二割五分と假定する、資本主の消費には少しも增減ないものと假定する、而して、第一年度の總利潤の四分の一は蓄積せられて、生產擴張の資に充てられ、殘四分の三は、生產に關係なき消費の用に充てられるものとする。其以後の年度に於ては、資本主の消費高は、絕對的には、少しも變らないから、利潤中蓄積せらるゝ割合は、段々增大する譯である。即ち左の如くなる。

	（一）生產要具の生產	（二）勞働者消費料の生產	（三）資本主消費料の生產
第一年度	1632p+544a+544r=2720	408p+136a+136r=680	360p+120a+120r=600
第二年度	1987,4p+496,8a+828,1r=3312,3	372,6p+93,2a+155,2r=621	360p+90a+150r=600
第三年度	2585,4p+484,6a+1239r=4309	366,9p+68,9a+175,5r=611,3	360p+97,5a+172,5r=600

p 生產要具　r 支拂賃銀　a 利潤

右を說明して見よう。第一年度に於ては、生產要具の價値は、支拂賃銀高の三倍と假定し、支拂賃銀高と利潤とは同額と假定する、ソコデ、假に（一）生產要具の生產に於ては、後の二者を五四四とすれば、生產要具高は、其三倍の一六三二である、此三者の總計が、生產要具生產一ケ年の結果である、其高は二七二〇である。（二）勞働者消費料の生產に於ては、後の二者を各々一三六とすれば、前者は四〇八で、三者總計六八〇となり、（三）資本主消費料の生產に於て、後の二者を各々一二〇とすれば、前者は三六〇で、三者總計六〇〇となる譯である。トコロが、第二年度に於ては、支拂

賃銀(a)は二割五分減少し、利潤高(r)は斯く減じた高丈け増加すると假定し、資本主の消費高は其價値が變らぬものと假定してあるのだから、資本主消費料の生産に於て次の變化が起る。要せられる支拂賃銀高は、第一年度には一二〇であつたが、第二年度に於ては、其二割五分減の九〇となる。其反對に利潤高は其減じた高(即ち三〇)丈け増すのであるから 120＋30＝150 一五〇となる。生産要具の價値は變化せず第一年度三六〇第二年度三六〇である。第三年度となると、支拂賃銀高は更らに二割五分(即ち二二、五)丈け減じて六七、五となり、利潤は、其れ丈け増して一五〇が一七二、五となる、生産要具の高は依然として三六〇である。(一)の生産要具生産(一)の勞働者消費料の生産に就ても、同一の變化が起るのである、其れを右表に數字で現はしたに過ぎない。ソコデ、利潤の高は、第一年度に於ては(一)五四四(二)一三六(三)一二〇であるから、總計八〇〇であつた。前の假定によつて、其の二割五分即ち四分の一が資本化せられる、即ち二〇〇が資本として蓄積せられるのである。仍て、資本主が第二年度に於て自己の消費に充て得る高は 800－120＝680 である。資本主の消費高は變らないものと假定した、即ち此高は、常に此の六〇〇である。

第一年度の終りに於ては、生産要具は二七二〇丈け生産せられたことは、前に算出した通りである。此高は第二年度の生産に全部投下せられて、生産要具生産用一九八七、四勞働者消費料生産用三七二、六資本主消費料生産用三六〇の割合で分割せられる。同じく第一年度の終に於ける勞働者消費料生産高は六八〇である、此高は即ち第二年度の三部門に於ける支拂賃銀高の合計 496,8＋93,2＋90＝680 と同じである、即ち全部其儘第二年度に於ける勞働者消費用に充てられるのである。同じく第一年度の終りに於ける、資本主消費料の生産高は、六〇〇である、此額は些の増減なく、第二年度に於て資本主の消費に充てられるのである。即ち第一年度の生産結果は一も殘す所なく、悉く第二年度の生産及消費の兩用に充用せられる。第一年度の支拂賃銀總額は 544＋136＋120＝800 で第二年度の其は 496,8＋93,2＋90＝680 で

ある。即ち 800−680＝120 丈け第二年度に於て減ずる、換言すれば、勞働者の消費は、一割五分減ずるのである。之に反し資本主の消費高には變化ないものと假定してある。第一年度に於ける三部門全體の總生産高は 2720＋680＋600＝4000 で、第二年度の該當額は、3312,3＋921＋600＝4533,3 で、其は一割三分の増加に當る。即ち、消費高が一割五分減じたにも拘らず、生産高は一割三分増したのである。第三年度に於ても同様に勞働者消費高は更らに六二一に減じ、生産額は四五三三、三が五五二〇、三に増加するのである。此く消費は彌々減ずるも、生産は彌々擴大して、資本制生産には何の支障が起らないのである。これがトウガン・バラノフスキーの推算である。ゾムバルトは、其『社會主義と社會運動』（第九版一九二〇年刊九六頁以下）に於て、『バラノフスキーの此試みは――茲に其れを細論するは餘の問題外に渉るから略す――予を滿足せしめない、然し其れはマルクスの恐慌論を攻撃した唯一最初の試みである、若し予が予の個人的意見――但し暫く其正當なることを立證す可き典據を示さずして――を述べ得るならば』云々と言つて居る。筆者も亦トウガン・バラノフスキーの以上の推算を以て悉く滿足するものではない、然し其れと同時に、其推算を誤謬なりと斥く可き理由を一も見出す能はざるものである。

（十五）

ゾムバルトは、バラノフスキーの說に滿足し能はざる理由を一も擧げず、而して自己の主張は、何等の立證を添ゆることなく、斷定的に之を示して居るに過ぎない。カウツキーも亦此トウガン・バラノフスキーの說に對して、之れは單純再生産から擴張再生産に移ると云ふ唯一個の場合に就てのみ考察したに過ぎない、決して資本主義の現實の全部ではない、而も其唯一の場合たる、實際に於ては殆んど起ることないものであると非難して、其說を斥けて居る。（一九〇一

爭ノイエ・ツアイト第四號一一六頁『恐慌論』）乍併、マルクスに囚れずして、客觀的に其立論の當然の歸趣を尋ぬる者から見れば、バラノフスキーの擧げた場合は、例外でなくして、其れこそ資本制生產の本質であると云はなければならぬ。マルクスの再生產の研究は、バラノフスキーの下した推論に於て、論理上其の當然の歸結を見出すものである。即ち資本制生產に於ける、資本の形成と生產の擴張とは、直接消費の大小とは獨立に行はれ得、又現に大いに行はれて居ると云ふことが、其の本質であるので、アリストテレースの所謂不自然的なる無限經濟は、資本制生產に於て、其絕好の代表者を見出すものである。斯く見てこそ、マルクスの周到にして破天荒なる循環行程に於ける資本再生產の理論は、學問上の大收穫となり得るのである。然るに、不思議にも、マルクスは、其業を半にして止め、此の當然の論結に到る前僅かに論步を間道に踏入れ、其再生產理論とは兩立せざる資本主義內在矛盾論に墮して仕舞つたのである、此は實に惜みても猶餘あることである。然るに、ゾムバルトもカウツキーも、否其他多くのマルクス評論家、何れもバラノフスキーを非なりとして、マルクスの一度踏入りたる迷路に彷徨して居るのは、更らに惜むべきことである。唯獨逸學界に於て卓越して明快なる理論研究者なるシュピートホフ氏丈けは、此點に於て一異例を成して居た（シュモラー年報一九〇三年度六八四年以下）

處が、近來經濟學の純理に於て、所謂『生產能性理論問題』及これに關連して『資本形成理論問題』が盛んに討論せられるに至り、獨逸社會政策學會は、近く物故せるマックス・ウェーバーの發案に基き千九百九年の其總會に於て、特に此問題の研究を其日程に上せた。（其議事錄は同會論叢第百三十二卷三二九頁以下に收めあり。）ゾムバルトは、此討論を評して、此れ實に社會政策學會の發展史に一新紀元を開くものであると云つた。此討論及び之に關連して公けにせられた幾多の研究は、ゾムバルトの言へる如く、確かに一新紀元を獨り獨逸社會政策學會のみならず、經濟學殊に流通理論に齎

らしたものである。(其詳細は追て公けにす可き拙著『流通經濟講話』に於て論述する。)

此等研究の結果は、資本主義生產組織の下に於て、所謂『生產能性問題』を從來の樣に取扱ふことの不可なるを十分に示めした。其は何故であるかと云へば、從來の所謂『生產能性問題』は、資本主義生產組織の下には存しないからである。リーフマンは一例を擧げて之を明かにした。米國に於ては、勞働者不足の爲め、豐作の年には穀物を畠に立腐れにして仕舞ふことが往々ある。從來の通說から云へば、此れは、極めて不生產的なことである。然し、リーフマンは云ふ、然らず、之を立腐れにすることは、强ゐて高い勞銀を支拂つて、之を刈入れるよりも、より生產的である。何となれば、立腐れを免れる爲めに、雇ふ勞働者に支拂ふ高い勞銀は、其儘にして置けば、其高い勞銀を支拂つても、猶ほ引合ふか、又は其れほど高い勞銀を拂はずとも、其勞働者が好んで從事す可き生產業から、勞働力を奪來る所以であつて、穀物の立腐れは免れるが、其代り、他のより生產的な業から、其れだけ勞働力の供給を奪來るによつて、其より生產的な業を妨ぐることになり、結局利は損を償はないからである。成程穀物を刈入れゝば、其れ丈け國民の食料は增す、然し同時に他方に於て、より有利な生產は減じて居るのであると。(コンラッド年報一九一二年二七三頁以下『經濟的生產能性理論の基礎』) 然り、資本主義生產に於て、何がより生產的なるかを決するものは、生產の餘剩である、而して生產の餘剩の大小は、決して國民の消費の豐否と同一義ではない、生產餘剩が大であるから、其れがより多く厚生的であり、小であるから、より少く厚生的であるとは云へない。生產能性を決するものは、一に國民經濟的餘剩が大なりや小なりや之れである、而して、資本主義經濟に於ける、國民經濟的餘剩とは、其が生產餘剩であつても、消費餘剩であつても、利用と費用との對照によつて決せられるものであつて、厚生の大小に直接何等關係のないものである、それが營利的流通經濟の特色である。リーフマンは、此立場から、餘剩は全然個人的主觀的のものであつて、之を根本動機とする今日の

經濟生活は全然個人流通的に說く可きものとして、尨大なる其『經濟原論』を大成した。然り其れは資本主義經濟理論としては、從來の何れの理論よりも確かに眞相を得たもので、彼の試によつて、今日の經濟組織は、自然と厚生の理論と全然絕緣せられるに至つたのである。リーフマンは、今日の經濟組織の下に於て、人は最急要の欲望から初めにたたし行くものでなく、最大の餘剩を生ず可き欲望充足から初めて、漸次其以下に及ぶものであると主張して居る。(同上三〇七頁) 而して、此れが最大厚生の追求と衝突することあるは、彼は明かに之を認め、之を以つて今日の交換組織の一缺陷なりと告白して居るのである。此理論を、資本の形成に應用して、リーフマンは更らに、資本の形成の大小は、消費充當の大小と同一の原則即ち限界餘剩均等による其最大の實現によつて支配せられることを明かにした。(シュモラー年報第三十六卷一五六五頁以下『貯蓄及資本形成の理論』)

(十六)

リーフマンの說は、資本主義經濟の面目を忌憚なく露骨に、大膽に提示したものである、筆者は、彼の主張に幾多の缺陷あることを認めるものである、然し乍ら、彼の提示した資本主義の面目は確かに眞なりと確信するものである。卽ち資本制生產の下に於ては、厚生は經濟と全く絕緣せられ、消費は生產と別乾坤を與へられて居るものである、流通生活」は、此く絕緣せられ、此く別天地の下に棲む消費と生產との交叉する世界である、而して其は全く生產の支配の下に活動して居るのである。生產の結果は、消費と資本形成とに分配せられるが、其分配を決する流通原則は、一に全く企業者及資本主の營利打算である、其れは限界餘剩均等、最大化の原則によつてのみ支配せられる。資本形成に充當せられるもの、內所謂生產的消費に向ふものもある、然し資本主の營利打算の現狀は、生產的消費を成る可く減ぜしめ

る。其れは生產要具の生產がより有利であり、又たより緊要であるからである、其の然る理由は、近世工業の發達は、生產要具を以て勞働に代へる工夫を甚だ多くし、其生產要具は、機械、器具、設備、原料、補助料の形に於て、益々價値大なるものとなる。タトヘ、勞働者の得る賃銀總額は絕對的に增進するとも──而して、其はマルクスの言ふ所に反し、疑ふ可からざる著明の事實である──年々の生產總額に對しては相對的に段々減少して行くのである、勞働者の消費不足（アンダー・コンザンプション）は事實であつても、事實でなくても、此點に何等の關係はない、資本主の自己消費は無論著しく增大した、然し生產額の資本化、生產要具化の割合の增大には遠く及ばない──此點に於てウキザース並に河上博士が資本主其他の奢侈品消費の減少に甚だ重きを置くことの殆んど赤手海水を汲む底の事たること疑を容れまい──マルクスの所謂擴張再生產は無限に增大して行く。人間の消費の代りに、物の蓄積が限界なく擴張して行く。同じく生產要具の中でも、消費用原料は、生產用原料の爲めに代位せられる、トウガン、バラノフスキーが指摘した如く、又たブレールスフオードが其『黃金の戰爭、鋼鐵の戰爭』に指摘した如く、（拙著『現代の商業及商人』及『暗雲錄』を見よ）又近頃山川均氏も說いた如く、十九世紀の前半は綿の時代であり從つてマンチエスターが其中心であり、其後半は、鋼鐵の時代であり、從つてバーミンガムが其中心である如く、世界は、消費用の衣料時代から、生產要具たる機械時代に進んだ、而して其れが、資本主義を、對外侵略的のものとしたものなることは、筆者が嘗て論じ置いた如く、山川氏が近來明快に指摘せられた如くである。此一事は軈て萬事を語る、外に對して侵略的となつた資本主義は、內に在りては全知全能、社會を擧げて、悉く資本蓄積の舞臺たらしめたのである。今日の流通經濟は、其無限なる擴張を遮る可き何物も存せぬことを、我々に確保する。消費より來る制限の如きは、痕跡だも之を認めることが出來ないのである。

消費、生產調和論を主張したリカルドは、樂觀者の最大なるものである、マルサスは、其一時的乖離を認めた點は、一

の悲觀論者であるが、其れが結局一致することを否定せざるが故に、又た是れ一の樂觀論者たるを辭し得ぬのである。

マルクスは、其根本的不一致を主張したことは大なる悲觀論者である、乍去、此不一致此矛盾は、資本制生產に內在的なものであると做し、其矛盾の爲めに、資本主義は、必然的に崩壞するものと信じたのは、大なる樂觀に耽けつたものと云はねばならぬ。我々の僅かに有する現在經濟組織の客觀的研究より來る流通理論は、此意味に於て、最極の悲觀を致ゆるのみである。資本主義は、決して內在的矛盾を有しては居らぬ、其の無限擴張は、アリストテレースが二千年の昔しに於て明示して置いた通り、其れ自らには之を遮る可き一の限界をも有しては居らぬ。從つて、此の內在的矛盾の爲めに、資本主義が早晚崩壞す可き必然性は些も存しては居らぬ。否、彌々肥へ太り、益々擴張發展し行く必然性を有して居るのみである。約して云へば、過超生產は、或場合——舊生產要具に代へる新生產要具生產は其代表的なものである、其事は他の機會に論じよう——を除くの外、今日の資本制生產の見地から見ては必然的に起るものではないと同時に厚生經濟の立場からは、彌々益々增加するものである。

雇傭所得と資本所得との根本的對抗は實に玆より起る。『資本家の所得中資本の形成に充用せられず企業者の手に於て直接消費の用に供せられる享樂財と——ウヰザース及河上博士の所謂奢侈——資本の形成に充てらる可く勞働者生計の料となる財との對立又は角逐のみを見て居た』（前號一六頁）正統派經濟を愚なりと笑ふ勿れ、賃銀鬪爭の形に於ける價格鬪爭を以て、階級鬪爭の本質とし、勞働爭議の本領とする者は、其妄なることに於て、決して彼れに讓るものではない。否、勞働爭議は、今日の流通組織の前提を其儘に据置きて、所謂所得の分け前を爭ふものと見るは、大なる誤謬である。若しもマルクスの主張する如く、根本的矛盾が資本主義に內在するものならば、勞働爭議とは、單に社會の一部と一部との間に於ける do ut des（與奪）の小競合に過ぎない、結局崩壞す可きものは、爭はずとも、鬪はずとも崩壞

する、唯其時期を早からしむるか、晩きに任せ置くかの『エキスペヂエンシー』の問題たるに過ぎない。之に反し、資本主義其物は、何の內在的矛盾を有せず、其擴張發展の可能は無限なることを知るとき、我々は『矛盾』を資本主義以外に探究す可き大な任務を有することとなる。何となれば、資本主義に矛盾の內在せざると云ふことは、人間社會に矛盾が內在せざると云ふこととは同意義ではない、資本主義に取りては、外在的に矛盾が存せざるや否や、是れ即ちアリストテレースが、其政治學第一卷に於て、殆んど其主要題目として論究した所である。今日の勞働爭議は、或は意識し、或は意識せずして、アリストテレースが一度學問上に提示した問題を、實際運動の上に於て解決せんとするものである。筆者は之を名けて厚生運動、厚生鬪爭と云ふ。其意は、社會 厚生化の爲めの運動、鬪爭と云ふことである。ロレンツ・フォン・シュタインは前世紀前半の末に於て、既に之を看破した。勞働運動は勞働者の爲めのみの運動ではない、勞働爭議は、勞働階級解放の爲めのみの爭議ではない、若し然るならば、其數如何に多くとも、社會全體より見れば、一部の爲めの事たるに過ぎない。其れが今日の如く、あらゆる社會運動の、あらゆる社會政策の最要事項たることは、殆んど受取り難き錯倒である。今日現在の社會には、元より勞働運動以外に、此の矛盾を或は意識し、或は意識せずして、除去せんとする運動は多々ある、乍去、其れは、直接利害關係の運動ではない、何となれば、其等は、此の矛盾の爲めに、資本增殖の無限發展と人間の眞正なる厚生發展との衝突の爲めに、目前に苦しみ惱むものではない、之に反し、今日の勞働階級は其全存在を擧げて、其全行動に渉つて、此の矛盾の爲めに、日となく、夜となく壓迫せられつゝあるものである。乃ち彼等は或は意識し、或は意識せずして、全社會の此矛盾よりの釋放の爲めの運動の先頭に立つ可く餘儀せられたものである。是れあらゆる社會解放運動が勞働運動を其旗手ともし、其代表者ともし、之に最大の注意を向ける所以である。斯く選び出された先鋒が、若しも價格鬪爭、do ut des に沒頭し去るときは、其は矛盾よりの

解放を後らせることにもなり、又た他面には、更らにより有力なる新らしき運動を喚起することになるであらう。社會發展の順路は、既に今日迄幾多の經驗を積み來れる勞働運動が其眞使命に十分に覺め、其の遂行に全力を傾注せんことを要求する。其眞使命とは他なし、勞働運動が厚生運動であり、勞働爭議が厚生鬪爭であると云ふこと是れである。此使命に覺めるとは、他なし、勞働運動の厚生化の謂である。（十、十、七）

本論文は更らに二三回連續す可き豫定にて稿を起したるものなれども、月刊雜誌上に餘りの長文は讀者の迷惑となる可きを悟り、俄かに省筆を用ゐた。故に論ず可き問題を殘したものが多い、殊に利潤率漸落に關するマルクス理論の評論は全く之を略した。他日機あらば、此缺を補はうと思ふ。從つて、前號論文末尾『正統學派に追從せず』以下四行は削除せねばならぬ。（終）

知識階級の無識

山川均

一

『レーニンとは何か』といふ試験問題の答案に、『悪薬の名前』と書いた女教員がある。『専ら資本主義中毒症に賞用す。』と附加へたかどうかは知らぬ。

この程、『中央公論』は秋季記念號の誌上に、『プロレタリアの専制に對するインテリゲンツイアの偽らさる感想』といふ試験問題に答へた、十三名の『インテリゲンツイア』の答案を發表した。是等の受験生の或者は、この問題を勞働運動の『惡化』と解し、或る者は謂ゆる『指導者排斥』の問題と解し、更に一層賢明な或る者は、此機會を捉へて、哲學的の深刻さと智力的の混沌さとを發揮した。之を知識的遊戯と云つてしまへばそれまでゝあるが、遊戯必ずしも無意義でない。吾々は『戰爭ごつこ』のうちから、軍國主義的心理を學ぶことが出來るのと同じように、知識的『遊戯』のうちからも、吾々はインテリゲンチャの心理を知ることが出來る。

『プロレタリアの専制的傾向』とは、一體どんな『傾向』を指すのか明らかでないが、謂ゆる『無産階級獨裁』（プローレタアンデイクテイトルシップ）を指したものと見てよからう。假りに『プロレタリアの専制』とは無産階級獨裁を指したものとしても、疑問は尙ほ殘つて居る。無産階級獨裁の『傾向』とは、一體どんな『傾向』を指すものであらうか。

しかしながら此の試験問題の意味について斯ような疑問を起す者は要するにインテリゲンチャたる資格のないものである。少くともブルジョア・インテリゲンチャたる資格のないものである。インテリゲンチャは敏感である。彼等は『無産階級獨裁』の一語を聞くと、直ちに『勞働運動の左傾』を直覺する。『無産階級獨裁』の一語によつて、勞働運動の左傾を直覺することは、彼等が其の眼前脚下に開展する『勞働運動の左傾』といふ事實

を見る時に、常に『無産階級獨裁』を直覺して居るといふ事實を告白したものである。

『無産階級獨裁』といふ試驗問題に對する答案としては、一二の優等生を除いては、多くは落第である。況んや此課題の要求は『僞らざる感想』である。『無産階級獨裁』といふ問に對して、勞働運動の左傾や指導者排斥問題を語ることは、明らかに僞りたる感想である。けれども巧みに此問ひに落ちなかつた時に、彼等は却つて語るに落ちて居る。『無産階級獨裁』といふ一語を聞いて、直ちに、舊き秩序に代らんとする新興階級に對する恐怖と憎惡とを直覺したことは、慥かに彼等の『僞らざる感想』に相違ない。此點に於ては、答案は全て滿點である。

斯ように此の試驗問題に對する答案の大多數が、新興階級に對するインテリゲンチヤの恐怖と憎惡とを以て答へた一點に於て一致して居るにも拘らず、其形と方向とは色々であつて、それが『僞らざる感想』の發露であることを證據立てゝ居る。そこで是等の答案を分類して採點を行ふといふようなことは、思ひも寄らぬことであるから、玆には各々の答案に就いて、其の片言隻語に現はれて居る知識階級の『知識』に敬意を表することに滿足しなければならぬ。

二

先づ第一に答案を出して、得意滿面で教場を出たのが、早大教授杉森孝次郎君である。杉森教授によると、『富の生産に必要不可缺な一位置を信ずる勞働者が、人間通有の道德的自尊心をその社會から非認されてゐるとは、教育、文化、個性の進步につれて、勞働者が怒りを發する道理だ』そうである。そして『勞働者の專制的傾向は』、杉森教授によると、『或る大いなる部分まではこの怒りだ』そうである。之を普通の言ひ方に反譯すると、無産階級獨裁なるものは、大部分、勞働者の怒りの現はれたものである。そして此怒りは、杉森教授によると、『道理』である。從つて此怒りを意味して居る範圍に於ては、無産階級獨裁なるものは、杉森教授によると『道理』お尤なものである——。之は慥かに無産階級獨裁を辯護する——レーニンもトロツキーもまだ氣が附かぬ——新しい一方式に相違ない。

然しながら無産階級獨裁は、杉森教授によると、『或る大いなる部分まで』だけがこの怒りの現れであるから、從つて『或る大いなる部分まで』だけ『道理』のあるものである。之を逆樣に言へば、無産階級獨裁には、少くとも『或る小いさなる部分まで』は『道理』に反したところがある。そして其部分は精密に、無産階級獨裁が杉森教授の社會觀と人生哲學とに無智だといふ點にある。

けれども幸にして、此哲學者の社會觀は極めて公平である』。社會は勞働を社會的一分勞として明知し、勞働者を人間的一實在として正信すべきだ。その知信にもとづいて勞働及び勞働者を善遇すべきだ。これは社會の責務だ。』（斷はつておくが、之は誤植ではない、原文のまゝである。尚は『知信』といふのは按ずるに『明知』するとと『正信』することとを加へて、二で割つた答を現はす、哲學者的の用語である）。この哲學者の公平は、先づ資本家階級に頂門の一針を與へさせる。そこで喧嘩の相手――强そうな年嵩さな方――に一喝を與へる。しかし喧嘩は畢境兩成敗である。資本家階級に勞働者の『善遇』を命じた哲學者はくるりと向き直ほつて、今度は勞働者の不心得を訓戒する。この哲學者の哲學が、一層實用向きの不斷着に着更へたものが、即ち日本では『勞資協調會』と呼ばれて居る。要するにこの哲學者の最も深遠な哲學は、第三者の立場から階級鬪爭を見る最も有觸れた中間階級的心理から、一歩も踏み出して居らぬものである。鳥のうちの最も鳥らしくないものと、獸のうちの最も獸らしくないものとが、蝙蝠といふ一點に接觸點を見出すように、資本家階級のうちの最も聰明な思想を代表する『協調會』と無產階級的分子のうちの最も無自覺な部分を代表する『哲學』とは、『公平な立場』に一致點を發見する。唯だ杉森教授の『哲學』が、資本家階級の『協調會』に一歩を拔いて居るところは、『協調會』が資本勞働の爭ひといふ、現實を卒直に見て居る時に、杉森教授の哲學は、資本家階級が勞働者を『善遇』する責任を、資本家階級の肩から、巧妙に且つ『哲學的』に社會に轉嫁した一事である。『協調會』によれば、資本家の責務であつて、杉森教授にすると、『これは社會の責務』なのである。社會の大部分を組成する勞働者を『善遇』することは、杉森教授によれば、『社會の責務』である。この哲學者の哲學によれば、社會とは勞働階級以外の社會である。資本家階級、之を哲學的に言ひ現はすと『社會』となる！　こゝに哲學者と哲學との尊い任務がある！

三

『社會』と名づける資本家階級に、一喝を與へた杉森教授は、今度は喧嘩の相手――恐らく青鼻を垂した小僧――の方に向き直ほる。

『勞働者自身は、勞働の概念の充實擴張を、最先要事の一に算ふべきだ。經濟的生產に於ける一分勞としての意義に、勞働を限定するならば、それにも及ばないが、勞働專制を、生　界、產業界、或ひは政治、教育、文化の全野にわたつてまでも實現したく思ふ人々は、勞働概念の擴充を先決條件とすべき

だ……』。

何だか無產階級獨裁の成功の秘訣の傳授のやうだが、悲しいかな吾々には、第一『勞働の概念の充實』とは、一體何を塡めこんで充實させるのか分らない。哲學つ世界では、生產界の勞働專制の外にも、生產界とは違つた產業界の勞働專制といふものがある。政治上の勞働專制から離れた、生產界の勞働專制があり、產業界の勞働專制があり、敎育と文化との勞働專制といふものもある！　して見ると露國の勞働者の如きは、勞働專制のイロハしか知らぬものである。

無產階級獨裁の成功の秘訣は、『勞働の概念の充實』にあるのだから、勞働者たるものは、忍耐力を奮ひ起して、杉森敎授の哲學を塡め込まなければならぬ。

『いはゆる筋肉勞働なしでは、いかに完全に科學者と、技術家と、組織者すなはち經營者と、それから物的要件としての原料、機械、工場が揃うても、富の生產は不可能だ……。（之は不思議だ！）

『けれども、勞働者は、筋肉勞働を供給しないといふ消極的手段に依賴して、資本主義を困厄させても、それは一部、一時の便策としての、少なる價値を有するに過ぎない、勞働者の志はもつと積極的であり、社會的でなくてはならん。すなはち勞働者は、科學者をも、技術家をも、經營者をも、生產勞働者内の分勞者であると、十分なる意義に於いて知信すべきだ、學者、藝術家、立法者、行政者、その他の文化的生產に從事する人々をも、同じく勞働者の一形、一態、一種、一類として、その存在理由と、發達理由とを、綜合的社會理想の見地から十分に肯定し、主張すべきだ。……』

そして杉森敎授によると、『勞働專制は、超勞働的目的と手段とを具備するを待つて、始めて成功の可能と、道德的社會的必要とを着ける』ものである。

吾々はもとより『超勞働的目的と手段』とは一體どんな目的とどんな手段であるかを知らぬ。しかし前後を綴ぎ合せて考へて見ると、此の哲學者の敎訓は、無產階級獨裁の目的とする社會主義的建設の事業には、謂ゆる智力勞働の關與が必要であつて、勞働の概念の『充實擴張』とは、勞働といふ言葉のうちに筋肉の勞働と智力の勞働とを併せ含めるといふ事にあるらしい。

若し勞働の概念の『充實擴張』といふことが、斯ような意味だとしたならば、マルクス以來、勞働の概念は充分に『充實擴張』して居るのである。敢て今更ら『綜合的社會理想の見地』などに這ひ上つて、『明知』したり『正信』したり、『知信』など

といふ手數を重ねるまでもなく、勞働の概念が充分に、充實擴張』して居ることは、『筋肉勞働』といふ言葉の存在そのものが明らかに之を語つて居るではないか。して見れば、少くとも杉森教授の哲學の上では、無産階級獨裁は、『生産界、産業界、或ひは政治、教育、文化の全野にわたつてまでも、實現』せらる可き『先決條件』が既に備はつて居ると云ふことになる。

四

勞働の概念——少くとも勞働者の勞働の概念——は、杉森教授の哲學によつて『充實擴張』して頂くまでもなく、充分に『充實擴張』せられて居ることは、最も純粹な形に於ける生産者『專制』の主張とも見る可き、サンヂカリズムに立脚する佛蘭西のC・G・Tが夙に智力勞働者の包容に努めて來た一事によつても知ることが出來る。

新社會の建設的事業に、智力勞働者——杉森教授の謂ゆる『文化的生産に從事する人々』を必要とすることは云ふまでもないことであるが、この云ふまでもない事を最も明かに知つて居るのは、杉森教授ではなくて露國の勞働者であつた。露國の勞働者は、時には新社會建設の事業に對する彼等のサボターヂュを粉粹する爲に、强硬な鎭壓政策を取ることをも辭しなかつたと同時に、時には共産主義の原則を破つてまでも、例外的の報酬を提供して彼等の協力を得ようとした。無産階級獨裁の權力が、是等の知識分子に對して如何なる形で發動するかは、其當時の形勢と新社會建設の事業に對する、是等の知識分子自身の態度如何によつて定まることであるが、軟硬いづれの政策も、要するに彼等の協力の必要を認めた結果に外ならぬ。

之は露西亞に往くでもない。昨年伊太利三十萬の金屬勞働者が、工場占領を行つた時はどうだつたか。幸ひに金屬工業に從事して居る伊太利の知識階級の多數は、進んで勞働者の計畫に加擔し、占領工場の經營に協力したが、少數の專門技術者は、露國に於けると同じように、協力を拒んだのである。『勞働者專制』は、是等の知識分子をどう取扱つたであらうか。此場合に取つた伊太利勞働者の『行動』は、何人も知つて居る事柄ではあるが、特に杉森教授の『哲學』の精神に一致して居るから云つておく。曰く、彼等は、是等の專門技術者を住宅から工場に拉し來つて、强制的に就業させたのである。私は今、この『强制』の可否善惡を論じて居るのではない。唯だ伊太利の勞働者が、專門技術家の協力を『强制』したといふ事は、彼等が是等の專門技術家をも『生産勞働内の分勞者であると、十分なる意義に於いて知信したからこそである。伊太利勞働者の『志はもつと積極的であり、社會的で』あつたからこそである。して見れば『科學者を

も、技術者をも、經營者をも、生産勞働内の分擔者であると、十分なる意義に於いて信ずべきだ』といふ杉森教授の折角の御訓戒は勞働者に向つて云ふことではなくて、勞働階級の『積極的』にして『社會的』な新社會建設の事業に、協力することを知らぬインテリゲンチアに對して、勞働者の方から云ふことなのである。そして若しインテリゲンチアが、この訓戒にも拘らず、勞働階級の事業に協力を拒んだなら、其時には如何なる手段を取る可きであるか。杉森教授公平なインテリゲンチアの哲學の上から、寧ろ此疑問に答へらる可き筈だつたのである。

杉森教授は、『學者、行政者、その他の文化的生産に從事する人々をも、同じく勞働者の一形、一態、一種、一類』と認めることを勞働者に要求せられて居るが、之は一八七一年の巴里コムミユン以來、夙に勞働者の認めて居り、主張して居り、其實現を要求して居るところであつて、露國の無産階級獨裁は、或る程度まで之を實現した。即ち露國の勞働者は、謂ゆる『文化的生産』に從事する人々をも、同じく勞働者の『一形、一態、一種、一類』と認めて、其れ以上のものとも其れ以下のもとも認めぬから、一般勞働者と同一標準に基づく報酬を實行して居るところが無産階級獨裁に反抗するインテリゲンチアは、『文化的生産』に從事する自分の尊い精神生活が、菜葉服の卑む可き勞働の『一形、一態、一種、一類』として彼等と同列に立つに忍びぬから之に反抗する、露國の無産階級獨裁は、巴里コムミユンの傳統を承け繼いで、謂ゆる『文化的生産者』も一般勞働者以上の報酬を受けぬといふ原則を確立したが、之に反對するのは勞働者ではなくて、小ブルジョア的インテリゲンチアである。そして勞働階級をしてこの『不當搾取』せられた勞働の概念に反してまでも、其協力を得る爲に特に高給を支拂ふの止むなきに至らしめて居るのは、現に彼等である。杉森教授の『勞働概念の充實擴張』といふことが、勞働者に對して、現在のインテリゲンチアの特權的地位を其儘に承認せよといふ婉曲な要求でない限りは、當然、インテリゲンチアに向つて提出せらる可き要求なのである。

斯ように『文化的生産者』をも、勞働者の『一形、一態、一種、一類』と認めることは、諸君の方に御異存さへなくば――若くは御異存はあつても――勞働階級はとくの昔に認めて居る。唯だ然しながら勞働階級が、勞働の『一形、一態、一種、一類』と認めるものは、社會生活に必要な勤勞であつて、彼等には今日、『學者、藝術家、立法者、行政者』――資本制度の永遠性を立證する學者、資本主義的天國を歌ふ藝術家、勞働者を×××

×法律の立法者、人による人の支配の專門家、一言にすれば杉

森教授の謂ゆる『文化』の生產者――の有ゆる精力の浪費をも恐く『勞働』の『一形、一態、一種、一類』と認めるほど、しかく寛大に『勞働概念を充實擴張』する度量はない。少くとも勞働階級は、明白な事柄を難解の言葉に反譯したり、自明の道理を不明の哲學に捏ね上げて、之を『明知』し『正信』し『知信』することを吾々に強ひる『文化的生產』の『勞働』――少くとも此種の尊い勞働だけは――勞働の『一形、一態、一種、一類』として、機械油の臭ひのする卑い自分等の勞働と、同じ伍列に引下げるに忍びぬであらうと云ふことを斷はつておく。

五

その次に答案を出したのが、林癸未夫先生である。教授といふ肩書こそ這入つて居らぬが、『プロレタリアの專制的傾向』といふ問題を、まともに露國に實現された『無產階級獨裁』と正歸した唯だ一人の受驗者であつたといふことだけでも、慥かに先生の尊稱に値ひする。『レーニンとは何か』といふ試驗問題に對して、林先生は少くとも、それは人間の名前だといふ答案を出された優等生であることを天下に推賞する。

この林先生によると、インテリゲンチアは階級鬪爭の、キャスチング・ヴォートを握つて居る、最も有力な階級である。そして此主張を裏附ける爲に、林先生はコールを引證される。

『若し筋肉勞働者が精神勞働者の大部分を味方に附けることが出來るならば、彼等は殆ど抵抗なしに資本主義を崩落せしめることが出來るのみならず、それよりも遙かに勝れた、能率の高い社會及び產業組織を以て、資本主等に置換へることが容易に出來るであらう』。成る程、容易に出來るに相違ない。能率の高い產業組織が『殆ど抵抗なしに』『容易』に資本制度に取つて代ることの出來る色々の條件のうちで、知識階級の向背如何は慥かに重要な一條件である。けれどもそれと同時に、筋肉勞働者が資本家階級そのものを味方に附けることが出來たなら、彼等は『全く抵抗なしに』『一層容易』に資本主義を崩落せしむることが出來る。林先生は、資本家階級は『階級鬪爭のキャスチング・ヴォート』を握つて居るとは云はれぬであらうか。資本主義から新しい產業組織への推移が、『殆ど抵抗なしに』行はれることが、絕對の必要であり必然であると云ふことが假定せられた場合にのみ、知識階級は『キャスチング・ヴォート』を握つて居ると云ふことが出來る。それは恰かも、此推移が『全く抵抗なしに』行はれることが、絕對の必要であり必然であることが假定せられた場合には、資本家階級が『キャスチング・ヴォート』を握つて居ると云ふのと同じほどの眞理である！

『階級鬪爭のキャスチング・ヴォート』によつて有力な地位に上

ぼつた林先生の知識階級は、次には露國の謂ゆる無產階級獨裁が、實は無產階級の獨裁ではなくて、インテリゲンチアの獨裁であることを證明することによつて、其地位を確實にしようとする。林先生の知識階級は大凡そ次の如く推論する――

(1) 露國のプロレタリアは、『如何にして其獨裁權を執行するかと云へば。それは時々ソヴィエット議員の選擧に投票するだけである。』

(2) しかも『此の眞正なるべき選擧』すらも、『實際においては僅か六十萬の共產黨員によつて擅に操縱されてゐることは、今日周知の事實である。』

(3) 然るに六十萬の共產黨員中、純粹の勞働者は七分の一に過ぎず、大部分はインテリゲンチアである。

(4) 更に此六十萬の共產黨員も、『實は唯だ全露ソヴィエット議員を選出する爲の便利に供せられる集團に過ぎない。』

(5) 斯くして出來上つた、全露ソヴィエットは、『名義上』露國の主權を掌握してゐるだけであつて、實際の主權は、全露國ソヴィエットでもなく、『其中から選任される全露中央執行委員でもなくて、『この中央執行委員會から形式上任命されることになつて居る內閣議長レニン、陸軍兼運輸大臣トロツキー外五六名の巨頭であることは、何人も疑はない明白な事實となつてゐる』。

(6) 然るに是等の巨頭は『疑ひもなく總てインテリゲンチア』である。

そこでこの『周知の事實』と『何人も疑はない明白な事實』を基礎とした推論の歸結は、勞農露國は無產階級の獨裁ではなくて、インテリゲンチアの獨裁であるといふことになる！　從つて此の試驗問題は、――林先生によると――インテリゲンチアの專制的傾向に對する、プロレタリアの僞らざる感想』であつた方が一層適切である。そして林先生によると、『キャスチング・ヴォート』を握るものはプロレタリアだといふことになつたかも知れぬ。

然しながらキャスチング・ヴォートの巧妙な使用によつて、ブルジョアの『屈從者』たる地位から、一躍して獨裁者(ディクテトル)の顯位に上つた林先生のインテリゲンチアは、玆に至つて勝者の悲哀を感じて來た。彼は最後に斯う歎息する――『階級鬪爭の勝敗はインテリゲンチアの向背に依つて定まる。彼等は正にキャスチング・ヴォートの所持者である。――嗚呼併しながら、玆に勝利の當事者ではあり得ない』！確かに『僞らざる』感想である！

六

堀江博士の答案は、『無產階級の專制は、必ず從來行はれた有

產階級專制に對する、復仇の意味で行はれる』一點に於て、杉森教授の答案と一致する。しかし私は、此暗合が決してカンニングの行はれた證據でないことを保證する。

杉森教授が『兩成敗』によつて喧嘩の片をつけられたに對して喧嘩は何時でも年上のものが惡るい、そこで年上の方をたしなめるといふのが、堀江博士の不斷の態度である。『日本では漸く年來壓迫されて居つた無產者階級が、天の慈雨を得て、其萌芽を地上に露して來た位の狀態に過ぎない。之を恐がるが如きは資本家の心膽豆よりも小なりとす可きである。彼等にして斯くまで無產階級の團體的行動を恐れるならば、朝鮮、支那、亞非利加沙漠と順を遂ふて、此種の行動の見られない所に移住し結局資本を懷いて、身を太洋に投じるより外に、處する所を見出し得ないことゝなるであらう』。

しかしながら博士は固より『有產階級の專制を不可なりとする如く、無產階級の專制をも不可なりとせられる。唯だ一方には、『我國家の法制又は制度の上で、殊更に兩階級の間に鑿たれた溝渠を深くするやうなものを癈止し（即ち兩階級の對立を緩和し）、一方には、兩階級を團體的に對立させ（即ち兩階級の溝渠を深くし）、社會の公心を以つて其間の均衡を維持することを必要と考へ』られる。即ち鎭靜劑三分、刺戟劑三分、飯粒の代りに社會公心』で捏ね上げて丸藥とする。茲に勞働者專制病の妙藥がある！

しかし『社會の公心』といふ賦形劑が粘着力を失つて、丸藥が二つに割れたらどうするか。これは自づから、博士に取つては別個の問題である。

其次には、他の事は何うでも、兎に角幾百年間地の底に埋もれて居た無產者を、地の表に立たせたと云ふ事だけでも、彼の偉業であるといふ、ゴルキーがレーニンを評した言葉に『淚ぐまれ』た小川未明氏は優しい心で、彼の無產階級革命に遁逃して急に反動主義者となつたアンドレーフの晩年の記事を讀んで『一面に於ては民衆に同情と愛のあつた藝術家が、あんな悲慘な最後を遂げた事を思ひ、如何に暴力に依る革命の恐ろしきかを知られたが、多くの人は其序でに、今日、『一面に於て民衆に同情と愛のある』幾多のインテリゲンチアも、まさかの時には、アンドレーフになると云ふことをも知つたに相違ない。

今度は三宅雪嶺博士が何かムニャ〳〵言はれると、其跡から例の生方敏郎君が、飛出して『和製のプロレタリアート何事をか爲さん』と黃色い聲で叫ぶ。この威勢のいゝ『警句』の直ぐ跡から、直接智慧を貸してくれたインテリゲンチアに對してこそ、好感を持つてであらうけれど、知識階級全體に對して、何も

兄弟分扱ひする謂れがない。矢張り知識階級を以て、貴族の片割れか若くは資本家の庶子位に見做するだらう。ロシアに於て革命以來、多くの學者や藝術家の或る者は悲境に陥り、或る者はさつぱり振はなくなつたのを見ても分かる』といふ心細い話が出る。全く、駄洒落や獨りよがりの警句なんかは、餘り振はなくなるかも知れぬ。

七

『…病的傾向は、單に本當の階級的であるものだけを認めるに止らずに、どんなものにでも凡ての階級的な意義を附け加へ、て自己興奮を試みる……自己興奮が慢性になるとに於て、いつとなく意識の混亂が來る。つひには意外にも、自分の敵でも何でも無い、或は却つて良友であつたかも知れないものに對してすら、無殘な敵意と反抗を以て立向ふほどの、救はれない自己脅迫症に陥ゐる。階級精神の認識の苛烈な時代に、かうした多數の犠牲者を生みつゝあることも、社會療病者にとつては、深く考察せねばならぬ現象である。

この『社會療病者』の職掌上から、『無産級階獨裁』を診察せられたのが、千葉龜雄君である。千葉國手によると、この『自己脅迫症』が嵩じて危險狀態になつたものが、即ち無産階級の獨裁なのである。

千葉國手が現代の社會を診察して、自己脅迫症を發見せられたことは、確かに社會的醫學の上の大なる貢獻に相違ない。現代の社會には、慥かに自己脅迫症に罹つてゐる。而も大病人があるそして露國の小ブルジョア的智識階級は、慥かに重患者の一人であつた。彼等は、謂ゆる知識階級なるものは、資本階級勞働階級といふような意味での、獨立した一階級を形成してゐるものではなく、實際の上では、無産階級の一部であることを忘れてゐた。彼等は自分をも均しく資本主義から解放しようとする革命を以つて、自分の口から、共咬えて居る一片れの腐肉——小ブルジョア的腐肉——を奪ひ取らうとするのだと考へた。意識の混亂』である！ そこで『自分の敵でも何でも無い、或は（否な慥かに）良友であつた』××に對して、『無殘な敵意と反抗を以て立向』つたのである。之は疑ひもなく、『救はれない自己脅迫症』の症狀に違ひない。

或る人々が、革命思想の傳染を恐れてゐるうちに、革命思想は傳染しないで、この『自己脅迫症』に感染したのが、即ち日本の知識階級であつた。就中、千葉龜雄氏の如き『社會療病者』が、知識階級の『無殘な敵意と反抗』とを以て、この病症の顯著な兆候とは診斷しないで、却つて無産階級の獨裁を以て此病症の危險狀態と診斷されたのは、咬んだ犬ではなくて、咬まれ

た人間の方を狂犬と誤診されたも同然であつて、肝腎の醫者が『自己脅迫症』の最も重い患者であることを物語つて居る。

そこで聊か日本の醫學に貢献する意味合から、『この自己脅迫症』に冒された患者は、どの種のウワ言を云ふものであるかを知る爲に、二つ三つ拔萃をして見よう。『自己脅迫症』の患者は斯んなことを云ふ――

『何と云つても、此の文化世界の黎明に於て、一番文化の光に透徹しない無知者は、凡ての權力の保有者である……けれどもそれは……一網すれば、直ぐ解體して了ふ情ない權力だ。だから人類は知識の上で凡てに自覺して、文化の光華が立てられ、自由の權威が尊重されることになつたら、こんな無知な權力の所有者共などは、苦も無く存在の影を失してしまふものである……』。

『自己脅迫症』が昂じると、一種の忘想狂の症狀を呈して來る。同じ患者は語を續けていふ――

『無產階級の人々は事々しく群集の力を擔ぎ出すが、正宗の刀で猫を斬るには當らない。そんな微力な、價値のないもの丶爲に、男一匹なりとも人生と血を犧牲にすることは、あまりに高價な取引ではあるまいか……』。

そこで群集の力よりも、もつと安値なもので取引きをしなければならぬ。この安値な代物（しろもの）は何だらう、この患者によると、それは『個性』と『合理性』なのである。

『……何と云つても個性と合理性の力である。正義を主張しやうとする人は、何人でも團體などの力を借らずに、個人と云ふ眞裸になつて來い……』。

『正宗の刀で猫を斬るには當らない』。そこで……茲に正氣の人間と『いつとなく意識の混亂した』病人との、推論の形式の相異がある！

いづれにしても、無產階級が『團體』などと云ふ『正宗の刀』を使はないで、『個人と云ふ眞裸になつて』ぶつかつて來れば、資本家階級と丶丶丶に取つては、萬事好都合に相違ない。

勝負はどうなるだらう。『無知な權力の所有者共』が『苦も無く存在の影を失してしま』はなかつたらどうしよう。勿論其時には、千葉龜雄氏は『凡てを……內から開展する（權力階級の？）人道的な魂に依賴しやうとする』！

八

『プロレタリアの專制』といふ一語を見た瞬間に、知識階級の受けた『自己脅迫』の觀念を最も鮮銳に反射した尤も敏感な人は、何と云つても赤木桁平君であつた。『プロレタリアの專制といふと、直ぐ赤木君の耳元には『矯激な勞働歌』が聞えるよう

な氣持がし、『無氣味な淺黄服が眼先きにちらついて來る。『全體此先きはどうなるのかと思ふと』、『一種』も一種もの『不安』を感じられるのは尤である。

とは云ふもの丶誤解する勿れ、赤木君の不安は一身の安危ではなくて、國家の安危である。

『勞働運動はあくまで資本家に對して行はれるものであり、『資本家の資本主義』！ に對する抗議として行はれるものでなければならぬ。若し勞働者の勞働運動が此範圍を脱して、その標的を一般の社會又は國家の方向に轉換するやうなことがあると、それは最早や云ふところの勞働運動ではなくて、勞働運動の假面を被つた社會革命運動である。……我國の勞働運動は、日を趁ふて『××××の彩色を濃厚にしてゆく形跡があると云つてもいゝ。かうなつて來ると、勞働爭議は最早や資本家と勞働者との間の問題ではない。勞働者と國家との間の問題である』。

此時此際、赤木君の如き愛國の志士が、率先して不安を感じられるのは無理ではない。尤も我國の勞働運動が、社會革命の色彩を濃厚にして居るか否かは、固より別問題であるが、現代の勞働運動が、赤木君にはお氣の毒ながら、最早や個々の資本家と勞働者との間の問題でないことだけは事實である。そこで赤木君によつて日本の勞働者に認可せられた、勞働運動△△△△△の假面を被らぬ勞働運動とは、一體どんなものかを承はつておく必要がある。赤木君によると『勞働者が單に資本家に對抗するためには、彼等は彼等に許された武器の多くを持つてゐる筈である。同盟罷工もよからう、サボタージユもよからう……』、が然しながら忘れてはならぬ、『生産機關が停止すると、その影響を最も強く受けるものは資本家であるといふよりも、寧ろ一般民衆である……』。そして此瞬間から、勞働運動は對資本家の爭議ではなくなつて、對社會、對國家の『××××の色彩』を『濃厚』にして來るのである。勞働者は同盟罷工もやつてもよい。然しながら生産機關を停止せぬように、同盟罷工をしなければならぬ！ 治安警察法は同盟罷工を不合法とは認めぬが、罷工の勸誘を不合法として居る爲に、巧妙な資本家擁護の法律と目せられて居る。赤木君の『生産機關を停止せぬ同盟罷工』の煽動に至つては、治安警察法の一枚上手を往つたものである。

然しながら疑ふこと勿れ。赤木君は勞働者の敵ではない。否な赤木君は『資本家の專制を惡むこと、敢て勞働者に劣らぬ人である。けれども唯だ、『露西亞の（勞働者の）暴虐と悲慘とを逞ぶよりも、寧ろ米國の（ブルジョアの）俗惡と醜汚とを愛する人であることも忘れてはならぬ。

この熱烈な、『生産機關を停止せぬ同盟罷工』の煽動演說の次

には、吾々は上司小劍君の理想鄕を聞くことが出來る。小劍君の理想の世界は、『一日三時間か四時間の勞働で、實生活に要する物資が有り餘るほど得られる』世の中である。そして之は、小劍君によると、大して先きのことではない、『人類がこの地球上に生息し得る間に、いつしかさうした美いし時代に到達するもの』なのである。『プロレタリアトの專制は、貴族富豪のそれよりも、更らに厭やな下品なものかも知れぬ』。滅多なことをするよりも、勞働者は大人しく、小劍君の宿命を待つ方がよい！

九

露西亞の知識階級は『西歐より輸入した警句を以て、一時間に合せの無神論を以て、受け賣りの社會主義を以て、獨斷的の唯物論を以て、生嚙みの哲學論を以て、新奇の議論を競ひ、多數の小冊子を人民に振り撒いた……』。そして其結果が人類歷史を一轉した無産階級の革命であつた。之が政治家の最新知識たる永井柳太郎君の共鳴された露國革命觀である。この新しい政治家の革命觀は、勞働組合を揉み潰したり、社會主義者の尻を追ひ廻したりすれば、社會的革命を帳消しにすることが出來るといふ、舊るい政治家の革命觀の裏返し仕立直しに外ならぬ。

『此頃何々主義と云ふ事が頻りに唱へられるけれども、主義に絕對的のものはない……然し總ての主義は夫れ〳〵社會生活の基礎となるべき或程度の眞理を含んで居る……がそれと同時に……或程度の缺陷を持つて居る……』。そこで不公平のないように、『現在に於ける總ての主義から、總ての人が眞理と承認し得る者を取り出し、それを出來るだけ現在の國家生活に實現せしめて行く事に、社會進化の最も安全にして又最も幸福なる道程が橫はるのではないかとも考へる』。しかしそれすらも、しかとは分らない！

そこで普選問題の迷宮から導き出して呉れたように、『かうした思想の迷宮より、吾等を眞の生命の泉に導き出してくれることが、知識階級の責任だ』固よりそれは政治家などの與り知ることではないのである。

本間久雄氏によると『プロレタリアの運動の點火者となり、指導者となる知識階級は眞に極めてその少數である』。慥かに其通りである。『蓋し、この少數者は事實に於いて明かに又、一種のプロレタリアである』。慥かに其通りである。『そしてこの少數者あるがためにこそ、知識階級は現代の階級戰爭に於て、重要な役目を演じつゝあるとも云ひ得る。』慥かに其通りである。『現代におけるプロレタリアのさま〴〵の運動の文化的價値を否定しない限りにおいて、現代の知識階級には有用のものと無用のものとが截然と分けられる』。慥かに其の通りである。

『わが國現代の知識階級者は、今岐路に立つてゐる。以上の意味において無用の階級たることに甘んずるか、進んで有用の階級となるか、更に言葉を換へて云へば、ブルジョアとあるかプロレタリアとなるか――この岐路に立つてゐる』。之も慥かに其通りである。

『そしてその何れを採るべきかは、個々の知識階級者が、個々において選ぶべき問題であることは言ふまでもない』。就中これだけは慥かに言ふまでもない。

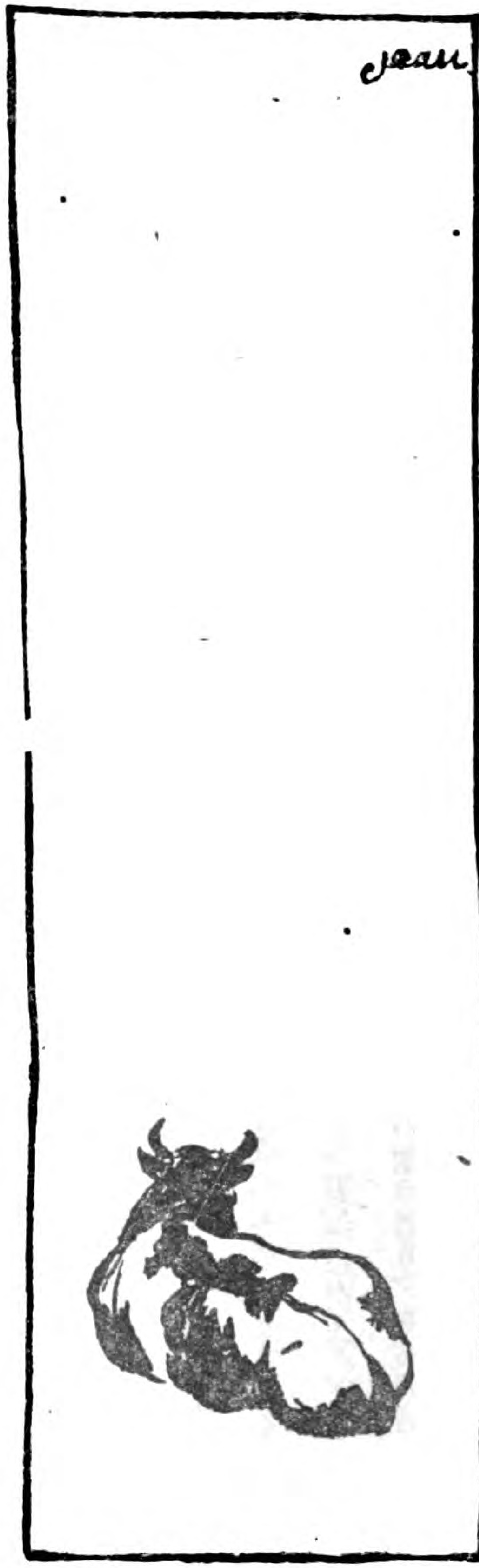
レーニンは毒薬の名前なりと答へた女教員と、多少の因縁のある湯原元一先生によると、『プロレタリアの専制的傾向』とは、勞働運動の社會主義化のことである。

『勞働運動は勞働者だけの運動であつて、……如何に工業が盛んになつても、職工の數は高の知れたものである。それで彼等のストライキでもサボタージュでも、その利目は資本家に對してあるだけで、一般國民には直接には何んの影響も與へない』。この點によると、流石に赤木君などゝ違つて落着いたものである。但し『この高の知れた』職工が、社會主義になると、こゝに初めて『慎重に熟慮すべき大問題』となるのである。マルクスの口吻を學ぶと、質の問題は量の問題となつたのである。

最後に答案を出して試場を出たのが、吉野作造博士である。

吉野博士によると、『プロレタリアの専制的傾向』とは、組合運動殊に友愛會の内部に起つた、知識階級指導者排斥運動のことである!』

『偽らざる感想』は巧みに回避することが出來る、また回避するの必要があるかも知れぬ。日本の知識階級は、『偽らざる行動を餘儀なくされるの時が、果して起らぬであらうか。



婦人參政より共產主義へ

シルヴイア・パンクハースト

私の父は社會主義者で、獨立勞働黨が出來た年に、その黨員となつた人である。その時分、私は極く小さな娘であつたが、既に社會主義に心醉してゐた。そして資本主義を、民衆の食物を嚥み込む大きな怪物としたり、海の老人のやうに、勞働者の背中に乘つてゐるものとして描き、結局勞働者が、黄金時代の曉に勝利を占める諷刺畫を描いたりしたものであつた。

これより遙か以前、物心のつき始めた時分から、煤煙にとち込められた汚いマンチエスターや、それからそれと涯てし

の無い町つゞきの中に迷子になつてしまひそうな、非人間的な、大きな章魚のような倫敦とは全然異つた、極樂のような花や野原の中に、世界中の人達が幸福と潤澤の中に生活するような『或日』のことを、私はいつも夢みてゐたのである。

或朝私は學校へ往く道で、頭に肩掛を纏うた、貧しい、痩せ衰へた女が立止まつて、肉屋の店の外の板の上に、安賣りするために積んである屑肉の中から、骨を一つ取り出したところを見た。すると道の向ふ側の少し離れた所にゐた、高いシルク・ハットをかぶつて立派な服裝をした、營養の良さそうな二人の男が、突然大聲を立てながら駈けよつて哀れな女を捕まへ、巡査が來るまでその女を放さずにゐた。この瞬間は恐ろしい印象を私に與へた。この瞬間が一生涯、私を『持たざるもの』と與みして、『持てるもの』に敵對させるようなことになつたのである。

共後程なく、吾々の住んでゐたマンチエスターに澤山の失業者が出來た、妹と私とは、母が失業者にスープとパンとを與へてゐるのを手傳ふために、ステフエンソン・スクウエアにいつた。みすぼらしい服裝をし、破れた靴をはいて雨降りの泥濘の中に列を作つてゐる彼等の姿は、燃え立つような義憤を私に感じさせた。私は父と共に、獨立勞働黨の街角の集會によく出かけた。父はそこで演説をした。……………………………………………………。私達が勞働者の住居のある貧乏町を通つて行くと、煙に煤けた、小さな煉瓦の箱のような家が幾列にも幾列にも重なり、どれも同じようなその汚なさは、私に云ひようのない惨ましさを感じさせた。私はもう堪らなくなつて、何度も壁に私の小さな頭を打ちつけそうになつたのである。私達はヴイクトリア公園にある私達の家の、綠の葉の繁つた花園に歸つて來た――そこには二本の大きなさんざしの樹があり、その低い枝は地にふれ、春になれば二本の輝いた赤い花の圓柱のような光景を呈するのであつた――が、其時、私は與奮して苦しんでゐた。そして

『私がこんな處に住んでゐるのは公平なことだらうか』といふ疑問のために、激しく惱まされた。

數年後、父が突然亡くなつた爲めに、私は十五才で家の貧困といふ問題に當面せねばならなかつた。私はマンチエスター市立美術學校の奬學金を得、そこで亦、伊太利旅行奬學金を得た。そして更に後には國民奬學金を得たが、そのお蔭で、サウス・ケンシントンの王立專門學校に入つて二年間研究することが出來た。其間に、私の父が屬してゐた獨立勞働黨の一地方支部によつて、父の記念のために建てられたマンチエスターの或る公會堂を私は裝飾した。此仕事の進行中、此會堂で社交的な倶樂部が作られた。所が婦人は獨立勞働黨の支部にも加入を許されないし、また男子の資格として毎夜出席はしても、其倶樂部の會員となることも許されなかつた。隨つて婦人は問題の處理と指導とにあづかることは出來なかつた。私はこれは非常に間違つてゐると考へた。恰度私がさう考へた當時、私の姉のクリスタベルは、婦人の選擧權に非常に熱心になり始め、私の母も亦、姉によつてそれに對する古い興味を再び呼び覺まされた。私の父は最も初期の婦人參政權論者で、リデイア・ベッカー、ウオルステンホルム・エルミー夫人、ジヤコブ・ブライト夫人、及び其他の初期の先驅者と共に働き、一八六五年に最初の婦人參政權委員會を彼等と一所に創立したのである。後には私の父も母も共に此運動のために働き、又た既婚婦人財產法の發布のためにも働いた。此法律は實際私の父の起草したものであつたが、議會を通過する際に散々に骨拔きにされてしまつたのである。

私の母と姉とは選擧權のことに夢中になつて、社會主義の宣傳の方にはすつかり興味を失つてしまつた。婦人選擧權問題を促進するために、一九〇四年、マンチエスターの私達の宅で創立された婦人社會及び政治同盟（ウイメンス・ソーシアル・エンド・ポリテイカル・ユーニオン）（W・S・P・U）は本來獨立勞働黨員に依て作られたものであるが、これは種々なる社會主義諸團體との圓滿な關係をすら失ふ程になつた。私は常にこれを遺憾に思つた、尤も當時に於ては、社會主義運動全體から見て、社會主義團體の婦人會員は、男子と平

等の地位を與へられてゐなかつたことは、認めなければならないのではあるが。

けれどもこれ以上に私を悲しませたのは、婦人自身が後れてゐるといふことであつた。社會主義運動に於ける婦人の大部分は、茶話會を開いたり、手製の服を賣る會を開いたりするばかりで、社會主義の目的や、そのための運動方法に關することは、全然男子に一任して置いた。

私は最初の參政權團體、即ち婦人參政權團體全國同盟（ナショナル・ユニアン・オブ・ウイメンス・サフレッヂ・ソイエテイース）（これは初期の參政權の先驅者が社會の反對を物ともせずに遂行した戰ひの、おとなしい、氣のぬけた殘骸であつた。）を、到底脈のないものと認めた。私は參政權團體全國同盟の集會で、會長ヘンリー・フォーセット夫人及び十二名内外の議員が演說した時のことをよく覺えてゐる。その議論の中で重きをおかれたのは、馭者に選擧權を與へながらその傭主たる貴婦人に選擧權を與へないのは不埒であるとか、門番に選擧權を與へて邸の女主人公に與へないのは不都合であるとかいふ點であつた。當時の參政權運動は主として社會的立法、特に賃銀勞働者として婦人が傭はれる時の條件を規定する立法を妨害することに力を注いでゐたかの觀があつた。

當時私はサウス・ケンシントンの學生であつて、オールダムの紡績女工のアンニー・ケンネーと共に、新しいW・S・P・Uの首領であつた私の母と妹とによつて、倫敦にある同盟のために働く準備に仕込まれてゐた。其間には、吾々仕事の主力を首府の勞働婦人の間におかねばならぬといふと、且つ吾々は勞働婦人を覺醒させて、何百萬の倫敦勞働者が生活してゐる慘めな狀態に對する、社會主義的な見解を抱かせねばならぬといふことを決心した。ディー・ピー・モントフイオリ、ジョーヂ・ランズベリー及び其他の人々を通じて、吾々は東部倫敦の勞働者と、彼等の間に存在する種々の團體とに接近した。

勞働黨は當時まだ創立後間もない時分であつた。その少し前に補缺選擧で當選したケア・ハーディーとアーサー・ヘンダーソンとだけが議會に於けるその代表者であつた。全體としての勞働運動及び社會主義運動は、勞働者を救ふものとして、新らしい議會内の勞働黨を熱心に待ち望んでゐた。私は、是等の高遠な希望が崩壞するとは豫想するには餘りに若く、餘りに無經驗であり、且つ餘りに國際社會主義運動に就て無知であつた。けれども當時でさへも私は私が會つた新政黨の名附親達の中には、社會主義のことを全然知らず、理想主義や高尚な精神的傾向を殆んど持たぬ人々の多いことを認めることが出來た。けれども若し此の勞働者の新政黨が、勞働者の解放を助けるものだとすれば、婦人も亦男子と等しく、是に參加せねばならぬことは明かであると私には思はれた。選擧權は勞働黨の武器であるべきである。男子は此選擧權に依つて議會に代表者を送らねばならず、婦人も亦良い事業に參加する爲に、選擧權を得ねばならぬ。のみならず婦人は黨の内部で積極的に働かねばならぬ。彼等は其の政策やその行動を決定する上に直接加はらねばならぬ、と私は考へた。

けれども、私の政策は、私の母や姉の政策ではなかつた。彼等はW・S・P・U・の首領であつて、全ての時を其仕事に費して居つたが、私は只學校の仕事の餘暇をそれに費すに過ぎなかつた。彼等は在來獨立勞働黨及び勞働黨の働き手であつたが、今や彼等は其等の團體を漸次に嫌惡するやうになつて來た。間もなく彼等は倫敦に來た。そして直ちにW・S・P・U と戰鬪的運動とに着手しはじめた。そしてそれは私が倫敦で、彼等がマンチエスターで、最初その運動を振り向けた方向とは、次第々々に遠ざかつて行つたのである。W・S・P・Uの東部倫敦支部は間もなく潰れてしまつた。のみならず勞働階級及び下層中產階級の婦人が集つてゐた全ての支部は、重要視されなくなつた。彼等は全國執行委員會に對して何等の勢力を持たず、それとは殆んど沒交涉となつた。一九〇七年に起つたW・S・P・U・の分裂は、その最初の民

主的な規約を全廢する機會であつた。此同盟は今や私の姉や、姉のクリスタベルや、會計係のペトリツク・ローゼンス夫人及び會の事務管理者であり且つその週間機關紙『ヴオーツ・フオア・ウイメン』(「婦人に選擧權を與へよ」)の主筆であつた彼女の夫に依て支配された、專制的な團體となつた。婦人選擧權の要求と戰闘的な參政權運動は、間もなく貴族及び上層中産階級の最もハイカラな若い婦人の間の流行となつた。法律を犯したり監獄に行つたりする勇氣のない連中は、集會におしよせて首領及び囚人に對して阿諛をあびせかけた、W・S・P・U・の創立當時には、其宣傳の主たる題目は虐げられた勞働婦人の運命であり、勞働者が自己の勞働の成果を樂しみ得る世界を要求することであつた。ところが今はすつかり變つてしまつた。只終始一貫して居たのは、婦人を政治に參加させようといふ要求であつた。此要求と共に、疾病及び勞働不能に對して勞働者を保護するといふ議案に對する反對賃濟の國家公認――此國では此制度に對する反對は激しかつたが、此當時にはまださほど本氣に主張されなかつた――に對する反對から、保護賃銀制度及び高敎會主義と低敎會主義(英國敎會内の二派)の贊否に到るまで、種々雜多な叫びが混同されてゐた。そして詰りありとあらゆる時事問題が、あらゆる見地から論ぜられたのであつた。社會主義者の聲もなほ運動の中に聞えてはゐたが、それは大低他の聲に壓伏されてしまつた。政治に關するこのやうな混亂した態度は、政治に對して中立的態度を採り、あらゆる政黨の援助を得ようとした努力の結果であつた。

私はその時分二度まで投獄されもしたが、凡て是等の事に對して、何となく氣が濟まず、不滿の爲めに暫くの間は運動から殆んど身を退いて居つた。

勞働黨も亦私を失望させた。否、これは或意味に於ては參政權運動よりも一層失望させることが深かつた。なぜならば、參政權論者は少くとも良き鬪士であつた。主義の爲に命を擲たうとしてゐる婦人も多かつた。ハンガーストライキを

忍び、釋放されるまでそれを續けた婦人も百人を超えた。監獄の中では戰鬪的な參政權論者は『拘衣』にかけられることや、暗い懲罰房を恐れなかつた。外では彼等は金で雇はれた無頼漢の群衆の野獸的な虐待を受け、ありとあらゆる勇敢な行爲をした。

ところが勞働黨はおとなしく臆病で、まるで意氣地が無かつた。勞働黨は饒舌をしただけであつた。議會外に於けるその演說には、有るか無きかの社會主義的色彩があるばかり、議會内の演說にはそれすらも無かつた。その議會内の代表者は、資本家政黨員の恩惠を蒙むつて、嬉々として居るばかりであつた。それは勇敢な戰鬪主義の爲に、參政權論者に烈しく敵對し、大部分は根本からの反社會主義者であるフオーセット夫人の率ゐる參政權論者を歡迎した。勞働黨は婦人の選擧權に對して冷淡であつたが、社會主義に對しては一層冷淡であつた。そして社會主義を承認することすら出來なかつたのである。それは勞働者を解放する爲に作られたものであることをも忘れてしまつた。その主たる創立者のケア・ハーディーは自分の生んだ子の此の反動的な性質を最も苦痛とし、重病に陷つて、勞働黨成立後最初の議會が閉會になつた後、一ケ年の間、政界を引退しなければならなかつた。

…………………………………………、…………………………………………、…………………………………………

……………………………………………………、……………………………………、……………………………………。

…………………………………………、……………………………………………。W・S・P・U　は、決社會は大體に於て、婦人選擧權を是認する方へ傾いてゐるのではあるが、とてもやり切れなくなるまでは、それを實行するために決して起つものではないと公言した。一九一二年まで、W・S・P・Uは、當局者に依て烈しく迫害された。その首領達は監獄に入るか、外國に行くか、又は潜伏するかして居つた。運動は事實上秘密運動とならざるを得なかつた、其集會は大抵開かれぬやうにな…、

機關紙の賣高は激減し、獄中の絶食同盟者は、强制食餌法を行はれ、刑期は益々延長された。運動が受けて居つたところの非常な公衆の同情は、次第に衰へて行つた。W・S・P・U の首領等は公衆の後援がいかに重要であるかを十分に認めてゐなかつた。同盟はもはや政府に印象を與ふべき、公衆の同情の表現を得ることが出來なくなつた、從て獄中にある無名の參政權論者は苦しまねばならなくなつた。

丁度此時分、米國の講演旅行から歸つた私は、婦人戰士の爲に公衆の同情を得る事が、運動の上に必要な事を感じた。これをするには倫敦及び各地方を通じて大仕掛の公開的會合を開く事が必要であつた。私は前に説明したやうに、殆んど本部とは關係の無くなつてゐるW・S・P・U の諸地方支部を通じて、此の方面の仕事を行ふた。間も無く示威運動は非常な勢を得、倫敦はそれに包圍されたような有様を呈した。毎週交る〳〵、何所かのよく知られた會合所には、多勢の運動者が數週間の豫備的運動によつて準備した大仕掛の集會が開かれた。最初吾々は倫敦の西部に對して運動し、それから西部の支部が東部倫敦に對して運動して、曾て亡びた支部を復興し、兩方が相携へて運動しようとしたのであつた。吾々は大きな行列をしたり、ハイド・パークやトラフアルガー・スケウエアで大きな集會を開いた、勞働者は在來にないほど、此の運動に參加した。W・S・P・U の本部も我々の競爭にはげまされて、その公衆宣傳を大いに復興した。私及び私と共に働いた多くの人々は、間もなく捉はれた。私は一年間に十一回ハロウイエ監獄を出たり入つたりしたのである。最初私は懲役三ケ月の宣告を受けた。そしてハンガー・ストライキをやつたので五週間の間、强制食餌法を行はれた。私が再び活動を始めるに足るだけ力を恢復するや否や、私は再び捕はれて、トラフアルガー・スケウエアでの演説の爲めに懲役三ケ月を宣告された。私は再びハンガーストライキをやつて、所謂「猫と鼠法令（キヤツト・エンド・マウス）」（ハンガーストライキを行ふた婦人參政權論者を衰弱の爲めに一時之を釋放した後、再び之をとらへる規定）によつて釋放された。かやう

にして釋放された囚人は、短い保釋期間、通例約一週間の後に再び捉へられることゝなつて居つたからである。『鼠（マウス）』としてすごした私の生涯の一年間に於ても、たとへ擔架に乘せられても、私はハンガー・ストライキの爲に釋放された後、二日目か三日目には、大きな公開の會合に演說するを常とした。私は常に保釋期限が經過して、私が再び捉はれねばならぬ時に至つても、變裝して集會に赴いては演說し、民衆の保護の下に其場を遁れた。私を捉へる爲めに派遣せられ、私の所へ達するために民衆を蹴散らさうとした、何百人の騎馬又は步行巡査から、群衆のお蔭で救ひ出されることも度々であつた。

時には吾々の力が、とても警察の力に及ばない事もあつた、斯樣にして私は三ケ月の宣告のうち、十回のハンガーストライキを行ひ、總てで二週間しか服役しなかつたのである。此の間に、私が基礎を鞏固にするために聯合させたW・S・P・Uの東部倫敦諸支部は、吾々が『婦人選擧權と社會主義とを混同してゐる』といふ理由で、母體から除名されてしまつた。

私も、私の目的が、私の母や、姉や、全體としてのW・S・P・Uの目的とは違つてゐることを知りぬいては居つたものゝ、最初、自ら求めたのでない此分裂を悲んだ。然し後になつて私は到底避けられない此分裂が、其時に行はれたのを喜んだのである。

そこで吾々は吾々自身の週刊機關誌を創刊した。それを私は當時から今日に到るまで發行して居る。それは最初『ウイメンス・ドレッドノート』（婦人の戰鬪艦）と呼ばれたが、その名前は、程なく、一層其目的に適した題『ウオーカス、ドレッドノート』（勞働者の戰鬪艦）と變へられたのであつた。

婦人參政權團體の要求は、當時男子に與へられて居る選擧權の條件よりも、時として一層狹い事はあつても、より廣

い事は決して無かつた。其條件は英國婦人十三人に就いて、僅かに一人にしか選擧權を與へるに過ぎなかつた。成年選擧權團體も多少出來はしたが、其等はすべて小さくて短命であつた。彼等は成年選擧權を得る爲に是といふ仕事は何一つせず、只徒らに婦人參政權の主張者を、其の制限的な要求の爲に攻擊したに過ぎなかつた。

東部倫敦に本部をおいた吾が勞働階級の參政權團體は、廿一歲以上の總ての男女に選擧權を與へることを要求し、此要求のために戰ふ準備のあることを示して、新運動に着手した。五回拒絶された後に、吾々は當時の首相アスキスをして、大きな幾回かの地方的集合で選ばれた勞働婦人の代表者に接見することを餘儀なくし、それから彼の前に吾々の要求を陳述した。アスキスはこれまで常に婦人選擧權に反對し、且つ是は純然たる中產階級的運動であつて、その要求する選擧權の形式は、勞働階級にとつては損失になるものであると稱して、この運動を疎外しようとした。ところが成年選擧法に對する吾々の要求は、彼の持說と一致したので、彼は吾々に對する回答のうちに、初めて、婦人の選擧權要求が正しいといふことを、確實に承認したのである。彼は此改良に對する政府の反對といふ障碍を、將に取除かうとするかのように見えた。

けれども恰度其時、戰爭が勃發して東部倫敦は慘憺たる狀況に陷つた。一般的な恐慌のために工場は閉ぢられ、全家を擧げて窮乏のどん底に陷つたものが多かつた。食糧品店は襲はれ、人々は貨自動車に乘つて、吾々の隣人が開いてゐる貧しい小店から、食糧品を買占めて行つた。食物及び必要品の價格は恐ろしく暴騰した。陸海軍の豫備兵は召集され、その妻子には何等の手當も與へられなかつた。宣戰の當時、私は愛蘭に居つたが、歸つて見ると、吾がイースト・エンドの本部は貧しい女子供の群衆に包圍されて居つた。彼等は途方に暮れて居り、參政權論者は自分らの味方であると考へてゐたのである。

吾々は出來るだけのことをした。程なく吾々は委員會を組織して、諸官省、又は半官的な出張所からの救助を得、陸海軍の不在手當の給與や、扶養料の支給を要求し、それが承認された時には、增額を要求し、また仕事を見つけ出すといふやうなことに働いた。吾々はまた、吾々自身の力で失業者のための衣服及び玩具工場や、家庭外で働かねばならぬ母親の子供のための托兒所や、醫者、看護、藥、齒科術、牛乳及び他の營養品、衣服等を無料で支給する產院を四ケ所に開いた。吾々は家賃や物價の騰貴に反對し、食糧及び住宅の社會化、失業者のために仕事を與へる運動をした。吾々はページェントや音樂會を組織したり、すべての官省に代表者を送つたりした。また吾々は行列をしたり、集會を開いたり、徵兵制度に反抗し、戰爭に反對し、同時に、戰爭の出來事を利用して、資本制度の害惡と社會主義の必要とを示さうと努めた。それは實に苦しい、困難な時代であつた。此事業を維持するには莫大の金が要つたが、吾々の一切の努力は篩に水を入れるにも等しかつた。戰爭景氣の人工的な繁昌が來た時でさへも、資本制度の難破者は、吾々の手で救ふには餘りに數が多く、餘りに貧困の度が深かつた。負傷者達は戰場から歸つて來て、つい吾々の近處の町で、手當が屆かぬために死んだ。一人の兵士や共稼婦のために扶助料を得ようとして、吾々は數ケ月も戰つた。そしてやつとそれが出るようになつたかと思ふと、減額されたり、全然支給されなくなつたりした。吾々の陽氣な托兒所は、慘憺なる汚物の海の中の唯一のオーシスであつた。吾々が一週間に五日半の間、丹精して丈夫にした子供らは、その母親達が子供らを、牛乳に乏しく、新鮮な空氣は一層乏しい、小さな、人の一杯詰まつた、小屋の中に留めておく殘りの一日半の間に、忽ち元の不健康兒になつてしまつた。私は慈善事業の無價値を最も深く、最も强く感じた。そして更に一層の苦痛であつたのは、私が此世界の富を多くの人々に與へる地位にあつたことが、彼等と私との間に隔てを作つたことである。私は自分が狩り立てられる亡命者であつて、今私が彼等に與へてゐると同じように、彼等がその乏しい財嚢と精力

を彼等と私とが共々働いてゐる主義のために、私に頒ち與へて與れた時代に歸りたくて堪らなかつた。私は自分が出獄した當時、私が彼等に與ふるのでなく、彼等が私に食物や花を持つて來てくれた時代に歸りたくて堪らなかつた。

これら總てにも拘はらず、吾々は婦人選擧權の問題を擲たなかつた。吾々は此時までには非常に殖えて居つた他の參政權團體を糾合した。吾々は世界戰爭の非常な災厄によつて、彼等はその政治的眼界を廣めねばならぬといふことを主張し、彼等にも吾々と同じく、成年選擧權を要求させようとした。私の立場から云へは、私がこれを主張したのは、政治上に關係する婦人が、もはや陳腐な政治的中立といふ口實に隱れ得ず、且つ參政權論者であつた眞面目な人々の注意が、經濟問題に注がれ得るように、一擧にして參政權問題を政治界から片づけてしまふといふ目的からであつた。

私が主唱した努力の結果として、成年選擧權全國評議會が作られた。前フオーセツト派參政權論者は、執行委員會に大多數を占むることに成功した、そして例に依て、妥協案のために交渉を開始する　とに依て早速吾々の標榜を曲げ始めた。成年選擧權を主張すべきか、制限案を支持すべきかを決議するために、評議會の召集した大會に際して、成年選擧權を主張したものは、執行委員中私一人であつた。そして私に賛成したのは故オリーヴ・シュライナー及びほんの少數の男女勞働者ばかりであつた。私は評議會を辭任した。そこで新たに成年選擧權勞働評議會が作られた。けれども妥協派は吾々にとつては餘りに强大であつて、遂に妥協案が採用された。若しも私や吾々の團體全部が、舊時の如く、選擧權に全力を注いだならば、此事は起らなかつたらうと信ずる。

……………………

……………………

……………………

……………………

一…………………………………………………。………………。……………………

…………、……………………………………………………………、

………………。」

倫敦『タイムス』及び他の資本家新聞は、眞先に此大事件を吾々に知らせて吳れた。私は露國に關する報道の一行一行を批評的な限で審査して、その眞僞を區別しようとした。

私は直ちに、ソヴィエツトの中の多數者は、わが勞働黨よりも多少ましな位のものに過ぎないことを認めた。其首領達の演說は吾國の新聞にも詳しく報道されたが、私は彼等を資本制度を仆さうとする意思の毫しもない、聯合軍の帝國主義的な味方であると認めた。

…………………、……………………………………。……………………

…………………、………………、…………………………………

………………、……………。

吾々の露西亞に關する報導とても、資本家新聞から許り供給されてゐた最初の頃でさへ、『ウオーカース・ドレッドノート』には、特別の通信の相手があるのだと思はれてゐた。さういふ通信は其後には來るようになつたが、最初のうちは、吾々は誰にも分つてゐるが、然し少しの人々にしか理解されなかつた報道を、單に精査して說明したに過ぎなかつたのである。

當時は、私にとつては幸福な時代でもあつたが、同時に孤獨な時代でもあつた。吾がイースト・エンドの會員は、遠い露西亞で發展してゐる此新しい大事業に對する、私の涸てしない感激を中々理解することが出來なかつた。それは、彼

等にとつては、餘りに遠い世界の出來事であつた。英國社會主義運動に參加してゐる大抵の他の人々は、私が最初の瞬間から問題にしなかつたケレンスキー政府を熱心に贔負にしてゐた。

ボリシエヴイキが權力を掌握し、反動革命が武器を採り、資本主義聯合國が干渉した時、此國の勞働運動及び社會主義運動の著名な人物の大抵は、…………………、今となつて、革命は不道徳であり、平和主義を人生の指導的法則として推奨することが、自分らの良心に忠實であるといふことを發見した。

「…………、…………………………。…………………………………………。…………………………………………、………………………、…………………、…………………………………………、…………………、…………………………、…………………………、…………………………、…………。…………、…………………………、……。」

◇泰西名畫家傳◇

石川欽一郎著 ―中判三百頁 代表作三十葉
定價參圓 送料拾貳錢

第八編

コンスタブル

新刊出來

寫生主義の開祖―新代派の先驅たる英國隨一の大作家

コンスタブルの標榜した寫生主義は戸外派の勃興を促して印象派を生み、後に新代派の現はれる機運を作つた當時因循姑息のクラシック派が跋扈する間にあつて諤々の新説を主張し遂に新藝術の基礎を確立した彼の一生は好箇の立志談とも言はれよう。

既刊七冊 各冊增版 價各參圓 送料各拾貳錢

(1) 黑田重太郎著 ヴン・ゴオグ

(2) 佐久間政一著 セガンティニ

(3) 岩崎眞澄著 ティチアン

(4) 渡邊吉治著 ティントレット

(5) 相良德三著 ラファエロ

(6) 田中喜作著 ルノアル

(7) 大隅爲三著 シャヴァンヌ

東京本郷區湯島六丁目 日本美術學院 電話小石川三五一九 振替東京五八八六

ハヴロック・エリス原著、矢口達氏譯（四六判クロース本箱入 定價貳圓五拾錢送料拾七錢）

（最新刊）

性的心理大觀 下卷

有名なハヴロック・エリスの原著で性慾學の權威であることは知らぬ人は無からう。性は人生に横はる一大事業で性の問題は人生の中心問題である。之をいかに理解すべきかを知らぬ中は眞に人生を愛重するものとは云へない。本書は氏の三千頁の大著を上下二卷に縮譯したもので性問題に關する一切の問題を極めて嚴肅な科學的見地から説述して絶大な知識と教訓とを與へる。

下卷目次

第一編 色情象徴　第二編 弛緩の結構
第三編 姙娠の心的狀態　第四編 對社會の性問題

上卷目次

第一編 性的顚例◎第二編 性的衝動の解剖◎第三編 戀愛と苦痛
第四編 婦人の性慾衝動◎第五編 人類の性的淘汰
（既刊）、（四六判、クロース本、箱入、價貳圓七拾錢、送料拾七錢）

クヌート・ハムズン原著、永島直昭氏譯（四六判細活字六〇〇頁 定價貳圓九拾錢送料拾九錢）

（最新刊）

土地の成長

本書は世界的名擧の最高權威たるノーベル賞金を授與せられし名著にして、涯しもなき未開の曠野へ一人の無智な漂浪者が來て土地を耕し住家を作り、そこに幾つかの生活が生じ大きな社會といふものが形成さるゝまでの土地の生長を描いたもので自然の輝き、その魅力、その中に住む人間の運命、成功と墮落、愛と性慾、宗教と罪惡等を深い感じをこめて書かれてゐる。

東京市麹町區 飯田町壹の二　株式會社 天佑社　（振替東京一〇一二八番 電話九段長一一七三番）

....
..............., ...
........, ..., ...
....
....

So in the those first days, when our Russian news was drawn entirely from the Capitalist Press, it was thought that the "Workers Dreadnought" had special sources of information. These came later, but at first we merely sifted and explained the news that was open to all, though understood by few.

Those were happy days for me, but lonely days also. Our East End members were slow to understand my boundless enthusiasm for this great new thing that was developing in far off Russia, it was too remote for them. Most other people in the British Socialist movement were enthusiastic for the Kerensky regime, which I from the first instant condemned; they thought me bitter and carping in my criticism.

When the Bolsheviki rose to power, the counter-revolution took arms, and allied capitalism intervened, most of the prominent people in the Labour and Socialist movements of this country, ...
......................................, began now to discover that their consciences told them revolution was immoral, and to elevate pacifism into the guiding law of life.

....
...., ...
......................................, ...
....
..............................., ...
....
.........., ...
........, ...

As a result of the effort I had initiated, a National Council for Adult Suffrage was formed. Ex-Fawcettite Suffragists succeeded in getting a majority on the Executive, and, as was habitual with them, they immediately compromised the position, by proceeding to negotiate for a compromise Bill. At the Conference called by the Council to decide whether to press for Adult Suffrage, or for a limited measure, I was the only member of the Executive to maintain the stand for Adult suffrage. The late Olive Schreiner and a little handful of working men and women alone supported me. I resigned from the Council, and a new Labour Council for Adult Suffrage was formed, but the compromisers were too strong for us and a compromise Bill was adopted. I do not believe this would have happened had I and our whole organisation concentrated on the Franchise as we had done in the old days, but ...., ...
.........., ..., ...
...., ...
....

....
....; ....
............................., ...
.............., ..., ...
....

The London "Times" and other capitalist papers were the first to give us news of the great event. Every line of the Russian news I scanned with critical eye, to sift the truth from the falsehood.

I recognised at once that the majority in the Soviets was at first only something better than our Labour Party. Its leaders, whose speeches were reported at length in our Press, I recognised as Imperialist supporters of the Allied Arms with no intention of overthrowing the capitalist system.

large sums of money to maintain this work, and all our efforts were like putting water in a sieve. Even when the artificial boom of war prosperity came, the wrecks of the capitalist system overwhelmed us in numbers too enormous, in poverty too deeply hopeless for us to cope with. Broken men came back from the war and died of neglect even in the neighbouring streets. We struggled for months to get a pension for a soldier or his widow, and shortly after it had been granted, it was reduced, or withdrawn altogether. Our bright children's nursery was but a tiny oasis in a dreary sea of dirt. The children we painfully nursed to health on five and a half days of the week, relapsed in the one and a half days remaining during which their mothers kept them at home in the little crowed hovels, where milk was scarce, and fresh air scantier still. Most deeply, most bitterly, I realised the futility of philanthropy, and more painful still, I learnt that the fact that I was a dispenser of this world's goods to many people about me, erected a barrier between them and me. I longed to go back to the days when I was a hunted fugitive and they, from their little store of wealth and energy, were giving, as I was giving, to the cause in which they and I strove together. I longed to go back to the days when as I came out of prison, they brought food and flowers to me, not I to them.

With all this we did not quite abandon votes for women. We called together the other Suffrage organisations, of which there was a large list by this time. We tried to induce them to adopt our own adult Suffrage demand, pointing out to them that the great catastrophe of the world war should broaden their political horizon. On my part this move was now mainly animated by the desire to sweep suffrage altogether away from the political arena, in order that women in politics might have no further excuse for taking refuge in banal political neutrality, and that the attention of the earnest people who had been suffragists might be freed to come to grips with economic issues.

just. He appeared to be on the eve of removing the barrier of Government hostility to the reform.

But just then war broke out. Misery descended upon East London factories were shut down in the general panic, and whole families were entirely destitute. The food shops were besieged, people came down to the East End in taxi cabs and bought up the supplies in the poor little shops where our neighbours dealt. The prices of food and necessaries rose to alarming proportions. Army and Navy reservists were called up and no separation allowances were provided for their wives and children.

I was in Ireland when war was declared and, returning, found our East End headquarters surrounded by crowds of poor women and children who knew not what to do and thought that the Suffragettes would prove their friends.

We did what we could. Soon we had secretaries working to procure relief from all the various governmental and semi-governmental agencies available, to press forward the introduction of Army and Navy separation allowances and pensions, to improve these when granted, to find work etc. We opened also, on our own account, a garment and toy factory for the unemployed, a day nursery for children whose mothers were obliged to work away from home, and four infant and maternity clinics, where free medical and nursing care, free medicine and dentisty, free milk and other nourishment, and free clothing were provided. We agitated to prevent the rising of rents and prices, for the socialising of food and housing, for work for the unemployed. We organised pageants and concerts we went on deputations to every Government department. We held processions and meetings, we resisted conscription we opposed the war, and at the same time sought to use the incidents of the war to display the evils of the Capitalist system and the need for Socialism. It was a hard strenuous time. We needed

At first I was grieved by this division which was not of my seeking, though I realised only too well, that my aims were not those of my mother and sister, and of the W. S. P. U. as a whole. Later I became glad that the split, which was quite inevitable, had taken place when it did.

We now started our own weekly organ, which I have edited from that day to this. It was originally called the "Women's Dreadnought" but its name soon was changed to the "Workers' Dreadnought," a title more appropriate to its aims.

The demand by the women's suffrage organisations had at some periods been narrower, never broader, than for enfranchisement on the terms then accorded to men, in this country. These terms would have given votes to only about one thirteenth of the women of Britain. Some adult Suffrage Societies had been formed, but these had all been small and short-lived. They had not done anything appreciable to secure adult suffrage, but had merely attacked the supporters of women's suffrage for their limited demand.

Our working class suffrage organisation, with its headquarters in East London, now, made a new departure, by demanding a vote for every man and woman over twenty-one, and by showing itself prepared to fight for this demand. After five refusals, we succeeded in forcing Mr. Asquith, then Prime Minister, to receive a deputation of working women elected at a series of great district meetings, we then laid our demand before him. Asquith had always opposed votes for women, and always endeavoured to side-track the movement, by saying it was purely a middle-class movement, and that the form of franchise it asked for would weight the scales against the working class.

In our demand for adult suffrage he found himself met with his own arguments, and in replying to us he for the first time, virtually admitted the justice of the women's claim for enfranchisement to be

tinct there, and to unite with them in the campaign. We held great marches, great meetings in Hyde Park and Trafalgar Square. The working people came flocking into the movement in larger numbers than heretofore. The Headquarters of the W. S. P. U., spurred by our competition, also re-established much of its public propaganda.

I and many others who worked with me, were soon arrested; indeed I was in and out of Holloway prison eleven times in one year. First I received a sentence of three months imprisonment, and on hunger striking, was forcibly fed for five weeks. I had hardly recovered strength enough to resume my activities, when I was re-arrested and again sentenced to three months' imprisonment for a speech in Trafalgar Square. I again hunger-struck and was released under what is called the "Cat and Mouse Act", because the prisoner so released is subject to re-arrest on the expiry of a short period of license, usually about a week. During the year of my life which I spent as a "Mouse" even if I were carried on a stretcher I always appeared to speak at a great public meeting on the second, third, day after my release on hunger strike. I always continued speaking after the expiry of the license, when I was subject to re-arrest, coming to the meetings in disguise, and leaving under the protection of the people. Often I was saved by the crowd from hundreds of foot and mounted policemen, who had been sent to take me, and who endeavoured to break through the people to reach me.

On some occasions, the police were too strong for us. Thus I served all but a fortnight of my three months sentence in the course of ten hunger strikes.

During this period the East London Branches of the W. S. P. U. which I had federated to make them strong had been expelled by the parent body, on the ground that we were "mixing up Socialism with votes for women."

. . . .
. . . .
. . . ., ..., ...
. . . .
. . . .

The W. S. P. U. declared that the public was in the main converted to Votes for Women, but would never move to secure its enactment till rendered thoroughly uncomfortable. By the year 1912 the W. S. P. U. was being heavily persecuted by the authorities. Its leaders were either in prison, abroad, or in hiding. The movement had been virtually driven under ground. Its meetings had largely ceased, the circulation of its organ had fallen, its hunger strikers in prison were being forcibly fed and kept for longer and longer periods. The great public support the movement had received was on the wane. The W. S. P. U. leaders underrated the importance of public support. It now ceased to secure manifestations of popular sympathy with which to impress the government. The Suffragette rank and file in prison were made to suffer accordingly.

Returning from a lecturing tour in America at this juncture, I saw that the need of the movement was to re-establish public sympathy for the women warriors. To do this a great campaign of public meetings must be held throughout London and the Provinces. I worked in this direction through the local branches of the W. S. P. U., which as I have explained were almost entirely distinct from the Headquarters. Soon the demonstrations were in full swing. London was girdled by them. Every week it was the turn of some well known meeting place to be aroused by a gigantic gathering, prepared by a preliminary campaign carried on for several weeks by a large army of workers. First we girdled London westward, then the local Unions of the Western ark went to East London to re-establish the Unions that had become ex-

this country, but not then seriously put forward, to or repudiation of prohibition, and of both High and Low Churchianity. Indeed of any and every *stunt* of the day was discussed from various angles. The voice of the Socialist was still heard in the movement but it was largely overwhelmed. These confusion sprang from the effort to remain neutral in politics and to draw support from all parties.

In all this, though I was twice imprisoned in those days for the Votes for Women cause, I felt ill at ease and out of place, and for a time I almost withdrew from the movement.

The Labour Party was equally disappointing: indeed it was in some respects more so, for the Suffragettes were at least good fighters. Many women were prepared even to lay down their lives for the Cause. Over a hundred women endured the hunger strike and carried it through until released. In prison the Militant Suffragettes did not shrink from the "straight jacket" and the dark punishment cell; outside they faced brutal ill treatment by mobs of hired bullies and committed all sorts of daring acts.

The Labour Party was tame, timid and subservient. It only talked. There was only the vaguest tinge of Socialism in its speeches outside Parliament, inside there was none. Its Parliamentary representatives were only too pleased to be patronised by members of the capitalist parties. It was bitterly hostile to the Suffragettes on account of their audacious militancy and preferred Mrs. Faucett's suffragist followers, who were for the most part rootedly anti-Socialist in their views. It was indifferent to Votes for Women, but it was still more indifferent to Socialism, which it could not then even approve by resolution. It had forgotten that it was created to emancipate the workers. Keir Hardie, its main creator, was most deeply pained by the reactionary character of this child of his, became seriously ill, and after the Labour Party's first session was obliged to leave political life for a year.

Party, they must take a hand in moulding its policy and its actions.

But my policy was not that of my Mother and sister, who were the leaders of the W. S. P. U., and gave all their time to it, whilst I devoted only the hours I could snatch from my work at College. They had been workers for the I. L. P. and the Labour Party, but now they viewed those Bodies with an ever growing dislike. Presently they came to London, and began at once to take the W. S. P. U. and the militant movement, further, and ever further away from the channels into which I in London, they in Manchester had first turned it. Soon the East London branches of the W. S. P. W. were discontinued; indeed all the branches into which women of the working and lower middle class had flocked, were considered of little account; they had no power over the National Executive and little connection with it. A split in the W. S. P. U., which took place in 1907, was the occasion of altogether abolishing its original democratic constitution. It was now an autocratic body controlled by my mother and sister Christabel, Mrs. Pethrick Laurence the treasurer and her husband the business manager of the organisation and editor of its weekly organ Votes for Women. Votes for women and militant suffragettism soon became the fashion amongst the smartest young women of the aristocracy and the upper middle class. Those who had not the courage to break the law and go to prison crowded the meetings and poured adulation upon the leaders and prisoners. In the early days of the W. S. P. U. the ruling theme of its propaganda had been the lot of the oppressed working woman and the need for a world in which the labourers should enjoy the fruits of their toil. Now things were changed; the only consistent doctrine preached was the demand for women's entry into politics. With this was confused a motley outcry, which ranged from denunciation of the Bill then in Parliament to ensure wage earners against sickness and disablement the State and denunciation of regulation of vice, a project one bitterly fought in

employed him, to the cottager and not to the lady of the Manor, the suffrage movement of those days seemed mainly concerned with preventing social legislation, and especially legislation regulating the conditions under which women were to be employed as wage earners.

I was a student at South Kensington then, and when Annie Kenney, an Oldham cotton operative, and I were instructed by my Mother and sister, who were the leaders of our new Women's Social and Political Union to begin work for the Union in London, I at once determined that our work should be mainly laid amongst the working women of the metropolis, whom we should arouse to a Socialist view of the unhappy conditions under which millions of London workers dwell. Through Mrs. D. B. Montefiori, George Lansbury and others, we introduced ourselves to the East London Working people and the various organisations existing amongst them.

The Labour Party was in its first early days then. Keir Hardie, and Arthur Henderson who had recently been returned at a Bye-Election, were its only representatives in Parliament. The Labour and Socialist movement as a whole looked eagerly to the coming Parliamentary Labour Party, as something that would lead the workers onward to salvation. I was too young, too inexperienced, and knew too little of the International Socialist movement, to foresee the downfall of these high hopes. But even then I could see very plainly that amongst the sponsors of the New Party whom I met, many knew nothing whatever of Socialism, and possessed but a very small share of idealism and mental elevation. It seemed clear to me however, that if this new Political Party of the workers were to assist in emancipating the workers, the women must have their equal part in it. The vote was to be the weapon of the Labour Party. The men would put representatives in Parliament by their votes and the women must also have votes to join in the good work. Moreover the women must work actively in the

My father had been one of the earliest supporters of women's enfranchisement and had worked with Lydia Becker and Mrs. Wolstenholm Elmy, Mrs. Jacob Bright, and the other early pioneers, having joined them in starting the first women's suffrage committee in 1865. My father and mother had later on worked together in this movement, and also in establishing the Married Woman's Property Act, which was actually drafted by my father, though mutilated in passing through Parliament.

My mother and sister became so ardent in their quest for the vote that they quite lost interest in socialist propaganda. The Women's Social and Political Union, which was formed in our Manchester home, in 1904, to push the votes for women question, was originally formed of I. L. P. members, but it soon ceased to be even on friendly terms with the Socialist organisations. This was a constant regret to me, though I could not fail to admit that the women members of the Socialist organisations were not, at that time, given an equal status with the men, in the Socialist movement as a whole.

But what distressed me more was that the women themselves were backward. In the Socialist movement the greater part of them confined their attention to organising teas and sales of sewing, and left the socialist aim and the tactical fight for it to be dealt with entirely by the men.

The original women's suffrage organisation, the National Union of Women's Suffrage Societies (which remained as a tame enaemic survival of the struggle which the early suffrage pioneers had carried on in face of public ostracism) I found hopeless. I remember well attending a meeting of the National Union of Suffrage Societies, addressed by its President, Mrs. Henry Fawcett and a dozen or so of Members of Parliament. The main burden of the argument was that it was an outrage to give a vote to the coachman and not to the lady who

unemployed. The sight of them in their poor clothes and broken boots, queued up in the mud and rain, aroused a ferment of revolt within me. I used to go with my Father to the I. L. P. Street corner meetings at which he spoke,...
.... As we passed down the dreary Streets of working class dwellings, rows upon rows of smoke-begrimed little brick boxes, the monotony of their squalor so filled me with hopeless misery that I often had an impulse to beat my little head in desperation against the walls. And when we got home to the green leafy garden of our house in Victoria Park where two great hawthorne trees, their lower branches touching the ground two cones of bright red blossom in the Springtime, I was distraught and worried, and sharply pained by the question: "is it fair that I am here?"

A few years later my Father's sudden death brought me, at fifteen years of age, face to face with economic difficulties at home. I obtained a scholarship to the Manchester Municipal School of Art, from thence a travelling scholarship to Italy, and later a National Scholarship, which enabled me to study for two years at the Royal College of Art South Kensington. In the interim I had decorated a hall in Manchester which had been erected in memory of my father by a local branch of the Independent Labour Party, an organisation to which my father had belonged. During the progress of this work I discovered that a social club was being started at this hall, and that women were not allowed to join either that branch of the I. L. P. or the Social Club, though women would be attending it every night as the guests of the men. The women could therefore take no part in the management or direction of affairs. This I thought very wrong. My discovery was contemporary with the beginning of a keen enthusiasm for votes for women in my sister Christabel, who re-aroused my mother's old interest in it.

FROM SUFFRAGETTE TO COMMUNIST

Sylvia Pankhurst

My Father was a socialist and joined the Independent Labour Party in the year of its inception. I was a very little girl then but I was already enthusiastic about Socialism, and used to draw cartoons showing Capitalism as a great monster devouring the food of the people, or riding like an old man of the sea on the backs of the workers, and Labour at last triumphant in the dawn of the Golden Age.

Long before this, as long ago as I can remember, I had had dreams about a "some day" when all the world would dwell in happiness and plenty in some paradise of fields and flowers, as different as could be from ugly smoky Manchester, or that great inhuman octopus London, where one is lost in an endless series of contiguous towns.

One morning as I was going to school I saw a poor haggard looking woman with a shawl over her head stop and take a piece of bone from amongst the scraps laid out to sell off cheaply, on the board outside a butcher's shop. Two well-fed, well-dressed men, wearing tall silk hats, who were some distance away across the road, suddenly rushed forward shouting and ran till they caught the poor woman, then held her until a policeman came. That incident made a tremendous impression on me: it linked me up for life with the "Have Nots" against the "Haves."

Soon afterwards arose a period of acute unemployment in Manchester where we lived, and my sisters and I went down to Stephenson's Square there, to help our Mother give out soup and bread to the



ポオル・クロオデル

吉江喬松

一

佛蘭西の第三共和政の初頭にあたつて一般を支配してゐた思想、自然主義(ナチユラリスム)、理智主義(ラシオナリスム)、科學主義(シアンテイスム)が、それより凡そ三四十年の間に、發轉開伸して、ベルクソンのヴイタリズムの哲學となり、アンドレ・ジイド、ロマン・ロオランの宗教情緒となり、更に象徴派詩人の個々の生命に徹した神秘境の開放となつた徑路を最も好く、また最も具體的に代表してゐるのはシヤルル・ペギイとポオル・クロオデルの二人であらう。

　最も具體的であるといふ意味は、二人共に自由思想家であることにあきたらず、二人共にカトリシスムに改宗して、從來の傳統的な神秘宗教の中に於て、その境地を一層廣くまた深くしようと努めたからである。二人共にカトリツクであるといふことが、他の思想上の精神的運動に參加してゐる人々よりは具體的であるといふ意味である。

　併し詩人の素質としてはペギイの方がクロオデルに比べてより少ない。それだけ一層智的である。彼にあつては解剖分析が想像よりも強く働いてゐる。またそれだけ彼の方がより深く、一意カトリシスムの底まで突進して行く。クロオデルにあつてはカトリツクの神秘を自己の詩的想像に溶かして、これを自在に流露せしめてゐる。ペギイの求むるのは正義と眞實とである。若きソシアリストとしては敢てジヨレスの批評をし、ドレヒユジストとしては無罪を罰する汚名をふせぐために戰ひ、そして千九百十四年の第一回のマルヌの戰爭に前額に鐵丸を受けて倒れるまでの彼の一生はまさに戰鬪的であつたといへよう。「大戰

中に倒れ、神に面し、地上に伏して死するものは幸ひなるかな。」
彼は自分の願ひを實現して死んだ人である。

ペギイの一心不亂中心に突入して行くやうな姿に比べれば、クロオデルは包容と流露とその藝術の姿にしてゐる。年と共に彼の藝術は、暗より光明へ、次第にその共存（コネエサンス）の眞義を廣めつゝ行くのである。彼の詩の本義はその著「詩の眞髄（アール・ポエティック）」と、その詩の傾向はその著「五大賦（センク・グランド・オード）」とによつて知り味はうことが出來る。

彼は「五大賦」の中の「靈と水」と題する詩の敍文でかういつてゐる。

「詩人は北京（ペキン）の城寨內に囚はれてゐて海を想ふ。無限と解放との水の甘醉である。けれど靈はそれよりもさらに自由と透徹とに於て立ちまさつてゐる。我々を過生より解き放つ唯一絶對の神への進渉である。現世にては我々は神より引きはなされてゐる。けれど、目には映ぜずとも神は存す、而して我々は、この流動の元質、靈または水によつて神と脈絡を結ぶ、萬物はこれによつて浸透せられてゐる。靈にして水、この成形要素と及びこれに課せられたる意志、その立てる壁こそはこの脫稿せられたる融合の表現である。靈は萬物に於て水を救脫せしめ、照らし、かゞやかす。こは死の闇より脫出し、自己自身にてあることを神に對して祈願することである。神の召しに應じて湧出するとき、水は淨化する。これは忍苦の心より湧き出づる涙である。過ぎ去つた過失の思ひ出である。今や總ては終つて、詩人は、深い沈默の底で、囁く聖靈と、萬人に話し掛ける寂寥の壁とに耳傾ける。」

水の如く各處に存在せよ、流通自由、有ゆる形を包み、有中に形を取れどもそれ自身の形式は持たず、動き流れ跳れども中心の靜かさを失はず。これは生命の大源より流れ出る聖なる水、靈なる水の姿である。この靈なる水の中に於てこそ、またこの靈なる水に由つてこそ萬物は共存の念に徹することが出來る、これは萬有の所有であつて、全時に萬有への溶合である。

クロオデルの藝術がこの眞義に從つて如何に發展し來つゝあるかを考へて見よう。

二

クロオデルは千八百六十八年に生れた。

十五六歳の少年時を彼と仝じ中學で送つた現在の巴里大學の教授ストロウスキイ氏はその當時を物語つていふのに、その當時自分等は一人の極めて嚴しい教師の監督の下に置かれてゐた。この教師ぐらゐ世の中で喋ることの下手な人もなかつたが、またこの人ぐらゐ文章の點の嚴しい人もなかつた。一つの言葉の繰り返しでも、一つの文句の不明な個處でも、一つの句切りの丁度に行かないのでも容赦しなかつた。その中でクロオデルは、「可愛いクロオデル」と呼ばれてゐた彼は、易々とその日課を果して行つた丸る顏で、キツトした眼付きで、少し重い語調で、活々した身のこなし、嚴丈な體軀、これがその當時のクロオデルであつた。ストロウスキイ氏に由れば、クロオデルのこの樣子は今日でも決して變らない。「クロオデルに於ては何かしら決して變らないものが在る」といつてゐる。

十八歳頃、クロオデルの青年期が初まらうとする頃、彼もまた當時の一般の青年の如く、唯物的の思想に囚へられ、暗い惱みに縛られてゐた。

「個的な凝固的な強い觀念が私の内を暗くしてゐた。私は機械的一元的の假定を極度まで受け入れた。私は、萬象は法則に支配せられ、世界は因果の固き鎖であり、科學はやがてそれを完全に證明することを信じてゐた。併し、それ等は私にとつて隨分悲しい、またうるさい事に思はれた。……次第に私は絶望の狀態に落ちた。……死の觀念はかつて私を離れなかつた。……私は完全に宗教を忘れてゐた。その點では、私は野蠻人の無智の狀態にゐた。」（千九百十三年青年評論十月號）

これは當時の一般の教養ある青年の思想の一端であつたに異ひない。少くもデカダンの詩人等が味はつた初期の惱みであつたに異ひない、マアテルリングの初期もさうである。併しその極致に達すれば、その暗の底から初めて象徴の芽が除々に伸びて來るのである。ヴエルレエヌにしてもラムボオにしても個性によつて形は異へどもほゞ同じ徑路を辿つて來たのである。

クロオデルがその暗い心の惱みの中で、多少の慰めを與へら

れてゐたのはラムボオの時であつた。

千八百八十六年のクリスマスに彼は群集の一人となつて、巴里のノオトル・ダムの暗い廻廊の中に立つてゐた。何か知ら刺激を求め、異つたものでも眺めるやうな氣分で立つてゐた。時は午後で、ヴエプル午後の禮拜が初まつてゐた。オルグの響きと、合唱隊が前方でうたふ Magnificat の聲々が、この小暗い會堂のなかにあふれて、林の木の如く立つてゐる圓柱をつたはつて空へ向つて登つて行くのを耳にして、湧き返へる波の寄せ來るやうな音樂の中に身をひてゝゐる中に、不圖、彼のなかに眠つてゐた靈が目を醒ました。異教者には出來得ない經驗であらう。彼の中に永い間幾代かたゝみこまれてゐたカトリックの聲が不圖した場合に呼びさまされたのである。ブラウニングの「ソオル」の心眼を見開かしめたやうな樂の音の効果である。

「私は強い進衝の力をもつて、全存在の湧起をもつて、強い信念をもつて、如何なる疑惑をも生ずる餘地のない確かさをもつて信じた。それ故、その時以來は、有ゆる書物も、有ゆる推理も、亂れたる人生の有ゆる遇然事も、私の信仰を動かすことは出來なかつた。いや、それは觸れることすら出來なかつた。私はこの異常なる瞬間につゞく幾分間を思ひ返して見ようと、屢々つとめたけれども、聖なる神意が哀れな絶望兒の心に手をふれ、それを開かしめるに用ひたたゞ一つの光り、たゞ一つの武器を構成する次ぎの要素しか見出すことは出來ない、即ち――「信ずるものはいかに幸福なことである!」――「だが、それは眞實であらうか」――「それは眞實である」――「神は存在す。神はそこに在り。それは或る何人かである。それは私と同じ人格者である。」――「彼は私を愛す、彼は私を呼んでゐる。」

涙と嗚咽とがつぎで來た……」(同上)

人格者たる神が彼を呼ぶ。彼はこの感じをもつてまつしぐらにその神の召呼に應じた、けれど彼が猶ほ肯定せられず苦しんでゐたのは、會堂の慣習、會堂に使ふる人々の風習である。彼は寧ろそれ等を嫌惡してゐた。然しそれから後の四年間は、彼はパスカルを、ボスユエを、ダンテを、更にアリストオトのメタフ

イジクを、ボオドレエルの遺著を讀んだ。その間には彼の信仰は白熱化して、舊來の聖殿内の習俗を眞の信仰をもつて燒きつくし、照らし盡さんとするばかりの力となつて、終に千八百九十三年のクリスマスに第二のコンムユニオンを、即ち眞の改宗洗禮を受けたのであつた。

三

この信仰の生活と共に彼の詩の領土は開けて來たのである。彼はその追求する萬有共存の眞義をその詩をもつて表現すると共に、その共存の領土を廣く求めて窮極に達せずしてはやまないのである。彼の心的領土の廣がりは丁度彼が表面生活上の經路として撰んだ外交官生活が象徴してゐる如き現象を呈してゐる。彼の詩作劇作は世界の到る所に於て書かれたものであつた。

彼は改宗したと同じ年に「獨立評論（ルヴイウエンデペンダン）」へ劇の試作を書き、その翌年著者の名を付けずして、同じ社から彼の處女作「金髪（テツドドオル）」を出版し、その翌年は既にアメリカへ外交官の經路を初めに出發したのであつた。それより後の彼の任地は東西に變化した。支那へ、天津へ、北京へ、その間に日本へも漫遊した――北海道へ、日光へ――やがて西歐へ歸つては、墺太利へ、獨逸へ、やがて羅馬へ、次ぎに南米へ、更に北歐へ、而してまた極東へ、彼の心境の擴まると共に任地は變りつゝあるのである。

彼の處女作「金髪（テツドドオル）」の出版せられたのは千八百九十一年にもせよ、これの書かれたのは、彼がまだ心内に於て暗鬪苦惱をつゞけて居た時代であり、彼の頭には過去の暗い苦しい影が立ち去らずにゐた時代である。暗中に於て光明を求め、神を探り行くもどかしさ、そのかすかな途と、これを覆ひ包む重い厚い闇の力とは、彼の信者自身の心境の苦しさと同じく、讀者としてもそれをとめて見るには非常な苦しみを味ふ。その翌々年に出版せられたる「都市（ラ・ヴイル）」も同じくこの晦澁の闇に包まれてゐる。併しこれが千九百六年に出版せられた「正午の分配（パルタアジユ・ド・ミデイ）」を經て、「マリイへの告示（アノンス）」へまで來ると除々たる光が、途を照らして人間の存在が一層明白に確かめられて來るのである。人間の存在の中に告知せらるゝ神の聲が示めされて來るのである。

「マリイへの告示」は嘗て千九百十二年に巴里にては ルウ

ブル座で演ぜられ、ヴイウ、コロンビエで演ぜられたこともあつた。今年になつてまた巴里ではコメデイ、モンテーヌで上演せられた。クロオデルもまたよくある例にもれず、佛本國よりも諸外國に於て先きに認められたる作家の一人であるが、最近に於て諸外國では特にこの劇を上演して來る。昨年の冬はモスクウに於ても大なる喝采を博したとのことである。

これは一種の神秘劇ともいへよう。

少女ヴオレエヌはそれと知りながら、憐みと赦るしとのために、一人の癩病病みの男にキツスを與えたがために、彼女自身も同じ病氣に罹つてしまふ。その時親父は遠い旅へ出發する。彼は出發前に娘等二人――ヴイオレエヌとマアラとの身の片付けを考へたが、姉娘のためにとて憐人のジヤツクを撰んだ。しかるに妹のマアラもこの男を愛し、姉を迫害するので、ヴイオレエヌはそれをすてて荒野へさまよひ出づる。撲素な村人等は彼女を尊んで、その振舞に奇蹟（ミラクル）をみとめる。

やがて妹のマアラは天よりの罰か、その生んだ子供は盲目でしかも死に瀕する。彼女はそれと知らずして、雪の中を奇蹟の女を求めて行けば、ヴイオレエヌはやさしくその兒を胸に抱いて、眼を開かせ、生きかへらせる。マアラは聲を擧げて「お前の愛情がお前を母親にした」と叫びながらも、執念き彼女はなほ嫉妬の心にかられて姉を殺す。ヴイオレエヌは呼吸をひきとりながら、總てをゆるし、死の中に悦びを求めて死んで行く。彼女はやがて、彼女が最初哀憐をそゝいで癩病の彫刻家ピエ、ル、ドウ、クラオンが會堂の中に刻む聖像の中に再生するであらう。

これは神の聖愛の人間化せられ具象化せられたる告知である。母性は愛より生づ、愛は一面に肉體を苦ましむれども、死をも燒きつくして不盡の喜悦をその中に求めしめる。神人の交通した姿である。「人格者たる神がそこにある」と彼が告白した如く、クロオデルの神は目に映ぜされども人間性の中に現はる。人間性を貫いて現はる。彼の描き出す人物は抽象の具體化であり、寧ろ眞實性の具象化である。こゝに彼の新技巧が現はれてゐる。

四

劇作の主材よりいへば劇作第三輯にある「少女ヴイオレエヌ」は、「マリイへの告示」の研究準備の如く思はれる。なほ千九百十一年に出版せられた「人質(ロタアジユ)」の中の人物の引きつゞきは十八年に出た三幕物の「固きパン(ルーパン・ドユル)」のなかにも、昨年出版せられた四幕物の「謙れる教父(ルペエル・ユミリエ)」の中にも現はれて、多少の脈絡と、發展とが見えてゐる。

この引きつゞきのほかに立つてゐるのが。劇作第三輯にある「交換(ルシヤンジユ)」と、第四輯にある三幕物「第七日の休息(ル・ルポ・ドユ・セツテイエム・ジユウル)」とである。前者は千八百九十三年から四年へかけて紐育とボストンとで書かれたもの、後者は九十五年から九十六年へかけて支那で、上海とフウチウとで書かれたものである。

「人質(ロタアジユ)」は「マリイへの告示」と共に彼の代表作の一つである。時代は大革命の後、シイニユ、ドウ、クウフオンテエヌといふ少女が、その唯一の血族で、戀人で、許婚者で、所謂エシグレの一人である從兄ジオルジエと家をなして自分等の血統をつゞけて行かうとしてゐる時、その從兄は、ナポレオン一世のためにフオテンプロオに囚はれてゐた法王ピイ七世を秘かに連れて來て家に隱して置く。それに氣づいたのはナポレオン配下のテイユルリユルルといふ男である。彼はシイニユに、法王を引き渡すか、自分の妻になるかと迫る。シイニユは司祭バデイロンの意見をきいて身を犧牲にする。この場面がこの劇中の最も緊張した個處である。やがてシイニユはトウエン、テイユルクユル夫人として一子を擧げたけれど、彼女は半ば病者の姿である。その時ルイ十八世の密使として彼女の夫の許へ送られたのは、彼女の從兄のジユオルジユ、ドウクウフオンテエヌである。秘密の契約を結ぶためである。從兄は使者の役目は果したけれど、戀の恨みに耐へられないで、シイニユと言ひ爭ひ、その夫の上へピストルを向ける。シイニユは身をもつて夫を防ぎ、從兄の銃丸に倒れてしまふ。司祭のバデイロンはまた迎へられた。死に行くシイニユとこの司祭との間に取りかはさるゝ言葉こそは人間悲劇の崇高化である。シイニユは最後まで夫をゆるさず、自分の死ぬのを何よりも悦んでゐるけれど、司祭が枕もとでする祈禱を耳にしてゐる中に、瀕死の彼女は不意に身を起して、兩手で頭の上で十字を描いたかと思ふと、再び流れる血の中へ

身を伏せて呼吸をひきとつてしまふ。

この劇は「マリイへの告示」に比ぶれば或意味で一層人間的である。法王ピイ七世にせよ、二人の男にせよ、シイニュにせよさうである。それ故に一層トラジツクである。而して初期の諸作に比ぶれば人間の存在が一層はつきりしてゐる。そのはつきりした人間の存在の中を貫いて表はるゝ神の存在は一層我々に近く感ぜらるゝ。ミケランジュの天井畫に現はるゝ具體的の神の姿ではなくとも、その力の現はれは全じ感じがある。この神は決して狂信の當對ではない。人間神である。これを探がし、それを求めて行くのがクロオデルの劇の發展の徑路である。

昨年出版せられた四幕物の「謙れる教父(ル・ペエル・ユミリエ)」は、千九百十六年に羅馬で書かれたものである。

舞臺は羅馬で、時代は千八百六十九年、時は五月である。猶太の、少女、パンセ、ド、クウフオンテエヌは、目は開いて居れども視力のない哀れな娘である、彼女の祖父は「人質(ロオタアジュ)」の中へ出て來るトウセン、テユルリユルである。彼女の父はシイニユとトウセンとの間に生れた子である。このジュイプの視力なきしかもいつも秋の如き感じを與へる少女は、羅馬の五月の夜の花の香の中に、不圖何ものかの近づくのを身に覺える。戀ひである。

兩親は法王に使へる二人兄弟の若者の中でその弟の方、オルソ、ドウ、オモダルムへこの娘を嫁はせようと思ひ、男もまた彼女を戀してゐる。兄のオリアンは弟の意を受けて少女の心を聽かうとて、二人して花園へ行く。けれど、この少女がその聲によつて戀してゐたのは兄のオリアンであつた。

羅馬のかぐはしい夜の庭園は、この二人をして遂ひに戀の糸につながらせてしまふ。けれど弟は兄を恨まず、寧ろこれに同情をそゝいでゐる。法王は彼等の間に現はれて、いかにもすなほなる一個の牧師のやうに教義を語つてきかせる。

間もなく革命の波は巴里に於ける如く、羅馬にも起つて來て、ピエモンテ人もゼルマン人も攻めよせて來ようとする。二人の若者も出陣しなければならない。兄のオリアンは弟を愛し、その心を思ひやりながらも、出發前、パンセと二人で語つて出掛けて行く。視力なき少女は、抱擁によつてゞなければ愛を感受

することが出來なかつた。
彼女は世のシイシエルと共にその消息をまつてゐるけれども長い間おとづれがない、すると或る日弟のオルソが歸つて來た。パンセはそれをオリアンと思ひ違えて物語りをする。しかし、その時は最早やパンセはオリアンの子を腹に宿してゐた。
パンセは不圖氣がついて歸つて來たのは兄のオリアンでなく、弟であると思ふと、その戀人の身の上が氣づかはれる。弟はいふ、兄は戰場で倒れてしまつた。併し自分には何とてもその死骸を手に收める暇がなかつた。けれども片身の品はこの手籠の中にある。パンセは、氣忙はしくその手籠に近寄らうとするのをオルソは止めていふのに、それは觸れてはならない。それは兄の首級である。けれど、兄の生命は最早や我々とは異つたオルドルの中にはいつてゐる。それを我々の團體で亂してはならない。それよりも兄の遺言を聽いて貰ひたい。
兄は、おん身の内に宿つた果實を非常な悅びと苦しみとで考へた。おん身と共につないで行く種族の種子を悅んだ、けれどおん身を苦しめ、法外の誕生をなさしむるのを悲しんだ。けれど、彼は最後にいつた、おん身が私の妻になるやうにと。パンセは拒んだ、やがて沈默におちた。そしてつひにその言葉を受け入れた。
ヴイオレエヌは愛の柔さしさによつて母性を、シイニユは愛の強さによつて後繼者を、而してパンセは愛の自由さによつて身をも子供をも生かして行く。神への途へはつひに悅びを伴はずにはゐない。

五

"Nous ne naissons pas seuls. Naître Pour tout, c'est co-naître. Toute naissance est une connaissance."
(Art poétique)

「我々は孤獨には生れない。生れるといふことは、總ての人にとつて、共存である。有ゆる誕生は即ち一つの共存である。」
而して眞に生きてゐるといふことは、この共存の感に徹することである。而して「時」(タン)は無限に伸展し、每瞬間に新らしき生長を催がす。共存の生はこの時と共に無限に伸びて行くのである。これを創造と呼ぶ、而してこの創造は萬有を通じて流れて

ゐる。この創造の感を身に徹せしめ、その創造の一端に參加し、それを演じ出す時、詩は生る。詩は創造の甘醉である。同時にこの創造の樂の言もて、眠れる人々の靈を呼びさまさなければならない。この召喚に應ずるものは神の前に立つ人である。併しこの召喚の聲を耳にする暇なくして、死んで行つた人が多い、こゝに人生の悲劇がある。

「人間は、人間の時間しか持たない。
そして死んで行く。それ以上を望まない。
永久に！」

假しまた、目醒めても、四周のつめたい重い闇はまたその人の頭上から覆ひかぶさつて來る。この闇との戰ひは人生の戰ひかも知れない、勝利の途、光明への途へ向ふ道程は安易ではない。この過程を具體的に見せたのがクロオデルの「十字架の道（シユマンドウクロウ）」の一冊である。

光明の遍き中にこそ共存の意義は徹するのである。この光明を人々の上へ導き來るものが詩である。それ故、クロオデルに由れば、詩を功効的に考ふる時は、人間の文明にとつて、歴史と同じく、缺く可からざる機能である。

然して共存の意義は勿論人間にのみ存するのではなくして、萬有に通ず、そこに象徴の世界が開けて來るのである。印度洋の岸に茂るコ、テイエも生をもち、由來舊きロオリエも生きかへり、マグノリアの花も生氣をはく、ましてオムニプレザントの海の自由は、詩人と共に生き詩人と共に呼吸し、流通自在な水は靈を具象す。クロオデルの詩集中我々に親しきものとしては私は "Vers d' Exil"（追放の歌）を撰ぶ。

共存の意義を人間界に徹せしむれば猶太人もクリスト教徒も愛によつて結ばる。共存の意義を地上に廣く求むれば東西もない、差別はあれども呼吸は一つである。彼の "Connaissance de l' Est" は、まさに東方共存者の求知錄である「東明」である。これはすぐれたる散文の詩である。

これは千八百九十五年から千九百五年までの間のル、コ、テイエ以下六十餘篇の散文詩を集めたものである。この中には日本藝術と西歐藝術との比較もある（此處、彼處と題する一篇の中に）。印度も支那も、要する東方の光りを集めたものである。

この他に、シヤルル、ルイ、フイリツプの死についてと、ヴエルレエヌへの尊敬にとてかいた詩がある。

併し詩人としてのクロオデルについては猶ほ靜かに稿を改めて書いて見たいと思つてゐる。



アーサー・ヘンダスンと語る

英國にて
本社特派員　室伏高信

一

私が初めてアーサー・ヘンダスンに會つたのは、英國へきてから間もなくのこと、丁度三角同盟が致命傷を負ふて後に、百二十五萬の坑夫が單獨での、長い、苦るしい、悲壯な戰ひに入つて、坑夫も炭坑持主も、英國の全支配階級も、勞働運動の黃色派の諸君も、みな一樣に苦惱の呼吸を、呼吸しつゝある時のことであつた。私はこの機會に、英國勞働運動の黃色派の驍將アーサー・ヘンダスンを訪ふべく、エクレストン・スクエアへと足を運むだ。そこは倫敦の交通の一方の中心としてのヴヰクトリア驛の煤煙から程遠くないところではあるが、靑葉の繁る角閣を前にして、人影の稀れな、靜かな通りであつた。こゝに英國の勞働運動の本流にとつて、最も主要な三つの建物が軒を並べてゐた。その一つは勞働組合會議の建物であるから、この國に於ける八百萬人の勞働組合運動の策源地であるわけであつて、ヂエ・エッチ・トーマスが會長としてこゝに出入する。他の一つは勞働調査局の建物であつて、秘書のペーヂ・アーノット君が每日のように、また名譽秘書のヂイ・デイ・エッチ・コオル君が時々出入しつゝある。この二つの建物に狹まれて、英國勞働黨の本部があつた。ヂエ・アール・クラインスがそれの院內總理ラムセイ・マクドウナルドがそれの會計、アーサー・ヘンダスンがそれの秘書としてこゝに机を並べてゐるのであつた。

私は約束の時間に、この三つの建物のうちの中央勞働黨の本部へと入つて行つた。

二

五、六人の若い女たちが忙がしそうにタイプライタアを鳴らしてゐる一室を通つて、少し奥まつたところに勞働黨の最高幹部室があつた。二脚の大卓子と、四五脚の椅子のほかには、何の裝飾品も置かれてゐない、陰鬱の氣に滿ちた一室であつた。私がこの室に入つて行つた時には、ヘンダスンは例の眼鏡越しで何か報告書ようのものを讀んでゐたが、私の姿を見ると、彼

は威勢よく立ち上がつた。そして恐ろしく長い手を私の前に差出した。彼れは身の丈け優に六尺を超えてゐるであらう。英國人にしても赤過ぎる位ひだと思はれる辨慶色の顔で、額を前倒らして、眼鏡越しに私を見下ろした瞬間に、彼れは精力と野心と鬪志とに滿てる、力の人のように思はれた。私はその瞬間に私の想像の人格が崩壞されたかのように感じないではゐられなかつた。私はヘンダスンのことを思ふごとに、中庸の顔、物凄いほどに退屈な人物を、私の心に描くのが常であつたからである。しかしまた私はその瞬間に『マンチエスタアの株屋』といふ言葉を思出した。ヘンダスンの顔は勞働運動者の顔でなくて、マンチエスタアの株屋の顔である、と誰れかのいつたことを記憶してゐたからである。私は心のうちで『マンチエスタアの株屋』を二、三回繰返しながら、再びヘンダスンの赤ら顔を見上げた。彼れの顔は矢張り赤かつた。彼れは矢張りそこに巨人のごとくに立つてゐた。しかしどことなくマンチエスタアの臭ひが彼れの全身に漾つてゐるのが見えた。彼れはこの國の貴族と同じように、夏の暑さにモーニングで威嚴をつくつて、太い金鎖を腹に卷きつけてゐる、國王ヂョーヂの樞密顧問官――勞働貴族であつた。

三

この日の前に、彼れは下院の壇上で、ロイド・ヂョーヂを向ふに廻して、彼れ相應の氣焔を擧げた。私はそれを朝刊新聞で見てゐたので、ロイド・ヂョーヂのことから話を始めた。

ロイド・ヂョーヂ君は要するにお天氣屋である、私が昨日下院で論じたとほり……

こういつてヘンダスンは眼境越しに私の顔を見た。彼れは『お天氣屋』といふ言葉に力を入れた。そして『お天氣屋』だといつたことが、大發見ででもあるかのように、彼れには餘程得意らしく見えた。『平凡なことを莊重に語る』――政治家とは、何處の國へ行つて見ても、平凡なことを物體ぶつて話すのが、彼等の身上であつた。

彼れは内閣大臣となつた英國最初の勞働黨員であつた。彼れはアスキスのもとに、ロイド・ヂョーヂとは暫らく机を並べてゐたことがあつた。またロイド・ヂョーヂ内閣となつてからも、その無任所大臣として居殘つてゐた。そして一九一七年の夏、ロシアから歸つて間もなく、對露政策の相違の故に、ロイド・ヂョーヂから閣外に『放逐』された。ヘンダスンの door-mat incidence として知られてゐるのはこの事件のことであつた。彼れはこの放逐事件以來、所有者階級から不評判となつたといはれてゐる。またそれだけに、この door-mat incidence は彼

れを幾分か左方へと動かしたことも爭はれない事實であらう。昨日の友、今日の敵、私は今までヘンダスンの巾廣の顔を眺めながら、この人がロイド・ヂョーヂから『放逐』された人だなと思ふと、彼れの口から、重々しく吐き出される、そしてもう千萬人の口に傳えてゐる彼れの辛辣な批評も——彼れの敵のロイド・ヂョーヂに對する彼れの批評である限り、尚ほ新鮮の興味をもつて聽くことができた。

ヘンダスンは、ロイド・ヂョーヂを批評しながら、自然と彼れ自身の人格を赤裸々に語つてゐた。彼れはお天氣屋だといつてロイド・ヂョーヂを非難した。そしてその非難したことを私に得意げに語つた。しかしお天氣屋だといふことは、彼れにとつては、決して政治家の致命傷ではなかつた。彼れは直ぐにこういつた『お天氣屋ではあるが、ロイド・ヂョーヂ君は大政治家である』と。

お天氣屋であつて、しかも大政治家——こうなつてくると、私には風見鷄と『大政治家』との間にどういふ區別があるものかが分らなくなつてくる。しかしマンチェスタア育ちのヘンダスンにとつては、こういふ謎は簡單に解けてしまう。グラッドストーンはお天氣屋ではあつたが大政治家であつた。ビーコンスフヰールドは日和見の才能であつたが、しかし彼れは大政治家であることを失はなかつた！ ヘンダスンはこの二人の政治家の名を並べて、それで私の謎は解けてしまつたらうといつた風に、微笑を浮べながらまた眼鏡越しに私を覗きこむだ。私は彼れと爭はうとはしなかつた。たゞ心のうちで考へて見た『ヘンダスンもお天氣屋である。しかし彼れは大政治家であるか？』と。私は彼れが『大政治家』であるか否かを知らない。たゞ一つ慥かなことは、彼れが彼れの謂ふところのお天氣屋の一人であるといふことである。

四

客あり、マルクスを論じたり、『資本論』を說いたりすると、ヘンダスンは直ぐ話題を地方團盤や補欠選擧の方へもつてゆくのが常である、と私は兼ねてから聞いてゐたから、私は迂廻曲折の手數を避けて、直ぐと話を補欠選擧の方へと進めた。ヘンダスンは、この問題なら己れの專門だといつた風に、——そしてまた實際これに相違なかつた——私の問はないことにまで說き及んだ。そして一九一八年の選擧——この選擧でヘンダスンは落選した——はたゞ戰爭熱の結果であつて、これによつて將來の選擧をトするに足らないといふことを、これも平凡なことを鄭重に述べ立てた。

私は倫敦滯在中、マックス・ビアボンの諷刺畫を見るべく、

ある日の午後を、レスタア畫廊の一角に送つたことがあつた。その百數十枚の製作のうちで、多分中ほどだと思はれるところに、一人の背の低い男が、ビア樽のうへに立つて、大勢の群衆に圍まれながら、大道演說をしてゐるのが私の目についた。その大道演說家の口からこういふ言葉が吐き出されてゐた『一、戰爭に勝つたのは私である! 二、カイザーを絞刑にするのは私である! 三、獨乙から賠償金をとるのは私である!……』と。そしてこの畫の標題には『だまかし』と書いてあつた。この大道演說家こそ無論ロイド・ジョーヂであつた。

ヘンダスンが一九一八年の選擧の話しに歸つた時に、私はビアボンのことを話した。そして要するにそれは『トリック』であらうと私はいふた。ヘンダスンはビアボンの話を聽いてから、目を細くして喜んだ。そしてトリック／＼、トリックに違いない! と繰返した。

ロイド・ジョーヂは一九一八年には一流の『トリック』で選擧に勝つた。彼れはカイザーの『首を絞る』ことの代りに、『勞働黨の首』を絞つた。マクドウナルドも、スノウデンも、ウエツヴも、ヘンダスンも、みな『カイザーの首』の身代りに供せられた。だからこの事の手品が分つてくるとともに、手品師ロイド・ジョーヂの身邊が危うくなつてくるのもまた免れがたい運命であつた。英國における補欠選擧の結果は、ヘンダスンの說明を待たなくとも、何よりも雄辯に、ロイド・ジョーヂ內閣の不安定を語つてゐた。しかし若しロイド・ジョーヂに、『カイザーの首』よりほかに手品の種がなかつたとしたら、彼れは天成の手品師であるといふことはできなかつた。然り、第二のカイザーの首を探し出すことが、手品師ロイド・ジョーヂにとつての『最高政治』でなければならなかつた。三角同盟の脅威が、この國の議會政治を死の無能にまで引下げた時に、ロイドジョーヂは慥に第二のカーザーの首を探してゐた。三角同盟が崩壞し去つた時に、最も多く失望したものは、坑夫組合でもなく、コムミユニストでもなく、實にロイド・ジョーヂその人であるといはれてゐた。

そこで私はヘンダスンに次のような問ひを試みて見た『勞働黨は、第二のトリックに掛りはしないか?』と。彼れは口を結んで、彼れの前倒つた額で、靜に頷いて見せた。

五

私がヘンダスンから一番多く聞いて見たいと思つてゐたことは、次の選擧、來るべき、そして近づきつゝある英國の次の總選擧について、彼れが勞働黨の地位をどう考へてゐるかといふことであつた。彼れは大なる樂觀者であつた。彼れは既に英國

の勞働黨が全國に亘つて三百有餘の有力な候補者を準備してゐること、更に他の二百名の候補者を發見しうること、地方地盤の開拓が着々緒に就いてきたといふこと、勞働者の政治的自覺が戰爭以來急速に進んできたといふこと、勞働黨の黨員が激增しつゝあるといふこと、それからこれ等の事實が既に過去二ケ年間の補欠選擧によつて證明されてゐるといふことを、何れも私の既に知りぬいてゐることを詳らかに述べ立てゝから、勞働黨は、次の選擧には絕對多數黨（アブソリュート・マヂョリティ）となることはできないにしても、最大多數黨（コムパラチヴ・マヂョリティー）となることは疑を容れない、と、さも疑を容れないらしく、彼れの確信を語つてから言葉を切つた。如何にも第二のカイザーの首が出てこない限り、ヘンダスンのいつてゐるとほり勞働黨が、この國の下院に最大多數黨となるか、若しくは第二の大政黨となるか、何れにしても彼れが現在の八十人の代議士の頭を二倍にし、三倍にしうるであらうといふことはヘンダスンよりも、クラインスよりも、ウエールス生れの、機敏で、殷掬ひの大宰相がよくこれを知つてゐる。若しくは鈍重のチエムバレンでさへよくそれを知つてゐる。『勞働黨の惡魔』、ロイド・チョーヂがこういふたのも、私が英國滯在中のことであつた。『橫柄な勞働黨（アーロウガント・パアテイ）』、チエムバレンがこういつたのもそれから間もなくのことであつた。然り、ウエルスの山中に生れた、機敏で、銳利で、お天氣屋で、雄辯で、虛榮に燃えてゐるこの國の大宰相の夢寐に襲ふてくるものは、最早や彼れの舊主人アスキスではなく、鈍重のトーリーでもなく、實にこの『橫柄』な『惡魔』であり、若しくはこの橫柄な『惡魔』を第二のカイザーの首とすることによつての、勞働者の陣營の分裂、中等階級の恐怖心の挑發、トーリーの隷屬性の保持——ピアボンの『トリック』のそれであつた。

六

勞働黨が惡魔となり、橫柄となつた時に、ヘンダスンも、クラインスも、トーマスも、この國における多くの勞働貴族、國王チョーヂの樞密顧問が、みな等しく惡魔となり、橫柄となる。私が英國滯在中に、英國の諸新聞は、『次の首相』を見出すために、既に屢々想像の遊戲に耽りつゝあつた。グレイの名があつたカアズンの名があつた。チエムバレンも、チャーチルも、アスキスも、ロバアト・セシルの名もあつた。そして勞働黨に說き及ぶものは、多くはヘンダスンと、クラインスとを擧げた。また或るものはトーマスの名を擧げた。私はこれ等の一群の政治家の諸君のうちの何人が『次の首相』であるかを知らないが、ヘンダスンや、クラインスや、トーマスや、勞働の『惡魔』、若しくは勞働の貴族の名が、『次の首相』の、縱令末席であるにし

ても、額縁の中に入れられてくるようになつてきたことは、少くともチエムバレンのいつたとほり、この國の勞働黨が『横柄』となつたことを證據立てゝゐるものでなくてはならなかつた。しかしそは横柄ではあるにしても、『惡魔』であるかどうか。例のノースクリツフ事件の起つた時に、憲法上における英國王の地位が下院で討論されたことは、下院が憲法上の主權者であるか若くは國王が主權者であるかを、再び英國の憲法史上に確める機會であつたとともに、國王に對する勞働黨の態度をも、公衆の前に明らかにする機會であつた。この日、勞働黨を代表したものはトーマスであつた。そしてトーマスが最大の嵌まり役であつた。トーマスは勞働黨を代表して國王への忠誠を誓つた。彼れ曰く、この國の國王が占めてゐる地位は世界無比であるとまた曰く勞働黨が明日政權を掌握した時に、國王陛下は、現内閣の忠言を聽かれつゝあるごとく、われ〳〵の忠言を聽かれるであらうと。トーマスが下院でこう述べた時に、英國の下院は喝采をもつて彼れを迎えた。否、トーマスの『忠誠』は、既に彼れの著書『勞働黨の支配する時』によつて明らかであつた。私はヘンダスンに會つた時に、既にトーマスの『忠誠』を知つてゐたから、序でに他の勞働貴族、ロイド・チヨーヂの謂ふところの勞働の『惡魔』、アーサ・ヘンダスンの『忠誠』をも知りたいゝ思つた。彼れは私に語つて次のように述べた。『王室に對する問題は、嘗つてわれ〳〵勞働者の間で眞面目に論じられたことはない』と。そして彼れもまたトーマスのように『忠誠』であるか、若しくはこの問題に觸れざることが、政治家の賢明さであるといふ態度を示した。彼れもまた流石に『樞密顧問』だけあつた。英國の勞働黨は縱令ロイド・チヨーヂにとつての惡魔であるにしても、少くともそは王室に對しては惡魔でないと私は思つた。

七

勞働黨が次の選擧で絕對多數を占めないとすれば、そしてヘンダスンの謂ふところの最大多數黨となるとすれば、勞働黨はその場合こそ、彼れが『勞働の貴族』であるか、または『勞働の惡魔』であるかの、試練であつた。私は勞働黨と自由黨——アスキスの『ウヰー・フリー』との提携は可能であるかどうかと、單刀直入にこう問ふて見た。私はこう問ふた時に、若しヘンダスンが狡猾な政治家——それを人々は『大政治家』といふのであるとしたら、私の問には答へないであらうと思つてゐた。私は嘗つて數年間新聞社に政治記者をしたことの經驗がありそして日本の『大政治家』の諸君がこういふ場合に如何に答へるかをよく知つてゐたからである。しかし幸ひにしてわが『ア

ンクル』ヘンダスンはそうした大政治家の一人ではなかつた。彼れは何の顧慮するところもなしに、それは無論可能だといふた。そして次に『政界の事情によつては……』と條件をつけたその條件とは、彼れの説明に從へば、勞働黨が單獨で政權を掌握するの力を欠く場合、そして一時的過渡期（トランシシヨーン・ピリユード）に限るといふことであつた。彼れは彼れの條件を説明してから、次のように述べた『勞働黨の主要なる政策、例へば對露方針にしても、課税の問題にしても、教育についても、アスキス黨と大なる相違はないし、愛蘭問題でも、アスキスの自治領主義と、われ〳〵の自定的自治領主義との間に、妥協の餘地は充分にある、多分のアスキス黨はわれ〳〵に讓歩ができるであらう』と。彼れは勞働黨がもう天下をとつてしまつた時のように、一々事例を擧げて説いた。と同時に、彼れがお天氣屋であること、そして英國の勞働黨が尚ほ自由主義との妥協を歩みつゝあることを明らかにした。

それから一ケ月ばかり後のことであつた。英國の勞働黨はそのブライトンの會議で、ヘインドマン一派の社會民主聯盟の提議に從つて、勞働黨は將來他の政黨（ブルヂョア黨）とは提携しない、といふ決議を通過した。私はその席には居合せなかつたが、ヘンダスンはその決議に反對はしなかつた。從つてこゝにヘンダスンは二人になつた。先きのヘンダスンが勝つか、後のヘンダスンが勝つか。それはたゞ近き未來の謎として殘すのほかはないであらう。

私は英國の勞働運動の指導者のことを思ふたびに、常にクラインスの言葉を思ふ、勞働運動の指導者とは、指導するのでなくて、服從するのであると。そして私は今日の英國の勞働運動は、彼等の指導者の『服從』をいよ〳〵必要としつゝあるかのように思ふ。

八

私たちの話しは、議會主義對直接行動の問題へと移つた。彼れは無論熱心なる議會主義の辯護者であつた。だが指導するのでなくて『服從』するのは英國勞働運動指導者の最高の道徳であつた。彼れの議會主義は、最早や昔日の政治的議會萬能主義ではなしに、ウエストミンスタアの議會とともに、この國の勞働者の築き上げた大組織を憲法上の機關として、こゝにウエストミンスタアと同一條件のうへに、『産業議會』を創設することが、遲かれ早かれ、必要であるといふ。政治的及産業的の、二重議會主義が、今日のヘンダスンの議會主義であつた。然り、この勞働貴族もまたギルド社會主義の影響のもとに立つてゐることを知るのである。で私は『あなたはギルド社會主義を信ず

るか？』と問ふて見た。『必ずしもそうでない（ナフト・ネツセサリー）』と、彼れは曖昧なことを答へた。

私は話を英國勞働運動の傾向へと進めた。そしてコムミユニストの勢力についての、私の見聞を話してから、ヘンダスンの考を聞いて見た。彼れの答へは次の數言に要約することができる『われ〱は曾つてサンヂカリズムの狂熱時代を經驗した。しかしそれは一時の波として去つた。今日は共産主義の聲を到るところに聞くにしても、その實勢力は微々たるものである』と。彼れはコムミユニストの勢力を、たゞその黨員の數の基礎によつてのみ計算してゐたことが分つた。

九

私たちは最後に日英同盟のことについて話した。ヘンダスンは、私が日本人であるところから、日本に對する批評を躊躇してゐるように見えた。そしてまた成るべく彼れが日本に好意をもつてゐるといふことを、私の頭に印象させたいといふような態度を示した。しかし私は日本の政治の現狀について、並に日英同盟と國際聯盟の關係、それから日英同盟の必要が今日どこにあるのか？といふような數點から私の考を述べた。『勞働黨は必ずしも』といつて、ヘンダスンはこゝで再び『必しも』といふ曖昧語を挾むでから、『勞働黨では必ずしも日英同盟に反對はしないが、しかしこうした同盟は決して望ましいことではない』と。尙ほこの國の勞働階級が、日英同盟を如何に考へてゐるかの、匂ひだけを示した。

この國の勞働運動者のうちで、私が日英同盟について話した他の一人は、チヨン・バアンスであつた。彼れは久しくアスキス內閣の一閣員であつたが、日英同盟の大反對者であることを彼は知つた。

十

その友を見ることによつてその人を知ることができるとしたならば、ヘンダスンが私のために書いてくれた紹介狀は決して無意味なものではなかつた。彼れが私に紹介してくれた人々の顏觸れは、獨逸人ではオツトウ・ウエルス、ベルンシタイン、ヘルマン・ミユーラーの三人、墺國ではアドラー（前首相）オツトー・バウアーの二人、佛蘭西ではルノウデル、チユウオウ、ボアソンの三人がこれであつた。

自叙傳（二）

大杉榮

一

焼け出されの僕等は、翌日の夕方、やはり軍人仲間の大立目と云ふ家に同居する事になつた。練兵場に沿ふた、小學校の裏の家だつた。

そこにも子供が六七人ゐた。其の一番上のが明と云つて、學校も年も僕より二年上だつた。僕は其の明の少しぼんやりなのをふだんから輕蔑してゐた。そして引越し早々喧嘩を始めて、其の翌日、家の前の溝の中に叩きこんで了つた。

明は泥だらけになつて泣いて歸つた。そして其のお母さんから、「年上のくせに負けて泣く奴があるか」と叱られて、着物を着かへさせられる前に二つ三つ頬をなぐられた。

母は珍らしく大して僕を叱りもせずに、すぐ何處かへ出かけて行つた。そして其の翌日の朝早く、八軒町裏と云ふ町の、小學校の或る女の先生の家に引越した。玄關とも入れて三間ばかりの家の六疊の座敷を借りたのだ。先生は一人で其の次ぎの間にゐた。

「お前が喧嘩なんぞするもんだから……」

母はかう云つてちよつと僕をにらみながら、こんどは何にか荷物を片つけてゐる女中の方に向いて、

「ほんとうに此の子が少し負けてくれゝばいゝんだがね……

……」

と眉をしかめて見せながら、それでも

『こんどは相手が先生なんだから…………」

と笑つてゐた。

半月程其の家にゐるうちに、四五軒先きの小さな家があいて、そこへ引越した。

大きな一廓の中に、三つ建物があつて、其の一つが二軒長屋になつてゐた。其の一軒に横井と云ふ多分軍曹がゐて、もう一軒の方に僕等が住んだのだ。一番大きな建物には石川と云ふ少佐の家が在つた。其の家は、ほかの二つの建物とは裏合せになつて、特に塀で區劃されて、八軒町と云ふ町の方に向いてゐた。もう一つの僕等の方と隣りの建物には、山形と云ふやはり少佐か大尉かの家がゐた。僕の父も其頃は戰地で大尉になつてゐた。

山形の家には僕よりも二つ三つ上のを頭に四五人男の子がゐた。其の一番上の太郎と云ふのは、會津の中學校にはいつてゐて、滅多に家には歸らなかつた。其の次ぎの次郎がちやうどいゝ僕の友達だつた。石川の家にも男の子が二人ゐた。其の上の四郎と云ふのは山形の一番上のと同じ年恰好だつた。横井の家にも僕と同じ年頃の男の子が一人ゐた。それ〳〵もう一人、石川の家の筋向ひの、大久保と云ふ大尉の家の子供と、それだけがすぐに友達になつて了つた。尤も横井の『黄疸』だけは僕のほかの誰れも相手にしなかつた。そして其の僕もいぢめる事のほかには相手にしなかつたが。

しかし皆んなはあまり仲のいゝ友達ではなかつた。喧嘩はしなかつたが、お互に輕蔑し合つてゐた。石川と大久保とは古くから向ひ合つて住んでゐて仲が善かつた。僕は其の二人のレファインされたお坊ちやんらしさが氣にくはなかつた。二人は僕の野生的なのを馬鹿にしてゐたやうだつた。山形の次郎もお坊ちやんだつた。が、彼れは長い間町の方に住んでゐて、町の小學校に通つてゐたところから、石川や大久保とは違つたレファインメントを持つてゐた。從つて其の二人とほんとうに親しむ事は出來なかつた。僕は其の山形の中にも多分の野獸性が潜ん

でゐるのを見てゐた。しかし其の町人らしいレファインさは堪らなくいやだつた。彼れは多くは其の弟を相手に遊んでゐた。僕は大がい横井の『黄疸』をいぢめて暮らしてゐた。營養不良らしい其の黄色な顔から、僕等は彼れをさう呼んでゐたのだ。横井は其の妹の、やはり痩せた黄色い顔をしたのと、さびしさうに遊んでゐた。

お互の母同士の間にも親しい交際はまるでなかつた。

其の山形の家からお化が出た。

夜なかに、臺所で、マッチを磨る音がする。竈の火の燃える音がする。まな板の上で何にかを切る音がする。足音がする。戸棚を開ける音がする。茶碗の音がする。話し聲がする。さうした騒ぎが一時間も續くのだ。

或る晩、山形の『伯母さん』と云ふのが、便所へ行つた歸りに、手を洗はうと思つて雨戸を開けた。まんまるい大きい月が庭の松の木の間に引つ懸つてゐるやうに見えた。庭は其の月あかりで晝のやうに明るかつた。伯母さんは手洗鉢の方へ手をやつた。鉢の中の水にもまんまるい月が映つてゐた。が、其の水を汲まうとすると、急にバラ〳〵と大粒の雨が降つて來た。可笑しいなと思つて顔をあげると、雨も何んにも降つてゐないで松の木の間にはやはりまんまるい月があか〳〵と光つてゐた。伯母さんは再び手洗鉢の方へ手をやつた。すると、急に又、バラ〳〵と降つて來た。伯母さんは恐ろしくなつて、其儘、寢床へ逃げて歸つた。

翌晩伯母さんは又夜遲く目がさめた。そして又便所へ行きかけた。障子をあけた拍子に伯母さんの足もとに、何んだか重さうなものがバタンと落ちた音がして、それが向ふの方へころ〳〵と轉がつて行つた。伯母さんは氣味惡るながら、暗をすかして其の轉がつて行くのを見てゐると、それが眞暗な中にはつきりと大きな人の首が見えた。伯母さんは其儘キャッと叫んでそこに倒れて了つた。

それから二日目か三日目かの晩に、伯母さんは、こんどは大入道が突つ立つてゐるのを廊下で見た。

山形家は大騒ぎになつた。もとゐた家の近所の、町の若衆が

四五人泊りに來た。皆んなは樫の棒を一本づゝ横に置いて夜ぢう飲みあかした。それで二晩三晩はお化が出なかつた。が、其の若衆連が歸ると、すぐ又お化が出た。

そんな事が幾度も繰返されてゐるうちに、最後に、山形のお母さんがふだんから信心してゐる或る坊さんが祈禱に來た。そして其の坊さんは幾晩か泊つて行つたやうだつた。

其の祈禱のおかげでお化が消えてなくなつたかどうかは今よく覺えてゐない。しかし此の坊さんと云ふのがどうもくせ者だつたやうに思はれる。

石川や大久保の家では此のお化の話をてんで相手にしなかつた。そしてそれを、要するに其の坊さんを泊りこませたい、何等かの策略のやうにうはさしてゐた。山形のお母さんと云ふのはちよつと意氣なところのある人だつた。

それから、やはり其頃の事だが、戰勝の祈禱と各自の夫の無事を希ふ祈禱との、夫人連の會があつた。其の祈禱にはやはり今こゝに問題になつてゐる坊さんが出たのだつた。そして其の席上で、どこかの奥さんが、其の坊さんの肩にしがみついたとかどうとか云ふ話しもあつた。又、其の坊さんのお寺と云ふのは、新發田から三里ばかりある菅谷と云ふ山の中にあるのだが、そこまでわざ〳〵お參りに行つた奥さんもあつた、と云ふやうな話しもあつた。

が、此のお化は僕の家にもたつた一度出た。母は何にかの病氣で一週間ほど何處かの溫泉へ行つてゐた。其の留守の或る晩に、僕のすぐの妹と女中とが夜なかにふと目がさめてどうしても眠られずにゐる間に、臺所の方で例のカタ〳〵コト〳〵が始まつた。二人は物も云はずに慄えてゐた。が、それと同時に、横井の家の小さな飼犬が盛んに吠え出した。そして僅か二三分の間にお化は逃げ出して了つた。

しかし妹等と隣りの室に寢てゐた僕は何んにも知らずに眠つてゐた。そして翌日其の話しをされた時にも『馬鹿な』と云つて笑つてゐた。が、女中は恐いのと心配なのとで、母に電報を打つてすぐ歸つて貰つた。母は『お母さんとお兄さんとがゐれば大丈夫だ』と云つて皆んなを慰めてゐた。そして實際母は何んにも心配してゐるやうに見えなかつた。

其後四五年して、名古屋の幼年學校で山形の太郎と會つた時自分は此の耳で其の音を聞いたんだからどうしてもあのお化を信ずると云つてゐた。山形は僕よりも二年前に幼年學校にはいつてゐたのだ。

お化は又戰死した軍人の家にも出た。

或る若い細君が、夜なかにふと自分の名を呼ばれたやうな氣がして、目をあけた。すと其の枕もとに、血だらけになつた夫が立つてゐた。

そして其の細君は、翌朝、夫の名譽の戰死の電報を受けとつた。

二

二三ヶ月其の家にゐたあとで、二軒町と云ふ隣町の、高等小學校のすぐ前に引越した。そして、そこで始めて、十の年の暮れに、僕は性の遊びを覺えた。

同じ焼け出されの軍人の家に川村と云ふのがあつた。其のお母さんと娘とがすぐ近所に間借りをしてゐた。母とそのお母さんとは兄弟のやうに親しくしてゐた。僕も其のお母さんは大好きだつた。が、それよりも僕は、其の娘のお花さんと云ふのがもつと大好きだつた。

お花さんは僕とおない年か、或は一つ位年下だつた。殆んど毎日僕の家に遊びに來た。そして大抵は、妹等と遊ばずに、僕とばかり遊んでゐた。

皆んなで一緒に遊ぶ時には、よく皆んなが炬燵にあたつて、花がるたかトランプをして遊んだ。そんな時にはお花さんはきつと僕のそばに座を占めた。お花さんの手と僕の手とは、折さえあれば、炬燵の中でしつかりと握られてゐた。或は窃つとお互の指先きでふざけ合つてゐた。そして二人で、お互にいゝ氣持になつて、知らん間にそれをほんとうの×××びに使つてゐた。

が、お花さんも僕も、それだけの事では滿足が出來なかつた。二人は、二階の僕の室で、よく二時間も三時間も暮らした。そしてそこでは、誰れに憚る事もなく、大人のやうな事をして遊んでゐた。

其頃僕にはもう一人の女の友達があつた。それは、やはり近所に住んでゐた、千田と云ふ軍人の娘だつた。

或日僕は、どんないたづらをしたのか忘れたが、母に『あやまれ』と云つて迫られた。が、迫られゝば迫られるほど、益々あやまる事が出來なくなつた。

夕飯が濟んでから、母は『もうこんな強情な子の世話は出來ないから、東京の山田の伯母さんのところへ行つて了ふ』と云つて、女中や子供等に皆んなに着物を着かへさして、小さな行李を一つ持つて皆んなで何處かへ出かけて行つた。僕は東京へ行くと云ふのは嘘だらうと思つたが、其のやりかたが大げさなので、實際何處かへ行つて了ふのぢやあるまいかと心細くなつた。しかし、何んだつてあやまるものかと思ひながら、仕方なしに床を敷いて寢てゐた。

二三時間して、玄關へどや／＼と大勢はいつて來る聲がした。母を始め出て行つた皆んなと、千田のお母さんと娘の禮ちやんとが來たのだ。

『伯母さんがあやまつてあげるから、もう決してしないつて仰いね。』

千田のお母さんは僕の枕もとに來て切りに僕を說いた。が、それが母と相談の上だと思ふと、猶僕はあやまりたくなくなつた。

『さまあ見ろ。とう／＼皆んな歸つて來たぢやないか』

僕は竊かにさう思ひながら、默つて布團を頭からかぶつてゐた。

『あの通り強情なんですからね…………』

母はさう云ひながら、又何にか嚇かす方法を相談してゐるやうだつた。

『あなたも又いゝ加減に馬鹿はお止しなさいよ。』

千田のお母さんは母をたしなめて、此のまま默つて寢かして置くようにと勸めてゐた。

其の間に禮ちやんが僕のそばへやつて來た。そして竊つと其の手を布團の中に入れて僕の手を握つた。

『ね、榮さん、わたしがあやまつてあげるわね。いゝでせう、

もう決してしないから勘辨して下さいつてね。わたしが代りにあやまつてあげるわ。ね、いゝでせう、もうあやまるわね。』

禮ちやんは布團をまくつて、ぢつと僕の顏を見ながら、『ね、ね』と幾度も繰返して云つた。僕の堅くなつてゐた胸が、それでだんだん和らいで行つた。そしてとう〳〵僕は默つてうなづいて了つた。

お花さんは町の方の小學校に通つてゐた。禮ちやんは僕よりも一年下の級だつた。そして光子さんは僕と同じ級だつた。

禮ちやんの級では、禮ちやんが一番評判の美人だつた。學科の方でもやはり一番だつた。光子さんの級では、光子さんが一番出來がよかつた。しかし綺麗と云ふ點の評判では、有力な一人の競爭者を持つてゐた。それは絹川玉子さんと云つた。

玉子さんは休職軍人の娘だつた。まる顏の、頰の豐かな、目の小さくまるい、可愛らしい子だつた。しかし僕は、北の何處かしら高慢ちきなのが、氣に食はなかつた。着物もいつも綺麗なのを着てゐた。そして妙にそり返つて、ゆつたりと足を運んで歩いてゐた。今考へても、ちよつとから、小さな公爵夫人と云ふやうな氣がする。

光子さんは衞戍病院の極く下級な藥劑師か何にかの娘だつた。彼女の着物はいつも垢じみてゐた。細面で、頰はこけてゐた。そして、玉子さんのやうに色つやのいゝ赤味ではなく、何んだかから下品な赤味を帶びてゐた。目は細く切れてゐた。

或日僕は玉子さんを道に要して通せんぼをした。彼女は何んにも云はずに、たゞ頰を脹らして、ぢつと僕をにらめてゐた。僕はかうした彼女の態度が大嫌ひだつたのだ、それが若し光子さんであれば、彼女はきつと『いやよ』とか何んとか叫んで、僕の手を押しのけて行かうとするのだ。そしてそれを望みで僕はよく彼女を通せんぼした。

美少年の石川や大久保は玉子さんびいきだつた。それで僕は猶更玉子さんを嫌つて光子さんびいきになつた。

二軒町の北の家の隣りに、吉田と云ふ、近村のちよつとした金持が住んでゐた。

僕はそこのちようど僕と同じ年頃の男の子と友達になつた。が、直ぐに僕は、其の男の子と遊ぶのをよして、其のお母さんと遊ぶようになつた。

　此の伯母さんは、火事で火の子をかぶつたのだと云つて、髪を短く切つてゐた。どちらかの眉の上に大きな疣のやうなほくろのある、餘り綺麗な人ではなかつた。

　伯母さんは其の子供と僕とにちよい〱英語や數學を敎へてくれた。そしていつも僕が覺えがいゝと云つては、其の御ほうびに、僕をしつかりと抱きかゝえて頰ずりをしてくれた。僕は其の御ほうびが嬉しくて堪らなかつた。

『私はね、こんな家へお嫁に來るんぢやなかつたけど、だまされて來たの、でも、今に又こんな家は出て行くわ。』

　伯母さんは其の子供のゐない時に、いつもの御ほうびで僕を喜ばせながら、そんな話しまでして聞かした。そして實際、其後暫くして出て行つたらしかつた。

　此の家の裏は廣い田圃だつた。そして雨のしよぼ〱と降る晩には、遠くの向ふの方に、狐の嫁入りと云ふのが見えた。

　提灯のやうなあかりが、一つ二つ、三つ四つづゝ、あちこちに見えかくれする。始まつたな、と思つてゐると、それが一列に幾町もの間にパツと一時に燃えたり、又消えたりする。さうかと思ふと、こんどはそれが散り〱ばら〱になつて、遠くの田圃一面にちら〱きら〱する。

　吉田の伯母さんは、『これはきつと硫黄のせいよ』と云つて、或る晩僕等がまだ見た事のない燐マツチを持ち出して、雨にぬれた板塀に人の顏を描いて見せた。青白い、ぼやけた輪廓の、ぼつぼと燃えてゐるやうなお化がそこに現はれた。僕は面白半分、恐さ半分で、伯母さんの云ひなり次第に、指先きでお化の顏をいぢつて見た。するとこんどは僕の指先きから青白い光が出た。それを僕はお化の顏のまはりのあちこちに塗りつけた。そして其の塗りつけたあとが皆んな青白い光になつて了つた。

『よく恐がらずにやつたわね。又いろんな面白い事を敎へてあげませうね。』

　伯母さんは僕を抱きあげて、頰の熱くなるほど頰ずりをして

くれた。

此の狐の嫁入りに就いては、あとで、次ぎのやうな傳説をきいた、

昔し何んとか云ふ大名と何んとか云ふ大名とがそこで戰爭をした。何んとかの方は攻め手で彼んとかの方は防ぎ手だつた。防ぎ手はとても眞ともではかなはない事を知つて、或る謀りごとをめぐらした。それは此の邊が一面の沼地で、ちよつと見れば何んでもない水溜りのやうに見えるのだが、過まつてそこへ落ちこめばすくからだが見えなくなつて了ふほど深い泥の海のやうなものだつた。此の沼の中へ案内知らない敵を陷しこまうと云ふのだ。味方は皆な雪の上を歩く『かんじき』と云ふのをはいた。そしてわざと逃げて此の沼地の上を走つた。敵はそれを追つかけて來た。そして皆んな泥の中にはまつて姿が見えなくなつて了つた。其の亡靈があゝした人玉になつてまだ迷つてゐるのだと。

實際其の邊の田からは、其の頃でもまだ、よく人の骨や槍や刀や甲などが出て來た。

三

父が戰爭から歸つて來る少し前に、家は又片田町の、前のとは四五軒離れたところに引越した。そしてそこから僕は二年間高等小學校に通つた。

學校の出來はいつも善かつた。尋常小學校の一年から高等學校の二年まで、三番から下に落ちた事はなかつた。高等小學校では、町の方の尋常小學校から來た大澤と云ふのをどうしても拔く事が出來ずに、二年とも大澤が級長で僕と大久保とが副級長だつた。大久保は僕よりも一つ年が多く、大澤は二つ位多いやうだつた。

高等小學校にはいつてからは、學校のほかにも、英語や數學や漢文を教はりに私塾に通つた。英語は前にゐた片田町の家の隣りの速見と云ふ先生に就いた。どんな學歷の人か知らないがハイカラで道樂者のやうに見えた。生徒は朝から晩まで殆んど詰めきりで、いつも三四十人は缺かさなかつたやうだ。數學と漢文とは、其の英語の先生がゐなくなつてから教はり出したや

うに思ふが、最初の先生は名も顔も全く忘れて了つた。たゞ其の家が外ヶ輪と云ふ兵營の後ろの町にあつた事だけを覺えてゐる。

二度目の漢文の先生は監獄の看守だつた。脊の低い、青い顔をした、隨分みすぼらしい先生だつた。それに其の家も隨分みすぼらしい家だつた。先生は朝早く役所へ出かけるので、僕はいつもまだ暗いうちに先生の家へ行つた。生徒は僕ともで二三人だつた。

僕は冬、三尺も四尺も雪が積つて、まだ踏みかためられた道も何んにもないところを、凍えるやうになつて通つた。行くと、先生のお母さんが寒さうな風をして、小さな火鉢に粉炭を少し入れて來て、それをふう〳〵吹いて火をおこしてくれた。僕は先生の此のお母さんが可哀さうな氣がして、母に其の話をした。母はすぐに馬丁に炭を一俵持たしてやつた。先生のお母さんは涙を流してお禮を云つた。そして其の翌日からは大きな炭でカツカと火をおこしてくれた。

僕は此の先生に就いて、謂はゆる四書の論語と孟子と中庸と大學との素讀を終へた。

先生はまだ二十四五か、せい〳〵七八の年頃で、其の風采は少しもあがらなかつた。しかし其のお母さんは、風は汚なかつたが、何處かしらに品のある顔をしてゐた。が、さうした士族の落ちぶれたやうなのは、僕にはちつとも珍らしい事ではなかつた。

僕は其後幾度も囚人として監獄にはいつて、其度にいつも此の先生の事を思ひ出した。生徒の僕等に何にか物を云ふんでさえ少々はにかんでゐたやうな音なしい先生だ。きつと先生は囚人などゝは直接に交渉のない、內勤の方の何にかの事務を執つてゐたのに違ひない。とても囚人を叱る事の出來るやうな先生ではなかつた。

それから又、やはり其頃に、夜五六人の友人を家に集めて、輪講だの演說だの作文だのの會を開いた。すぐ一軒置いて隣りの西村の虎公だの、町の方の杉浦だの、前に其のお母さんの事を話した谷だのが、其の常連だつた。虎公と杉浦とは僕よりも

一年上の級だつたが、近所の柴山と云ふ老先生の私塾に通つてゐたので、虎公が杉浦を連れて來たのだつた。谷は僕よりも一年下だつた。

本讀みの僕はいつも皆んなの牛耳をとつてゐた。僕は友人の殆んど誰れよりも早くから『少年世界』を讀んでゐた。そして或る妙な本屋と知合になつて、そこからいろんな本を買つて來て讀んでゐた。修身の逸話を集めた飜譯物のやうなのも持つてゐた。又誰れも知らない四五冊續きの大きな作文の本も持つてゐた。さうした雜誌や書物から竊つて持つて來た僕の演說や作文は皆んなの喝采を呼ばずにはおかなかつた。

新發田から三四里西南の水原と云ふ町に、中村萬松堂と云ふ本屋があつた、そこの小僧だか番頭だかゞ、新發田に來て、或る裏長屋のやうなところに住んでゐた。それをどうして知つたのか、僕が多分殆んど最初のお客となつて、何にかの本を買ひに行つた。店も何んにもなくて、たゞ座敷の隅に數十冊の本を並べてあつただけだつた。しかし。それまで本屋と云ふものゝまるでなかつた、たゞ或る一軒の雜貨屋が教科書と文房具との店を兼ねてゐただけの新發田では、それでも十分豐富な本屋だつたのだ。僕はひまがあると其の本屋へ遊びに行つて、寢ころんでいろんな本を讀んで、何にか氣に入つたものがあると買つて來た。小使錢と云ふものを一文も貰はなかつた僕は、文房具でも本でも、要るだけのものは母に默つてゝも何處かの店から月末拂で持つて來る事が出來た。其の拂ひが少し重むと、母はこれからは愼めさう云ふやうにと注意はしたが、決して叱る事はなかつた。其後すぐ此の本屋は上町に店を持つて、やはり萬松堂と云つてゐた。そして僕は、それから三四年經つて新發田を去るまで、そこの店の一番いゝお客の一人だつた。

此の夏新發田へ行つた時、僕は第一番に尤も之れが宿のすぐ近くであつたからでもあるが、此の店を訪ねた。主人はやはり昔しの主人だつた。

『僕誰れだか分るかい？』

僕は默つて僕の顏を見つめてゐる主人に尋ねた。

『えゝ、確かに見覺えはあるんですけれど、どなたでしたかな。』

『もうちよつと二十年になるんだからね。分らんのも無理はあるまいが………』

『いや其のお蔭で思ひ出しました。これやほんとうに暫くめですよ。』

主人はそれで小僧にお茶を入れさした。そして僕は昔しの友人の行衛をいろ〳〵と此の主人から聞いた。新發田の中學校を出たものなら、主人は殆んど皆なよく知つてゐた。

友人等との會の話しが本屋の事にそれて了つた。もう一度話しをもとに戻さう。

此の會での一番大きな問題は、遼東半島の還附だつた。僕は『少年世界』の投書欄にあつた臥薪嘗膽論と云ふのを其儘演説した。皆んなはほんとうに涙を流して臥薪嘗膽を誓つた。

僕は皆んなに遼東半島還附の勅諭を暗誦するようにと提議した。そして僕は毎朝起きるとすぐそれを聲高く朗讀する事にきめてゐた。

虎公は高等小學校を終へるとすぐ北海道へ小僧にやられた。そして其の數年後に同く消息が絶えて了つた。谷は僕よりも一年遅れて幼年學校にはいつた。今は多分少佐位になつてゐるだらう。杉浦は、其の家が何をしてゐたのか當時は知らなかつたが、そして其の家の相應な構へなのにも係らず馬鹿にけちだつたところから後では高利貸かとも想像してゐたが、こんど行つて聞いて見ると新發田第一の大地主だつた。今は當主でぶら〳〵遊んでゐる。

『ほかではどうか知らないが、少なくとも此の越後では農民運動は決して起りませんよ。地主と小作人とが全く主從關係で、と云ふよりも寧ろ親子の關係で、地主は十分小作人の面倒を見てゐますからね。』

杉浦君は先日會つた時、室のあちこちにある神棚のあかりを手際よく靜かに團扇で消して、其の農民との關係を詳しく話してくれた。

四

そんな風で、其頃は隨分よく勉めもしたやうだが、しかし又隨分よく遊びもしたやうだ。

遊び場は、前の片田町にゐた時とは違つて、もうすぐ前の練兵場ではなくなつてゐた。前にも云つた大寶寺の射的場のバツタ狩り。其の後ろの丘の茸狩り。昔し殿様の遊び場であつた五十公野山の澤蟹狩り。又、昔し昔し、何んとか云ふ大名が城を圍まれて、水路を斷たれて、うんと貯てあつた米を馬の背中にざあ〳〵流して、敵に虚勢をはつて見せたと云ふ城あとの加治山。そこではまだ、頂上の狹い平地の赤土をちよつと掘ると、黒く焦げた燒米が出て來た。綺麗な冷たい水の加治川。それらは皆な、子供の足にはちようどいゝ遠足の一里前後のところにあつた。

或る夏の日、僕は虎公と一緒に加治山へ遊びに行つた。山百合が眞盛りだつた。

虎公は百合の根を堀りはじめた。虎公は其の家の裏に廣い畑があつて、よく其の年とつたお婆さんの手傳ひをしていろんなものを作つてゐたところから、そんな事に就いての知識を持つてゐたのだ。僕も一緒になつて堀りはじめた。收穫は大ぶ多かつた。が、僕はそれをすつかり虎公にやつて了つた。

『虎公のうちは貧乏なんだから…………』

僕はさうきめてゐたのだ。虎公は又釣が好きで、よく朝の三時頃から連れ出されたが、そんな時にもいつも僕は全收穫を虎公にやつてゐたのだ。

が、歸りがけに僕は、母が何にかちよつとした病氣で寢てゐる事を思ひ出した。そして百合の花をおみやげに持つて歸る事に氣がついた。僕はあちこち駈け廻つて、なるべく大きさうなそして幾つもの花のついてゐる、十幾本かを蒐めた。

二人とも大喜びて歸つた。そして僕はすぐに離れの母が寢てゐる室へ行つた。

『根の方を持つてくればいゝのにね。ほんとにお前は馬鹿だよ。そしていつも虎公にそんな目に遭つてゐるんだらう。』

母はもう大ぶしほれた花にはろくに目もくれずに、僕が虎公に百合の根をやつて了つた事を批難した。

僕はこれ程悲しかつた事はなかつた。涙も出ずに、たゞ胸がそく〳〵と迫つて來るやうな悲しさだ。そして僕は其のわけを

母に話す事も出來ずに、と云ふよりは寧ろ、そんな氣は少しも起らずに、しほ〳〵として自分の室に歸つた。

これが僕の、尤も其のわけさえ話せば母は自分の過言をあやまつて僕をほめてくれたに違ひないとは思ふものゝ、母に對するただ一つのしかし大きな悲みの思出だ。

けれども僕はやはり母は好きだつた。

其の夏の或る晩に、皆んなで座敷で凉んでゐた。ふと、次ぎの妹が庭先を見つめながら、

『あれえ』と叫び出した。皆んなはびつくりして庭の方を見た。暗い隅の方に何んだかぴか〳〵と光る大きな目玉のやうなものが一つ見えた。子供等は皆な『あら』と云つたまゝおびえて了つた。

母はすぐに立つて庭下駄をはいて下りて行つた。僕等は默つてそれを見送つてゐた。

『さあ、皆んなこゝへお出で。何んにも恐い事はありません。お化の正體はこんなものです。』

母は一人づゝそこへ呼んで、其の謂はゆるお化の正體を見せた。それは罐詰か何にかのブリキの罐が二つ轉がつてゐたのだつた。

けれども又、多分僕のいたづらが年と共に益々はげしくなつたせいであらうが、母の折檻も益々ひどくなつた。僕は母と女中と二人に、荒繩でぐる〳〵からだを卷きつけられて、さんざんに打たれた事を覺えてゐる。母の留守に女中の云ふ事を聞かなかつたと云ふのが其のもとだつたやうだ。母は大勢の子供をほつたらかして、半日も一日も、近所のやはり軍人仲間の島さんのところへ行つてよく遊んでゐた。そして子供等の上には、女中に絶對の權力を持たしてゐた。

喧嘩もよくした。

『自分の事ではまだ人にあやまつたやうな事はないんだが、此の子のためにだけはしよつ中あやまり通しですからね。』

母はよくから云つて、喧嘩の尻を持つて來られる愚痴をこぼ

こてゐた。そして僕は父や母がたゞあやまるだけでは濟まないやうな事までも幾度も仕出來かした。

高等二年の時だ。同じ級の、しかし多分違ふ組の、西川と云ふのと何にかの衝突をした。僕が甲組第一のあばれ者で、彼れは乙組第一のあばれ者であつたのだ。僕は其の日の歸り路があぶないと思つた。そして窃かに、習字の紙の壓へにする鐵の細長い『けさん』と云ふのを懐に入れて、何に食はん顔をして學校を出た。果して西川は僕のあとについて來た。彼れの家は僕の家とあべこべの方向にあつたのだ。そして彼れのあとには其の幕下の七八名がついてゐた。

僕はいつものやうに、衛戍病院の横から練兵場にはいつた。そしてそこへはいるとすぐ右の手を懐に入れて用心してゐた。今まで大ぶ離れてゐた皆んなが、がや〳〵云ひながらだん〳〵接近して來た。悪口の挑戰がはじまつた。なぐつちやへ、なぐつちやへ、などゝ云ふ聲も、すぐ後ろに聞えた。僕は誰れかゞ駈け寄つて來るのを感じた。僕はけさんを握つて、止まつて、後ろをふり返つた。西川が拳をあげて今にもなぐりかゝらうとしてゐたのだ。僕もいきなりけさんを振りあげた。西川はちよつと後ろを向いた。其の拍子に彼れの頭から血がほとばしり出るやうに出た。皆んなはびつくりして西川を取りまいた。僕は多少の心配はしながら、それでも意氣揚々と引きあげて歸つた。

西川の頭には其後二寸ばかりの大きな禿が出來てゐた。

それから餘程經つてからの事であるが、或日、父が聯隊から歸るとすぐ其の室に呼ばれた。父と母とが心配さうな顔つきをして向ひ合つてゐた。

『此頃お前學校で誰れかの肩をなぐるか蹴るかしやしないか。』

父が厳かに、しかし不安さうに、尋ね出した。父の顔には太い筋が見えてゐた。

父がこんな裁判をするのは始めての事だつた。で、僕も何にか非常な大事件のやうな氣がしたが、そんな覺えは少しもなかつた。僕は默つて考へてゐた。

『それでは何んとか云ふ子を知らないかい。』

と、こんどは母が尋ねた。

僕は其の子は知つてゐた。同じ級のたしか同じ組だつた。親しい友達でも何んでもないが、とにかく學校で知つてゐた。けれどもそれが此の妙な事件と何んの關係があるのか、僕には益々分らなくなつた。しかし知つてゐると云ふ事だけは答へた。

『其の子の肩をなぐるか蹴るかしやしないかい。』

母は僕の返事を待つて更にかう尋ねた。

『いゝえ。』

僕にはそれは益々覺えのない變な事だつた。

母はそれで漸く安心したやうになつて、事の顛末を詳しく話して聞かした。

八軒町に岡田と云ふ少佐がゐた。父が前に副官をしてゐた聯隊長だ。その馬丁か從卒かゞ門前を掃除してゐると、學校の子供が一人通りかゝつて、それがフラ〳〵右左によろめきながら幾度も前の溝の中に落ちかけた。妙だな、と思つて肩をつかまへて聞くと、

『それが君んとこの子供の仕業だと云ふんださうだ。それでとにかく其の家まで送り届けさして置いたさうだがね。醫者は頸の根のところは急所で、ちよつと針でさしても死ぬ位だが、これは治つても多分馬鹿になつて了ふだらう、と云つてゐたさうだ。』

と云ふ岡田少佐の話しだつたんださうだ。

さう云はれると僕は思ひ出した。其頃學校では毎日『隅取り』と云ふ遊びをしてゐた。それは雨天體操場の二つの隅に各々一隊づゝ陣取つて、其の陣屋を守つてゐるものを押しのけくゞり抜けて、それを占領する遊びだつた。が、普通尋常に押しのけくゞり抜けしてゐるんでは、いつ勝負がつくか知れない。それで先づ第一攻擊隊にそれをやらして置いて。敵の陣容の大ぶくづれかゝつた時に、一人か二人の勇者をそこへ飛びこませるのだつた。此の勇者等は、組打ちをしてゐる敵味方の肩の上から陣屋のなるべく奥へ飛びこんで、一擧にして其の一番奥の隅を占領するのだ。僕はいつも此の勇者の役目がお得意でゐた。其の飛びこむ時に、何んとか云ふ子の肩の急所を蹴つたのぢやあるまいかと。

僕は父と母とに其の話しをした。そして三人できつと其時の事だらうときめて了つた。

父と母とはすぐに見舞に行つた。が、向ふでは、それがひどく恐縮して、何んでもよい事にして了つた。

其後其子がどうなつたかよく覺えてゐないが、目つきがちよつと藪にらみのやうになつて、いつも何んにも云はずに默つてゐるのを見たやうにも思ふ。

（つゞく）



京の女

近松秋江

今更めかしく京を稱ふるは事古いが、自分のやうに始終京に行きつけてゐる者にでも、久しぶりに京の街に入つて、第一に氣の付くことは、京といふ處は、何といつても小綺麗なところであるといふことだ。

文化の進んだ都ほど美しい男女が多いといふことだ。今日の日本では、東京に最も美しい人間が多い筈である。また實際東京にそれが多い。そして自分はかう思ふ。以前は銀座を歩いてゐて、美しい都會人によく出會はしたものだが、今日は銀座通りよりもむしろ日本橋の白木屋前の十字街殊に白木屋の飾窓（ショウインドウ）から西川、伴傳などの大商店の打ちつゞいたあの飾窓（ショウインドウ）の前の人道に最も多く都會人らしく洗練された美しい男女を見るやうに思ふ。故に自分は此の頃では、最も都府らしい華美な、そして生活をエンジョイしたいやうな心地にならされるので、白木屋の入口のあたりを、廣い東京の中でも最も多く興味を持つ地點としてゐる。

東京のことをいふのではなかつた。が、丁度そんな意味でいへば、京都では四條の大橋の東西のあたりが京都の繁華と人間の美しさとを觀るに最も好いところである。假し京都は、近代の文化や流行では遙に東京に比して遲れてゐるとしても、東京が一朝一夕にして企て及ばない千有餘年の古い傳統的の都會美の洗練を繼承してゐる。

平安朝の文學を引證するまでもなく西鶴を見ても德川時代の京都の文化がいかに洗練の極爛熟頽廢してゐたかは十分に想像に浮ぶのであるが、五人女の中に、

年のほど三十四五と見えて、首筋立ちのび、目のはりりんとして額のはえ際自然とうるはしく、鼻おもふには、すこし高けれども、それも堪忍頃なり。下に白ぬめのひつかへし、中に淺黄ぬめのひつかへし、上に椛ぬめのひつかへし、本繪に書かせて、左の袖に吉田の法師が面影、ひとり燈のもとに、古き文など見てのもんだん。さりとは子細らしき物好。帯は敷瓦の折びろうど、御所かづきの取まはし、薄色の絹足袋、三筋緒の雪駄、音もせずにありきて、わざとならぬ腰のすはり、あの男めが果報と見る時、何か下々へ物をいふとて口をあきしに、下歯壹枚ぬけしに戀を覺ましぬ。

今の世の姿の關守は四條大橋の上に立つて、西へ東へと歩いてゆく人の容姿風俗を見てゐるに如くはない。

前文の西鶴が「わざとならぬ腰のすはり、あの男めが果報……」は少し猥褻であるが、自分が近い頃の夏の初め、四條大橋を歩いてゐて、向うから來る一人の女を見た時に、すぐさま聯想に浮んだのは、この西鶴の文章に書かれた京の女であつた。そして、それとゝもにその古い聯想は、又反射的に、その時見た女を、幾世紀の長い傳統的洗練なしにはあり得べからざる人間だと思はしめた。

その女は年の頃二十七八。水の垂れるやうな丸髷に結つた頭髪にはおくれ毛一と筋も見せず、紫紺の勝つた千すぢの結城紬の、仕立ておろしてまだ間のないのを、すらりとした身に纏ふて、帯はたしか薄い染出し模様のある羽二重に絽繻子の腹合はせ。梅雨の頃で加茂川には水嵩が増してゐたが、雨は晴れてゐたが、素足に高い足駄、華奢な蛇の目の傘を疊んで持つてゐた。丁度加茂川の岸に立つてゐる柳のやうに細い腰のあたり、きりゝと締ふた着物の裾前が、小いそぎに歩みを運ぶはづみに、心もち、からげたやうに高く引つ吊つて、そこから白い友禪縮緬の蹴出しがほのめいてゐる。見たところ祇園町か、でなければ先斗町か、いづれ町方の女房ではない、廓の女ではあるが、仲居かお茶屋のおかみであらう。歩く樣子に滴るやうな色氣があつた。

西鶴の同じ文章のつゞきに、美目容（みめかたち）は人並優れて美はしけれど、その日のたつきに追はれて諸事心にまかせず身に襤褸を纏ひ多くの人の花見に綺羅を飾りて行樂に、永き春の日の徜ほ[illegible]

るゝに早きを惜みて遅々として行く中に立ちまじりて、脇目も振らずひとり道を急ぐ女を叙して

……身に様子もつけず獨りたのみて行く

と、書いてゐるあたりの前後の文章は、自分には古くから、なんとなく春の悲哀といふ如きものを感ぜしめた文章で、いつまでも印象に殘つてゐるのであるが、今云つた四條大橋の上で見たその女の脇目も振らずに獨りを賴みて急ぎゆく風情が今でも尙ほ鮮かに記憶にのこつてゐる。

一體京都は、東京大阪などに比べて繁華の度が低く、人の往き交ひが少く、目に立ち易いせいも一つはあるだらうが、空氣がいかにも澄明なので、何によらず眼に映る物の印象が鮮かで美しく見えるのは爭はれない。まして西鶴の美しい、印象派風の文章を通して京都の山水や人の風俗を心に思ひ浮べる時は一入さういふ氣がせられる。

この間も友達が三四人偶然久し振りに顏が會つたので、場處を變へて夜遲くまで酒を酌み閑談に時を移した。折柄連日の秋霖に惱まされてゐるのであつたが、その夜はさまで雨も邪魔にはならず一層氣分を落着かせてよかつた。その中の二人は鎌倉に家があるので、どうしても十一時少し前までには停車場へ行かねばならぬといつて又しては氣にして懷中時計を取出して見てゐたが、秋の夜は長うして、淸興はいつまでもつゞいた。肴はもう鳥鍋の煮食ひがうまくなる時分、そのほか格別に燒松茸の木酢を註文せしに傍に青松葉を二三本あしらひ、さながら松の木山の香を食膳のうへに移したるはゆかし。それより話は又京都の今の季節にうつりゆきて、祇園も島原もない、今十月十一月の二た月ばかりの間は京都の生活そのものが好いといふことになつた。酒は甘美、松茸は好味、四圍の山々の眺めは飽かない。この秋は京都に行つて、久し振りにこれだけの顏を合はさうぢやないかといふことになつた。

古昔を通して今の世と思ひくらべ、往昔に變る桑田碧海の跡を偲ぶほど心を悲ましめるものはない。

京都に近い山城の伏見といふところは、今は酒造家など多く

あつて、可なり繁昌してゐる土地であるが、その昔豊太閤が桃山に邸第を築いてゐた頃を全盛の絶頂として、豊臣氏歿落の後の哀れに淋れたる有様は、西鶴の簡潔にして味ある筆によりて最もよく想察することができる。

都につゞく伏見の里、通り筋の外今の淋しさ。殊更秋は物哀れに、垣根に咲たる朝顔の茶の湯の沙汰も絶えて、手釣瓶の繩をたぐりて捨てかけたり。萩は見る人もなき野の錦。玉芙蓉の枝に泣く子の襁褓などほしける。むかしの春は日暮しの御門と眺めし所も、間引菜の畠となり。兩替町といひし所も、今は錢が百ありさうなる家もなく、三文が油一文づゝが鹽賣り、赤鰯さへ年越に見るばかり。京へ一里の道なれば女の足にても夕飯過より行歸る所を貧にからまれ、大かたの妻子は大佛の貌を見ぬ人ばかりなり。東に城跡の山深く、初茸狩りせし人も皆な遊興にはあらず、二條の八百屋よりたづねさせける。よろずの歯を取つて賣込むなど、身過ぎは草の種ぞかし。この數千軒何をかして世を渡るとも見えざりしに、朝夕の烟立てけるは、せめても大川の舟着にて、鑓から鞘へ身代の棹をとつて、手ぐらまぐらと年浪をわたりける。

これは、「本朝町人鑑」の中の「具足甲も質種といふ、異國の

モウパッサンやメリイメなどが何ほど鯱鉾立ちしても到底企て及ばないほどの名文の書き出しのところであるが、わづか、四百字詰の原稿紙にして六枚にも足らぬ此の一文を讀めば、唯り前掲の一節によつて、元和偃武以來やうやく五十年くらゐしか世を隔てぬ元祿時代に身を置いて、振り返へりて見たる伏見桃山あたりの榮華の廢址人の心を悲ましむるに餘りあるばかりでなく、當時既に兵馬倥偬の世を距ること遠くして、産業漸く興隆し、經濟狀態が發達して富は増加し、殊に京阪地方にありては、經濟的に無力なる武士よりも實力ある町人の威力が次第に生じつゝあつたことを看取するに十分である。次手に前文のあとを引いてみる。

ある夕暮に時雨して風横吹きに寒かりしに、四十あまりの男、笠の代りに圓座を被つぎ、身にひとつ着たる古布子を脱ぎて、やう〱一匁七分借りて、その錢細き帶に持添え、丸裸になり、下帶ばかりにて歸る。又七十あまりの婆杖にすがり庭に踊り込み、懐中より東山時代の蚊帳の釣手二た筋をさしける。之にも札書く事のむつかしやといひて錢十六文貸しければ、せめて二十と手を合はして斷りいへど、ならぬ

事と、合點せねば、是非も御座らぬと、その錢持ちながら、むな〳〵と身ぶるひして、そこへ轉けたが最期なり。貧者の質取るから、こんな事あれど、不憫とも思はず。又船の下る時たゝき牛蒡賣りに出ける男、關ケ原陣いひ立て、昔おどこの具足甲を置きにきたれば、亭主なか〳〵同心せず、そなたに似合はぬ物なり、取る事ならぬといふ。是は人に頼まれましてといへど、その吟味までもなし。相應の物を持つておじやれといふ。時に、門の戸明けて四方髪の男、にが〳〵しき貌さし出して、これ亭主。それは身どもが物じやが、いかにしても侍の手から具足は質に置かれぬ。儘に請人取るからは、たとへ女が置きに來るとも埒あけたがよい、殊にその甲は大江山にて正八幡宮の御光にくだされたる物、世の寶ありといふ。それならば、猶ほむつかしや、寺へ寄進によき貨物といふ。さても口惜や質種には木綿布子にも劣りけると悔みて持ちて歸りける。

此の「具足甲も質種」の一文は、「本朝町人鑑」の中に收められて、極意は質屋を渡世とする者の誡めに書いてゐるらしくはあるが、前に掲げた伏見の里の荒れたる叙景、後に引いた質屋の光景など、世智辛き世相を描破して眞に遺憾なき名文である。そしてそれとゝもに、傍ら周到なる讀者に氣の付くことはその頃世に落魄せる者が東山時代の蚊帳の釣り手や關ケ原陣に着たといふ具足甲に勿體をつけて金を借らうとしても二足三文の値打ちもなかつたといふことである。――尤も出所の明かな眞物ならば今日でも高價であるが。

西鶴が伏見の里の叙景によつて感得せらるごとく繁華な都會の場末ほど侘しい心地のせらるゝはない。自分は、さういふところを歩いてゐて、屢々胸のつかへることがある。田舍ならば又田舍で野趣の味ふべきものがあるが、田舍と都會との中間を成してゐる町はづれが侘しいのである。それに類する叙景の名文は西鶴の中に到る所に發見するが「萬の文反古」の中に、

「……我等も十七年のうちに二十三人女房持ち替え見申候に、みな思ひど御座候て暮し申候。然れ、少し御座候金銀は此親育事につかひ込み、只今は手と身ばかりに罷成候。もはや女房持ち申倍力もござなく候へば、竹田通りの町はづれなる伏見に近き裏屋住ひして菅笠の骨をこしらへて其日ぐらしに、さても死なれぬ浮世に御座候。…… ……
……（中略）京も田舍も住み憂きことすこしもかはらず、今の身に比べて昔の島原の住所（すみどころ）ましと存候。都ながら櫻も見ず、涼みにゆかず、秋

の榮耀榮華も從はず、雪のうちの蕪汁も知らず。やうやう鳥羽に歸る車の音をきゝて都かと思ふばかりに候。はる〴〵の京にのぼり、女房去つて身躰（しんだい）つぶし候、恥かしきことに候。

西鶴の書を讀むに。その榮耀榮華を書いたると、その骨を刻むごとき貧窶を書いたるとを撰ばず如何にも官能的（センシュアス）なるは何人も氣の付くことであるが、彼の貧苦といふは、殊に官能の自由なる欲望を滿たし得ぬことの不如意を嘲つ側面を叙してゐる。富むも貧しきも、西鶴に於ては物質の與ふる快樂とその缺乏とを痛切に意識するといふことである。是れひとり西鶴の場合に限らざることのやうであるが、西鶴の穿鋭なる筆力と、徹底せる人生觀とによつて一層それが引立つて見えるのである。西鶴は何よりも物から心を見てゐる。即ち事實についてゐる。形に先づ眞さを置いてゐる。なべての藝術家は尤もさうありたい。藝術家——殊に文學上の藝術家が論理を生命とする學者にあらずして世態人情を直覺する天分を餘計に持つてゐなければならぬのも其處にある。

前掲の文章を見ても、自分が前にいつた、町はづれの佗しい生所が想はれるとゝもに此處にも西鶴の、どこまでも感覺的な物の見方、物質から心に入つてゆく人生觀世界觀といふやうなものゝ一端がうかゞはれるのである。繰返へして云へば、物の悲しいのも哀れなのも先づ官能の不滿足から生じ、そして其等の佗しい感情も又その反對に陽氣な愉快なる感情も凡て物象の表に滲みついてゐるのである。

西鶴の貧窶に惱む感覺は實に骨を刺すごとく讀者の胸にひゞくとゝもに又彼れの飽食暖衣、榮耀榮華に醉生夢死する生活も、迫眞の筆力によりて肉の誘惑、物の形象、色彩さながらに讀者の五官を襲ふて來る感がある。

窮乏貧弱の反對に富裕豪奢、美を極め、善を盡した生活もまた西鶴は到る處に描いてゐるのであるが、誠に當時の服裝などについて見るも、その、眼を眩惑するばかりの装飾的（デコレーチブ）の意匠は今の世の趣味好みと比較して華美贅澤を極めたものであつた。

「俗つれづれ」の中に、

近くにあるほど珍類にして微塵も鮮なし。まだ十四五あるべし、自然

と玉を延べたる天底(うてんつけ)。下には鱗色に茶糸の紅綿つけ、中には瑠璃紺同じ紅綿の裏つけ、上に薄玉子色に同じ紅綿の裏つけ、肩より一尺ほど骨々と御簾の模様、唐織の裾、紅の房を下げ、さゝとは〱繰りたる物好、褄は乱桜、眞の男鹿もこれには焦れ鳴くべき、帯は黒き天鵝絨に大紋の石畳、後に廻はして御所結の端に、銀にて鶴菱の円紋、返へし様、裾先をかし揚げて帯の下に挟み、抱帯なしに細き忍帯を締め、素き合せ湯具の裾に鈴の鎖を掛け、惣浅黄金剛を踏きて擦足に歩み、しめつけ島田髷、前も後も長み同じことにして、中ほどに平元結を懸け、挿櫛白檀の木地に珊瑚樹の切入、梅の古木に氣を盡し、前髪に鯨の鬚の曲りたる物を入れ、髪の狂はぬやうに仕懸け、わづかに俯向き、首筋あり〱と見せ云々………

同じ「俗つれ〲」の他の小篇の中に又、

「年のほど十四か五にもせよ、いまだ若木の蕾、櫻色とは是ぞ、此丸顔の當世顔、鼻筋次第に高く、眼ざし細きもよくや、耳小からず長みあつて、首筋立ち伸び、落し懸けの大島田、忍元結の上に中疊み平元結、先は一文字にして、庵形の挿櫛に切金の折菊、伽羅の角櫛枝(かくかうがい)に青貝の折菊、水鹿子の下着、中紫鹿子、上には紅鹿子の兩面、二尺三寸の袖下、帯は樺繻子に小鳥づくしを縫ひに散らし、白糸の網を掛けて、吉彌仕立しの後結び、括目の角に鈴を掛けて、白綸子の二重湯具、紅裏の絹踏皮に河原の野郎紐を付け、水口の八兵衛ざしの木地のつゞら笠に、鼠地小模様ある菊の金入を裏打たせ、千筋紙撚(こより)の紙紐を付けて、後なる下女に持たせ、姿自慢の蹴出し歩行。」

この二個の文章は、女の容姿風俗を形容描寫するの文としてはあまりに說明が細か過ぎて、却つて技巧としては印象の鮮明を缺いてゐるが、元祿風俗の洒落れたる物好みをそのまゝに書き付けてゐるので、これによつて娘自慢の艶達の心づくしを想察することが出來る。白い合せ物の湯具の角に鈴の鎖を掛けて、姿自慢の蹴出し歩みして練り歩いてゐた當時の女風俗を今の世の流行と思ひくらべると、すべてが、隔世の感があるけれど、當時は當時なりに、いかに生活の様式を多趣多様にし、現世の生活を誘惑的な淫美なものにしようとして苦心してゐたかゞわかる。

しかし今日では京都に行つたとて決してさういふ淫美な誘惑的な女の容姿風俗が見られるわけではない。偶に冒頭に云つたやうな容姿の女を發見することがあるばかりであるが、それが又特に京都でなければ見られぬやうな氣がするのも西鶴などの

中に書かれてゐる如き長い間の傳統的洗練を經て來た都會趣味の所産だからであらう。

初冬に近い、ある秋晴和の日に京都の郊外の方に出て見たくなつた。嵐山も宇治も八瀬大原も高雄も春秋を知つてゐる。鷹ケ峰の光悅寺に行つてみようと思つて出掛けた。

圓山公園の見晴しに上つてあちこちに眼を放つと、北山から愛宕、西山にかけて遠く西北の空を劃つて美しい山脈の蜿蜒としてつゞいてゐる中に丁度その中間西北の一隅に圓かな形をした峰が突兀として聳へてゐるのが眼に入る。秋日和のよく晴れ渡つた日にはその峰の中腹に開展した、山畑や人家の點在してゐるのが見える。秋漸く闌けゆく頃野の面から凡ての農作物が收穫せられ取り去られて滿目蕭條としてゐる中に大根の葉の、ひとり霜にもめげず倍々青緑の色を誇つてゐるのは美しいものである。圓山公園の見晴しから鷹ケ峰の中腹に開展した臺地を遙かに望むと、折からの秋の陽を反射して白く光つてゐる人家の白壁の點綴してゐるところに鮮麗な青色を敷き展べてゐるのはその大根畑の色であつた。

鷹ケ峰は、本阿彌光悅が、三代將軍德川家光から賜はつた所領であつた。家光も「光悅は國の調法」と稱へられて、將軍に待遇を辱ふしたのであつたが、招きに應じて江戶に下ることを肯じなかつた。そして遙かに家光の下問に應答しつゝ日頃の溫蓄抱懷を述べて將軍より恩賜の鷹ケ峰の地に隱棲して終生その地を去らなかつた。

私は、京都の西北隅にある一條大宮で市街電車を下りて、そこから場末の街を通り拔け、緩に爪先上りの田舍道を日和下駄でこつ〳〵歩いて行つた。道の兩側に斷續して建つてゐる軒の低い陰氣な小家の格子の中では西陣などを織る機の音が聞えてゐたりする。こんないぶせき賤の家で織る西陣の織物が仲買の手に渡り問屋の手に渡り、京都の吳服屋はいふに及ばず、東京や大阪の三越や白木屋、高島屋などいふ大きな小賣商の棚に陳列せられて、都會の子女の眼を悅ばし、眩惑せしめるのである。

道は緩い勾配で少しづゝ上つてゆくに連れて大根畑があつた

り眞青な色の竹藪が續いてゐたりする。そして、ところ〳〵に秋陽を浴びて眞紅に輝いてゐる唐辛子の實の熟れてゐるのが大根の葉の青綠にまじつてゐる。これこそ萬綠叢中の紅一點であるなど思ひながら、私は、十一月の中ばとも思へぬくらゐ、そよとの風も立たないあまりの好い日和に、歩いてゐるうちに段々汗ばんで來たので夏外套を脫いで腕にかけ、額の汗を拭き〳〵歩いてゆく。太陽はやゝ西に廻はつて、左方に見える衣笠山の松の木林に赤々と照り榮えて、大空にはさながら瑠璃玉の如き光を漲してゐる。道は丁度織田信長を祀つてある建勳神社の岡の背後を上つて行くのである。もう其處まで來ると、いつの間にか土地はもう余程高みになつてゐて、振り顧つて京都の方を見ると、丁度そこから眞東にあたつて比叡が紫に霞んで、麓の八瀨の方に長く尾を曳いてゐる。如意嶽から南禪寺の山、華頂山、阿彌陀ケ峯と東山一帶の丘陵が遠く南に走つて、その手前には京都の街の瓦甍の波が煙霞の底に展開してゐる。道はそれから尙ほ遠かつた。そして兩側には相變らず綠の色の冴かな竹林と、青綠色の大根畑と、西陣を織る機の音のしてゐる民家とが斷れ〳〵に續いてゐた。そして道は一歩々々ごとに展望を大きくして來た。比叡はすぐ鼻の先きに立つてゐる。その麓につゞく裾野の村々が一目に見晴らされてゐる。一方行く手の左方に聳えてゐた鷹ケ峰は段々接近して來て、やがてその麓の近くまで來ると、そこらあたりには又人家少しづゝふえて、竹藪を背にして荒物を鬻ぐ鄙びた店屋があつて、郵便切手も賣つてゐたり、白壁の眼に着く寺の塀が道の脇につゞいてゐたりしてゐる。光悅の邸宅の跡と云はれてゐる廣い地面は空しく大根畑になつて、わづかに道傍に立つてゐる一基の石標がそれを語つてゐるばかりである。仰いで見ると丁度その西北を防いでやゝ圓錐形を成した圓かな鷹ケ峰が突兀として峙つてゐる。山の色はもう黄褐色にうら枯れ、松の常盤樹ばかりがひとり綠を傲つてゐる。その邊は又、人家がやゝ密集してゐて、軒先に折から盛りの菊の鉢植などを飾つて、紅殼格子の家の內で羽二重の生地を織つてゐる女が見えたりする。道はそんな山の中腹まで來ても坦々として何處までも通じてゐる。そこからまだ深く雲ケ畑の方に入つてゆくのである。裁付けの股引を穿いた老爺が天秤棒

の先きに鹽鮭だの、町で買ふて來たいろんな品物などを括り付けて擔いで山の方に歸つてゆくのも野趣が深い。京都の市街のそこから俯瞰すと更に一と處に引纏つて見えてゐる。思ふに任かすならば、京都の此のあたりに別莊を造つて住んでゐたら好からうなどゝ空想しながら歩いた。冬は寒さが厳しいかも知れぬが、地は高燥である。夏は街にゐるより遙かに凉しいであらう。光悦が、將軍家光から何にても望むところがあるならば、云へといはれて、多く望む所無之、鷹ケ峰の地を賜はりたいと云つて直ちに將軍の御朱印を下された。光悦はなるほど好い土地を見附けたものであると、私は思つた。

けれども、不斷東京に住居してゐる者から云へば京都の地が既に隠遁的で閑寂の觀がある。その京都の土地で、更に又こゝまで世を避けるには及ばないと、私は心の中で思ひ止まることにしたのであるが、私には金閣寺や銀閣寺のある邊よりも遙かに浮世はなれのしてゐる處と思つた。

そして光悦寺は、兩側に並ぶ人家の間に左側に一寸した山門があつて、それを入つて磴の上をつたふてゆくと些かな寺院の玄關が取付にある。三四日前に、毎年年に一回營まれる光悦忌があつたので、寺に所藏の光悦の遺品など、まだ壁間に懸け連ねたまゝに取り披いてあつたりしたので、私は寺僧に乞ふて其等を一順展覽さしてもらつた。平素光悦について研究してゐる所なく、彼に關する知識が甚だ乏しいので、惜しいから其等の遺品によつて啓發される所が鮮かつたのは、自分の咎であるが、秋寂びた境内の庭樹の中をやゝ暫くひとり逍遥しつゝその藝術の巨匠を想ひ、藝術の生命の不朽といふやうなことを考へた。

光悦の藝術品に對する鑑賞談は、此處に、今不用意に語ることは出來ないが、文明の華といへば、蓋し彼のごとき德川期文化の一方を代表する先驅者の随一人である。彼は書畫、刀劍、茶儀、陶器等あらゆる方面に行くところとして可ならざるはなき造形美術の巨人であり、趣味三昧の達人であつた。繪畫の方で彼と同じ傾向を代表する巨匠俵屋宗達、尾形光琳などは彼についいて元祿を中心とする德川文化の實に精髄であつた。元祿の文化については既に定論のあることであるが、尾形光琳の華麗

豪奢を極めた装飾的美術（デコレーチーブファインアート）と西鶴近松等の絢爛なる文學とを併せ觀る時、ある一時代の趣味好尙、氣分等は斯くまでに、互に相呼應してゐるものかと、寧ろ驚嘆されるばかりである。西鶴の――近松でもそのとほり――文章を讀んでゐると、その豪奢で、隆揚で、織細な辭藻配置の字面に自から光琳の華麗豪快なる繪畫が聯想に浮んで來るやうである。

今の時、人口を開けば直ちに文化生活を云ふ。文化生活頗る可なり。しかも文化の極致は藝術にある。法律制度のごときは共存共助の生活に一日だも缺くべからざるものであるが、要するに人間生活の最大多數に遍通する綱概を總べてゐるものに過ぎない。文化の極致は、所謂個々人の趣味思想感情に深く探り込み、洗練彫琢してゆく深度に懸り存するのである。明治大正には自から明治大正期を後世に語るべき特色ある文化が存在してゐる筈であるが、徳川期文明の精華たる、西鶴、近松、光悅、宗達、光琳等の名流巨匠の流風餘韻によつて歷々指示しうべきやうなる文明の特質を成してゐる物があるであらうか。

毎年今時分は秋霖が梅雨よりもひどいのであるが、今年の秋霖はまた格別ひどい。八月の末から降り出した雨が、偶々晴天を仰ぐことがあつても、それが三日と續かないで、すぐ又雨になる。しかし新聞の報道によれば、此の長い雨も、今年は別けて東海道から關東にかけて東京を中心とした地方が殊にひどいらしい。その爲に米價をはじめとし諸物價が昂騰しつゝある。此關東の暴風雨について、自分は又西鶴のある作を聯想する。

西鶴といへば世人は直ちに彼の好色物を思ひ浮べるが、事實は好色物よりもその他の短篇の方に優れた物が多いのである。「好色一代男」「好色二代男」「好色一代女」は、いづれも相應な長篇であつて、勿論文章も西鶴の精粹をこゝに傾け盡してゐる趣はあるが、往々故意に作爲してゐる跡が眼につき、ひとり好色といふ以外に、不自然なるが反感を惹き起さしめる。之に反して「胸算用」「永代藏」「町人鑑」「置土産」「萬の文反古」「廿不孝」等の多くの短篇には比較的誇張少く、人間を觀察するに故意に作爲する跡なく、人間心理の機微を穿ちて思はず瞠然たらしめ、或は覺えず肅然として自己を反省せしむろなど、

西鶴の眞骨頭は所謂好色物に非ずして、寧ろ之に在ることを思はしめる。

「本朝町人鑑」の中に、

「神武この方世の人艶女に戯れ、無明の眠の中にその家の亂るゝ事數を知らず、近年町人身體(しんだい)を疊み、分散にあへるは、好色買置き此の二つより。相銀仇銀年々相積りて、才覺の花もちり、紅葉の錦も紙子と成り、四季轉變の乞食に筋なし。是をおもふに、それ／＼の家業に油斷する事勿れ。」

と書き出し、攝津の國伊丹に諸白(もろはく)を造つて年久しく暮してゐる男があつたが、年々の出入りも少く、大した金持ちにもなれなかつた。するとその總領息子は親の古風に似ぬ當世氣質で、萬事に賢く、衣服などにも身を飾つて、女郎狂ひを覺えはじめ、伊丹から忍び駕籠をいそがせて京の島原に通ひ、次第に放蕩が募つて、少しの本手もつかひ減らして身上も危くなつた。二た親が歎げいて意見するけれど、なか／＼耳に入らない。ある時島原の吉野太夫に約束を付けて丸屋七左衛門方に揚げて置き、伊丹の里から、いつもと違ひ六枚肩の駕籠を急がせてのぼつた。やう／＼丹波口まで來ると丁度夜半の鐘が鳴つて、そのうち明朝の八つで門が明くと、昨夜から泊込んでゐた客はまた好い夢を果てぬうちに名殘り惜しさうに朱雀の細道を打ち連れて歸つてゆく。自分はまだ今來たばかり、太夫が待ち兼ねてゐた顏を見るにも、戀に深さが籠つてゐて嬉しく。それから、さあお行水よ白粥よと、あとから後から種々の御馳走が座敷に運ばれ。亭主は自分で置炬燵を仕掛け、女房はお氣晴らしにと、手づから濃い茶を立て進めるといふ待遇なし振り。引舟女郎は背後から側に寄つて髮を撫で付け、禿は足の裏を摩すつてくれる。太夫はしなやかな手を以つて自身で手の指を一つひとつ採みながら引張つてくれる。折から外の通りをそゝつてゆく投げ節の唄聲まで、こちの座敷の肴にし飲みかけ。この榮耀榮華は大名もならぬこと。なほ此の上の願ひには、我を知つたかと京中八十二人の太鼓末社、出口十七軒の茶屋までも、霜夜に裸體で起きて、旦那の御上京なされたと、嬉しがるほどの物を取らせたい。とかく欲しいものは金銀財寶。算用なしに使ひ捨てたならば女郎狂ひの遊興の面白さには限りはあるまい。目前の

極樂とは此の里のこと。寢間は成佛と、三つ重ねの絹蒲團の上に添枕しながら、吉野と二たロ三たロ物をいふか云はぬに、門の戸を紙立たましく叩き明けて、

「お宿より御狀がまゐりました。」と、隣の床の客へとゞける氣配がする。何事かと、いふ聲がして、そのいふのをこちらで聞いてゐると、

「これは目出度い。金銀掴み取りの内證の沙汰。江戸の手代より申越した關東筋大風吹て米俵に上りたれば、これより大阪に下りて、西國米大分買込み、その上りを受けたらば、太夫を根引にして我等が奥様にすることぞ。此度の仕合せを祈れ。夜が明け次第に此處を立つぞ。」

といひて、尚ほ今少しの間の別れを惜んで、潔く寢床を離れかねてゐる樣子である。

此方は伊丹の男、その事を聞耳立てゝゐたが、やう〳〵太夫と添ひて横になつたかならぬに、まだ帶をも解かず起き別れ、面白い最中を思ひ捨てゝ、太夫には、たゞ我が家に失念してゐた事があつたとばかり告げて、委細の首尾も構はず廓を立ち戻り、早駕籠を急がせて伏見の濱から飛脚船を仕立てさせて、その日の四つ前にもう大阪の北濱に着くが否や問屋と密かに商談を遂げて、米を大分買ひ込むと、早やその日の晝から、どん〳〵値が上がつて、只一時の間に三十八貫目といふ銀を儲けた。その思ひ入れに又此度は油を買込むと、それが又四十四貫目よりを受けて、丁銀で凡て八十二貫目といふ金を懷中にして涼しい顏で伊丹に歸り、親仁に小判の山を積んで見せると、世間に黄金の珍らしい時分のことゝてその悦びは一方でない。これぞ長者になる人の心掛けである、さるにても偶々逢ひにのぼつた太夫を思ひ捨て、身過ぎ大事にして思はぬ利を得たといふのがそもそも分限に成るべき例である。その後その男は身代倍々肥つて、これが後に池田伊丹の造り酒屋の榮えゆく先祖となつた。

自分は折りふし西鶴を取出し此の短篇を讀むごとに、隣の床に太夫と添寢してゐて、江戸の手代からの書狀を披いて見て、米の値の上がりを受けたらばお前を根引きするぞ。夜が明け次第にこゝを立つ、といひつゝ少しの間の別れを惜んでゐる心と、その溫柔を蹴した歡樂に浸らうとする面白い最中を、まだ帶をも解かぬに意馬心猿を叱咤して潔く起き上つて行く心との岐路に深い興味を持つのである。吾れも人も滔々たり。誰れかよくきぬ〳〵の離愁に惱まされざるものぞ。

（十月十日茶ケ崎にて）

惠まれたる性の爲に（三）

醫學博士　永井潜

男と云ふ河も、女と云ふ流も、其の最後の源に遡れば、夫々異なれる生殖腺の泉に歸着するのであるが、扨て其の泉から湧き出るホルモンは、男と女の體と心に夫々特色を與へた。吾等が、男と女とを比較して、其の差別を求むる場合に、直ちに目に着くのは、此の第二次乃至、第三次の性徵である。而して又男女の問題を、あらゆる方面から論及するに當つても、人は專ら此の附帶的性別にのみ、膠着して、進んで性別の根本義に觸れることを忘れる。吾等をして、先づ周ねく此の附帶性徵を通覽する所あらしめよ。其の見たる所のものを徐ろに性別の、そうして根本義と併せ考ふることによりて、兩性の問題に就きて、常に正しき道を步む所あらしめよ。

先づ男女の大さ、卽ち身長に就て見るに、云ふ迄もなく男子は、女子を凌駕して居る、是れ全く骨格が、一般に、男子に於ては太く、長く出來て居る。殊に運動器官たる手脚の骨が、男は女よりも著しく長大である。但し骨盤（卽ち腰の骨）並びに骨盤を、直接支へて居る大腿骨（股の骨）丈けは、女子が男子よりも割合に佳良なる發達を遂げて居る。身長が男子に於て大きいのは、男子に於ては、骨の成長發育が永く續くに反して、女子では其の發達が早く停止するからである。女子の生殖腺が完成する時期卽ち思春期に於ては、女子の身長は一時男子を凌ぐが、併し十四歲頃を過ぐると、男子の身長が著しく增大して、再び女子に優越し、其れ以後は男が女よりも常に長大である。卽ち女子の生長は男子に比して早く起り、又早く停止するものである。斯る關係は、獨り身長に於て見るのみでなく、あら

ゆる身心の方面に於て見らるゝ女子の特色であつて、斯の發育生長の早き停止は、女子の心身をして、兒童の心身を距ること尠なからしめ、女子をして長く兒童性を保有せしめ、兒童に近似せしめるが、之に反して男子に於ては、久しく發育生長を繼續するの故を以て、兒童との距離が、益々著しくなる。

婦人に於て、身長の發育が停止されると、身體が充實して、體內殊に皮下に、多くの脂肪が溜る。其の爲に豐潤軟柔となつて、所謂曲線美を呈する。此點に於ても亦、女子と兒童とは、類似して居る。蓋し脂肪が溜るのは、身體の新陳代謝に於て、分解的作用よりも、建設的作用の方が打ち勝つて、成分が有り剩る時に、起るものであるが。女子に於て生長が停止せられ、其の爲に費やさるべき勢力を節約して、體成分を充實する傾向が起るのは、思春期に入つて、今や將さに第二の我を體內に宿し、十分に之を養はんとするの準備に外ならぬのである。而して又た胎兒を容るべき骨盤が、女子に於て佳良の發育を遂げ、大きく廣く淺くなるのも、當然のことである。之に付いて、直接骨盤を支ふべき大腿骨が、著しく發達するのも怪むに足らない。斯くて女子の身體は腰圍が最も大きく、恰も三角形の廣き底部を下にして、之に脚を附けて据ゑ附けた樣なものである。隨つて、据かよく、安定で靜肅の感を與ふるに反して、男子の身體では、胸圍が最も大きく、恰も三角形を逆にした樣なもので、體成分の分解酸化によつて、エネルギーを發現せしむべく、其新陳代謝は寧ろ分解的であつて、不安定であり、動的である。是れ男子は生存の爲に自然と鬪ひ、活動を本態とするもので隨つて呼吸循環が旺盛に行はれなければならないから、肺や心臟がよく發達し、又之れ等の臟器を納めて居る胸廓が、大いのである。又た活動をなすべき手や脚の發達が、女子よりも優れて居る。然るに女子は、生殖の爲に自然に從ひ、靜かに自然と同化せんとするもので、第二の我を造り、之を養ふ爲に、新陳代謝は建設的に傾き、隨て榮養器官生殖器官を容れて居る腹部が、長大で、爲に胸をして長大ならしめる。而して活動器官たる手脚は割合に短かい。斯くて男は胸の人となり女は腹の人となるのである。

動的の男子と、靜的の女子とに於て、其の筋肉の解剖的、及

び生理的差別は、最も注目に値する。成年男子に在りては、筋肉が體重の四割二分を占むるに反して、女子では三割六分にしか當らない。然るに脂肪は男では平均體重の一割八分であるのに、女では二割八分になつて居る。又女子の筋肉は、男子の夫れに較べて、脂肪分や水分が多くあると云はれて居る。

握力計によつて、男女の力を比較して見ると勿論男が女よりも強い、併し十歳位迄は、男女共に大した相違はないが、夫れから後は、男が常に著しく女を凌駕して、筋力の最も旺盛な二〇——三〇歳では、男子は女子の二倍に相當する握力を示すものである。又男子は、一般に自己の體重の二倍の重さを運搬し得るも女子は、自己體重の半分の重しか運搬し得ないのである。婦人の筋肉の中殊に薄弱であるのは、脊部及び胸部の諸筋である。脊の筋の弱いことの爲に、婦人の姿勢は動もすれば崩れて、圓背や側屈等の脊柱の不正を喚び起す胸の筋肉の弱いことは、呼吸運動の不十分であることを、語るものである。之に反して、股の諸筋の力は、婦人が絶對的にも男子に勝つて居るもので、此の事は、女子に於て、骨盤及び大腿骨の發達の佳良であることゝ併せ考ふる時、頗る意味がある。婦人は、此の強筋力によつて貞操を守ることが出來る。

生存の爲に、自然を征服せんとして、活動を必要とする男子では、隨意運動を行ふべき骨格筋横紋筋が大切であるが、自然の生理作用に從つて生殖を專らにする女子では、榮養生殖に關係せる内臓の不隨意筋(平滑筋)が大切である。此のことは婦人の體育に關して十分に考慮せねばならぬ。横紋筋の發達は、必しも平滑筋の發達を伴ふものでない。加之餘りに筋肉萬能主義に傾いて、運動によつて骨格筋の甚だしい發達を來たすと、其の爲に屬々子宮壁其の他の平滑筋に横紋筋に多量の榮養を奪はるゝ爲に却つて疲弊萎縮する。西洋では運動で煉えた隆々たる筋肉を具へた婦人であつて、而かも子宮壁の平滑筋が薄弱で、難産をする樣な場合が報告されて居る。故に婦人の體育を施こす場合には、筋肉の發達に重を置き過ぎてはならぬ、宜しく婦人の體に於て本來薄弱である胸筋や、背筋の訓練に注意を拂ふて其の缺點を補ふべきである。

其の他運動の敏捷なることや、巧緻なる點に於ては、女子は

一般に男子に劣つて居る。但し疲勞に對する耐久力は女子は割合に、男子に勝れて居る、白耳義の女流生理學者として有名な、イオテーキヨー氏の報告によれば、筋力は男を一〇〇とする時、女は五七の割合であるが、疲勞に對する耐久力は男を一〇〇とする時、女は六四である。即ち腕力は男子の特色であり、耐久は女子の特色である、男の仕事は一時的に强い力を出すことであり、其の代りに疲れて長い休みを要求する、之に反して女子の得意とする所は、弱い力を絶え間なく働かして疲れないことである、一方が堤を決した洪水であるならば、一方は石をも穿つ雨滴れである。

『男は獵し漁しそうして家に寢轉ぶ』と濠州の土人は歌ふては云ふ。是は敢て例を遠に求めるに及ばない。房州あたりの漁村の生活を見ると、正に其の面影を止めて居る。男子は實際、生存の爲に自然と鬪ふべき男子の原始的の有の儘の生活は夫である。働く時にウンと力を勞する代りに、惰ける時には思ひ切り惰ける。之に反して、女子は内を守り、子供を育て、衣を紡ぎ、食物を調理し、種子を蒔き、器具を造り凡ての細々した仕事は皆其の手一つに集つて來る。是れ即ち婦人の筋力をして耐久性を帶ばしめた原因でなくてはならぬ。此の意味に於て、男子の生活は爭鬪であり、女子の生活は平和である。而して農業工業等人間としてのあらゆる文化生活の芽さしは、實に女子の手に培はれたのである。

然るに、人間が智慧の木實を味つて自然の樂園から追放されて以來、人間の生活は餘り露骨に、力萬能の時代を現出した、そうして婦人が退いて自然に從つて靜かに母の仕事をなしつゝあつた間に、男子は自然と鬪ふ爲に其の力を練り、其の智を鋭うして、終に婦人の手に芽ばた產業の果を奪い取つた。そうして彼は經濟上の優者として、婦人に屈從と隷屬とを强うるに至つた。印度でも希臘でも羅馬でも、最軍國主義を基礎とせる舊い文明は皆な夫れである。そうして『母』としての尊い婦人を閑却した爲に、何れも皆亡滅の深い谷底に陷つた。

男子の筋肉と婦人の筋肉との機能上の相違は、婦人勞働問題の八釜しい今日、又其の立場から愼重なる考慮を要すべきものである。智慧の結晶たる機械は確かに文化の尺度である、文化の

幼稚なる時代に於てこそ、疎大なる筋力が、産業の大部分を占有して居たのであるが文明が進むにつれて、筋力は常に機械に共の位置を譲つた。機械を使用することによつて、人間は單に筋力を賴むよりも。十數倍共の生産を高めることが出來た。玆に於てか産業に加へらるゝ人間の手は、其の疎大なる一時的の强力によるにあらずして、寧ろ持久的の美妙なる力によつて機械を調節するにあることが明かとなつた。斯くて輓近の産業は、敢て男子を待たずとも婦人の手によつて十分に支配せらるゝに至つた。加之機械の進步は生産に關して會社組織を産み、資本主義を發現するに及んで、富める者愈々富み、貧しき者益々貧しく、生活難の颶風は婦人を驅つて自から生存競爭の渦卷の中に投ぜしめた。そうして、舊い文明が曾て婦人の手から奪つた所の物を、新らしい文化が、再び婦人の手に返へさんとして居る。斯くして、生産に對する階級戰と共に、生産に對する兩性戰を喚び起した婦人勞働問題が夫れである。而して、婦人勞働問題は、正さしく婦人解放運動の兵糧方である。

男子が動的であり、婦人が靜的であることは、獨り骨格や筋肉のみでなく、他の多くの解剖的生理的事實から、立證することが出來る。先づ血液内にあつて酸素の攝取と、炭酸の排除に大切な働をする赤血球の數を見ると、兩性によつて差がある。學者によつて多少調査の成績が一致しないが、男の血球數は常に女よりも多くして、大體一立方粍中の赤血球の數は男五百萬で、女四百五十萬と注せられて居る。卽ち男の一〇〇に對して女は九〇を有するに過ぎぬ。更に又赤血球内にある大切なる成分たる血色素（ヘモグロビン）の分量を見るに男子では、平均血液重量の、一四・五%を占めて居るが、婦人では一三・三%に過ぎぬ。加之懷姙時には、血色素量は著しく減低して、九―一一%となる。是れ母の血液は胎盤を通じて、胎兒に、其の血色素を與へるからである。要するに婦人の血液は、男子よりも稀薄で、水分に富んで居る。隨つて其の比重も亦輕いのである。血液に於ける此の婦人の性徵は、月經時や、思春期に於て特に著明であつて、隨つて女子は、思春期に於て屢々萎黄病と名くる慢性貧血病に罹ることがある。

次に心臟の發育を見るに、幼時には男女共に略同大であるが、或は男兒が女兒に勝て居るが、併し、十二歳より十五歳に至る間は、女子の身體の發育が急速に行はれて、一般に男子を凌駕し、心臟も亦女兒の方が男兒よりも大きくなる。併し夫れ以後になると、男子の心臟が、再び女子に打ち勝つて來る。男では、初生兒から成人になる迄に、心臟が重さを十三倍するが、女では十一倍するのみである。又は心臟の肥大は、男子に於て多く、心臟の萎縮は女子に於て多く見られる。要するに、心臟の發達は、男子に於て女子よりも佳良である。女子の身長が早く增加を始め、早く其の發育を停止する樣に、女子の心臟も亦一時急速に發育するが、忽ち之を停止して仕舞ふものである。而して心臟の搏動する數を見ると、誰しも知る如く年齢によつて相違があるもので、小兒は大人よりも數多く、又は性別によつて違ふもので、女子は同年齢の男子よりも、脈の數が多い。是それは女子の心臟の性狀が小兒の夫れに近似して居ることを語るものである。

肺臟に於ても、亦女子に於て其の發育が早く終を告げることが分つた。殊に肺の呼吸機能に於て女子は、著しく男子に劣つて居る。肺に呼吸し得る極大の氣量、即ち所謂肺活量なるものを測つて見ると、日本人では男子が平均三〇一二立方糎であるに對して、女子は二二八〇立方糎である。佛蘭西人では男三九一二立方糎に對して、女二七四七立方糎となつて、何れも略男一〇〇に對して、女七〇と云ふ割合になる。又十二歳の男と女とでは、男の二〇五三立方糎に對して、女は一二九四立方糎と云はれて居る。

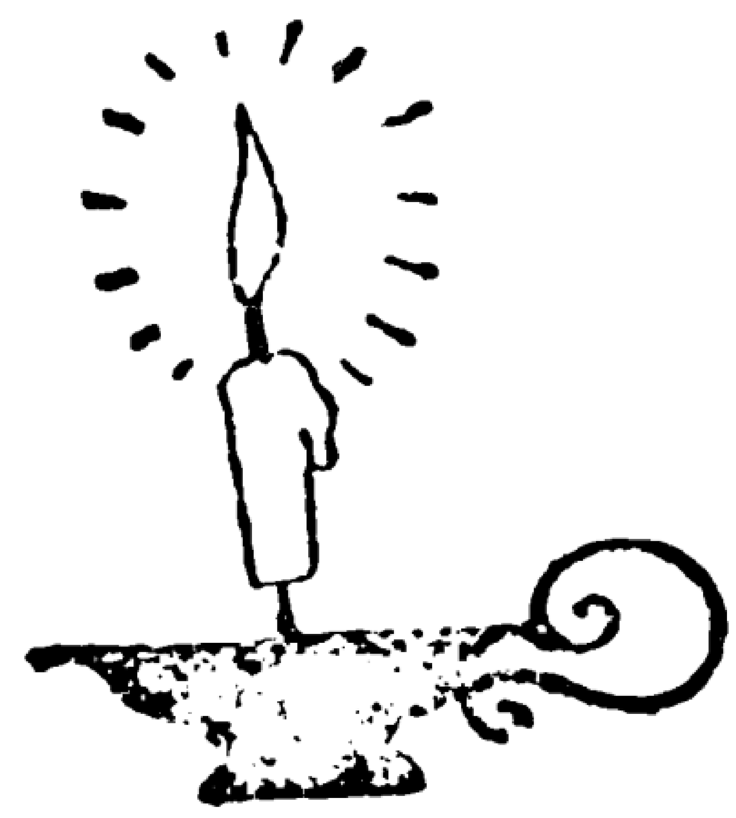
酸素を要求することも、婦人は男子よりも少なくて濟むので、隨つて同一の場所で窒息した場合でも、女の方は男よりも生き延びる數が割合に多い。絞殺による死刑囚でも男よりも女の方が活き延びる場合が屢々見られる。又た毎一時間の炭酸の排出量を見るに、十六－三〇歳では、男の一一・二瓦に對して女子は、六・四瓦と殆んど二倍になつて居る。

斯く活動の器官たる、心臟肺臟なる胸部の内臟は、男子が女子に優越して居るに反して、榮養の器官たる腹部の臟器は、一般に女子が男子を凌いで居る。最近ビルケー氏は、榮養に關し

て一新説を公にして居る。其の根抵とする所によれば從來の如く、單に體重を基礎として、食物の需用量を決定することは誤つて居る。何んとなれば、瘦せた榮養不良の人で、多量に食物を取るべき必要ある場合に、其の體重が輕いと云ふことから割り出されて、食物需用量は少なく見積られ、之に反して甚しく肥胖して居て、食物を制限することが健康上必要である場合にも、體重本位から計算すると、多量の食量を與へることになつて、恰度正反對の結果を齎すからである。そこでピルケー氏は、體重を目安とする代りに、榮養面積を標準として、食物の需用量を決定することにした。榮養面積とは、即ち消化吸收の本舞臺たる、腸管の全表面積を云ふのである。而して腸管の面積は、其の長さと幅さとの相乘積である。然る所、腸管の長さは、人間では坐高(背を眞直に伸ばす時、坐面から頭の頂きに至る迄の高さ、即ち胴と頭とを加へたる高さ)の十倍に相當するものであり、又腸管の幅さは、坐高の十分の一に相當するから、腸管の長さと幅さとの相乘積たる腸管の表面積は、坐高の二乘に相當することが、解剖的に示指されるゝに至つた。斯る立場から考へて見ると、子供や婦人に於て腸が長いことは、大に意味がある。即ち盛んに生長せねばならぬ子供と、第二の我を胎内に宿して、之を養はねばならぬ婦人とでは、共に腸が長くして榮養面積を廣うすることが出來て居るのである。實際又た胃の太さは、男女共に略同一である、隨て比較的には女子が大きい。腸管の長さを測つて見ると、女子の方が長い。消化の働は一般女子の方が旺盛で、饑を感ずること甚しく、屢々間食をする傾向がある。此の傾向は小兒に於ても亦見らるゝ所である。榮養作用と密接の關係を有する肝臓は、女子の方が男子よりも大きい。脾臓の如きは、殊に其の關係が顯著である。腎臓も亦女子の方が比較的に大きい。而かも新陳代謝の結果として、排洩せらるゝ尿の固有成分を見ると、女子の方が少ない。是れは女子は靜的で、エネルギーを外に現はすことが少ないから、體成分の分解も亦少なくて濟むからである。即ち男子の新陳代謝の特色は、分解的現勢であり、女子の特色は建設的潛勢力である。隨て男子は胸の人であり、女子は腹の人であるのである。而して、凡て是等の性別は、何れも一方が自己生存なの爲に飢

餓の爲に働くに反して、他方が專ら種族保續の爲に、戀愛の爲に活きて居るが故を以て、喚び起さるゝのである。

吾等は已に婦人と小兒との間に、幾多の近似點あることを觀た。胴の長いこと、手足の短いこと、隨つて身長の小さいこと、皮下に脂肪の餘計あること。筋肉骨格の薄弱なること、運動の拙劣なること、心臟が小さく且つ脈搏の多いこと、新陳代謝が寧ろ建設的に傾いて居て、榮養面積が廣く消化作用が旺盛で比較的多量の食物を要求すること、皆な此のことを立證する。其の外尚ほ女子と小兒との類似點は幾つもある。皮膚が軟柔であつても髮の少なきこと、身長の割合に頭が大きいこと、(成年男子の身長は頭の八倍に匹敵するが成年女子では頭の七倍にしか當らない) 又た頭蓋部と顏面部とを比較すると男子では頭骨の中顏面部が割合に廣く、腦髓を包んで居る頭蓋部は比較的狹く、其の比例は、十三と十一との割合であるに反して、女子では顏面部よりも寧ろ頭蓋部が廣いので、是れも亦女子と小兒との似よりを示すのである。男子で顏面部が廣くなるのは、主として下顎骨が甚しく大きくなる爲であるが、由來下顎骨は、物動が自己生存の爲食を求め敵と鬪ふ場合の唯一の武器であつて、隨つて動物に於ては其の發達が著しい。斯くて顏面部の廣いことは、男子をして獸性蠻性を發揮せしめ、強い意志と力との標徵たらしむるに反して、下顎骨が少なく顏面部の狹い婦人では。小兒と同じく優さし味を帶ばしめ、溫い感情と愛との標徵たらしむるのである。其の他男子に於ては喉頭が著しく發達して聲帶が長大となり其の振動數が少なく聲の調子が低くなるに反して婦人では喉頭が何時迄も小さく止まつて居て小供樣に高調の美聲を發することも、婦人をして愛の標的たらしむるに十分なる資格を具せしめる。更に轉じて疾病の關係を觀察しても、婦人と小兒とは相接近して居ることが分かる。糖尿病の如きに男子に多くして婦人に少ないが小兒も亦之を病むこと極めて稀である。慢性腎臟炎の如きは亦、同樣の關係を示すものである。然るに好んで一面婦人及小兒を冒して男子には尠ない病氣がある。猩紅熱の如き鵞口炎の如き「ペルペス」の如き心臟瓣帽瓣疾患の如き皆な夫れである。然り獨り斯る身體的生理的の關係のみならず、精神的關係に於ても婦人と小兒との間に幾多の近似點を示すことは心理學者の夙に道破せる所である。斯くて小兒と大人との中間に立つもの、此れ即ち婦人であると云ふことが出來る。 (未完)



赤ん坊の頬ぺた

賀川豊彦

絹のやうに柔かい、赤ん坊の頬ぺたに接吻する私は、甦り心を以つて、生命の清水に汲む。

凡ての人間の筋肉が硬ばつて、骨と肉との間にゆとりが無く、眼がうるみ、唇がたるむ時に人間は藝術品としては誠に價少なきものである。それ等の人々が、革命を企て、それ等の人々が陰謀を企てゝも少しも怖いものでは無い。火葬場の竈の中に入れられた屍が、いくら反逆を試みても何にならうか！

硬ばつた筋肉と、うるんだ眼の持主の革命にあまり信用を置く必要は無い。それ等の人々の革命はあまりに醜い。

私等は、美しい革命がみたい。富めるものを殺して凡てを貧しくし、帝王を殺して凡てを庶民にする代りに、貧しきものを富ませて、…………………、醜きものを高めて美しくするその革命を私はみたい。

街上に流す血の代りに、乙女の頬ぺたの皮膚の下に流れる美しい血の革命がみたい。凡ての革命を乙女の

革命であらせてくれ、硬ばつた筋肉の代りに赤ン坊の誕生を見る革命であらせてくれ！

穢き人は一切「約束の地」には這入られないのだ！

醜い姿を以つて、密と乳の流るゝ地を踏むことは許され無い。血で血を洗ふ革命は「次」の時代を織ぐにはあまりに醜い。美を織ぐものは若き生命である。嬰兒の赤き頬べたである。乙女である、母である。凡そ醜きものは「次」の世界に通ることは出來ぬ。内側から爆發するもの——生命の貢ぐものの外、何物も、次の世界に通ることは出來ぬ。そして、生命の貢ぐ、内側の捧げ物は凡て、美であり、華麗である。

乙女の肌は暴力革命の齎らしたものでは無い。私の跪拜する嬰兒の皮膚もそうである。凡て人間のあくせくした小刀細工で乙女の肌と、赤ん坊の頬べたに革命を與へ得ることは出來ない。内側から延び上れ！若き人々よ！　嬰兒は内側から成長する。乙女の皮膚も内側から美しくなる。パンは最初に消化されねばならぬ。凡てのものを先づ内側に吸收される。そして延び上れ！　延び上れ！　天に届くまでのび上れ！　空氣は地上五十三哩しか無くとも、空氣を越えて延び上れ。

醗酵は内側から醗酵する。パン種も、からし種もみな内側から生長する。延び上れ！　延び上れ！　凡て内側から生長するものは美しい。凡て美しいものは、内側から生長する。花も、鳥も、二八の乙女も、凡て内側から發生したものである。

花も、鳥も、二八の乙女も凡て之等のものゝ形を見せ無い貧民窟には、たゞ一つの花が咲く。それは赤ん坊である、赤坊の頬ぺたである。

私はなぜ、神が赤ん坊を、かく美しく造つたか、その理由を知らない。或は美しくなければ育ててくれる人が無いからであるかも知れない。美しくなければ、面倒臭い生殖の煩ひを取る人は無いのである。そしてまた美しく手際よくあらねば革命を助ける人もない。嬰兒殺しのやうに、おも湯と、コンデンス・ミルクで育てゝ善い革命なら誰れでもする。それは貰ひ兒殺しのやり方である。その兒等はみな干ぬけた干瓢のやうに、或はまた梅干の實のやうに生氣も何にもない赤ん坊の剝製が出來る。

貧しくても、自分の母は赤ん坊を美しく育てる。

赤ん坊は美しい。汚れた襤褸の中から赤ん坊は皇太子のやうな顏をして覗く。何と云ふ美しい顏であらう。何處を見て居るのであらうか？ あてども無く、眼を据えて天を見て居る。天の幻でも見て居るのだらうか——私達の筋の硬ばつた、唇の色の褪せた大人には見えない幻でも見て居るのだらう。何にも見て居らないのだらうか？ 眼を見張つて居て此世の不淨を何にも見ないのであれば猶幸福だ。嬰兒の心に映るには此世界はあまりに醜惡である。嬰兒の前に此世の芝居の幕を閉じよ。それは神聖な嬰兒の心を穢してはならぬ。

私は嬰兒を抱き上げる。絹のやうに美しい。眞綿のやうに柔かい。大理石の塑像のやうに華麗な藝術品を抱きしめる光榮を私は擔ふ。

私は赤ん坊の頬ぺたの上に現れてくる色々な表情に注意する。それは池の面をすかしてみて、天に飛んで居る雲の形を見るやうなものである。鱗雲が行く、入道雲が行く、氣流雲が行く、雨雲が行く。それらが凡て鏡のやうに澄んだ池の面に映つるやうに、赤ん坊の頬ぺたに凡ての形が映つて行く。親の嘆きがうつる、社會の不人情がうつる、戰爭がうつる、母の愛がうつる、子守のねんねこ唄がうつる、私の腕の抱き具合がうつる。

それ等の寫つた映像は凡て嬰兒の頬の上に沈澱する。そして嬰兒はそれを一々記憶しまたこれを次の時代の嬰兒に傳へて行く。我等の醜い顏をまた次の時代に傳へるものである。そう思へば怖ろしい氣がするよ。

聖き神殿としての嬰兒は、神が人間に示してくれた最も不思議な奇蹟である。それは成長する。それは啓示する。それは世界最大の藝術品である。

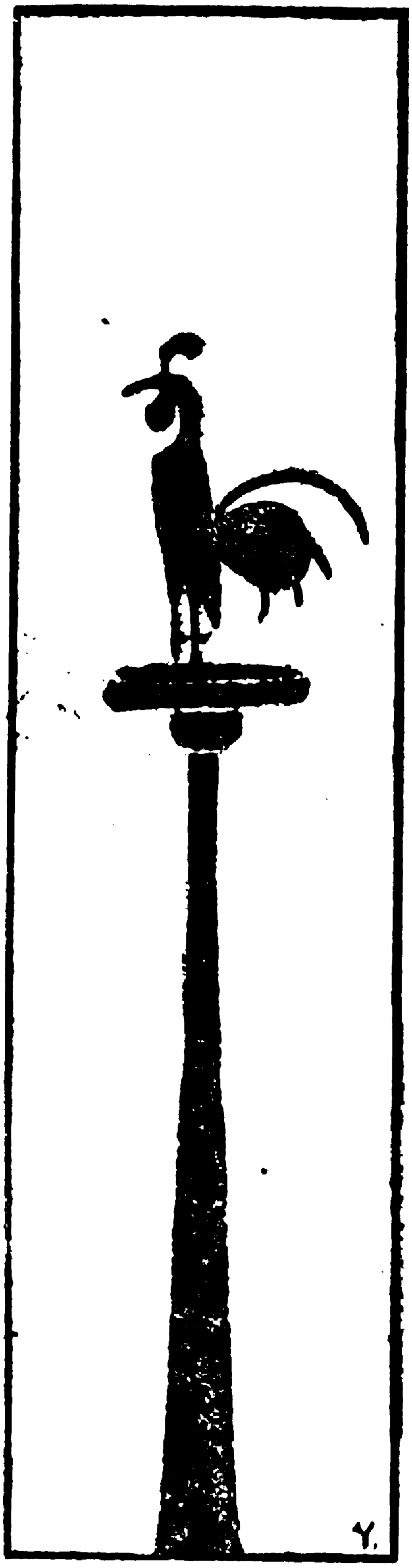
三つの寶を捧げて、嬰兒を跪拜せよ。嬰兒こそ、眞の革命者である。革命者は永遠に若い。星に導れて嬰兒に禮讚せよ。嬰兒こそ「次」の時代の世繼ぎである。父なるもの の親である。私は禮讚の心もて、嬰兒の頬ぺたに接吻する。

──一九二一・一〇・二一──

──中禪寺湖畔の冥想の午後──

スタイナッハ「若返り法」研究

醫學博士　榊保三郎



『青春及老衰に關する研究』といふ演題は、一九二二年十二月五日墺國首都ウヰンナ府の學士會館で、ウヰンナ大學生理學教授スタイナッハ氏が、過ぐる十數年、特に一九一〇年より後二ケ年間に於て、研究したる『老衰若返り』の可能なる事を述べた時の演題である。

自分は是からスタイナッハ氏の所謂、『若返り法』なるものを今少しく詳しく、また、出來る丈け明瞭に世間に紹介せんとする者であるが、其の此處に至つた動機を少しく辯明する必要が在ると思ふ。

夫れは去大正十年、即一九二一年七月にスタイナッハ博士は更に精細に其若返り法の業績を獨逸ベルリン府に於て、ヘーレーの解剖學教授ルー氏が發行してゐる『有機體の發生機械學實

國』の第四十六卷第四號として、七月廿日に之を世間に發表した。そして出版者スプリンゲル氏は、特に之を單行本として世間に賣弘めた。以來世間にて狂熱的に之れを批評し、宣傳し、獨墺は云ふに及ばず、瑞西、佛蘭西、英吉利及び米國に亘りて醫學社會は勿論、特に一般民衆に狂熱的に喧傳されるに至つた各大學の教授を主として外科醫、泌尿生殖器醫、婦人外科醫、物理的療法醫等は爭うて其の方法を繰り返して更に、短日月間に於て得たる自己の所見成績をも急遽發表するやらまた病理學者や、生理學者などは、動物實驗の上、其學說を批評するやらまた或る多數の學者は自からの實驗は無くとも、唯在來の所見或は理論よりして其事の能、不能を論ずるやら、或は、また醫學の學理以外に世間の倫理や、道德の方面迄も持出して、當時の歐洲學會は勿論、政治家實業家に至るまで氏の若返り法で持ち切りの勢であつた。例へば、スタイナッハ氏の若返り法の發表者で最初の歸依者である、ルー教授の如きも、日々數十通の書信にて世人から若返り法の能、不能に就て質問を受けるのでルー教授も其の煩に堪へず、適應症を論ぜずしてみだりにスタイナッハ氏手術を行ふといふ事は此尊ぶべき療法の聲價を落し却つて其偉大なる業蹟も獨逸民族の中より出でずして、却つて氏の法を注意して正しく實行する外國人に其の功果を奪はれる怖れありとて、世人を警告した位である。

こんな素破らしい狀態で、歐洲大陸で大評判になつてゐる折我が九州大學解剖學教授小山博士が世界大戰後の醫學界觀察のため渡歐された時、伯林市で其の一本を購つて歸朝された。自分はスタイナッハ氏の生殖腺移植法に關する動物實驗の事は特に興味を以て納す其學說の眞否を、自分の專門である精神病患者について臨床上、及其の治療上について觀察してゐた。取り分け生殖腺の內分泌說には少からず興味を以てゐたので、甲狀腺、腦下垂體等の製劑と共に、色々と研究してゐたのである。此際、小山博士がスタイナッハ氏の業績に就いて話されたので、たゞちに、其の原著を借用して熟讀してゐたのである。所が、本年四月大分市醫學會で講演をする事になつたので、其の際、自分の甲狀腺に關する實驗の極一部を發表した際、スタイナッハ氏法を併用したらば『若返り』の效を擧げる可能性があるといふ旨を述べた。所が此れが端なくも非常な世間の注意を惹起し遂には、東京醫學士會から九州帝國大學ではスタイナッハ氏手術を行つてゐるか、否かの詰問樣のもの迄受ける事になつた。余は詰問等うける事をした覺えは更にないが、それは別問題として、兎に角、自分の立ち場を明にする必要があるので、また改造社からの再三の懇望に默し難く茲に性の內分泌、及若返り法

の理論並に其れを治療に實際應用することも如何なる程度まで進んでゐるか、又、如何なる點までは學會に於て、認められてゐるかといふやうな事を少しく世間に紹介し度いと思ふ。自分は自分の教室で此生殖腺に關する内分泌、及び老衰の病理、また其の治療法に關しては今正に設備をととのへて研究中であるが其成績を發表する時機が到逹してゐない。其處で病理學、及び實際治療外科的手術、及レントゲン線に關する治療等は、他日一通りなりとも完成した上で發表する事として、此處には只だ生殖腺、及甲狀腺に關する在來の事實と學説とを紹介しようと思ふ。

夫れとても、勿論詳しく全般に亘つて論ずる事の不能なるは言ふ迄もない事であるから、唯主に、ス氏の事業の中直接『若返り法』に關する事柄の極く綱領と是れを理解するに必要なる學説などを主に述べ、また夫れに關する他の學者の批評をも附記して、如何程まで氏の業績が世間に受け入れられてゐるかを世の好學者に話し、また更に甲狀腺が、生殖腺と如何なる關係の者であるかを少しばかり述べやうと思ふ。

スタイナッハ氏の『若返り法』は男子の老年に關して、特に成功してゐる趣きがあつて、老年の婦人に關しては幾らか夫れよりも遲れてゐるので、自分は、特に婦人の生殖腺の内分泌物の純粹抽出に就ても少しく紹介しようと思ふ。

自分は先づ、最初冒頭としてスタイナッハ教授が、一九一二年に氏の『若返り法』に關する業績を學士會院で演説した事の大要を爰に紹介し様と思ふ。

氏は此より前二年間、老齢の鼠に就いて實驗を行つたが、其の生存時期の短かいため、種々の困難を感じたけれども、種々工夫の結果買入れた鼠でも、成る可く生年月日の明かなるものに營養、寄生蟲病氣等によく注意して、特に其爲めに老衰の狀態を表はして居るのをさけて、非常に無病な樣完全なる所の老衰實驗動物を得やうとしたのである。其老衰の徵候としても、毛の少き事、特に脊中がやゝもすれば禿げて居る事、陰囊に毛少き事或は完く禿げて居る事、曲つた姿勢、食慾不振、體重の減少、一般に痩せて居る事、著しき嗜眠性、仕事に物憂き事、他の若き雄に對して卑怯なる事、盛りのついた雌に對してさへ興味を起さず、精力減退または消失、更に進んで之を開腹術によりて檢査すると精囊は弛緩して、少しばかりの精液を貯へて居るか又は完く空虛である事、攝護腺の萎縮等である。是等は老衰雄の徵候であるが、此の老衰よりして若返らせる爲めに、輸精管を二重に結紮した。そして其の手術の成功する必要條件としても精系に伴ふてゐる血管を注意して取り除ける事である。其

の施術の根據とする所は佛國のブーアン、アンセル兩氏以來既に學界に知られてゐる、事實精系を結紮すれば、睾丸の生殖分布である。輸精管は滅びて間質細胞のみが殘るのみならそれが肥大するといふ事になる。鏡檢する時は手術後、數週間の睾丸組織中に此の間質細胞即ち青春腺の細胞が特に增殖して居るのである。かゝる手術を受けた老衰の動物は、其れに加病の無き限り(例へば結核、雜菌等の)數週後には驚く可き結果が現れるのである。動物は活潑になり、食慾は增進し、體重も增加し姿勢がよくなる、廣く禿げた皮膚には處々若き毛の島が出來る夫れが時日の立つにつれて奇麗な光つた美しい毛に變るのである陰唇も再び毛で被はれて、全體の毛衣が厚くなる、加之、精神上に於ても其の効果が著しく現はれて來る。

動物は再び物事に注意する樣になり淸潔な性質になる(お化粧をする樣になる)、また、他の雄が籠の中に入り來る場合等には、以前よりは勇氣を出して夫れを攻擊する。手術前にも色慾が少しでもある樣な場合には、四週間許後には情慾と勢力とが非常に增加して來る、また手術前全く無勢力であり、情慾が消失して居た場合にでも、再びそれが眼醒めて來て、少くとも盛りのついた雌　執拗く追ひ廻しなどするやうになる。一言にして言へば、老衰した雄が再び若返つて元の青年の狀態に復歸するのである。

ス氏は此の中數例を寫眞に採つてまた標本に作製したのである。

若返りの現象は、必ずしも全般に揃つて起るとは言へない。其の効果は各個別々に異つて居るが、概言すれば、老衰が進めば進む程、若返りも困難である。

然し、數ケ月間生存して充分に觀察する事の出來た動物は、皆例外なく悉く著しき現象を呈したのである、運動が增加し、體重が增し、皮毛が所々に生へ新に更つて來る。色情の興味が再生する。

氏は又一方の輸精管のみと結紮して略同一の結果を得て居る。氏は此研究を續けた。其の目的はと言ふのは、壽命は長くし得る者か、否かといふ事を尙一層詳しく調べやうといふのである。そして更に、是れを老衰に向ひ、若しくは老衰した人類にも擴め度いといふのである。

氏は、老衰雌に關しては、これまでの所多數の經驗をもたない、雌には卵巢移植の方法が最有効だと認めてゐる。此實驗に因ると、或る一匹の老衰鼠の如きは、數ケ月以來最早盛りになつた事が一度も無かつた。いつも同じ榮養と平常と、濕度で飼つてあるが、毛髮貧弱で、體重も減退してゐた。所が、都合良

く卵巣移植が行つて四週後には盛りがついて、雄より激しく情交を受けたのである。そして、また毛も厚くなつて體重も増加した。

以上は、一九一二年、即昨年再び『若返り法』を發表した時より九年前に氏が若返り法の大要を氏の學者同僚間にのみ發表した大要である。然し其の後、是以上の發表は見合せて居たのは種々の理由があつたからである。其第一の理由としては、此問題を一層多數の、一層確實なる材料のもとに、研究し度いと思つたからである。第二の理由としては、未だ充分に研究しない事を早々に一般世間に發表する場合には、稍もすると誇張され誤解される憂がある。殊に、戰爭當時、人心が荒んで居る場合に特にそうである、所が、今日では既に色情に關する内分泌の知識も一通りは世の學者が、皆心得てゐる様になつてゐるし、これ等學説に關する澤山の著書も出て次第に世間に擴がつてゐるし、のみならず、氏自身としてもリステンステルン氏と共に發表した所の人間の睾丸移植の外科手術、尚ほまた男女の去勢者に生殖腺移植法を行つた結果等も漸やく世間から注意されて、男女の花盛りが再び人工的に起され得るものであると言ふことが世間一般に注意され、即若返りが可能である事が略ぼ世人から受入れられる時期になつたのを、氏が更に引き續き研究した結果を、氏の同僚のみならず又廣く一般の醫學社會にも發表する様になつたのである。

是等の發表の内容が、如何なる者であるか、また其の根本原理は如何なる立脚地に立つてゐるかといふ様な事にて、下に叙述するのであるが、自分は最初ス氏が此研究を一通り完成した後に如何なる希望を持つてゐるかといふ事を述べる事が適當と思ふからして、先づ此處に其の事を附記するのである。

ス氏は言ふ、自分の業績には、多くの缺陷があることは勿論承知してゐる。夫れは研究の範圍が非常に廣いので其れを申譯にする事が出來るのである。

唯一人の研究者で有り餘つた問題を捉へる譯にいかない。こんな事業にて、助手と研究費が充分に在つてさへも困難であるのに、まして自分は此所大戰後數年間といふものは學問上の後援といふものを失つて居る。補助は極めて哀れであつて研究費の如きも非常に不足勝ちで、數年來研究所には手當も無く、随つて下男も無く、實驗動物とても無いといふ有様である。斯の如き興味ある研究には、夫れ自身、別個の研究所を必要とする。例へば『實驗及實際生物學研究所』または『實驗老衰研究所』といふ様な獨立した組織が必要である。斯かる事業は政府とか府市とかが組織立つた研究所を構へてくれた方がいゝと思ふ

である。先づ自分が手を着けた問題以外にも眼の當り尙次の樣な研究事項が必要である。

第一、若返つた動物の中樞神經系統の研究であるが、夫れは大腦の實質が再生するのであるか神經細胞に色素が沈着してゐるとか澱粉樣、變成物が沈着して居るのが減少されるかまたは消失されるかといふ樣な問題である。

第二、循環器の研究である

心臟の筋肉が如何程まで再生するものであるか、血管の硬化が如何ばかり影響されるかといふことである。

第三、感覺器の若返りの精密なる研究(例へば嗅覺)感覺表皮細胞の再生、眼の硝子體の透性特に綠内障の研究等である。

第四、新陳代謝機能の研究に於ては若返つた場合には榮養は子供や青年と同樣に身體の構成に利用されるか否かである。

第五、青春腺の他の内分泌腺(例へば副腎)に對する影響及び若返る際に其れ相互に如何なる關係を有して居るか。

第六、毛髮が新たに生えて美しくなることとの研究。

第七、自己及び同樣移殖法を種々に組合せて研究すること。又一方の睾丸を結紮するとか次に兩側共に結紮するとか、それから其後更に移殖法を繰り返すとかいふ樣な事をして出來る丈け老年期間を延長すること。

第八、多くの動物の睾丸よりして有力なる成分を取り出すこと

自然の狀態では青春腺は生殖腺に比しては極少のものであるから、是れは睾丸を結紮するとかまたは自己移殖法で增殖せしめなければならぬ。斯くして增殖した内分泌腺でなければ有力なる男性の刺戟劑を充分に提供する事は出來ぬ、

こんな有效成分の注射に依つて手術療法が著しく助けらるのみならず、また短少期間には或る程度迄を其の代用になるのである。

第九、ラヂウムを含める鑛泉が若返りの効ある事は最早や世人に知れてゐる。是れは恐らく青春腺の發生に對して輕度の促進作用をするであらう。是等も實驗的に證據立てられなくてはならぬ。

是等は將來の研究に對しての極く少數の目標に他ならぬのである。

十八世紀の末葉、英國の有名なる醫學者ジョン・ハンターが、初めて性の第二次特徵と云ふ言葉を使用したが、其の意味は雌と雄とが區別さるるのは生殖器以外に種々の違つた特徵、例へば多くの鳥類では美しき羽毛だの、また或種の獸類では角だのと言ふ樣に、目立つて雌雄を區別する事の出來る特徵をいふのであるが、其後、彼の有名な進化論の鼻祖ダーウインが、此の

言葉を採用し尚ほ夫れを詳しく研究して、雌雄陶汰といふ學說を組立てたのである。それはよく世の學者に讀まれる所の『人祖論』の中に書いてある事だ、ところが生物學の進步するにつれて、進化論も次第に其の形を變へて來て、後には單に雌雄淘汰といふ理論許りでは到底彼の美しき雄鳥の羽毛や、彼の美しき雄虫の鳴聲等が進化して來るといふ事が出來なくなつて、是れは寧しろ生理的に說明すべきものであると主張する學者が、澤山出て來たのである。

其後、內分泌說が起つて來てから此の第二次の性的特徵をもまた、內分泌說で說明しようといふ學問の潮流が起つて來た。そして是れを確かめる爲に色々の動物實驗が行はれた。其動物實驗の主なる種類は、睾丸や卵巢を取り去ること即去勢法、また其去勢した者に他の睾丸、または卵巢を移植する事だの、また睾丸卵巢を雌雄兩體から取換へて移植する事などである。また一方には其睾丸、卵巢等の浸出液だの、或は他の化學的に有効成分を含むと思はるゝ者を、注射するとかして、此の男女の性質及其本態をも見極め樣としたのである。

性といふ問題は生物學の根本問題ともいふべきものであるので其研究に專門的に沒頭した學者が非常に多い。スタイナッハ教授等も、其最も主なる一人である。氏は二十年來、專ら此の性の問題を取扱つてゐるのだが、氏の前半十年間ばかりの事業は主に睾丸及卵巢の移植法であつて是に依つて種々の新事實及新技術を發見したのである。此の分は殆ど全部の學者に採用せられて其事實丈けは最早や一點の疑なきものとして學界間に承認せられてゐる。氏の實驗材料は、主として鼠であつて、彼は二十年近く鼠を多數飼育して、其の習性と心理とを研究して性に關する生理及心理の研究材料としてゐる。氏の學術界に貢獻した最大な事實は大略左の如く言ふ事が出來る。

雌雄にかゝはらず、幼少の動物を去勢即雄よりは睾丸を除去し。雌よりは卵巢を取去れば、將來發達して完全の雌雄となるべき者が。其發達が中止若しくは一層退化して、雌雄いづれともつかぬ中間性の者になる。即ち雄に於ては、性の第二次特質なる陰莖、攝護腺、其他毛の粗きこと、喧嘩ずきまたは雌を慕ふ性質等が出て來なくなる。雌では子宮膣.乳房が發達しないで、色情期（サカリ）が來なくなる。即ち雌雄各の特色が出來ないで、中間物になつてしまふのである。

ところがこの中間物に、新に他の睾丸または卵巢を移植すれば、睾丸では雄の特徵、卵巢では雌の特徵が更に現れて來るのである。そして初めの雌雄どちらにしても、睾丸を植うれば雄となり、卵巢を植えれば雌となるのである。そこで此の強精法

に依る時には、雄となるべきものを睾丸を除去して中間物とし、また是れに睾丸を植えてもとの雄に返す事は勿論、もとの雄に卵巣を睾丸に植え換ふれば、雄を變へて雌となす事が出來るのである。同様に雌を變へて雄とする事も出來るのである。此驚く可き事實は、澤山の學者が繰り返して、其の眞實なる事を證明してゐるのである。

右の事實は所謂『若返り法』を發表する十年以前に確定したる事である。そこでスタイナッハの法といへば、昨年迄は此の生殖腺移植の法を謂ふてゐたのである。勿論生殖腺の移植法は、スタイナッハ氏のみがやつたのではなく、其他の學者も多數行つてゐるのである。そして其の手術の方法の如きも、スタイナッハ氏は主に皮下、または腹膜に充血を起さして移植してゐるが、スウエーデンの生理學者サンド氏は睾丸共者に移植する事に成功してゐる。然し最も秩序的に最も專門的に、そして最も成功したのがスタイナッハ氏なるが故に、世間では生殖腺移植術を、全くスタイナッハ氏の專賣特許のように考へてゐる。

スタイナッハ氏は尙此上に、種々精密な議論に立ち入つて一寸聞いた處では實に驚く可き事實や學說を主張してゐる。例へば女性の卵巢を、一部分剔出して幾分の睾丸を移植する時には、或時は女性の性質を現すが、或時は男性の性質を現すと言ふやうに、定期的に男女の性質が交々出るといふ様な實驗をしてゐる。また或場合では一部分が女性で、一部分が男性的で夫れが交つて現れるいふ様な事を述べてゐる。そこでこの研究より一步を進めて、雌雄同體の研究や、同性愛即、男が男を愛し、女が女を愛するが如き、しかもそれが夫婦の如き愛情の現れ方をする樣な變態心理の現象迄も、是れを生理的組織的に研究しようと勉めてゐる。スタイナッハ氏は睾丸及卵巢の顯微鏡的所見を描いて、睾丸の內にも女性的の內分泌細胞と、男性的の內分泌細胞との二種類がある。これが爲めに、男性的の性質と女性的の性質が、同時または交互に現れるのだと主張してゐる。

スタイナッハ氏の生理的實驗事實は、確實なる實驗を經てゐるので、反對する人は誰もないが、よく反對を受けるのは、この顯微鏡的所見の解釋方面にある。特に最も反對を受けてゐるのが、男性靑春細胞及び女性靑春細胞である。或病理學者、例へばフライブルグの病理學者アショフ氏の如きは、今では靑春腺といふ名を承認しない(一九二〇年著の氏の教科書には承認してゐるが、近來若返り法が、世間に盛んに稱へられる樣になつてから、講演會等で反對してゐる)。またアショフの弟子のチェデイーが、近頃スタイナッハ氏の方法に似たる實驗をして反對の說を述べてゐる、其中には同じ様な現象を顯微鏡で、スタイナ

ッハ氏の男性青春細胞及女性青春細胞に相等する二種類の細胞を認めてゐるが（こんな者は無いと言ふ反對學者もある）、それは同じ間質細胞の變形に外ならぬと主張してゐる。此のことは同性愛の說明の時に必要なので、一寸言ふたがまた、後に詳しくスタイナハの理論を論ずる時に述べる事とする。

此他スタイナッハ氏の大事な仕事として、男子の性質及女子の性質は、嚴密に青春腺の多少による。即青春腺が多ければ其の性質が強く、少ければ弱く現れると言ふ事や、また其男女の性質は特種の者で、互に打消す力があるといふ事迄、非常に精密な、非常に明瞭なる實驗で示してゐる。

以上は一九一〇年までの氏の研究の極く要領を述べたのであるが、此時即一九〇一年に於て既に、若返り法の可能なる事に就て考へ初めたのである。其の考への順序は大畧次の樣である。

性の最も完全した場合は、所謂盛りの時であつて、即ち若盛りである。年齡の少き意味でない。性の特質の最もよく現れたのは、人間では男盛りとか女盛りとかいふ時で、性的に見て一番美しく立派な時代である。これはス氏の學說によれば、男では睾丸の組織中の間質細胞中にある青春細胞が、最もよく發達した時に起る現象であるから、老衰した者でも、何等かの方法で、この青春細胞を發育若しくは移植する事が出來たならば其の性的の若盛りを再び實現する事が出來はすまいかと考へたのである。ところが其方法は在來諸學者殊にス氏自身に、多く研究した方法により幾つもあるのである。其の方法を舉ぐれば、

第一。睾丸または卵巣を、移植するのであつて——移植しても、生殖部分の細精管は退化してたゞ青春腺になる部分の間質細胞のみが、殘るのである。

第二。エツキス光線で照して、適度の度合まで達すると、生殖部分の細精管は破壞されるが、青春腺になる間質細胞は反對に增大するのである。

第三。これは特に男子のみの方法にして、輸精管を結紮する方法である。是れによると詳しき理由は解らぬが、やはり細精管は萎縮して青春腺のみが增大するのである。

第四。春青腺の有効成分を、適當の方法で抽出する方法である。是れは睾丸の方では意外にも尚不完全で、却つて卵巣の方ではヘルマン氏がフレンケル氏の研究室で、全く純粹もしくは殆ど純粹の類脂肪體の有効成分を、この大戰中に非常な努力を以て成功してゐる。其他のエキス及び製劑は皆、缺點があつて未だ完全の域に達してゐない。例へば餘り効がないが（多少は効いても）、また有効でも、腎臟炎だの血壓を非常にさげるだの、副作用を起して使用されぬのが多い。

以上四つの方法のうちで、老人に最も適當な方法としては、男子にありては輸精管の結紮である。それは手術が極く簡單で、危險を伴ふ怖れが殆どない。是れに關する議論等は、ス氏の批評の初にゆづり、詳しき事はこの項には省ぶく。併し一言して置かねばならぬ事は、輸精管の結紮といふても色々注意す可き事項はあるのである。唯此處では若返り法が如何にして考へられたか、その道筋を明にするために述べたのである。要するに、右四つの方法は夫々特色があつていづれも極大事な方法でいづれを捨てる譯にもゆかぬのである。

女子の方はスタイナッハ氏は主にエッキス光線の方法を主張してゐる。また同時に移精法を勸めてゐる。併しヘルマンの研究以來、立派な有効性分が採れるから、此の方は男子以上の特典をもつてゐる。この事も後に詳しく論ずることゝする。

右の考へでもつて、スタイナッハ氏は一九一〇年から一九一二年迄二ケ年の歳月を費して、いよいよ其の可能なる事を鼠でもつて實驗した。そして其要領を、墺國ウインナの學士會院で、報告演説をした。是れが大戰二年前の事である。然しスタイナッハ氏は尚、自己の所說を確實にし、また過りの結論に陷らないといふ事を確定し、他から一點の非難をも受けぬための注意より、其の後八年間卽一九二〇年、若返りの著書を發表する迄、實驗した設備と方法は次のようである。

前述の如くスタイナッハ氏が主に實驗材料とした動物は鼠である。其理由は鼠は、他の動物に比して氏の研究にとつて種々の利益がある。第一、鼠は人間に極近い關係を持つてゐて、食物が人間の食物と殆ど同樣で、極飼ひ易くまた小さいので、食物の分量も少く、飼育人の數も少くてすむ、隨つて經濟上非常な利益がある。國が富でゐてさへ、多數の實驗動物を調へる事は容易でない。まして歐洲大戰をへて非常に困難をしてゐる墺國に於てスタイナハ氏が鼠に着眼したといふのは、經濟の點から(今でも獨墺では牛や豚や其他の家畜は殺す事を禁じてあるので、臟器藥品を內分泌に製する事が出來ない有樣である。)また此處に注意す可きは、是れは米國のドナードソン氏の話であるが、鼠は食物が人間と等しいので、何かの生理的關係が、他の動物に比して非常に人間に近いと言ふ事である。尤も此の點に就ては、ス氏自身は言ふてないが、ついでなるがため此處に記載して置く。

第二、鼠は繁殖力が非常に強い、そこで自分で自由に澤山飼育することが出來る。實驗動物は、自分で育てたものでなければ當にならない。如何なる食物如何なる方法で育てたかもわからず、其の生立ち病歷が不明であるから、隨つて適當の判斷を

得る事が出來ない。此の點はス氏教授が最も重きを置いてゐるところで、彼は多數の鼠に一々生年月に兩親、同胞、其の他の病歴を詳しく書き取つて置いたのである。

第三、鼠は繁殖力が強い代りに壽命も短かい、だから實驗者にとつて非常な利金を與へるものである。鼠の年數は、最も高齢に達しても三年以下を普通としてゐるから、十年位飼育して見れば、ずいぶんの世代を、始めから終りまで觀察實驗する事が出來る。

第四、鼠はモルモットの樣に一見甚だしい男女の區別は無けれど、非常に悧巧な動物で、大腦も身體に比して大きいしまた特に性の研究をする爲めには、睾丸卵巣が身體の割に大きいので心理的、生理的に、雌雄間の動作愛情等の具合が最も良く研究が出來る。

其處で籠と飼養箱さへうまく造れば、其動作は晝夜目擊する事が出來るしまた絶えず綺麗に、其の身のまはり等を注意してやる事が出來る。それに病氣の時等、充分の手當もしてやる事が出來るのである。かくすることに依て、鼠が弱つたとか強くなつたとか肥つたとか瘠せたとか發病したとか色情關係が如何になつたとか皆、實驗時の眼をのがるゝ事は出來ない。そこで老衰の現象を研究する場合に最も大事な點は、色情問題であるから、實驗室で飼養の出來る動物にして、此位他に適當の動物はないのである。何故なれば如何なる動物も、鼠よりも強い色情亢奮を現すものは無いし、隨つて色情の變化または障碍が、こんなに良く目につく者は無いのである。例へば正規の色情があるといふ事の證據は、唯雄が盛りのついた雌に對しての態度を調べさへすれば、それで解るのである。此際鼠は一種特別の行爲を示すものである。盛りのついてゐない雌に對しては、雄も無理にそれを成就しようとしないのである。其處で鼠の雄の精力を試驗するにはいつでも、盛りのついた雌を要する。そを何時でもさがす事は、澤山鼠を飼養せねば出來ない譯である。

第五、老衰及若返りの研究をするに年とつた雄を買集める事が非常に困難である。よしそれを得ても、病氣中かまたは衰れな狀態である。其處で買た鼠を飼養するには、しばらくは自分で手馴して飼育をよくするとか、病氣を治さねば實驗の用にはならないのである。そしてその事が非常な困難事である計りで無く、到底それでも完全な者は得られないのである。

第六、若い動物と老いたる動物との區別を良く見分ける事が出來て、間違ふ怖れがない。其處で例へば若返り法を實行したる際、はたして若かつたか否かといふあやしき所がない譯である。何故なれば若いのと老いたのとは、其の動作性質體格等が

著しく異つて、疑しい點を無くする事が出來る。

以上は若返り法及色情の研究をするのに、最も都合のよい點を列擧したが不利な點も少々ある。

第一に命が短かいから老人期も短かい。ス氏は廿年間以上、鼠を飼養した實驗に基いて、次の樣な事を言ふてゐる。墺國ウインナの氣候で普通の食物（パン、穀物、食物のすたりもの）で、飼育した白鼠及び白鼠と野鼠との雜種は、間に病氣が起らぬ限りは、廿七ケ月から卅ケ月位の年數迄達する事が平均である。卅ケ月と言へば既に極度であつて、卅ケ月以上の年齡に達する者は極稀である。十八ケ月から二十三ケ月位の間に、老衰の病狀が著くなつて來る。其處で老年期即ち老衰の初めから、自然の死に至る迄の期間が、僅かに四ケ月しかない。此の間に澤山な病氣が在つて、稍もすれば被良の實驗動物を失ふ事がある。然し絶えず補充されてゐる材料は、この缺點を補ふ事が出來るのである。

以上述べたところにより、既に明かである樣に、買入れた鼠と自分で飼育した鼠との間には、多大の違ひがある事がわかる。買入れる鼠は實際よりも年老けて見える事が多い。食物惡き事、不潔である事、皮膚病、虱等が出來て健康をそこねて早くから老年の徵候が表はれて來る。夫れは人間で言へば、榮養不良で過勞した特に戰爭等で苦しんだために、早く年とつた人によく似てゐる。此の買入れた鼠を、虱を取除くために、次の樣な處方で洗つた後に、榮養を良くし手當をよくしても二ケ月三ケ月後までも、其の老年の模樣が變らない時には是れは立派な實驗動物である。然し年寄りの徵候が良くなる樣な場合には、是れはまだ中老であつて、老衰の研究には適せないから、眞の老衰が初まる迄は待たなければならぬ。

虱を取る爲めの處方は、

アルコール四〇〇、瓦の中にメントール一、瓦を解かし五ー六〇〇、瓦の水で淡める

またの法は

一茶色のリゾール（普通は三立計りの水にとかした液もよろし）

動物は一つ一つの小さな池または盥の中にて、數分其液の中に浸して溫かき所で藥の上に置く。弱き鼠は是等の藥液には過敏であるから、其の中に浸すよりもむしろ其の尻を浸した脫脂綿で身體全體を撫でるのである。これに反して自分で育てた鼠では、かゝる注意は要しないのである。年も分つて居れば、他の雌鼠等と育てあげられた條件も同樣であるし、當り前の經歷で年を取つてゐるのである。唯此處に大事な點といふのは、何

時明かに老衰が初まつたか、そして老年の徴候が進む事をたしかめて詳しく夫れを觀察する事である。此老衰の初まりには、非常なる遲速があるのである。老衰の現れは體重を減ずる事、陰囊其他の皮膚の毛が無くなる事、色慾及精力の減少又は缺除する事等である、こんな徴候は一時に結合して現はるゝ事もあるが、また前後して現はるゝ事もある。そして其現れる時期も既に一ケ年半位で現はれることあるが、また二年半位になつてやつと現はれて來るのもある。或場合では次第に或は突然に、強き老耄症に陷る事もある。一番目につき易いのは、陰囊が禿げる事、脊、股等に禿げたところある場合である。

體重は規則正しく、秤にがけて記錄して置くのである。老衰する場合に、體重は大概急に失ふものである。色慾及精力は、最も規則的の老衰をきたす事の出來る病狀である。然しこれを檢査する事は、注意を要する。雄を試驗する時に、數匹の鼠と同じ籠に入れた丈けでは充分でない。

成る程すぐはじまつて來る所の娛樂――其の後を追かけるとか、香を嗅ぐとか、轉げ合ふとか、飛びつく樣な事の情態を現す樣なものゝ、嚴密に證據だてたものではない。何故なれば、此の樣な娛樂やあばれる樣な事は、好奇心に對する反應と混雜し易いものである。

鼠は雄でもまた去勢された者でも、若くとも年取つても、非常に好奇心を持つてゐるものである。

精力のある雄鼠に大事な事は、盛りのついた雌が面前に居る場合である。雄はたゞちに猛烈に盛りのついた雌を追ひまわし、低い鳴聲を出して、短時間のテタヌス病樣の交尾を遂げるのである。是れが數分間毎に繰り返され盛りの高潮に於ては數時間もつゞいて、遂には雌雄共に疲勞し切つて仕舞ふのである。

併し盛りのついた雌を、探す方法は如何にといふに、是れは特別の鼠籠を作らねばならぬ。其は長いブリキで作つた箱で掃除をするためには、二重の底を持つた引き出しを附けるのである。そして其の間を針金の格子でもつて五六の部屋に分けるのである。そして此の部屋はいづれも、前に廣き戸をつけて置く。其の戸は鐵柱の格子になつて、よく觀える樣にして置く。そして籠の端の部屋または中の部屋には、若き強き試驗用の雄鼠を入れるのである。他の部屋に十及十五位の雌を入れる。そして此處に、充分に運動の餘地を與へて、巢を造り得る樣にして置く。雄鼠は分けられてゐるので、亢奮の極に達する。格子を通して雌を見、其の香を嗅ぐのである。此の時隔ての戸を引き擧げて連絡をつけると雄鼠が多くの雌鼠の手を探しまわつて、盛

りのついた雌を見出してすぐに、幾度も交尾するのである。そこで盛りのついた雌を捕へて、試験しようとしてゐる老衰した雄の入れる籠の中に移すのである。而して試験用の若い雄鼠はもとの様に隔離して置くのである。

吾々はかくの如くして、數個の試験用の籠を準備して置けば、數匹の盛りのついた雌は殆どいつでも選び出す事が出來る。(但しウキンナの氣候で十月から正月迄は、盛りのある雌は求められぬ場合がある。)

年寄つた雄を試験した結果は、いろ／＼違つてゐるが、大約下の三種に分ける事が出來る。

第一の場合。雄は客に直ちに興奮して、それを追廻はして戯れ、遂には交尾する。それは勿論若い者よりも交尾が少く又激しさも少いのである。かういふ場合には、未だ老衰期には入つてゐない、それで時機を待たなければならない。

第二の場合。雄は盛りの附いた雌を認めてそれを嗅ぎ廻す。そしてそれを絶えず追廻はす、然し交尾はしない。恐らく勃起のない弱い交尾くらゐは、起ることがある。然し間もなく興味がなくなつて、雄は疲れた恰好をして、籠の隅に引込んで了ふ。これは既に高い程度の色情衰弱で、そして最早々衰期に這入つてゐる。それから數週間引續いて三四回同じ様な試験を續けても、結果が同一であれば、恐らく早く手術をしたといふ非難を避けることが出來る。精力の減少又は喪失は、一年の中の初め半ばに、起るような時には、それは特に確實である。何故なれば、一般に此の數個月の中に色情が最も強く、現はれるものであるからである。

第三の場合。盛りのついた雌は、年寄つた雄鼠を興奮させることが出來る。此の場合雄は、雌が攻勢をとつても、興味を喚び起さない。色情が全くなくなつて、そして精力といふものは全然缺乏してゐる。この狀態は大抵、老衰の外の徴候と伴ふものである。此の試験を數回繰返して、確實にした上、身體の衰弱が餘りひどくない場合には、即ち若返り法を實施するに、最も適當したる時機である。

以上は主として、鼠に就いて實驗した時の極く些細な點を、述べたのであるが、それはスタイナッハ氏がどれ位、注意深く缺點と非難のないようにと勉めてゐるかといふ一般を、示すためである。氏の研究の結果または、其方法等は、氏の原著を熟讀すれば、勿論よく分ることであるけれど、稍もすると、これ等に注意しては居ないだらうといふ者があるからして、特に人の見落し易い点を述べたのである。

本邦でも、氏の業績は、隨分興味を以て研究されてゐるので

世人も、恐らく其實驗の成績及び方法、例へば鼠やモルモット（モルモットは雌雄形狀を異にしてゐるので、雌雄の特色の研究には尤も適したる動物である）を特にスタイナッハ氏が使用したこと等をよく知悉してゐる。

永井博士が隨分詳しく、此の學說に就いて紹介されてゐるから、其を見れば大體は分ることである。そこで余は主に精神的並びに心理學的の方面を述べたいと思ふ。

スタイナッハ氏の實驗の中特に著しく目立つことは、心理的の事實を非常に詳しく書いてあることである。色情心理の根本問題に觸れて其れを生物學的に說明せんと努力してゐる、例へば、氏が卵巢と睾丸とを取換へて雌雄の改造を企てた實驗などで、今迄雄であつたところの動物即ち雄といへば雄同志喧嘩するとか又は荒々しくつてそして雌に對しては特に優しいといつた性質が、睾丸を拔きとられて卵巢に植えそれが成功した場合には、性質が一變して、非常に優しくなり、雄に對して戰鬪的態度、嫉妬的態度は消失して却つて、それに性的に刺戟するようになり即ち雄が之に引き附けられるのである。此場合は、勿論身體の構造の變化することは生理的の事實として詳しく說明してある。しかしこれは、生理學者として勿論の態度であるが、心理學的に注意した點は他の生理學者に其類例を見ない所である。之れ一には、ス氏實驗動物が鼠であつたために、特に明かになつた故でもあらう。鼠といふものは、非常に怜悧な動物で、其心理的現象が動物であり乍ら、人に近い程まで、よく現はれるからである。かういふ風であるから、ス氏は雌雄の變成に於て色情心理を詳しく述べてゐるのみならず、又若返り法を實行する際に老人心理をも、美事に書いてゐる。

氏は云つてゐる、若い動物と、老衰した動物の態度及行動の變化は活動寫眞にして說明すべきものであつて、これを文字で記載し若くは繪畫で描くことは到底充分につくすことは出來ない。若い雄鼠は活潑で絕えず動いてゐる。境遇が變ると、例へば外の籠に入れられた場合には、非常に好奇心を示すもので、有らゆる物を嗅ぎ分けるやら調べるやら、攀ち上るやら、乘越しようとする。例へば外に、もう一定の雄鼠を入れるようなことをすると、直ぐに後足で立ち上り、飛び附くやうな攻擊の姿勢をとる。そして激しい場合には命を棄てゝ鬪爭するのである、ところが一定の雌、特に新しい雌を籠の中に入れると直ぐに、それを追ひ駈けて、娛樂に疲れない。特に交尾期に入つた場合には、直ぐに性交を遂げるのである。而かも、虛榮心が何時も伴つて化粧したり、身體をよく甜めて綺麗にするのである。

これに反して、老衰したる鼠は運動が少なく、馳ることが少

い。外の動物を籠に入れると直ぐそれを避けるのであつて、それと爭ふ氣勢を示さない。無理に戰ひを挑んでも、弱く防禦するくらゐのもので、直ぐ弱つて、後には自分の座に引き返すのである。元氣ある仕事だの好奇心だのといふことは全然消失してしまつてゐる。總ての者に對して無關心で、交尾期に入つた雌に對してさへ無關心である。大抵の時間は寢むつて過ごし、食慾も少いし、次第に痩せて行くのである。稍もすれば、呼吸の聲がきこえる樣になり、心臟の鼓動等も極めて緩るくなるのである。精神上の活動が減退するに連れて、有らゆる外創に對して無感覺でそれを氣にしないようになる。若い動物ならば、絶えず身を甜めて手入れをして、體を清潔にするのに反して、年寄つた動物になると、汚れて虱のついたのも構はなくなる。そこで年寄つた鼠を生かしておくには前述の處方で、虱と共卵をとり去らなければならない。さもなければ鼠は死んでしまふのである。これ等の老衰現象、例へば疲れ易いこと、賴りなさ相な氣勢、不注意、色情に對する無慾、無精力、これは籠の中に入れておけば容易く觀察することが出來るのである。併し一番目につくことは其姿勢である。老衰した動物は背が曲がつてゐる。頭が地上に附いてゐる、目が全く若くは半ば閉ぢてゐる。かゝることは詳しく説明すれば色々と數へきれない程ある。

余が今こゝに、老衰の心理を詳しく、紹介したのはス氏の研究が、特に心理的に注意してゐると云ふ一例を示すためである。氏は幾度の實驗をするにしても、心理的の觀察を怠つてゐない。氏の目的は恐らく、人間の微妙なる男女間の心理狀態等も恐く生殖腺の派生物であるといふことを説明したいために、かく記述してあるものと思はれる。

前にも一寸述べたように氏の若返り法の出發點は、若いといふことはそれは、色々見方もあるであらうが、つまりそれは、性的に最も完全に發育した時が卽ち若盛りである。換言すれば、男子ならば、尤も女性に愛好せられるような性質と身體を持つてゐるものが、一番若盛りであると見てゐる。卽ち若いといふとは性の意味を除いては、存在しない。男でもなく女でもないものが、若いだの年寄りだのといつても、それは何等の意味のないものであると見てゐる。卽ちこれを生物學的に云へば、精神の若盛りは、生殖腺の最も活動してゐる時機に起るのであつて、生殖腺が根本であり、身體は其附屬機關であると見てゐる。卽ち去勢された生物は、それは最早生物ではなくて、生物の拔殼に過ぎないと見てゐる。そこでス氏の若返り法といふのは、只だ漠然と七十歳の者が二十歳に返るといふやうな意味てはない。七十歳では目が見えず耳が聞こえぬから、それが

若返つて目が見え耳が聞こえるどいふ様な意味でもない。七十歳の老人が再び性的に、所謂青春時代になるといふのが其若返り法を意味するのである。即ち老人が老人であり乍ら、男としての本職即ちそれが若い女に崇拜されるような者に返るといふ意味である。此意味即ち若返りといふことは性的若返りといふ意味であると世間の人達も朧げながら、諒解してゐるらしい。何故なれば、余のところにやつてくる患者の訴をきくに、體も骨格も逞ましく油ぎつて非常に丈夫で、そして或人の如きは、三十歳の前後の人さへも此の若返り法を請求してくる。してみれば、色情的に、無力若くは、弱る場合には彼等は既に老衰したと思つてゐるのである。そこで生物の形體である。身體は偉大でも、油ぎつてゐても、若し生殖腺の根本に何か異狀があつて性的に老衰してゐる者は、これ矢張一種の老衰者である。ス氏はこれを早期老衰といふ名を與へてゐる。そして彼が人間に於て最初の實驗を得て居る第一の例は、この早期老衰の患者である。

これは少し傍路であつて、一般の讀者には左程興味がないかも知れぬが、精神病學で極めて、大切な病氣で、早發痴呆といふのがある。これは青年期前後に起る病氣で、前述の老人心理を其儘現はしてゐる病氣である。汚れて、無關心で、目を閉ぢて背を拒げて、二十歳の老人といふやうな病氣である。ところが此の病人の生殖腺を、顯微鏡的に檢査してみるに、恰度老人の生殖腺みたいな狀態を現はしてゐる。其處で、若し普通の老人が若返ることが出來るならば、此早發痴呆といふ精神病者も同じ療法によつて、治療せらるべきものであるかも知れないので、吾々は非常に興味を以てゐるのである。こゝに今現に研究中で、一二の好成績を得つゝあるが、未だ發表の時機でないから。只こゝには、ス氏の若返り法といふものは、決して精神病學家に緣遠き者でないといふことを、述べるために一言したのである。

余は以上、若返りといふ意味の誤解を防ぐために、特に詳しく、ス氏の云はないところまで補足して、その眞意を說明しておいた。その理由は現今此の意味の誤解から種々の議論、種々の批評を受けるからである。例へば、若返るといふことは先づ第一に不可能だといふ人がある。さういふ人のいふところは、獨墺の學者のみならず我國の學者中にもあるやうであるが、人間といふものは死ぬ、少くとも形骸、生殖腺を除いて、即ち子供を産むを以て不死としない以上、死ぬとは運命である。今のところ如何なる方面より見ても、長生不死といふとは考へ得られぬといふ議論をする人がある。それは全く若返りの意味を間

迄へて、かゝる非難攻撃をするのである。

スタイナッハ氏の、若返らすといふとは、性的に若返らせるといふ意味であつて、生命を延ばすといふ意味は其の主たる目的ではなかつた。併しそれが偶然にも、鼠に於て實證されたので、其のとを書き加へて居るまでゝある。即ち長生と云ふ問題は、かういふ事實で論定せねばならぬとス氏は云つてゐる、——それは可能である。老體が身體的にも機能的にも生き返つて、新しい若返りの生活を、永く享樂して、そして最後の老衰時機が、平均的に一定の度まで、延びるとが出來る可能があるといふまでゝある。

鼠に於ては、大抵三年以内で壽命が終るものであるといふとは前にも述べておいたが、即ち三十六ケ月が最長年齢で、其中九ケ月ばかりは、長生が出來た多數の實例がある。そしてこゝに注意すべきは、こゝの實驗例中全體の身體が揃つて若返るといふ場合もあるが、ある場合には、その一部若くは大部分のみが若返つてそしてその他の部分が之に伴ひきれない例が多い。特に精神系統の若返りが、第一に困難であるらしい。鼠は身體的に若返つて生殖器に於ても、毛髮又は皮膚の皺の延びてゐると、皮下の脂肪で肥つてゐると等は充分若返りの現象を呈してゐるにも拘らず、其鼠は呆然たる態度で外界に、無關心で反應の程度が非常に弱つてくるといふのが多くて、終に此のために死亡するのである。この事實は人間に於ても、老人のみならず、早期老衰に於てもよく發見するとであつて、一見したところ、他の身體機關は左程衰へたとも思はぬのに、先づ精神作用が老衰して、外界に適應する能力が缺げて遂に病を得、不治の災難に會ふとかして身を亡ぼすのがあるのである。これらの點は、將來最も研究の要ある點といはねばならぬ。

序であるからして、生殖腺以外の他の内分泌腺との關係を少しく、こゝに述べておきたいと思ふ。

甲狀腺に關しては非常によく調べられてゐるといふのは、バセドウ氏といふ甲狀腺のふくれて、心臟の鼓動が激しく、瘦せてよく亢奮する、一種の精神病に近い病氣があるので、甲狀腺を除去するとか、それを植付ける動物實驗などをして、盛んに調べてある。そしてよく世間の人が知つてゐるので今更こゝに、說明する必要もないが、たゞ特に注意すべきは、其甲狀腺から有效成分と思へる物質、沃度チリンといふものが知られてゐる。これが先づ甲狀腺の尤も大事なものである。甲狀腺が缺げてゐる病氣に、この物質を使用すれば、之を補ふことが出來るといふように、なつてゐるが、其實未だ仲々、甲狀腺の作用全體を、この物質のみでは起させることはできない。そこで最近

に英國の有名な生物學者ハツクスレー氏（ダイウキンと同時代のハツクスレー氏の子息で同じく動物學者）が、甲狀腺の移植を試みてゐる。それが特に蛙に於て、成功してゐるといふので非常に騷いで、人間も、ある意味に於て長生不死ができるものであるといつて騷いだことがある。かゝる方面がよく進歩したなら、卽ち人間に於ての甲狀腺移植が成功したならば非常に興味あることゝ思ふ。併し乍ら未だ、それ丈の程度には進んでゐないので、これは實際方面の醫學社會をば騷がしては居ない。併し倫敦の新聞などで、何か耄碌したことを政治家等が言ふと、甲狀腺を移植して、若返つてはどうだなどゝ云はれてゐるが、これは獨逸で、政府が瓦解しようとする前に、ス教授の手術を受けて、内閣の壽命を延ばしては如何かといつたことと好一對である。

それからもう一つこゝに、附言しておきたいことは、ス氏自身は、研究が主に生殖腺にのみ向けられてゐるので、他の内分泌腺には、恰んど手が届いてゐない。併し氏の門下生に、シユライトといふ若い有爲の青年があつて、ス氏の手術した多數の鼠を顯微鏡的に研究して、甲狀腺及び腦下垂體が、同じく若返つてゐるといふことを發表してゐる。そこでス氏は生殖腺が他の内分泌腺特に甲狀腺及び腦下垂體等に、作用してそれが、間接に若返りの現象を呈出するのであらうといつてゐる。詳しくいふと、長生とか若返るとかいふ症狀の大部分は、特に身體に關しての部分は、甲狀腺が掌どつてゐるから、それを若返らして、そして身體が若返るやうになるといふのである。併しそれらの方面は、未だに研究すべき餘地が多い。（シユライト氏は不幸にも、早逝したのでその研究も中止された。これは學問のため、大に惜むべきことであるといはれてゐる。）

今序に腦下垂體のことを一寸述べたが、これは、腦髓の中頃にぶら下つて居る一種内分泌腺であつて、身體の生長と大關係がある。特に骨格の生長に大關係があるので、これが働らきすぎると、所謂巨人症といふ一種の病氣をおこす。手足が非常に長くて、そして特に手足の末端が大きくなる病氣である。これは生殖腺から支配を受けると、過度の生長を遂げないことになつてゐる。卽ち生殖腺と、甲狀腺とが反對の作用を持つてゐる。だから生殖腺の作用が、衰へても矢張、腦下垂體が強く働いて巨人症を呈するのである。世間にはよくある實例であるが、殊に婦人に著しい例であるが、丈がごく低くて、よく肥つてゐる人に、早熟性の女性を見るのである。此の現象は、植物界でも見られるのである。實をよくならせるためには、新芽を摘みとつて、生長を妨げると、目的を達するのである。近頃の果

物を大きくする法は、色々の方法が併用されてゐるが、此方法が最も大事な方法の一である。そこで一般身體と生殖に關する部分とは、何時も反對の傾向を示すものである。かくの如き研究は、非常に面白い研究であつて、將來醫術の進歩に於て、尤も重要な着眼點であると思ふ。

それで一通り、若返り法といふものゝ、意義を不完全乍らも、諒解の出來るように述べたとと思ふが、學術的に深く立ち入つて說明はしてゐない。其の深いといふ意味は、主に顯微鏡的研究の方面であつて、少しく專門に亘りすぎる傾きがある。さうしてこれを、充分に理解するとも、中々容易ではない。しかしスタイナハ氏が反對されてゐるのは、主に此學說方面であつて、氏が成功してゐる實驗的の事實は、事實であるから、爭論の餘地が殆どない譯である。のみならず發表されて以來、年月も經たない事であるから、その是非が、愈々確定するといふまでには、如何しても出來ない理由がある。例へば有名なフライベルヒの病理學者、アショフ氏の如きは、其反對者として最も主なる一人であるが、かれとても、適確に反對するとは出來ないのである。ス氏の弟子で且つ現今同僚である外科のリヒテンステルン氏が、昨年ナウハイムの自然科學會の席上で、氏が實際手術した結果の報告をやつたときに、アショフ氏はス氏の青春腺說を、認めてゐないような口吻を漏らした。ところが本年、アショフ氏の教科書の第五版を出版してゐるが、その中にはスタイナハ氏の青春說を、極く概括して卷頭の總論中に揭げてある(レッスル氏執筆)。だから二十一年に至つては更に、ス氏の學說を承認してゐる事になつてゐる。勿論ス氏最近の輸精管結紮術に依て得たる若返り法の事に就ては、一言も述べては居ないが、それは病理に直接關係がないからして、書かなかつたとも思へるが兎角、青春腺說といふのは、ス氏が十數年來稱へ來りたる學說であるので、その學說を非難しては居ないのである。ところが今年の三月末日發行の獨逸醫事週報中に、アショフ氏の門弟であるチエデエといふ人が、豫報として發表してあるところによれば、矢張ス氏の青春腺說には反對の態度を持つてゐる。併しアショフ氏自身がこゝに、其意見を述べては居ない。たゞ其教室からして反對說を出してゐるのであるが、其說の反對の大要は次のようである。

二十九疋のモルモットの中。性的に充分發達したものが十七疋で、幼いものが十二疋卽ち老衰したものは此の中に一疋も含まれてゐない。そしてス氏の輸精管結紮術を行つてゐる。そして其方法は三種類に別れてゐるが、其第一の法は、一方の睾丸を結紮して、他方の睾丸を除去してゐる。第二の法は、一方は

其まゝにしておいて他方のみを結紮してゐる。第三は、兩方とも同時に結紮して居る。其結果によると、一方を結紮して、他方を除去した動物では、それが若い場合には睪丸の重さが、その期間に比例して增大するが、性的に成熟して居る動物では初めに睪丸の重さが減るけれど、後には增えてくる。ところが一方のみを結紮し、他方は其まゝ健全にしておいた場合には、手術を受けた睪丸の重さは、時がたつに連れて減少して來るが、健全の方の睪丸は、代償的に重さが增えて來る。ところが兩方を結紮した場合に於ては、睪丸は何時も同じような重さを示して居る。それによつて睪丸の重さを、動物全體の男子的態度が、精液發生に關係するものであつて、間質細胞の量には關係しないといふことを主張して居る。そして其外顯微鏡的の所見でもつて、此間質細胞即ちス氏の青春腺に相當する部分は、新陳代謝の作用に極く大切なものであつて、精液發生に必要なる養分を蓄へる作用をするものであつて、それが内分泌をするものでないと主張してゐる。内分泌するのは、精液其のものであつて、若返りの現象は精液の蓄積によつて起る現象だと主張して居る。ところが此說は非常に古い時代から行はれて居る說で、最初は一般學者が殆んど皆、生殖腺の内分泌作用は、精液若くは精虫に依てなされてゐると考へて居た。それが佛國の學者ブーアン及アンシエル二氏の研究によつて、内分泌の作用は間質細胞にあるといふ事になつたのである。此の兩學者は實に輸精管結紮術の最初の實行者であつて、その内分泌が又間質細胞にあるといふ說の元祖である。元來精系結紮若くは切斷術（輸精管のみならず、輸精管を含めて血管其他のものも合せた總稱）は、避姙法、去勢術又罪人精神病患者等の子孫を絕つために行はれてゐた。併しそれは神經も血管も同時に合せて、除去するのであるから、睪丸全部の萎縮を來させる方法である。だからしてこれに就いての臨床上の結果漸くは心理上の結果を是非するは、尤も見當はずれの反對說である。最初は獨墺でも、盛んに此種の反對說が、稱へられたものであつたが、今はさういふ事はないが、これに似寄つた反對說は尙間々見受けるのである。

此の佛國の醫學者の研究に次いで、同じウヰンナ大學の同僚である、解剖學教授タンドレル博士は、エツキス光線によつて生殖腺の中、細精管即ち精虫の出來る部分のみを亡ぼして、反對に間接細胞のみを增植させて同樣なる結論に到着した。ス氏は更にブーアン、アンシエル兩氏の實驗を、多數の動物に繰返して、其眞實であるといふ事を確かめたのである。以後舊說であるところの精液を以て、内分泌の主要有効成分であるとい

ふ說は殆ど廢れかゝつてゐたのである。それを再びチエデエ氏が再興させたわけである。またステイプといふ人が、これは解剖學者で隨分有名な人であるが、初めからス氏に反對者であつて、最近古い文獻を集めて矢張チエデエ氏と同樣な說を主張してゐる。其他には餘り有名なる反對者はないのである。

これに反してス氏の手術の効果は勿論、其學說までも殆ど全部採用してゐる外科醫は、大部澤山ある。其主なる一人は、獨逸ベルリンのウヰルヒヨウ病院の外科の担任のミユーザーム教授である。此人は多數の手術例を持てゐて、其効能を切りに述べ立てゝ居る。併し其青春腺といふ學說は、アショフ氏の反對があるから、未だ確定したものと云ふことは出來ないと附言してある。其外、人間に對しての實際例を提供して贊成してゐる學者も多數あるが、こゝにもう一人、大事な外科醫を一人述べようと思ふ。

それはライプチツヒ大學の理科學教授パイヤー博士である。氏は、昨年の外科學中央雜誌三十七號に、『スタイナハ氏若返り法に就いて』といふ論文を書いてゐるが、此中にはス氏の法は餘りみだりに行ふと、或場合は危險があるといふような注意を與へてある。例へば非常な强壯な青年に、老衰の徵候の全くない者に、それを行ふと、特に双方の結紮を行ふ場合には、よく精神病者を出すことがあると報告してある。それは色情過度の亢奮より來るのである。それから又パイアー氏は普通外科醫が、よく老人に來る攝護腺肥大症のときに、攝護腺を除去することがあるが、其中には輸精管が通過して居るので結局、其穴を閉塞して一種の徐々たるス氏法をやつてゐるといふようなことを云つてゐる。そしてそれも矢張在來には見落して居つたが、同じく若返りの効果を持つてゐるといふことを云つてゐる。卽ち在來は若返りの効果があつても、それは攝護腺を除去したために起つたことであると考へられた。ペイアー氏は此法がむしろ、急速でなくて害が少い。それは一種のスタイナハ氏改良法であるといふ意味に稱へられてゐる。

批評は其他にも澤山あるけれど、悉くこれを述べることは出來ない。たゞ主なるものの一二を述べた。特に反對側のものを述べておいた。それは手術の性質上、世人に誤解を起し易いものであるから、特に反對者の意見を重んずる譯である。併し歐羅巴大陸に於ては大體贊成者の數の方が多い。そして特に自分で實際手術した人の方に贊成者が多いようである。反對者の方はむしろ、理論的で、さういふことは在來の學說上不可であるといふような論法である。動物實驗はやつても、勿論十數年間を費して自分で育て上げた動物を、選り拔いて、眞正の老衰者のみを實

驗するといふようなヿは、過去一二年の間には繰り返すヿは勿論出來ないのであるから、實驗上反對するヿは、不可能の譯である。そこでチエデエ氏のように、若い生々としたものに、若返り法を行つて其の結果により、兎や角議論するは、餘程謹しまなければならないと思ふ。篤實なる學者が、十年二十年の日月を費して、念に念を入れ、過のないように發表した業績の如きは、特に尊敬を拂ふ必要がある。勿論疑ふといふヿは、學者の本來の態度であつて、他人の説を輕々しく信用するヿは、極めて學者らしからさる態度ではあるが、分らないヿは分らないとして、一層それを分らせるヿに勉むべきものであると思ふ。

此外諸種の研究を社會的に見て、兎角の批評を加へる人がある。例へば生殖能力は亡くしてしまつて、色情のみを特に増大させる方法は、道徳に反むいて居るといふ説は、これは又別種の議論であつて、ス氏はさういふ道徳の事まで考へて自分の研究を發表したのではないであらう。よしや考へても事實が事實であれば、學者としては發表すべきものであるのみならず、或は却てそれが結局、正しいヿに導くかも知れない。例へば吾々は本來子供を持つために、男女の愛情はあるものと考へてゐた。少くとも造物主といふものが若しありとすれば、男女間の戀愛といふものは、子供を産ませるためのみの用として造つたものであつて、男女のみの享樂は許さない。これは最憶説の甚だしいものであつて、尤も非學者的の考である。何處にも其證據はない、却つて自然の現象を静かに觀察したならば男女の愛情若くは雌雄間の牽引力、若くは雌雄別々に出來る美しい姿、美しい香其他のものは、必ずしも生殖の目的のみには用ひられてゐない。現に日本の名物の一なる櫻の如きは、實といふものは、大事な部分ではない。たゞ花其ものが大事なものである。鹿兒島地方に普賢象といふ一種の櫻があるが、此櫻の雌蕋は退化して、もとの青い葉に代つて居る。そこで普賢菩薩の象は、鼻の中から齒が出てゐる、といふのでこんな可笑しな名を附けてあるが、それは勿論花からして實は出來ない。花其ものが唯一の目的といはなければならぬ。即ち花の美其ものが目的であつて、實を造らえるために蝶々を呼んで受性作用を速進するといふやうなヿは、不可能である。これは序乍ら目的論的に、何は何のために出來てゐると、よく論ずる學者の誤り易き一例を指摘したに過ぎない。少しく精密に、虚心平氣に、宇宙の現象を觀察するならば、思ひも寄らぬ面白き事實を發見するのである。かういふ風に論じ來れば、スタイナハ氏が七十一歳の老人を手術して、此老人が再び結婚したいといふヿを云ひ出したので多數の老人が、吾も吾もと再結婚を主張する場合には、これは社會の現象のた

めに考へ物であるなどゝ云つて反對した學者等は、そのために、スタイナッハの方を壓迫するよりも、寧ろス氏がやりかけて居る婦人の若返り法を、更により以上に完成して七十前後の老婦人も亦再結婚を要求する方法を考へた方が人道のため却つて、盡すと云はなければならぬ。かゝる議論は余派に亘りて、際限がない。吾々學者としてはたゞ眞理を發見すればそれで職務は盡きるのである。其結果などを考察することは他に其人がある。

最後に一寸述べておきたいことは、墺國の現狀に就てゞある。世人も夙に知つてゐる如く墺國は、露國に次いで社會混亂に陷つてゐる。獨逸よりも遙に貧困饑餓に苦しめられてゐる。從つて道德も、在來のものは恰ど破壞されて、他の比較的秩序を保つて居る國家よりも混亂の狀態である。それで所謂道德の制裁力又は壓迫力といふものがない。卽ち在來の道德に幾分反むいても、國民は平氣でこれを見るのである。故にス氏の若返り法の如き、云はゞ道德的ならざるかの樣な方法も發見されたのであらう。現に性に關する研究は、ウヰンナ大學は尤も盛んなものゝ一つである。そしてス氏の本場であるだけ、其說の信仰者が尤も多い。獨逸が之に次いで多い。かゝる關係で、墺獨は、國家的に損失してゐるが、學問上に於ては却て自由な研究が出來て、そして意外なる大眞理を發見することが出來たものと考へられる。だから國が國家的に弱いからといつて、學者の研究までも、價値のないもののように考へるのは、それは考の足りないことゝ云はなければならぬ。これは贅言であるが、遂思はず文手に書くことになつた。（大正一〇、一〇、一二）

教育費削減批判

教育費節約論の側面正面

帝大助教授　大島正徳

一

輿論尊重とか衆意尊重とかは、立憲政治の骨子で、當代の精神であるとは、何人も異論のない所である。然るに、其の精神を無視して取扱はれるのが、いつも教育問題である。近頃政府當局者は何事にも、調査會を設けて事を運ぶ風をなしてをるが、其は事を愼重に取扱ふためであるか、或は面倒なる連中を懷柔するための手段であるか、其は何れにしても、調査會の設置は其の數極めて多い。大體に於ても、是れは衆知を借りるものとして善意に解しても差支なからう。然しまとに妙なことは其の衆知を集め衆意を取るべき筈の調査會について、事教育の方面に關する問題になると、殆んど、教育關係者は無視されて教育社會の官吏とか實業家とか議員とヵを以て、殆んど其の全委員をなしてゐる觀がある。所謂昇格案問題を中心とせるかの教育調査會に於ても、其の感が強いが殊に教育費節約を主眼とする教育行政調査會に於ては、全く素人の集會である。只僅に二三人を臨時的に教育關係者から參考人的に員に加へただけである。そこには何等教育關係に就ての代表意見を徴すべきものはない。全く教育を除外したる、且つ侮辱したる教育上の調査會である。輿論尊重とか衆意尊重とかいふ精神は教育界の問題については全く認められてゐない。教育界は全く專制乃至干涉政治である。自治教育も立憲教育も、本來あつたものではない。勞働者が、其自治的社會力が是認せられてゐないとすれば、教育者も亦さうである。それでゐて、其教育者に立憲教育を

求め、自治心の涵養を要求するなどは、矛盾極まることである。

これも一つは、教育者其人のあまりに自發心團結力のない所に由るといはなければならぬが、又一つは、從來、教育者を去勢的に作り、之を甘く見たる爲政者の傳統的精神のあらはれである。教育者の自治力自發力社會力を是認しないといふことは、國民教育の根本精神の宿る所を是認しないといふことである。立憲自治の政治形式は既に三十有年になつてゐるが、自治精神の缺乏して、腐敗破廉恥の疑獄事件が頻々として起ることは、教育の魂が輝いてゐないことを證明するものであつて、是れ又爲政家が、教育者を干渉壓迫して、自治的社會的精神の生きた空氣に住むことを禁制した結果である。其の例證は、教育者の生活の有ゆる方面に於て指摘することは出來るが、其れが最も世間的に大きく明かに表徴されてあることは、教育に關する調査會の組織についてである。そこには教育關係者は殆んど全く無視されてゐる。教育界の輿論はきかぬでもよいといふ風に組み立てられてをる。是れ、教育者乃至教育界を甘く見、從つて教育其事を尊重せざる精神のあらはれと見る外はない。教育外の他事項の調査會になると、法制にせよ、經濟にせよ、事外交にせよ、皆夫れ夫れの專門家を以て羅列され、たしかに衆知を集め、衆意をかりるやうに見えてをる。法制調査會、經濟調査會外交調査會、皆然りである。然るに、教育に關する調査會はとみると、全く教育界には縁のない意外の人ばかりである。之れで教育の大問題を決しやうといふのであるから、教育界を馬鹿にしたるも、程があるといはねばならぬ。殊に、今回の教育行政調査會の如きは、三學級二教員とか二部教授とかいふ最も教育實際家の考案と用意とを必要とする問題を、素人委員か案出して、それで、教育費の節約を企てやうとするのであるから、これほどの亂暴なる、又教育界を侮辱し、教育を破壞せんとする行爲はない。而かも、斯くの如きは、既に教育界に於て再三試驗せられ、其の成不績が明に認められ、國民教育の發展の上に採ることの出來ない方法であることは、定論となつてをることであるのに拘らず、ひとへに昔を思ひ出でてか、專ら教育界を甘く見てか、江木氏と原首相との二人の肝膽相照らすとかいふ世評通りに出來上つた企とすれば、これほど時代錯誤の擧はない。二人の頭の結合に依つて、教育整理法が決行されるといふやうなことほど、寡頭政治的色彩を帶びてをるものはない。江木氏は教育の事には熱心であるとはきいてをるが、其の熱心が、國民教育の根本を推すやうなことに向けられ、教育界の輿論に逆行して用ゐられるといふことであるならば、其の熱心をも排らなければならぬ。又原首相が近頃の實力首相である

とは世評もあることである。又國民教育には最も理解が乏しいとは、教育界の通論になつてをる。現内閣が高等教育機關の増設、大學昇格問題の如きに力を用ゐて割合に、能率をさげんまでも、國民教育費の節約をはからうとする所は、事の理解の程度のいかに低きかを察するに足ることである。

二

今日の地方費は、其の大半を教育費に充てゝをる。而して市町村は、其の經費の重なるに困んでをる。故に何とか此の窮狀を救濟する方法を講じなければならぬといふことは分つたことである。夫故に今春は市町村長と教育界とは相合して、教育費國庫支辨の斷行を要求した。是れ時の輿論であつて此の事に反對したものはない。これに依つて市町村民も其の負擔より救はれ、教育者もかねての希望を達成し得る譯である。これをさへ實行すれば何でもない。而して政友會内閣は、更に調査される譯である。然るに意外にも、前議會に於て、政友會の某代議士は、教育費三四割節約の餘地ありと叫んだ。洵に意外千萬の聲で、教育者は其の後さんざ其の身のまはりのものを見廻してみた。然し遂に何物をも節約し得べきものを見出せなかつたのである。然るに更に意外にも其れが教育行政調査會といふ組織の下に、三學級一教員といふやうな古く否認されたものを持來つて實行されかゝることになつて來た。けれども、今こそはもう古い時代は過ぎてをつた。教育界も漸く自覺期にはいつて來た。弱い教育者も、みづから勇を鼓するより外には道がないことを熟々と悟つて來た。而して現に毎日新聞紙上に見るが如き、教育社會全體の猛烈なる大反對である。而し世人は斉しく此の反對熱を當然視するやうになつて來た。政府當局者も、諮問案を答申案に書き換へ、節約案も、節約し得べきは節約し增額すべきは增額するといふ御尤至極な方針に改めることになつた。是れ驕るものも遂には久しからずの類であらう。とにかく此の機に於て、輿論尊重、自治協同の精神が、教育界に於ても認められ働くやうになりつゝあることは、慶賀すべきことゝいふべきである。

教育費を國庫支辨にすれば、した額だけは國費支出をますことは明白である。然し教育費に於て節約されやうとする千萬圓か千五百萬圓の金額は、之を十餘億の國費の内に於て節約をはかることにすれば、それほど難事ではあるまい。各省に分つて天引するも可、況んや軍備縮少論の漸く旺んなる時に於ては、之れだけを軍備に於て節約するは更に可である。或は、此の種の論を以て、教育界の我儘論と評するものもある由である。自己

の如に屬することは少しも節約する氣なくして、他の如に於て節約をせよとのみいふは、利己主義である、黨派根性である。國民の負擔を輕減しなければならぬと云ふ大前提の下に立つて自省すれば、自己の如に於ても節約すべきものがあれば節約をはかることが至當ではないか、といふのである。此の消德的訓言は理論としては當を得てをる。然し、事實の問題としては、教育界に於て、今日以下に經費を減ずるといふことは、教育を退化せしめ破壞せしむるに外ならぬ以上、而してこれが教育界の輿論として明白である以上、かゝる訓戒を以て、教育界の意志を枉げることは出來ぬ。それも有ゆる國費を一齊に天引するといふ方針であるならば、已むを得ざることと觀念しなければならぬが、教育費に於いてのみ、而かも常に日蔭者視されてをる教育者に於てのみ、經費が節約されなければならぬといふことは、いかなる道理があるのか、到底了解に苦しまざるを得ない。

想ふに、何故に、獨り教育費に於てのみ節約が試みられるかについては、一應の事實上の根據は、地方費が嵩むからといふとであるが、深い根本の理由は、原首相の胸中に存するといはなければならぬ。其は初等教育は、專ら地方費を以て之に充てなければならぬといふ原則が、胸にあるからである。此の原則が、其の胸から和らげられない以上、原首相がある限り、教育費節約の問題は、必然に附隨して來る現象である。傳へられる所によれば、原氏は、高等專門以上の教育費は、國費を以て中等學校費は縣費を以て、初等教育費は、市町村費を以つて之に充つべきものといふことを原則としてをるといふことである。大中小の便宜的順序に依つたものであらうが、初等教育は、即ち國民の基礎的教育であり、義務教育であるといふ意義が無視されてある。成ほど、一面から觀察すれば、市町村は其れ夫れ自治團體であるから、自治團體内の生活に屬することは、出來るだけ其の自治力に任せた方がよいといへるであらう。其については、勿論、異論はない。夫故に、校地校舍學校用具等の費用は市町村の費にまつべきことであり、又教員待遇の道も、餘力ある市町村は、優待して良教員を聘せんとするのも、至當であらう。然しながら、一面に於ては、國家の義務教育であつて、市町村の任意に放置すべきものでないことを知らなければならぬ。初等教育を自治體に任せるといふ意味が、其の欲する所に從つ、て可なりとすることであるならば、裕福なる市町村は、六箇年を七箇年にも八箇年にも延ばし其の地方だけの義務教育として、兒童を仕上げるに經費を用ゐ貧乏の市町村は五ケ年にも四ケ年にも、短縮し、短縮せずとも、教師は無資格者を以て充し、

所謂讀み書き十露盤だけのことを教ゆるに止まるものもあらう。全然初等教育は、地方によつて區々別々になることになるであらう。然らば、國定教科書の必要もなく、小學校細則の必要もなく、教師の資格の制定も必要はない。教育は全く亂軍のまゝに任せ、市町村の貧富に從つて、兒童教育程度は非常に相違あるまゝに放置しておけばよいといふことになる。然しかくの如き狀態になるといふことは、義務教育を施ひた方針でないことはいふまでもない。太郎次郎は、一兵衛二兵衛の子であり、市町村民に屬するが、同時に國家の公民である。夫故に、兒童の教育は、國家の責任ある重大事項として、義務教育を施き、六箇年ときめた其の間に於て、出來るだけ、能率のある教育を施し國民の前途を、出來るだけ、健實に保證して行かうとするのである。故に、これがために市町村費が嵩むならば、國家は此の方針を取る義務として、其の多くを負擔しなければならぬ。否最初より、教員俸給の一切は、國庫に於て之を負擔するのを、當然の義務となすべきである。これを至當とするが故に、從來教育界に於ては、其の輿論として、教育費國庫支辨論を唱へて來たのである。かやうに、初等教育は義務教育として國家が設けた方針である以上、其の費用の大半を負擔するのは、其の當然の義務であらねばならぬ。然るに初等教育は、市町村の自治に屬することであるから、國庫で負擔する必要はないといふならば、國家の義務教育ではない。市町村の義務教育である。夫れは市町村の任意次第である。從つて、かゝる考へ方は所謂義務教育の根本を破壞する精神であることは、勿論である。故に、原首相が、初等教育は、市町村の經費に待たねばならぬといふやうな原則を胸に懷いてをるとすれば、義務教育の破壞心を懷いてをるものといはねばならぬ。此の原則を主義とせるが故に、市町村費輕減の方法として、ひとへに教育費を節約せんと欲し、之を國庫支辨に廻はすが如き念頭の少しもないが如くに思はれるのも、當然の心理といはなければならぬ。

然しかゝる考へは、義務教育其の者に關する當然の論理でないことは明白のこと、且つ又正當の倫理でないことも明である。而して今日教育者が、四方に猛然として奮起したのも、當然の論理的倫理的觀念に基くものである。之を濫りに非議するものは、義務教育の論理及倫理を解せざるものである。

三

本問題に關する、もう一つの謬見は、所謂劃一打破の聲である。劃一打破といふことは、教育界に於て屢々唱へられたことで、良い響をもつてをるものであることは、誰れも承知して

る。然るに、此の劃一打破といふ聲が、とんでもない方面に應用されるに至つては、むしろ噴飯に堪えない。初等教育費節約の理由として、劃一打破がさも大なる理由であるが如くに唱へられることは、全く劃一打破論のはき違へである。尤も或る意味に於ては其の論が、同時に經費節約論にもなり得る。例へば、都會と田舍と同樣の校舍を建てるには及ばないとか、同樣の制服を設けるには及ばないとか、いふやうなことであれば、其は夫れ夫れ其の地に適當したもので差支ない譯である。然し、本來、教育上の劃一打破論なるものは、教科目の取捨選擇を許し、商業地農業地、漁業地等に應じて、夫れ夫れ、知識内容を適當に按配して教授するがよいといふことである、其他訓練の方法等についても、出來るだけ學校當事者の創意が許さるべしといふことであつて、經費節約を目的としたものでなく、教育の能率を一層あげんことを目的としたものである。然るに、劃一打破論の上に經費節約が考へられ、而して三學級二教員制が其の案とされてをる。地方費のかさむ所では、三學級二教員制となし教員給の三分の一を減じ、負擔の輕減をはかれ、といふのである。これが劃一打破法だとされてある。まことに教育の効果を削ぐことなくして、其の制が能く行はれ得るならば、其れもよからう。然し然らば貧村に限らず、凡ての地方に於て人物經濟の上から其の制を用ゐるに若かずである。けれども、さうとは唱へず、貧村によつてやるべしといふのは、其れが教育の効果を削ぐに至ることを暗示してをるものに外ならぬ。けれども、表面上は、能率を下げることなしと吹張されてある。然し其は實際を知らぬ論であることは、今日の輿論が明に之を語つてをる。若し強いて、効果の如何を問はず、貧弱町村に於ては、經費節約のために、其の制をとれといふにあらば、其の町村の兒童は國家の公民としての資格を十分に認められない、ことになる。日本の少國民に義務教育を施すといふ、趣旨は立たなくなる。國家としては、何處の兒童も、國家の大切なる一員なる以上は、國民教育は一樣の高さに教養すべきが當然である。勿論都會地や田舍に應じて、學科内容等については取捨選擇の自由あることを可とし、所謂劃一的ならぬことをよしとするが、夫れ夫れ、六年間は六年間だけの教育の實際的効果が十分にあらはれるやうには、何處でも一樣に努力されなければならぬ。金持の所は金次第に能く教育し、貧乏の村は貧乏のまゝに十分の教育を施さぬのを是認することは、義務教育の根本精神に背馳するものである。むしろ、其の點からは劃一的に、六年間の教養の効果のあがるやうに努められなくてはならぬ。否むしろ、今日世界の大勢から押して考へれば、國民の粒を良くすること

が最上の策であるが故に、義務教育は六年より八年更に十年にまで延長し、國民をして眞に機會均等的社會生活に出發點を占むることを得しむるのが、最も合理的であり、且つ最大急務であると信ずる。

四

我國は一等國だなどとは、事毎に言はれることであるが、能く省みれば、其の文化的位置は、乍殘念歐米に比して遙に低い。弱い支那と露國とに打勝つた御蔭で、東洋に大をなしたが、其れがために軍國主義の國家を以て常に目されてをる。日本人が本來軍國的國民性のものであるかについては、予は疑をいだくものであるが、とにかく現代の表面に於て、軍國的色彩の強いことは否認することは出來ぬ。他國の我國に心を用ゐる點は、其の色彩を通じてゞある。我國に於て從來、社會的國家的價値のおかれたものは軍人である。國費の上に於ても明白に軍國的色彩を示してをる。之に反して、文化的方面は、國內に於ても之により多く價値が拂はれてゐない。文化方面の最大の事項は教育である。地方に於てこそ、教育費はかさんで來たが、一人宛の教育費としては歐米に比して遙に少い。而かも、精神的待遇に於て、教育社會は決して、より多くの價値がおかれてゐない。既に從來の調査會の組織、教育者に關する取扱法が、明かに之を物語つてをる。

今回の大戰の結果は、國家は所謂軍國主義に依つて維持され得ないことを明に語つてをる。所謂軍人だけが國家の存在力を組織し得ないことも明白である。國民の有ゆるものが其國家社會生活についての自覺を有し、夫れ夫れ人格的實質價値のあるものに依つて組織されなければ、外から亡されぬとも、內から崩れることも明である。之れについては國民の教育を高め、其の粒を良くすることが、何より必要のことである。此に歐洲諸國はめざめた、而して戰時より義務教育統一教育の向上普及に努力してをる。かの過激派政府に於ても、其の大切なることを認識して、一般教化の向上に努めてをる。結局、今日は特殊的なる狹小なる軍國價値より、普遍的文化價値にめざめて來た時である。これが又人類初等の合理的進化である。有ゆるものが人格的に取扱はれ、精神的に社會の聯帶協同的生活を營なまなければならぬ時である。而して是れは教育事業の重視を以て第一としなければならぬ。所謂教育第一の原理である。是れ實に最も強く要求されなければならぬ緊急事である。他事は辛棒しても、此の事だけは大に進めなければならぬ時である。嘗ては金はなくても軍備のためには、無理にも絞り出さねばならぬと

は、我國に於て歴考へられて來たことであるが、今日に於ては金はなくても、教育の普及向上のためには何とか工夫してみなければならぬ時である。只これ國民の自覺次第である。爲政者の努力一つである。而して、從來、軍國價値のみ認めて、文化價値を知らなかつた。我國民も、今度の世界的大變動を緣として、漸く、此の事に自覺して來たやうである。けれども只一つ此に自覺しないものがあつた。其は政友會乃至其の一派である。

教育が大切といふ見地よりも、只金がないといふ見地、否、ない場合には差當り教育方面から節約するといふ見地に立つて、今回の教育費節約案といふものを案出するに至つた。然し其の無理なることは、先きにも述べた如くであり、且つ天下の輿論は斷然として之に反對するやうになつた。是れ時代精神の新舊價値の顚倒に氣づかなかつた當然の果報といはなければならぬ。

（十月十四日）

整理と削減

慶大教授　阿　部　次　郎

教育費と雖も整理の餘地があるといふ議論は尤である。併し全體として教育費を削減して之れを他に廻はすか若しくは國庫と地方町村との負擔を減じようとするのたらば、それは必ず教育の實質を低下するに極まつてゐる。教育費を整理して之れを今よりもつと有効に使はうとするのならば私は整理といふ事に賛成する。併し削減の意味で整理するのは絕體に反對である。教育費は全體としてまだまだ増加する必要が有る。之れを削減するなどは思ひもよらない。

私は子供の時分に二學級一教員並に三學級二教員の教育を受けた事が有る。吾々は時々教場で何もせずに遊んで居たり自分の仕事を忘れて隣の級の話に氣をとられたりしなければならなかつた。それでも一通り教はるべきものを教はつたには違ひないが、若し一學級一教員ならば吾々の進歩はずつと早やかつたに違ひない。

又私の娘が今行つてゐる町の學校は二部教授であるが、見てゐると文部省所定の課目を定められた學年内にやりきつて仕舞

ふ事はとても出來ないらしい。充分飲み込ませずに形式的にやつて仕舞ふか、若しくは後れるのが普通の樣である。一學級一教員の私立學校へ行つてゐる友達の子供に比べると、家庭で之れを補ふ樣につとめてゐても、隨分後れ勝である。實際、兩方ながら充分に時間を利用するものと假定した上で五時間の授業と四時間の授業と同一の効果を舉げるといふ事はどうしたつて考へられない。五時間の授業に堪へるものを四時間しか授業をしないのは甚だしい時間の不經濟である。若し今日の學課の割り當が四時間で充分やつて行けて、子供の能力は一日五時間の授業に堪へるものとすればみつしり五時間づゝやつて年限を短縮する方がどれ丈け利益だかわからない。

二部教授若しくは三學級二教員でも教育の實質が低下しないといふ論者から其の論據になる事實をききたい。他の條件は全く同じにして置いて、只一教員一學級と二部教授若しくは三學級二教員の組織丈を別にし、兩者の効果を嚴密に比較する樣な實驗はとても出來るものではないと思ふ。それから一週間交代に午前に行つたり午後に行つたりする爲めに子供の生活が受けるデリケートな影響なども、その論者の勘定にははいつてゐないらしい。老人の大ざつぱな頭で、かういふ問題を獨斷されてはたまらない。

併し多少實質が低下しても校舍若しくは地方費が足りなければ仕方がないぢやないかといふ人が有るかも知れない。そこで吾々は教育費を削減する前に削減す可き費用が無いかどうかを考へて見なければならぬ。私は普通の軍備縮少論者とは少し違つた意味に於いて軍事費に大に削減の餘地が有る事を信ずる者である。

一體軍備縮少論の根據を總豫算に於ける軍事費の割合に求めるのは有効な議論とは思はれない。若しその國が強大な隣國の壓迫を受けて、軍備を充實しなければ、その存立を保つ事が出來ないのに、その國の財政が貧弱であるとすれば、豫算の九分九厘まで軍事費にするの止むを得ざる場合もあるであらう。私は現在の日本に向つて國防を廢して宋襄の仁を學べと要求する程勇敢な理想論者ではない。アメリカの海軍が今日の樣に擴張されてゐる限り、日本も亦、少くとも之れを防ぐに足る程の海軍力を維持するのは止むを得ないと思ふ。此の點に於いては私は只、今度のワシントン會議で國防を危くせずに海軍の縮少を實行し得るやうにする樣に、全力を舉げて努力する事を希望するのみである。

併し陸軍の方では事情を異にする。ロシアが陸軍國として復活する處のなくなつた今日に於いては、假令支那の事で戰爭が

起るにしても我國の常備軍はもつと減少する餘地があると信ずる。この點について陸軍の當局は若し國防上どうしても現在の常備軍を維持する必要があると信ずるならば、もつと誠意を披瀝して國民の諒解を求める必要が有る。

又假りに常備軍も、今日以下に減少する事は出來ないにしても、猶軍事費の中には整理（この場合に於いては整理卽削減である）の餘地が有るに違ひない。かういふのは決して兵卒の給與や隊内の費用を今日以上に節儉する事を要求するのではない。その點に就いては、私は寧ろ出來るならばこれを一層善くすることを希望したい。併し私は、軍人内に於ける特權階級――所謂秀才や天保錢組の使用する費用（旅費機密費其他）の中に大に整理する事を要する冗費が無いかを疑ふ者である。一例を言へば歐羅巴にゐる友達からの手紙によると、駐外武官は「少尉の小僧」（其の友達の言葉をその儘借用する）でも他と釣合のとれぬ程多額の出張旅費を取るとの事であるが、この類の冗費は定めて多い事であらうと思ふ。少くとも吾々はさういふ疑ひを持つてゐる。どうしても國費を削減しなければならないならば、先づその邊から手をつけて貰ひたい。

これは餘談であるが、私は廢兵の食ふに困つてゐるのを見る度毎にせめて勳章の年金を減じて之れを廢兵扶助に使つたならば、彼れ等はどんなにか助かるだらうと思はない事はない。勳章は名譽の表彰であらうから、之れに附隨する年金は如何に少くとも、勳章の價値は減ずる事は無い筈である。若し勳章を持つてゐる軍人がその戰友の不具になつて困つてゐるのを見たならば其の人は自分が年金を貰ふ事を濟まないと思ひさうなものだ、さういふ心持から年金の辭退と廢兵扶助の運動が軍人の中から起つて來さうなものだと私は常々思つて居た。併し未だ嘗てその運動の起つた話を聞いた事が無い。この事實は私に、軍人内に於ける特權階級の無私に就いて或る疑を懷かしめる。國民のかういふ疑を解く爲めにも軍事の整理は必要であらう。教育費を削減するのは、比較から言へば、勳章の年金はそのまゝにして置いて廢兵の扶助金を減らす様なものである。私は教育と廢兵とを比較しなければならぬ現狀に就いて深き憤りを感ぜずには居られない。

窮死の露にさへも劣る餘裕

早大教授　杉森孝次郎

國民教育費に、大増加を努力して實現すべき必要強き今日、却つてそれに小削減を苦策する當路者は、時代錯誤の官、公人だ。なぜ、國庫負擔の公正則を、決意して進まうとはしないのか。國民教育振作の必要が、明確に、切實に意識されないからだらう。理想なき現實一點張りの政治家の、落ち入りさうな一弊だ。いはゆる五大國の一にも列したらん新興弱小國が、國民教育に、本質的に不足な、また周圍の先進國や、競爭國や、協力國に比して、劇しく低率な努力を投資してをることは、悲慘なる現實だ。弱い者いぢめに、一千萬ばかりの乞食錢を、無理やりにひねりださうと試みる時間と興味とを有するに至つて、涙をしぼる固だ。

古い資本主義の英國でも、一九一八年の教育法令に於いて、義務教育の擴充、補習教育の發展、國庫負擔の飛躍的增大を、すなはち全義務教育費の半額負擔を、英斷した。新らしい社會主義の露國でも、あの混亂と險艱をきはめた眞只中にあつてさへ、幼少年者の教育だけをば、實に萬綠叢中の一點の紅にも譬ふべき奇蹟的好成績に於て示してをる。レーニン氏に罪過ありとしても、教育上の絕大努力は、彼の眞價に九鼎大呂の重きを與へる。義務教育の延長、補習教育の發展、義務教育費の國庫負擔の最大化の努力、これらは、わが國にとつては、確かに歐米先進國に於けるよりも遙かに高い時務的必要だ。すなはち正しい意味の政治的必要に屬する一大事だ。曰はく、校舍の新築、改築增築費の節約、曰はく、備品消耗品費の節約、曰はく學用品費節約、なんといふ惡鬼的繼母質の調和結論だらう。窮苦まさにその身命を枯らさんとしてをる歐露に於いてさへ、幼少年者だけは、いかに深く且つ暖かにき、豐かに食ひ　驚くべく完全なる設備をその學窓として、教育園として享樂しつゝあるかを一顧せば、そして、こひねがはくば再認せば、いはゞ聖雄主義の信者たるべき今年の日本としては、すこしく恥ぢるところがあつてよささうだ。ウエルズ氏の『陰影のロシヤ』を一讀したまへ。

共產主義に對しては、正しい批評眼をむけてをる同氏も、またレーニン氏を、鵜呑みには信仰しない同氏も、現在の露の小學校の眞價には、敬虔の襟をただしてゐる。ロイド・ジョージ氏も、フィッシャー氏を信任するところに、當代の政治家たる一要件を示し、レーニン氏も、小學教育に最も深い、高い誇りを寄せてをるところに、新時代の英雄たる一資格を示す。わが國の政治家や英雄も、いつまでも暗室に盲動してゐてはいけない。能率を高めるために、數量の上に純化的削減をほどこす餘地は、國防のうちの或る方面にさへもあると聞く。なにを苦しんで小學教育といふ、赤子の乳をへらさうと企てるか、國民の進步的精神の聖慣をまねくやうなことを、爲政者は、やつてみて驚き、目醒めるやうな淺識小器であつてはいけない。

新刊紹介

□ゴシックの文化と建築　森口多里編）ゴシック建築の叙述の中から一般のゴシック文化の概念を掴むことが出來る（定價貳圓五拾錢、牛込區市谷谷町九三、洪洋社發行）

□法成寺物語（谷崎潤一郎著）現代脚本叢書第三篇にして法成寺物語、十五夜物語、春の海邊の三篇を收む。（定價一圓、新潮社發行）

□現代國家批判　長谷川如是閑著）明快なる氏一流の理論と筆致とを以つて現代國家を科學的に解剖批判せるもの即ち先づ國家を發生學及進化的に觀察し、次で主權に對し同樣の觀方を以てし、更に既成國家道德に關する批判を試み、及び政治の事實と思想とを同樣の態度にて取扱へるものにして最近の好著である。（定價金三圓五十錢、弘文堂發行）

□青家と其弟子　長與善郎著）曾て白樺誌上に揭げられ高評ありしもの也。（定價九十五錢、叢文閣發行）

□惱しき春（加藤武雄著）主人公たる若き教師の痛ましくも眞摯なる步みの記錄にして四六判四八〇頁の長篇である。（定價金二圓、新潮社發行）

□第六感を交へて（理學博士三宅恒方著）丁抹附人の名に於て讀書界に知られたる博士の隨筆を蒐めたるもの也。（定價金一圓八十錢、實業之日本社發行）

□名所便覽二三日（大村貫吉、藤岡良三共著）東京を中心として短時日手輕　旅行案內書として最近の好著である。（定價金二圓卅錢、綠葉社發行）

□夜明け前の歌（ワシリーエロシエンコ著）悄然として漂泊の旅に上れる盲詩人の名殘たる、狹い籠以下十　篇を蒐めたるもの（定價金一圓八十錢、叢文閣發行）

友愛會大會の印象

山川均

日本勞働總同盟友愛會の第十回大會は、十月一日より三日に亘つて開かれた。全國の三聯合團體及び支部の代表者百二十餘名、そのうち關西聯合會を代表する五十餘名の代議員諸君は、いづれも最近に於ける大阪及び神戸に於ける激烈な階級戰の戰場から、直ちに此大會に向はれた人々である。本年の大會は、議事の内容に於ては必ずしも格段に重大なものがなかつたにも拘らず、日本に於ける最も重要な工業地帶たる阪神——日本の勞働運動の本隊たる可き使命をもつて居る、しかし今日迄は、却つて東京に比して多少の遜色があると一般に見做されてゐた阪神——に於ける勞働階級運動の提起を意味する最近の爭議を背景として居るだけに、異樣の緊張を示してたのは怪むに足らぬことである。

□

大會が吾々に與へた第一の强烈な印象は、日本の組合運動は、今や確實に舊式の職業的組合主義(トレード・ユニオニズム)の域を脱したといふことである。日本の組合運動も、それが組合運動たる限りは、勞働條件の改善といふ、資本階級の搾取に對する部分的の征服を忘れぬと同時に、決して此部分的の勝利を以て始終するものではなく、資本主義の完全なる征服といふ、明白に意識した目標に向つて進んでゐる運動である。日本の勞働階級の理解する組合運動とは如何なる本質のものであるかは、此大會に於ける代議員諸君の言論と其決議によつて充分に表明せられて居る。

大會は先づ、小ブルジャア的の軍備縮少運動に對する抗議として、軍備撤廢の決議をした。此決議は『軍備縮少を主張の一項目に入れ、之が實行の爲に宣傳をなすこと』といふ提案が、殆んど議場の問題とならずして葬り去られたことゝ相待つて、資本制度と其必然の結果たる帝國主義的戰爭とに對する、勞働階級の撤底した理解は窺はしむるに足るものである。少くとも此大會によつて代表せられた日本の勞働者は、資本制度そのも

の、撤廢によつてのみ、世界平和の實現を期待する堅き決意を表明したものである。そして之は獨り此大會に代表せられた勞働者ばかりでなく、日本の全勞働階級の──少くともその先驅たり前衛たる階級の──明白な意志を反映したものであらうと思ふ。

これと同時に、『太平洋會議に勞働代表を派遣すべし』といふ提案が、之れ亦た議場の一顧をも與へられないで葬られたところを見ると、軍備撤廢の決議は、單に資本主義的帝國主義に對する、抽象的な思想と原則としての抗議に止らないで、現に目前の具體的事實たる『太平洋會議』に對する抗議と見做さなければならぬ。

太平洋會議の資本主義的性質は、今更ら云ふまでもないところであつて、それは帝國主義的政策によらなければ切り拔けることの出來ない、資本主義の押し詰つた形勢に對する不安と、共必然の結果たる第二の世界戰爭に對する恐怖の反映であることに於ては、一九二一年の太平洋會議は、一八九九年のヘーグの『泥棒の晩餐會』の復習に外ならぬ。唯だ一九二一年の『晩餐會』がヘーグに開かれずにワシントンに開かれたのは、將來の搾取の舞臺が、支那、滿洲、西比利亞に移つたからである。太平洋會議は、或は或る期間の間、太平洋上の戰爭を防止することが出來るかも知らぬ。けれども太平洋戰爭と太平洋會議との相異は、何づれの資本主義國が亞細亞大陸の自然と民衆とを搾取する、權利を獨裁するかといふことに代へて、數箇の資本主義國が、如何なる割合で搾取の權利を配け合ふ可きかを決定するだけの相異である。國に對して勞働階級の取る可き態度は明白である。國際聯盟の勞働會議によつて充分に教訓せられた日本の勞働階級が、太平洋會議に對して、よし積極的の抗議を表明せぬ迄も、驚く可き冷淡を示すのは固より當然のことである。

□

『團體交渉權要求運動反對決議案』は多數によつて否決された。提案者の說明によると、此決議案は、組合が資本家と對立して、團體として交渉するの機能を持つことに反對するのではなくて、この團體交渉權の承認を資本家に要求することに反對するものである。これが恐らく提案者の精神であつて、この精神そのものに就ては、大會の議場にも多くの異論がなかつたようである。何故ならば、組合が團體として交渉する機能を、完全に行ふことの出來るのは、資本家の承認によつてゞはなくて、組合の實力によるものだからである。

然しながら實際の政策問題としては、固より異論の餘地があ

る。少くとも組合運動の初期にあつては、運動の目標は一定の賃銀の増加、一定の時間の短縮、又は其他の勞働條件の改善といふ、特定の問題、個々の問題になつた。この場合に、組合は一個の團體として資本家と對立しなければならぬといふ、抽象的な一般原則の主張の爲に戰ふようになることは、明らかに組合運動の進歩に相違ない。若し純粹の理屈から云へば、如何なる勞働條件の改善も、之を維持するものは組合の實力であるから、例へば八時間勞働の承認を資本家に要求することも無意義といふことになる。要するに程度の相異であつて、此場合に於ける眞の問題は、團體交渉權の要求といふことが、今日の形勢の下に、組合運動の標語として適當であるかどうかといふ實際の運動政策上の問題である。大會の多數が此議案に反對したのも、恐らく政策上の問題として、反對したものであらう。

□

大會に於ける最大の問題となつたものは、東京鐵工組合の提案に係る『全國的總同盟罷業の行動を認め、主張の一項目に加ふ、同時に普通選擧の項目を削除する』ことであつた。

これに就ては原案賛成、反對、並びに普通選擧の項目を削除するに止むべしといふ修正説との三つの意見に分れたが、反對派は五十三名、原案賛成と修正説とは各々二十七名であつたから、作戰上の手落ちがなかつたら。一票の差によつて修正案が成立し、少くとも普通選擧の一項目だけは削除し得た譯である。

然しながら原案に對する反對が多數を占めたにも拘らず、注意すべきことは、この提案の精神に至つては、一人の反對者をも見なかつたことである。殊に原案派も反對側も共に善戰し、殆んど剩ますところなく論議を盡した觀がある。この提案の目的が、思想上の宣傳にあつたことは明かであるから、この意味に於ては、提案者の目的は充分に達せられたものであつて、現に原案に對して反對の立場を取つた關西同盟の諸君の間では、夙に普通選擧に關與せぬ決議が通過されて居るといふ程であるから、普通選擧の一項目の削除の如きは、敗れても勝つても大した問題ではないのである。

□

最近の爭議の結果として、關西では數ケ所に於て現に工場委員制度の實施を見て居るが、此制度に對する大會の態度は極めて冷淡である。此制度を獲得した關西の代表者すらも、此制度に對して、殆んど何等の期待をも囑してゐないことは注目に値ひする。『吾々は資本家の與へたような工場委員制度の爲に戰つたものではない。唯だ之れ以上の獲物を得る實力がなかつた

から、與へられるものを取つたのである。けれども吾々は之に何等の期待をも持たぬ。若し吾々が之に何等かの期待を持つとすれば、吾々は工場委員制度の經驗によつて、苟も資本家階級との協力を意味するような一切の制度が、到底無益であることを、一層明白に知ることとである』。之が關西の勞働階級を代表した、工場委員制度に對する感想である。或る組合から提出された『工場委員制度實施案』が、討議に入らない前に、提出者によつて撤回された一事を見ても、此制度に對する大會の意向を窺ひ知ることが出來る。（林癸巳夫氏は、『中央公論』十月號の誌上に、『欺瞞か誤謬か――團體交涉權と工場委員會とを混同せる我勞働爭議の現狀』と題する論文のうちに、この『爭議の渦中にあつた罷工團の指導』すらも、この兩者を混同してゐたことを痛論し、『日本の社會運動の現狀に對して』盛んに『嘆辭――』を發せられて居るが、現に此爭議に加はへた代議員諸君の言論を聞いたところでは、少くとも日本では、團體交涉權のつもりで工場委員會といふ贋札を受取るようなお人よしはないらしい）。

資本家によつて與へられた工場委員制度は、その儘では殆んど無益なものであり、或は有害なものであることは、大會の均しく認めたところである。然しながら既に此制度が現在する以上は、そして資本家の爲に一種の僞瞞の道具として用ひられる恐れがある以上は、決して冷淡に觀過することは出來ぬ。況んや政府は、工場委員會制度の調査中であると傳へられてゐる位であるから、或は近い將來に、此制度が一種の僞瞞策として、一般資本家によつて實施せられるかも知れぬ。そこで現在あるが如き工場委員制度を獲得する爲に戰ふと云ふことゝ、既存の事實としての工場委員制度を、勞働階級が如何に改善すべきかと云ふことゝ、更に之を勞働階級運動の爲に如何に利用す可きかと云ふことゝは、自づから別問題である。そこで最近に關西同盟大會に於て、工場委員大會開催の決議を見たことは、極めて有意義なことであつて、更にこれを常設的の組織たる工場委員評議會としようとする赤羽鐵工組合の提案は、慥かに考慮の値ひある議案であつたと思ふ。唯だ現存の工場委員制度そのものに對する不信任と不人氣の餘勢でもあつたが、遂に此の案の撤回を見たのは、聊か惜む可きであつた。

□

大會から受けた最も著るしい印象は、友愛會の組織が、著しく分散的となつたことである。昔日の友愛會は、唯だ漠然たる勞働者の集團と云ふに過ぎぬもので、全國に散在する個々の勞働者が、友愛會本部によつて間接に團結して居るといふまでゝ

あつて、名目の間を直接に結束する、何等の有力な紐帶も無かつた。そこで唯だ勞働者の散漫な集團の上に、中央集權的の本部が載せられてあるに過ぎなかつたのである。

ところが先年の大會の決議によつて、支部を改めて産業又は職業的の組合とする根本方針が確立せられて以來、形勢は一變した。今日の友愛會は、大部分全然獨立した組合より成るものであつて、本部の職分は著るしく減じて居る。そして全國大會の如きも、假りに實際上の行動に關する一定の決議を通過しても、此決議が果してどの程度まで、總同盟全體の行動を支配するかは疑問である。

斯ようにて現在の友愛會は、各部分部分の結束が鞏固となるに從つて、統制權は漸次に各部分の手に移り、全體としての結束はそれだけ弛緩したかの觀がある。然しながら、之は組織の上の進化、組合運動の『質』の上の進化に、必ず通過しなければならぬ徑路であつて、決して憂ふ可きことではない。全ての團體組織は集中的でなければならぬことは無論であつて、曾てプウゼーは、C・G・T・の組織が三段の集中となつて居ることを誇つたことがある。けれども何を集中するのであらうか。云ふ迄もなく各部分部分の活動と意志と戰鬪力とを集中するのである。昔日の友愛會のような散漫な集團には、集中せらる可き各部分の活動も意志もない。そこで惡るい意味での中央集權はあり得るが、眞の集中的の組織――デモクラチックな集中――はあり得ないのである。最もよき組織は、各部分に最大の活動を許るすと同時に、この各部分の活動を最も有効に集中して、意志と行動との焦點を造るところの組織である。そしてそれが爲には、散漫な集團が、唯だ中央の本部によつて間接に繋がれて居るばかりでなく、各組合員と組合員とを直接に結びつける有力な紐帶がなければならぬ。友愛會の組織は、今尚ほこの分散的の作用が進んで居るものであつて、斯くて造られた各部分の力は、再び有効に且つ有力に、或る一つの焦點に集中されるに相違ない。

□

友愛會の大會を觀て最も意を强うすることは、僅々兩三年間の實戰によつて、日本の勞働階級が如何に有力な戰士を產みだしたかといふ、今一つの實證を得たことである。勞働階級を强くするものは唯だ戰である。私は細かな點に於て或は意見を同ふし、或は意見を異にするに拘らず、是等の勞働階級の先驅者たる戰士に對して、敬意を表するものである。

おめでたい往生

堺利彦

『…………、…………………。…………………、……
……、…………………、…………………
…………。』
『………………、…………………、……
……………………………。………
………………、……………………。……
…………………。』
…………、…………………………。……
……………………………………。……
……………、…………………、………
……。然し、其の漠然たる『見せしめ』的『痛快』以上に、

果して何ほどの批評と解釋とがあつたらうか。

模範的資本家、道徳的富豪たる澁澤さんの此の事件に對する批評も、矢張り右の店頭批評より以上に一歩も進んではゐない。澁澤さんは曰く『勤儉に徹底し、言行の一致を以てあれだけの富を致されたことには敬服の外はないが、氏が其の金力と勢力を今少し國家の爲に用ひてくれたならばと痛切に感じさせられることがあります。』

澁澤さんも店頭批評家も、安田氏の富その者に對しては、十分の肯定を與へてゐる。澁澤さんは、其の點に於いては『敬服の外はない』と云ひ、只それを『國家の爲に用ひ』なかつた事を遺憾としてゐる。店頭批評家も『金を山ほど積ん』だ事には

異議を挾まないで、只それを『使ふ道』を知らなかつた事を批難してゐる。だから若し安田氏が其の山ほど積んだ金の中から、百分の一でも千分の一でも、折々『國家の爲』と云はれる事に投げだして、慈善家となり、社會事業家となり、そして別莊の座敷で無事に天命を終へたのなら、澁澤さんも店頭批評家も、同じく大滿足に極まつてゐる。從つて社會の輿論は只だ安田氏の生涯を讃美した事であらう。

そうすると、あの事件は只、富豪をして其の山ほどある金の中から、百分の一か、千分の一かを投げださせる爲の、『見せしめ』になつたわけだが、それだけではチト物足りないぢやないか。

尤も、澁澤さんをつかまへて、卽ち模範富豪をつかまへて、それ以上の事を求めるのは無理だらう。何百萬圓でも、何千萬圓でも、何億萬圓でも、それをスツカリ投げだせと云ふのは、首をくゝれといふのも同じ事だ。德川慶喜さんがおとなしく八百萬石を投げだした先例があるからと云つて、あれほどに衰へきつてゐない、(イヤ、それどころではない、今を盛りと茂りあつてゐる)資本階級が、おめ〳〵その先例に倣ふ筈がない。

だから澁澤さん御本人はそれでいゝとして、卽ち模範富豪、代表的資本家としてはそれが當り前だとしても、それに對する世評の不徹底が餘りに齒がゆいぢやないか。如何なる搾取方法に依つて『富を致し』ても、その幾分かを『國家の爲』に使ひさへすれば、それで結構だ、滿足だ、遺憾なしだと仰やるのを、如何にも其の通りで御座いますと是認するのが、被搾取者の面目だらうか、見識だらうか。安田は平生あゝいふ不心得をしたから、それであゝいふ死にザマをしたのだと罵り、これに比べると澁澤さん其外心掛のいゝ富豪は違つたものだと感心するのでは、あんまり馬鹿〳〵さ過ぎるぢやないか。

多くの新聞記者なんどが、淺はかな店頭批評家そのまゝの態度で、安田を罵り嘲る事にばかり興味を持つて、模範富豪、代表的資本家の僞善を批評するだけの見識がなく、安田事件の根本的意義について遂に何等の解釋をも與へ得ないのは、餘りと云へば情けなさすぎるぢやないか。尤も、そこが卽ちブルジョア新聞のブルジョア新聞たる所以だと云へば、一言もない。澁

澤さんにあれ以上を求めるのが無理なのと同じように、新聞紙にそれ以上を求めるのも無理なのだらう。

然らば新聞紙も仕方がない、姑くそれでいいとして、苟くも被搾取階級たる自覺を持つ人々は、新聞紙上の輿論なんどに胡麻化されず、店頭批評家の淺はかな罵倒などに釣りこまれず、こんな事件を機會にして、モット、モット根本的な批評眼を開いて貰ひたい。

一體、安田家の富はどうしてそんなに山ほども積まれたのか。それは外でもない、只だ善次郎氏の勤儉努力の結果だと云はれてゐる。善次郎氏自身もそうだと確信し、澁澤さんもそうだと思つてゐるらしい。そして一般の輿論もそれを是認してゐるらしい。問題の根本はそこだ。

『勤儉努力』は如何にも結構だ。然し善次郎氏は何に努力したのか。商賣に努力し、金貸に努力したのぢやないか。そして商賣と金貸とは即ち『搾取』ぢやないか。勞働者に對する資本家の搾取、小資本家に對する大資本家の搾取ぢやないか。然らば即ち、安田氏の努力は搾取の努力なのだ。そして其の結果がアノ山ほど積まれた富になつたのだ。そうして、此の搾取の方法と過程とは、獨り安田氏ばかりでなく、總ての資本家に共通普通の事實であるのだ。只だ或る資本家は、大した努力もしないで、或は陰險な手段に依り、或は偶然の幸運に依つて、濡れ手で粟をつかんでゐる。又或る資本家は、奢侈放逸を極めながら、使つても使ひきれないほどの富を、其の營業組織の間から取りあげてゐる。それから見ると、安田氏の『勤儉努力』は（資本家仲間の比較對照上）大いに賞讃に値するのだらう。然し、被搾取者の立場から見る時には、搾取者が勤儉であらうとあるまいと、努力しようとしまいと、搾取されるといふ根本の事實に違ひはない。從つて、安田ばかりを罵つて、澁澤さんに隨喜する理由は少しもない。

安田氏はモウ死んでしまつたのだから、今更その目を開かせるわけには行かないが、せめて澁澤さんには、死ぬるユウベの其のアシタまでに、少しなりとも此の『道』を聞かせてあげたいものだ。然しそれも實はどうでもいゝ。澁澤さん一人なんぞ問題ではない。只だ多數の被搾取者に、篤と此の道理を呑みこ

んで貰ひたい。

それから今一つ、朝日平吉氏の態度にも大いに物足りない點がある。殺人に對する彼れの法律上の責任は、彼が自ら死を以て償つてゐるので、政府もそれを追究する方法がないし、我々も勿論それを云々しようとはしない。只そこまで行く彼れの思想的態度については、批評の餘地がある。從來、政治的熱狂者が單純な政治問題ばかり捕へてゐたのに比べると、彼は時節柄、稍や經濟問題に踏みこんでゐるといふ點に於いて、確かに一段の進歩が認められるわけである。然し其の進歩が、矢張り澁澤さん程度、新聞輿論程度、店頭批評家程度に過ぎなかつた事を、我々は大なる遺憾とする者である。

總て不法は不法である。殺人は殺人である。我々は今それを批評する限りでない。只その精神に於いて個人的の私憤でなく、利益でなく、社會を思ふ一念の爲であつた場合、我々はそれに同情を寄せる事がある。更に一歩を進めては、それが些々たる不徹底の改良政策の爲でなく、深い根本的の理解の上に立つてゐた場合、我々はそれに大いなる敬意を拂ふ事が出來る。我々は朝日氏に對して、物足りなさを感ぜざるを得ざる事を遺憾とする。

然しこれも既に死んだ人の事である。何を云つても追つかない。只だ此の事件について、大なり小なり刺激を感じた人々が、之を機會に社會改革の根本的意義を考へて貰ひたいと祈るばかりである。

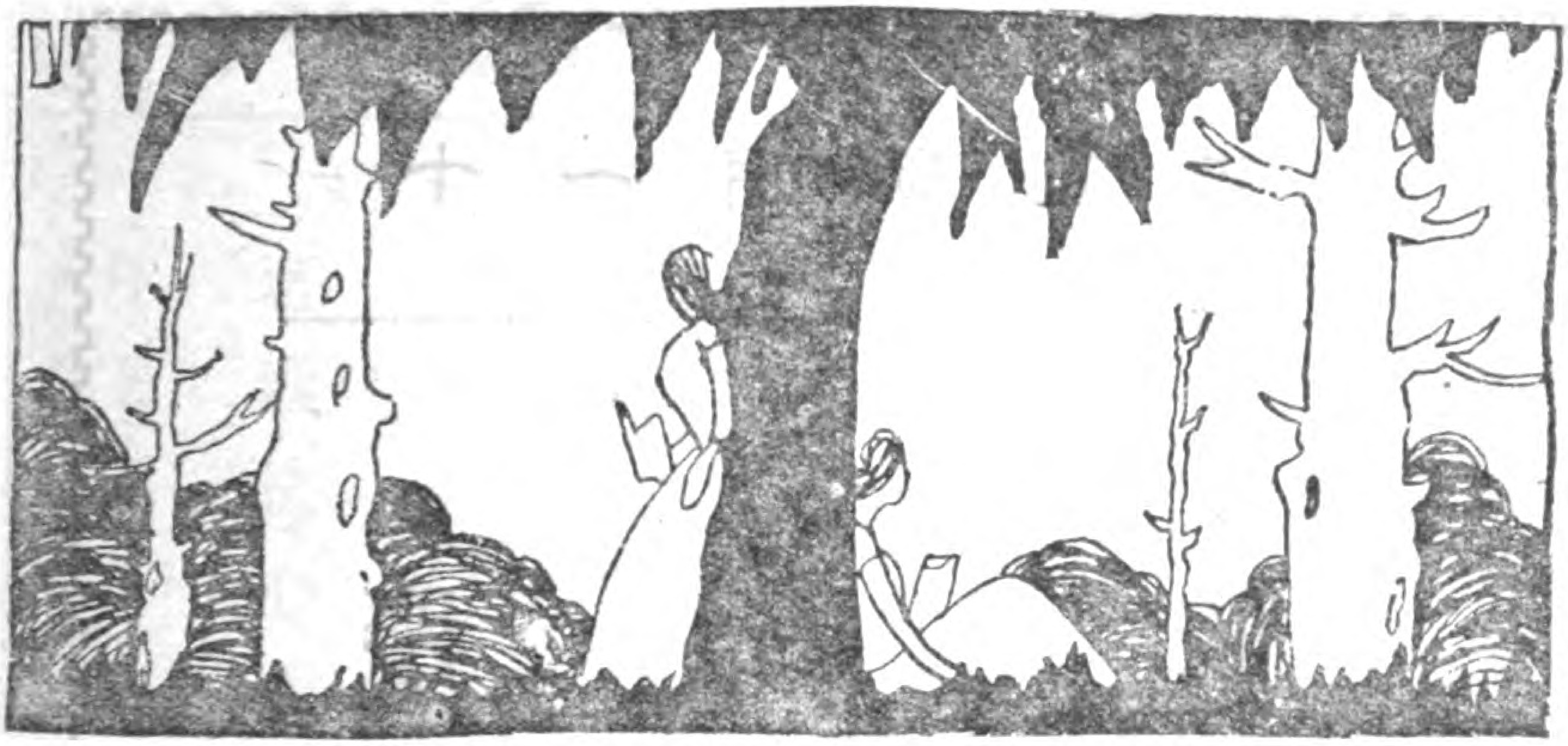
最後に、安田翁は其の所信に徹底して遂に身を殺すに至つたのだから、先はおめでたい往生だと申しあげておく。僞善な、不徹底な、道學的富豪なんぞより、却つて氣持がいゝぢやないか。

十一月號創作

◇欅　吉田絃二郎

◇或る男　武者小路實篤

◇妓李十　室生犀星



欅

吉田絃二郎

九月・・・日

夜の二時である。お仙は眠つてしまつた。

俺一人起きてゐる。そしてまたこのころのいつもの夜のやうに、俺はお仙に匿して買つて來たピストルを、そつと本箱の奥から取り出した。

それは偶然のことであつたが、ピストルを持つて見たいやうな　になつたので、一ケ月ばかり前、町まで出かけて行つてピストルを買つて來た。妻はまだ今日までピストルのことは知らない。

近所の家に頻々と盗賊がはいつたりしたので、護身用のためといふ考で買つたのではあつたが、實際、俺の心の底を探つて見たら（これさへあれば何時でも樂に死ねる。もし何うしてもこの人生といふものが、俺にとつてあまりに虚無であり、あまりに淋し過ぎるものであるならば、そしてもし俺がほんたうに、悲しみなしに死を選ぶことができるやうな心持ちになれるなら、俺はこのピストルを利用すること

がでさる、最も尊く、最も嚴肅な聖物として）といふやうな考が、そこに潜んでゐたことを否むことはできない。

俺はイプセンの戯曲によくピストルが出て來るのを、このごろ讀んでゐて、非常に興味を持つやうになつた。『ヘツダ・カブレル』それから『鴨』…ヘツダ・ガブレルも、また『鴨』のなかのあのお爺さんも無暗にピストルをぼん〳〵撃つてゐるが、あの心持が俺にはいまやつとわかつて來たやうな氣がする。

ピストルは大人の危險な玩具である。ヘツダ・カブレルも、『鴨』のなかの老人もピストルといふ玩具なしには生きてをられなかつたのだ。大抵の人間が屹度一生の中に一度はピストルの玩具が欲しい年配に行きあたるにちがひない。俺が、今恰度その時期に行きあたつてゐるやうだ。

俺は三十發の彈丸をお仙に隱れて、大抵は森のなかで、櫟の幹に撃ち込んでしまつた。今では殘つてゐるのはわづか二發しかない。

俺はこの二發の彈丸を何う使用するか。二發の彈丸の使ひ方一つでは、俺の一生に大變化を來たすやうな心持ちもする。

俺はピストルをしづかに机の上に置く。

俺の手をちよつと伸ばせば、直ぐにピストルに屆く。俺の額に銃口をあてゝ、輕く小指が一本動けば俺といふものが世界から失はれる。悲しみも、懊惱、いろ〳〵な不快もなくなつてしまうのだ。俺はこんなことを想ふこともある。

しかし俺はまだ實のところ生きてゐたい。だからこのごろでは滅多にピストルを握らないことにしてゐる。それでも俺は時々、ピストルを机の傍に置かないと、生活の緊張味を缺いたやうでいけない。

俺の心は、いつもピストルの前におびえてゐなければならない。お仙が眠つてしまつてからの夜の數時間だけ、俺は

ピストルの金具をいぢくつて見たり、引鐵に輕く指を觸れて見たりすることができるのである。その間だけ俺はすべての世間的な不快な聯想からも、束縛からも自由にされるのである。

『もし俺が、あやまつて、引鐵を引くかして自分の手で自分を殺すやうなことがあつたら、俺の墓は、武藏野の櫟の森の中で、成るたけ人の目に觸れないやうなところにできる丈け小さく建てゝくれ。秋になれば落葉がすつかり俺の墓を埋めてしまうやうに。』

俺は今日も、森を散歩しながら、こんなことを考へたのであつた。

×

九月…日。

昨夜ピストルをいぢくつてゐたりして、おそくまで眠れなかつたが、今朝はまた暗いうちから眼がさめた。

俺は起きると直ぐ戸外に飛び出した。

朝の風がしづかに黍の葉をがさつかせて通りすぎて行つた。

一つの葉から一つの葉へと寂しいさゝやきをのこして、朝の風は白い空に滅えて行つてしまつた。

黑い畑の土の中に立ちどまつてゐる俺には、通りすぎて行く白い風の聲が、たまらなく頼りない心を喚びさますのであつた。

『人生の秋、そしてやがて死…』といふやうな感傷的な言葉が口まで出かゝつて來るのであつた。

がさ〴〵と鳴る黍の葉ずれの音が、大自然の寂寞そのもの丶さ丶やきのやうにも聞かる丶のであつた。

疲れたる大地はまだ眠りからさめなかつた。朝のさ丶やかな風の音のみが、眠つた曠野の上を吹いて行つた。

そこにはうら枯れた凋葉につ丶まれた黍の穂がうつむきはじめてゐた。

俺は黒い土の上にしやがんで、小さな雑草をむしつた。踏みにじられた雑草にも、すでに堅い殻につ丶まれた草の實がみのつてゐた。

すべて生けるもの丶生に對する本能的な執着！巣を編むところの小鳥も、實を結ぶところの雑草も、たゞ生きて行くためにのみ、自己の種（スピーシース）を保存するためにのみ生きてゐる。かれ等は何のために生きてゐなければならぬかを考へることもないであらう。また生きてゐることがはたして死よりも幸福であるか否かも知らないであらう。また考へたこともないであらう。かれ等は恐らく死といふ意識すら持つてゐないであらう。恐らく永劫に。

かれ等は生きてゐなければならないのだ。かれ等は生まれ出るべく作られたのだ。かれ等は生長しなければならなかつたのだ。かれ等は暗い夜の間にすら自分のいのちを大きくし伸ばして行くも働きの手を休めることをゆるされなかつたのだ。かれ等はちよつとでも、自分の意志にしたがつて生きて行くことをゆるされなかつたのだ。

けれどもかれ等は、それに對してかつて何の不平も感じてはゐない。黍も、雑草も、木立も、大地そのものも、たゞ生長するがま丶に、うら枯る丶がま丶に、刻々に過ぎて行く。何といふ偉大な悲壮な忍従であらう。何といふ尊い沈默であらう。

空も、森も、野も、そして人間のすべてが何のプロテストもせず、しづかに眠つてゐる。

俺は黍畑の黒い土の上にしやがんで、たゞ一人、自然の不可思議な暴君的な威力に對して、疑惑を抱き、恐怖を感じ

てゐる自分自身を見出したのであつた。

『人間は生れる。生きる。戀をする。苦しむ。悩む。やがて壁に頭を打ちつけて死ぬのだ！』俺は或る西洋の作家の言葉を想ひ出した。しかし、この考へ方は果して眞實なのだらうか。俺はこの言葉に對しては、他のどの言葉に對してよりも、一層深い共鳴を感ずるのではあるが……

『お前の考へ方は病的なのだ。この世界ほど幸福に輝いた世界がどこにあるものか。お前はいつも灰色の眼鏡をかけて自然を見てゐるのだ。お前は何故もつと人生の明るい方面を見ないのだ。お前は後の時代の人々のために、踏み台となる英雄的精神を持つことができないのか。人生は自分等の後から後からと歩いて來る新らしい時代人のために、踏み台となつてやるところに意義がある。』俺の耳には英雄主義や、人道派の人々の晴々しい叫び聲が聞へて來るのであつた。

『俺にも幾分このやうなことを考へる心がないではない。しかしほんたうに俺の心を切り開いて見たら、俺はそんな樂天的な素直な善人ではないやうだ。俺の心はいつも人間の言葉の裏を探らうとし、俺の心はいつも明るい光りの底の暗を見出さうとしてゐる。恐らく俺の心のうちには暗い夜だけが植えつけられてゐるのかも知れない。そしてあの人々の心には明るい眞晝だけが……。

俺は草の上を家の方に歩いて行つた。そうつと寢かしたまゝ置いて來たお仙の蒼白い顔が浮かんで來た。それと同時に、この數ケ月來母の寂しい死を中心として惹き起されて來た不快な自分自身や、周圍の人々の心の裏がはつきりと俺の心に映つて來るのであつた。お互にたれひとりとして、人を信ずることのできぬ疑ひ深い、そして利己的な——本能的と思はれるまでに——父と子、母と娘、弟と姉といふやうな醜い人間の心の姿のみが、俺の頭に焦きつけられてゐるのであつた。

家の戸はとざされてゐた。

俺はそうつと雨戸を一枚明けて家のうちにはいつて行つた。家のうちはまつくらであつた。俺は臺所から板の間を座敷の方へ足音を忍ばせて歩いて行つた。俺は音をさせないやうに注意を拂ひながら襖を明けた。お仙は眠つてゐた、俺はしばらくぢつとそこに耳を傾けてお仙の寝息を聽いた。かすかなお仙の息が薄暗がりの底から聞えて來た。俺ははじめて安心して立ち上つた。俺はこのごろ、お仙が眠つてゐるときには、お仙の呼吸をうかゞはずにはをれなくなつた。俺はお仙の呼吸を聽いてはじめて輕い安心を覺える。俺は臺所の床板の下に置いてあつた殺鼠劑を遠くの草の中に捨てたり、夜になると臺所の刃物をお仙に知られないやうに、雜誌の間に隱して置く。

俺はお仙も俺と同じやうにピストルの玩具が欲しい時期に達してゐることを知つてゐる。

俺はお仙が俺にかくして、このごろ町から西洋剃刀を買つて來たことを知つてゐる。お仙は何うしても、俺にその剃刀を見せないが、俺は紙屑籠のなかにはいつてゐた包紙を見たので、それが獨逸製の剃刀であることだけは知つてゐる。

『川上眉山は剃刀で咽喉を突いて死んだんですつてねえ！』とお仙が冗談のやうな話し振りで語つたのは、恐らくお仙が剃刀を買つて來た日であつたらう。

このごろお仙と俺の故郷の姉たちとの間も面白くなくなるし、またお仙にとつてはたゞ一人の眞實の母親である芝の老人のお仙に對する態度が冷たかつたりすることが、お仙の心をひどく暗くしてゐることも理解される。

それにお仙はあれほど俺を頼つてゐながらも、一方ではいつも人間の心の頼り少いことをあまりに強く感じ過ぎてゐる。かつてたゞ一人の母にすら裏切られ、無理に強ひられて嫁いで行つた、かの女の第一の家庭生活も第二の家庭生活

一（[illegible]）一

も虚偽そのものであつた。そしてその二人の男にも捨てられてしまつたので、お仙は今では人を頼りつゝも頼ることのできぬいたましい心の持ち主になつてゐる。

俺はこの數年お仙の傷いた心を、取り戻してやらなければならぬと思つて來た。しかし、俺はお仙の傷いた心をいつもゆるすほどの寛大さを持つてゐない。

お仙の我が儘にはほんたうに小娘の無邪氣さが潜んでゐる。

第一の男に僞られたお仙、第二の男に傷けられたお仙には、たゞ一人の母さへ、ともすれば頼るべき味方ではない。

お仙は子供の日からすでに、多勢の他人のなかにはいつて、涙をかくすことをしなければならなかつた。しかしお仙は一生のうち一度だけは泣いて見たかつたであらう。駄々をこねて見たかつたであらう。母も、第一の男も第二の男も、かの女の希望を充たすことはできなかつた。かれ等は一層かの女の涙を多くし、かの女の心をかたくなにするばかりであつた。

お仙は今はじめてこゝの屋根の下で泣けるだけ泣いて見ようとしてゐる。駄々をこねるだけこねて見ようとしてゐる。可憐なる、傷ける女！

しかし俺もやはり第一、第二の男と同じ暴君ではないか。俺はそれを杞れる。

俺はお仙を殺してはならぬ。俺は何うしても、お仙の手からあの剃刀を探し出さなければならぬ。

×

◆福田德三博士書翰◆

―江原氏宛―

學兄は將來必らず日本文壇の巨匠となられる御方と確信します漱石よりも樗牛よりも向後の日本青年は學兄の作に其心を傾倒することを確信します

江原小彌太短篇集

◆新刊◆

新菊判六百頁ポイント組
表紙クロース函入氣品高雅

◆定價參圓貳拾錢

書留送料廿五錢

目次

◆內山省三氏曰く○彼の藝術は荒削りの花剛石の如し（八月一日、日本及日本人所載）

◆英雄は英雄を知り眞の讀書家は書籍の選擇を知る◆

東京神田中猿樂町 越山堂 電話九段一三九二番 振替東京一二九五四番

米國にて最近發見されたる
神經衰弱藥發賣

○歐米から日本へ來て遺憾に堪へぬのは日本の藥局道德低き事
○藥の効能廣告不信用を來し日本では眞の良藥も廣告の方法がない
○だが只茲に米國藥學家メーゼン氏苦心七年最近完成せる事と
○弊コンパニー主本藥日本一手販賣契約に當り先づ米國より英獨和白佛伊等の順序に旅行專門に同病藥視察の結果神經衰弱に對し本藥の價値豫想以上偉大なる確信を得たこと丈けを廣告し置く

メーゼン氏レゾート

○効能 一般の神經衰弱 譬へば頭痛、眩暈、耳鳴、熟眠不能、體量減退、不活潑、悲観、記憶力思考力缺乏、遺精、夢精、早漏、陰萎、婦人ヒステリー等
○藥價（和譯說明付）小九十錠入金六圓、大百八十錠入金十圓、大二瓶十九圓、郵送十五錢、領土四十五錢
輕るきは小瓶病永きも大二瓶にて大抵全治不思議

東京丸ノ內有樂町一丁目四番地
日本發賣元
本店米國桑港 N.S. 鈴木コンパニー日本支店
店主 鈴木仁兵衛
振替東京五七四二八 電話丸ノ內一〇三一・一〇三二・一〇三三
◎全國に販賣店募集す

谷崎潤一郎氏著

創作集 AとBの話

布表紙木版手刷り▼定價金貳圓

四六版三百八十頁▼送料拾貳錢

内容

AとBの話

私

途上

不幸な母の話

檢閲官

鶴唳

蘇東坡

月の囁き

文壇人多きが中に、ひとり群を抽んじ、常に駭目の飛躍を示しつゝあるものは、谷崎潤一郎氏である。本集は、惡の奉仕者たるAと、善の支持者たるBとの、終りなき闘爭を描いて、人間心理の奥底を發き、我が文壇稀有の深刻と稱せられた「AとBの話」を初めとして、その近作中より粹を抜くこと九篇未だ氏の如何なる集にも掲げざるものゝみを收めてこゝに此の一卷となした。中に「月の囁き」の如き、映畫劇として書かれた、極めて異色あるものもあるその量に於いて質に於いて、文壇近時の最大收穫たるは、こゝに繰返すまでもあるまい。裝幀の美を凝らせる大卷で定價の至廉なる一事も序に附記して置く。

■ツァラトゥストラ 改譯新版

■ニイチエ原著 生田長江氏全譯

價貳圓五拾錢 郵送料拾貳錢

■ツァラツストラ解釋並に批評

■阿部次郎氏著

價壹圓貳拾錢 郵送料拾錢

■聖フランシスの小さき花

■久保正夫氏譯

價壹圓五拾錢 郵送料拾錢

東京牛込矢來三番地 振替東京一七四二番

新潮社

電話番町 八〇七番 八〇八番 八〇九番

九月…日

『あなたはピストルをお持ちですね？』とお仙が今朝蒼い顔をして言つた。俺はたうとうピストルをお仙に嗅ぎつけられた。

嘘をいふこともできないので、たうとう白状してしまつた。護身用のためだといふことだけは繰りかへして言つて置いた。

『ほんたうに馬鹿な考なんかなすつちや困りますよ。あたしはあなたよりほかにはこの世界に頼る人がないのですから……』

女の一生！、誰にか頼らないでは生きて行かれぬ女の生涯といふことが、俺の頭に犇々と迫つて來た。たとへ、踏みにじられても、擲られても男の力に頼らうとする女の一生！

俺はお仙のことを思つてゐる間に、亡くなつた母の一生を想ひ出さずにはをれなかつた。

俺が東京から歸つて行くのも待ち得ないで、寂しく死んで行つた母の心を思ふとたまらなくなる。

母も最も氣の毒な忍苦者の一人であつた。

七棹の箪笥に棹がきしむほど花やかな衣裝を詰めて父の家に嫁いで來た十七の母は、やがては父のために寒い冬の日にも布子一枚着ることもできない貧乏のどん底に叩き込まれてしまつたのであつた。酒を飲んで來た父にちよつとしたことを言つたかりに、髪を掴まれて土間に横顔をこすりつけられてゐた。割木でいやといふほど背中をどやしつけられて、苦しさうに土間の上を這ひまはつてゐたこともあつた。

母は、しかしそんな時一度も父に對して口返答らしいことをしたことがなかつた。たゞ實家にかへしてくれといふこ

とだけを泣きじやくりしながら言つてゐた。もうそのころは母の髪には白髪がまじつてゐた。

三日四日とほとんど米を買ふこともできぬほど金に困ることもあつた。そのやうな折にも母は父と子供たちだけには、米を工夫してくれた。そして自分では川の岸に流れついてゐた果物での甘藷だのを食つて、飢を忍んでゐたこともあつた。

七十幾年の生涯、一日として母には幸福の日はなかつた。母は一度だつて心から笑つたこともなかつた。母は父のために虐げられ、子供たちのために泣くために生きてゐたのであつた。そして一度だつて何の不平も顔にあらはさないで靜かに死んで行つた。何といふ悲しい、尊い、忍從者の生活だつたらう！

俺は冷たい、しかしながら、聖者の像のやうに尊い死顔をして柩の中に仰向けに眠つてゐた母の姿を思ひ出す。

俺は柩の前ですゝり上げて泣いた。

しかし今夜ほど俺は心ゆくまで泣いたことはなかつた。俺は故郷の家に歸つて行つた時も、母の柩の前でも、暗い、遠い山の中の火葬場のなかでも思ふ存分泣くことができなかつた。が、今夜だけは誰れにも憚るところなく泣くことができた。

『泣け、泣け、どんなにでも泣け。お前の母の一生ほど悲しい生涯があらうか。かの女の死ほど寂しい死があらうか。かの女は一生を苦しみ貫くために生まれて來たのだ。泣いてやれ。どんなに泣いてやつたつて、かの女の靜かな忍苦的な生活をなぐさめるには充分でない。もつと泣け、もつと……』俺は今夜すぐにでも母のとこに飛んで行つて、倘一度母と逢つてみたい。そしてそれがどんなに寂しい世界であらうと、苦しい世界であらうと、母と一緒でさへあるならば、俺は決して悲しいとも、苦しいとも思はない。俺は泣いてゐる間に、三十年以前の自分自身を見出した。

月が照つてゐた。秋であつた。若い母は俺を抱いて野天の風呂にはいつてゐた。螢のやうに明るい月の光りが、風呂の水をかきまぜるたんびに美しくくだけた。俺はその夜の空いちめんに白い粉のやうに撒き散らされた星の群を記憶してゐる。地平線から地平線まで星の雲がつゞいてゐた。

母がどこかの世界で俺を待つてゐるやうな氣がしてならぬ。

母一人が俺の世界であるやうに想はれる。

×

九月…日

俺はこのごろになつてはじめて我々の人生觀といふものが、いかに年齡に支配されなければならないかといふ平凡な眞理を痛切に感ずるやうになつた。どんなに藻掻いたつて、あせつたつて、行くところまでしか行けないのだ。それに、自分では大分、自分の周圍の人たちからは、かけはなれた程度まで進み得たと思つてゐても、ほとんど一歩も周圍の人たちから進んでゐないことを發見することが多い。たとへば俺は相當の本を讀んだつもりでゐる。いろいろの哲學だの宗敎だの、文學作品なども目を通したつもりだ。新らしい思想も相當に嚙み分けてゐるつもりだ。或る意味では俺は哲學者であると自分を信じてゐることもある。或る意味ではいつぱし、思想家でゞもあるかのやうな顏をすることもある。けれども無智だと思つてゐる父や、姉や、またはお仙や、お仙の母などといさかいをした時、俺はあの人たちにくらべてどれほどの賢人であつたか。どれほど立派な人間であつたか。二十餘年來、讀書し、瞑想し、苦心したことが、

實は俺の性格を築き上げるに、一文の足しにもなつてゐない。俺は野良犬を追ふ時には、やつぱり野良犬だけの性格しか持つてゐないことに氣付いた。俺に法外の値で枯れかゝつた椿を賣りつけた植木屋の親爺を口汚く罵つた時は、俺はあの狡猾な植木屋の親爺以上の人格は持つてゐなかつた。お仙の母に對して、故郷の父に對して不愉快な感情を抱いてゐた時は、俺は決して、かれ等以上の寛大さも、怜悧さも持つてはゐなかつた。こんなことを考へてゐると、俺は人生そのものに對して、時々たまらなく寂しくなることがある。自分自身に對してすら愛想をつかしたくなることもある。他愛もない若い人たちのうちには、俺の詩だけを讀んで、俺が餘程立派な、親切な人間でゞもあるかのやうに信じ切つてゐる人がある。俺は氣が弱いのでさう見えるかも知れぬが、時々、思ひ切つて、殘忍なことをする。最初からさうするつもりではないのだが、最初、俺の氣が弱かつたことが、最後にそんな結果をひとりでに生んで來ることになることもあるが……。どつちにしても、俺は本氣になつて世間のために働いたり、人間の生活といふものに、そんなに強い執着を持つことができなくなつた。無論、俺だつて死にたくはない。たゞ時々、發作的に自殺といふことを想像することはあるが。オブローモフのやうに十年も一つのベッドに寢つ切りにして、飯を食ふか、厠に通ふほかは一生起きもせず、働きもせず、(いつたい人間は起きる必要あるのか?)といふやうなことを平氣で口にするほど思ひ切つた無性者にもなれない。しかし何がなしに、俺はこの人生が倦怠くてたまらぬことがある。苦しくてたまらないと言つた方が適當かも知れないが……。

俺は、自分のこの灰色の心の原因を色々に考察して見た。ミケランゼロの心のうちには暗い夜そのものが潜んでゐたのだ。と評した人があつたが、俺の心のうちにも生れつき暗い夜そのものが潜んでゐるのではないだらうか。俺は母が一生のあひだに一度も聲を出して笑つたとこのなかつたことを思ひ出す。母の心にこそほんたうに暗い夜のみが潜んで

ゐたのであらう。

あの母の暗い夜が、やつぱり俺の血のなかにもまぜられてゐるのではあるまいか。

×

十月…日

母の命日である。俺はピストルを懐にかくして森のなかを歩いてゐた。俺はいつもの欅の幹にむかつてピストルの彈丸を一發見舞つた。

欝積した心が幾分輕くせられたやうな感じもした。しかし一時掻きのけられた雲が、更にはげしい勢力をもつて元の位置へむらがり集まつて來るやうに、俺の心は間もなく一層暗くされた。

俺は森を出て、近くの寺へ行つた。午後寺から若い僧が來て經を讀んだ。讀經をきゝながら俺はまた今日も母のことを思ふ。

母は俺を大學に入れるために、どんな日でも夜の十二時近くまでひとりで起きてゐて、國道傍に露天店を出して駄菓子を賣つたり、柿を賣つたりしてゐた。無論、田舍の寂しい國道では夜の八時、九時になると人つ子一人通らないこともあつた。しかし早立ちの荷馬車は夜の十二時ごろになると、家の前を通つて、蠟燭だの、草鞋だのを買つて行くのであつた。俺は母がその日の賣れ高を遲くまでかぞへてゐたのを、眼をさまして見たことが幾度もあつた。暗い、すゝけたランプを疊の上に置いて、母は文久錢だの銅貨だのを選り分けてゐた。そのたびによごれた錢がちり〳〵と低い、打

ち沈んだ金屬的な音を立てるのであつた。それが夜が更けてゐるだけに一層寂しかつた。いつ油をつけたともない、またいつ結んだともない髮は母の蒼白い顏にかゝつてゐた。それを二分心のランプの光りが照らしてゐるのであつた。母は五十枚、百枚と文久錢を藁にさした。そして古い黒光りのする木の函にしまつて置くのであつた。あのころから母は何といふことなしに時々小刻みに手や、顏を顫はせてゐた。

俺は子供心にも、母を一人苦勞させるのが辛くてならなかつた。

俺は金がないので中學に入ることができなかつた時は、どんなに悲しんだか知れない。しかし一年經つてから、ともかく故鄕(くに)から二十七八里も離れた町の中學にはいつた時は、月々送つて來る少かの學資を貰ふことがどんなに心苦しかつたか知れない。俺は寄宿舍に寢てゐても、夜の十二時ごろになるとよく眼をさました。廊下の電氣の光りが寢室まで、かすかに洩れて來るのであつた。自修室と寢室の境のすゝけた障子に映つた光りは、俺の頭にすぐと、故鄕の母の面影を描かせるのであつた。薄暗いランプの光りで文久錢をかぞへてゐる母の白い、小刻みに顫えた手が、俺の小ひさな胸いつぱいに涙を湧きかへらすのであつた。

少年の心にも人間の功名心といふやうなことが、あさましくてたまらなくなつて來るのであつた。俺は乞丐したつてかもはないから、母と一緒に暮してゐたいと思つた。俺はたうとう寄宿舍を脫け出して、そのころはまだ汽車がなかつたので、二十幾里の道を夜晝歩き通しに歩いて翌日の夜故鄕に歸りついた。

俺が土間の中に飛び込んで行つた時、母はたゞひとりで起きてゐて、爐に火を焚いてゐた。母はどんなに驚いたことであつたらう。俺はその日の晝飯も、夜の飯も食つてゐなかつたので、土間の上り框に腰を卸したまゝまるで這ふやうにして、そこにあつた茶碗を掴んだ。俺の手は顫えてゐた。（わづらうたので、もどつて來たのじやないのう！）とたゞ

それだけ言つたゞけで母は俺が摘んでゐた碗に蘿豆飯をついでくれた。母はいつも無言がちの人であつた。(今日は太郎さんのお精進日じやつたけに)といつて、ちよつと佛壇の方を見た。佛壇といつても、たゞ名ばかりで、鴨居の上に粗末な板を釘付けにした上に、素木のまゝの位牌が五つか六つ並べられてあるのであつた。どの位牌も眞つ黒にすゝけてゐた。太郎といふのは俺のたゞ一人の兄である。俺が生まれない以前にすでに死んでゐたのであつたが、母は俺の兄の死以來どんなにすゝめても一度も芝居を見ることもしなかつた。母はたうとう死ぬまで家からほとんど一歩も外に出ずしまひであつた俺の兄の死後四十幾年の間母は一度だつて毎月の命日を忘れたことはなかつた。俺の兄が死んだ日から永久に母の心からは光りと笑ひとが滅ぼされてしまつたのかも知れない。

俺は幾杯、飯を食つたか分らなかつた。俺に飯を食つてしまふと爐の傍で手をあぶつてゐたが、わけもなしにうれしいやら、悲しいやら、妙な感じになつて、椀のなかにぽとりと涙を落した。母もまたぽとりと涙を落した。しかし俺たちは一言も語らないで、暫く默つたまゝ、爐の傍に布團をひろげて寢てしまつた。母が幾度も、そうつと俺の寢顏をのぞいては、布團の隅を輕く叩いてくれたのを、俺は知つてゐた。爐の燒り火が吐息をつくたんびに母の衰えた顏があか／＼と照らされた。母は急に十年も年をとつたやうに思はれた。俺は布團を被つてしまつたが、瞼の裏が熱くなつて來たのを今にも憶えてゐる。

それでも俺は中學を終るだけのことはしてしまつた。上の學校にすゝむために金を拵えなければならなかつたので、俺は一里ばかりはなれた町の鐵工場に通ふことにした。恰度日露戰爭の時であつたので、工場は大概、毎日のやうに徹夜か、居殘りで仕事をやつた。冬の寒い夜など十二時か一時に家に歸つて行くのであつたが、やはり母だけが起きてゐて、俺が靑服を脫ぐのを待つてゐて葛湯を拵えてくれた。工場は毎日のやうに怪我人ができた。たまには高いクレーン

の上から落ちたり、或ひは鐵材の下に壓しつぶされて死ぬ者もあつた。母はよく烏鳴きを氣にした。母は毎日の俺の靴音がするのをどんなにか待つてゐたことであらう。

戰爭がすむのとほとんど同時に、俺は東京に出た。（いつまでも田舍にゐても立身出世はできぬけにのう）と母も言つて承諾したのであつた。俺が上京してから後の、母の努力は想像しただけでもつたいないくらゐであつた。

母は俺が大學までやるためには、とても想像もできないほどの苦痛を忍んで來たのであつた。俺はともかく大學を出た。

俺も母もその時ほど妙な寂しい心に囚へられたことはなかつた。安心した母は急に氣拔けしたやうになつてしまつた。『俺たちは歩まなければならぬ道を歩いて來たのだつたらうか？』俺はその時、こんなことを考へてゐた。恐らく母も……。

二年の後俺はお仙を貰つた。

母は俺の結婚に對しては何も言はなかつた。母は何も彼もひたすらにたゞ俺の歡心を買ふことにのみこれつとめてゐた。

何といふ寛大な母の心であつたらう、何といふ悲しいあきらめであらう。

俺は姉の一人からこんなことを聽いた。

（おつ母さんは、お前がおつ母さんも東京に出ておいでなされといふ手紙を寄越してくれんので、泣いてゐなさつたことがあつたよ。たゞ一度ではあつたが……）

また一人の姉は言つた。

(おつ母さんの身になれば。お前が大學を出て、一人前の人間になつたことはどのやうにうれしかつたか知れぬ。けれども、うれしいと思ふたときはすでにお前はお前の女房のものになつてをつた。また女房の母のものになつてをつた。わしはこんなことになるために一生これほど苦しんで來たのであつたらうかといふことを話しておいでぢやつた。これもたゞ一度だけではあつたが……)

また俺は姉の口からこんな話も聴いた。

(おつ母さんは。家鴨を孵す鷄の譬へ話をしなさつたことがあつた。鷄は苦しんで卵を孵すが家鴨の雛は沖へ沖へとうれしさうに泳いで行つてしまふ。わしは岸で一人殘されて泣いとる親鷄ぢやいふて、その時だけはほろりと涙を落しなさつたよ……)

また姉はこんなことを言つた。

(おつ母さんは、お前が出世したのはうれしいが、時々、お前がもすこし、學問が出來んで、いつまでも町の鐵工場に通うて職工してゐてくれたら、今ごろは工場の汽笛の鳴るのを聴いて、お前が工場から歸つて來るのをどないに樂しみにして待つてゐたらうにとのう……)

俺に對しては母は一言もそんな不平がましいことを洩らさなかつた。

『おつ母さん東京に來ませんか』と訊ねたのに對して、母は『わたしらが東京に出て住んでもお前が心配するばかりぢや。月々不自由なく暮しの金さへ送つていたゞけば……』と言つていつもの寂しい笑ひ方をした。

俺は母の言葉を文字通りに取つてゐたのであつた。

何一つ自分の正當な要求をさへ持ち出すことをしなかつた母の心を思ふと、俺はこの頭を石にでも叩きつけたくな

る。

母が死ぬ十日前、俺が歸つて行つた時、母は『よう歸つて來てくれた。逢ひたかつた。逢ひたうて耐らんぢやつた！』と言つた。俺は生れて始めて、あのやうな言葉を母の口から聽いた。母はどんなに逢ひたくても、一度だつて子供たちを自分から呼ぶやうなことをしたこともなかつた。

俺は母が死ぬ五六日前に東京に歸つてしまつたが、その時も母は『わたしの病氣は大丈夫だから、東京におかへり。夏になつたら歸つて來ておくれ！』と言つた。俺は東京に歸つた。

俺が東京に着いた翌日であつた。姉から手紙が來た。それには〈お前さまの人力車が家の軒下を一尺と離れぬうちに、母上は夜具をかむつておしまひになり候。あたしは跣足にでもなりて、お前さまの人力車をもいちど呼びもどさうかと思ひ候。〉といふやうなことが書かれてあつた。

永遠に逢ふことのできない母！俺はこんなセンテイメンタルなことを考へてゐると、今日まで讀んで來た哲學や、宗敎の本も鐚一文の價値もないやうに思ふ。

俺は何で、故郷を捨てゝ都會に出て來たんだらう。

俺はなぜ、いつまでも、あの夜更けの葛湯を母と二人で飲むことをしなかつたのだらう。俺は俺の若い日の虚榮心、功名心を呪はずにはをれない。

俺は若い僧がかへつてから、たうとう今日もすゝり上げて泣いた。

俺は母が死んでから、半年の時が經つて、今はじめてほんとうの母といふものが幾分わかつて來たやうな氣がする。

俺は泣いてはならぬと思つた。しかし俺はまるで子供のやうに聲を出してしまつた。俺はお僧が後ろに近づいて來て

ゐたのも知らなかつた。
『何うしたんです？』
『あれを見い……』俺は本箱の上の母の寫眞を指さして見せた。
『日の暮れ方が一等いけませんよ。殊に、こんなに雨が降つてゐるんですから……』から言つて妻は線香を持つて來た。
『これで十年も二十年も經つたら忘れるかも知れない。しかしまだつひ六ケ月前までは生きてゐた人なんだから……』
『まつたくです……』
妻も急に眼を赤くして泣いた。
俺は緣側に出て、秋の雨に暮れて行く木立の中を見つめてゐた。
一羽の小鳥が、草の上を斜に飛んで木立の中にかくれた。
俺はしばらくその寂しい小鳥のあとを見つめてゐた。
母が、人間は死んでから小鳥になつたりする人もあるといつたことなどを思ひ出した。

×

十月…日
午前三時であつた。はげしく汽車が揺れたはずみに俺は眼をさました。時間から考へて見ると岡山驛あたりにちがひ

ない。岡山の近くの小ひさな町に片付いてゐるK姉のことが頭に浮かんで來た。いつもなら俺はどんな眞夜中にでも、きつと起き上つて、たとへ暗の中であらうとも、ほゞそれと見當のつく山の輪廓だけでも見出して姉の幸福を祈つて行くのであつた。しかし俺は今夜は何うしてもそんな殊勝な氣にはなれなかつた。

（わしは、お仙がをるうちは、お前の家には行かぬ）と言つたK姉の言葉が俺の耳によみがへつて來た。母の法事の日であつた。あの時の憎らしいほど冷たいK姉の顏。

汽車が長い鐵橋の上をわたつてゐる音が聞えた。俺はその鐵橋がどこの鐵橋であるか、そして鐵橋をわたつて直ぐ左手を見れば夜にも松山の輪廓が見えることを知つてゐた。松山の端には姉の葡萄畑の燭が一つ見えることも知つてゐた。

しかし俺は動いてはならぬ。起き上つてはならぬと自分に命じた。青いカアテンが窓にかゝつてゐたのを見たが俺はカアテンをあげやうとはしなかつた。

汽車は鐵橋をわたり終つた。急に靜かになつた。河から、松林から、刻々に遠ざかつて行くことがはつきりと俺の胸にこたへて來るのであつた。

俺たちを養つて行くために、父とK姉とが眞つ暗なうちに起きて、荷車を曳いて炭坑の方へ出かけて行つたころのことが思ひ出さるゝのであつた。

（今日は、もすこしのことで、わしも、これも岩の下になつて死ぬところだつた。ばらばらと小ひさな砂が落ちて來たのをわしは知らんぢやつたが、これが無理にわしの腕をひつぱつて逃げたが、五六間も離れぬうちにそこにあつた荷車は微塵にくだけてしまふた）とK姉と一緒に、飯を食ひながら語つてゐた父の面影が、うつつて來た。雪の日であつ

た。

姉の踵は一面に血を吹き出した皸が切れてゐた、K姉は山野の根を噛んでは黒い反古紙に塗つて、足につけてゐた。

（こんな貧乏はしてゐても、石炭運搬はしてゐても、いまにお前さへ出世させりやあ、のう……）今まで何か言つて笑つてゐたK姉が急に手の甲で涙を拭いてゐた。

（今日、炭坑の役人がこの子をつかまへて無作法なこといひよつたでのう……）母と語つてゐた父の暗い顔……。）

（辛抱せえ、家のことなど心配するな。うんと出世をせえ。あたしはどんなつらい思ひをしても助けるで……）俺が東京に上る時、K姉は今の家に片付いてゐたが、葡萄畑の中で眼にいつぱい涙をためてから言つた。

しかし過去はみな過去だ。K姉はお仙をまるで仇敵のやうに憎んでゐる。亡くなつた母ばかりではない、俺の姉たちの身になつて見れば、（自分等がみんなで苦勞をして一人の弟をあれほどの學問をさせてやつたのに、ばかばかしい今では赤の他人のお仙に盗まれてしまつた）といふやうな小姑根性を出すのも幾分同情されないことはない。

畢竟こゝにも所有慾と所有慾の戰ひが赤裸々にあらはれてゐるのだ。或る程度まではK姉の心持ちもわかる。父と二人きりで故郷の田舎に寂しい生活をしてゐるS姉の心持ちもわかる。しかし何故あの人たちは尚一步、その小姑根性から救はれ得ないのだらうか。何故もすこしお互に人を信じ合ふことをしないのか。お互がお互を疑ひ合つて、自分で自分を苦しめてゐるのではないか。俺が言つて聴かせれば理窟ではわかる。表面的には幾分改まつて來る。しかし心のうちではやつぱり元の通りだ。半年、一年と經つ間には元より一層醜い女同志の暗闘が始まる。

俺は人間が元々、もつと立派な筈のものだといふ肯定を、あまりに容易に受け容れてゐたのではないか。人間は俺たちが思つてゐたのよりも、もつと醜い、あさましい部分を餘りに多く持つてゐるのではないだらうか。俺はこのごろよ

くこんなことを考へる。
　俺は弱い心になつてはいけない。センテイメンタルな人道主義者になつてはいけない。
　俺はヘッダ・ガブレルにならなければいけない。俺は父も母も、義理の叔母も捨てゝしまつて、戀のために伊太利に出かけて行つたエルハルト・ボルクマンにならなければならぬ。
　俺はたうとうカアテンをあげなかつた。俺は勝つた。しかし俺はまだ俺の心の底に弱いセンテイメンタルな影があるのを憎む。俺はクッションに俯伏せになつた。
　弱蟲奴！　そんなことで、何で、ほんたうな人間の生活が生きられるものか。強くなれ。
　お前はかつて誰にも憎まれたくないと思つたことがあつた。それは卑怯者の考ゆることだ。
　嘘つき、不親切な人間、傲慢な人間、こんな奴等からは憎まれるのが正しいことだ。千人の味方を持たうと思ふものはほんたうは一人の味方をも持つてゐないのだ。たつた一人の心からの味方を持て。そしたら千人の敵なんか、何で恐ろしいものか。
　お前はあのイプセンの顔を見ないか。あの意志の強い大きな堅く結んだ口、あの深く錐んだ野獸のやうな光つた眼、あの硬い頬鬚。
　俺は眠りからさめた。
　京都の山が雨に煙つてゐた。秋の雨に濡れた塔がなだらかな山の上に見えた。
　お仙と一緒になつた年の冬、二人で京都の町に滯在したことがあつた。夜が更けてから宿にかへる道を迷ふて、疲れた足を引き摺つておそくまで歩いたことがあつた。道には霜が白くおりてゐた。川の淵に出た時は千鳥が鳴いてゐた。

道に迷つたのを俺のせいにして、あまりお仙がふてくさつたので、俺はあの時、川のはたでお仙の横面を一つどやしつけてやつたことがあつた。

(でも、宿にかへれないかと思つて心細かつたんですもの)お仙は宿にかへつてからかう言つて泣いた。俺はあのころから時々發作的に狂人のやうなことをしたのであつた。

しづかに自分のことを振りかへつてみると、父に對しても、亡くなつた母に對しても、お仙に對しても、姉たちに對しても、恐らく俺は隨分わがまゝなこと、冷淡なことをしたにちがひない。さう思ふと誰も恨めない。

しかしこのやうな殊勝な考はたゞ一時的にしか、俺の心には起つて來ない。

俺は故郷の父に京都驛から手紙を出した。

わづか數日の滯在のうちに、悲しみに狂つてゐる父をとらへて理窟がましいことを言つたり、父を怒らせたりしたことが、たまらなく苦しい。俺はまだ思ひやりといふことを知つてゐない。俺の心はまだ人間の苦しみをほんたうに味つてゐないやうだ。

日の影が山からも、曠野からも薄らいで行つた。

×

十月……日

雲につゝまれた伊豆の山が見えて來た。

十四五日前から伊豆の温泉地に行つてゐるお仙や、芝の老人の面影が俺の心に動いて來た。三日前のあらしにひどくたゝきつけられてしまつた桑畑が、黄昏れの汽車の道に沿ふて、遠い山の裾まで一面にひろがつてゐた。わづかに枝にくつ付いてゐる桑の葉は潮風にでも吹かれたかのやうに赤くなつてゐた。

俺はM驛で東海道の本線から伊豆行の汽車に乘り替える時も、故鄕の父とS姉とに繪葉書を一枚づゝ出して置いた。父に對しては濟まぬ氣がしてならなかつたので、心のうちではおわびをするつもりで。

K河に沿ふた桑畑の間を走つてゐる間に、日はだん〳〵暮れて行つた。曼珠沙華の紅い花もやがては見えなくなつてしまつた。

俺は小一時間も經てばお仙に（それから芝の老人にも）逢ふことを待ち遠しい氣にもなつてゐたが、黑い山の麓に明滅しはじめた點々たる火などを見た時は、一昨日別れて來たばかりの父のことや、S姉のことや、母のことなどを思ひ出すのであつた。

（おい、…………や、あかりをつけぬか。日が暮れたぞ。あかりは夜つけるものぢや。阿呆。何しとる。あかりぢや、あかりぢや……）

S姉を叱りとばしながら、暗い緣側にぽつねんと坐つて暮れて行く秋の夕空を見つめてゐるであらう父の姿が、泛かんで來て詮方がなかつた。

『弱い心の想像を捨てろ、お前はまるで中學生のやうだ。』俺はかう言つて自分を叱つた。それでも俺の想像は壞られなかつた。

父が母の位牌の前に坐つて香を焚いてゐた。父の眼は赤くなつてゐた。

父は緣側に坐つて、雉子笛を吹いてゐた。父は若いころから雉子笛の名人であつた。齒が落ちてしまつた口からは風がすうすうと洩れた。

S姉がすゝけたランプを持つて來て、無言のまゝ古い机の上に置いて行つた。その古い机は俺の小學時代に、父が自分で板を買つて來てこしらへてくれたものであつた。机は油と垢で黑く光つてゐた。机の上には宮本武勇傳と、それから玉藻前三段目の義太夫本が載つてゐた。

父は雉子笛を止めてしまつた。そしていつまでも暗い緣側に坐つたきり、暗い東の空を見つめてゐた。

俺は息が急に窒まりさうに苦しくなつた。で、俺はできるだけ自分の想像を打ち消さうとつとめた。

すつかり暗くなつてゐた。俺は自分だけ、たゞ一人が客車のなかにゐることに氣付いた。生憎俺が乘つてゐた客車にはあかりがついてゐなかつたので、窓に凭りかゝつてゐると、俺の記憶に殘つてゐる天城山の輪廓が、夜の空に明暗の一線を描いてゐるのが、遠く見えるのであつた。

數日の故鄕の滯在は俺にとつては不愉快なことが多かつた。父やS姉と俺は不愉快ないさかひもした。しかし俺は今、父の家から別れて來て伊豆の溫泉地に行かうとしてゐるのだといふことを思ふと、貧しい生活、寂しい田舍の生活をしてゐる父やS姉に對しては心から濟まないやうな氣がしてたらなかつた。

その溫泉場には芝の老人もゐる。俺は伊豆に立ち寄らないでまつすぐ東京に歸つた方がよかつたとも思つた。

この春、芝の老人が伊豆に行きたいからお仙を貸してくれ、旅費はお仙の分もみな自分の方で持つからと言つて來た。俺はその時お仙は貸してやれないと言つた。秋 なつて伊豆に行きたいから一緒にいかゞですと言つてやつたら、老人は、(わしは伊豆には行きたくない、この秋は大阪に行かなければならぬから)と言つて斷はつて來た。俺はお仙と二人だ

けで伊豆に行くことにした。

ところが出立しようと思つてゐた二三日前突然、芝の老人から手紙が來た。そして自分も一緒に伊豆に行くといふことであつた。

芝の老人がこの前歸つて來た時にはおれはお前たちに伊豆の山なんかにつれて貰はないでも、—大阪にゐる赤の他人ではあるが—親切にしてくれる人があるから、その方へ行くんだあよ)といふ腹があつたのを俺は見拔いてゐた。

大阪の赤の他人といふのは、日露戰爭の折芝の老人が送つてやつた慰問袋から出來た緣であつてそれから今日までつゞいた交際になつてゐるのであつた。大阪の男は芝の老人の姉が死んだことを聴いた時は、わざ〳〵位牌をこしらへて大阪で拜んでゐるといふ手紙を送つて來た。その手紙を讀んだ老人は涙を流した。(自分の子だの、孫だのいふものよりか、赤の他人の方がどれだけたのもしいか知れぬ)老人はあてつけによくこんなことをお仙に話した。

ところが何うした原因か知らぬが、この秋になつて老人と大阪の赤の他人との間が急に面白くなくなつたやうであつた。老人が急に俺たちと一緒に伊豆行きを思ひ立つたのはそんなことが第一の原因であつた。

『お仙と二人きりの旅ならば氣も置けないが……』俺はまつたく溫泉行きもあまり愉快ではなかつた。で、俺は故郷に歸つて、お仙だけを老人と一緒に伊豆にやつたのであつた。

お仙が暗いプラットフォームに立つてゐた。

あまり客がないと見えて、宿からは上等のお客に使つてゐた自働車を持つて來てゐた。お仙の顏は輝いてゐた。

『いゝ自働車だねえ。』

『えゝ、あすこで一番いゝ自働車ですよ……』

『さうだらう。東京なら、成金か、華族か、そんな人たちが乗りさうな自働車だ……』

『ですから、あたしすこし張り込んで、宿の男と運轉手に、これだけ祝儀を……』妻は一円紙幣を三四枚手のひらに載せて見せた。俺たちの生活ではそれだけの金でも決して少い額ではなかつた。俺はうなづいて見せた。

俺は自働車のなかに飾つてあつた紅い花を見つめてゐた。母が夜おそくまで起きてゐて、文久錢を丹念に、疊の上にならべ立ててかぞへてゐた姿が思ひ出さるゝのであつた。母は一生一度も三等の汽車にも人力車にも、乘つたこともなかつた。一枚の木綿布をつぎはぎして十年くらゐは着てゐた。

俺は何だか、泣き出したくなつて來た。

『こゝでこの夏東京の藝妓が身を投げて死んだんですつて！』お仙の髪の桃色珊瑚が光つた。恰度暗い鐵橋をわたつてゐたのであつた。風のやうにさあつと川の水音が聞えた。

『おつ母さんはますく變になつて來ましたよ。あたしこの半月ばかりの間一日でも泣かないことはなかつたのですよ。あたし實の親でもあんまりなさけないと思ふことがあるのです。』お仙は鼻をすゝつた。

『でも、お母さんは年をとつてゐなさるのだし、今までが多勢の他人のなかばかりで、あんな世帶を切りまはして來なすつたのだから、いろく人には言へぬ苦勞もあつたらうよ。だから隱居になつてたゞ一人になれば、永い間、押へに押へてゐた我儘も出て來るだらうさ、殊にお前一人が實の子なんだから……』俺はかう言つてお仙をなぐさめて見た。まつたく俺にしても、今日までの老人の心についてはいろく好意的にも解釋し、それと反對な風にも解釋して來たのであつたが………

人道主義者的な人間の見方からすれば芝の老人の性格は立派に好意的に解釋ができる。

芝の老人の、その父といふ人が情の薄い、極めて功利的な人であつた。そのためにはお仙といふ子供まで出來てゐたのを先方の用に望みがないといふので、暇を取らせてしまつた。尤も、かの女自身が自ら進んで暇を取つて歸つたのだとも言はれてゐる。芝の老人がお仙を伴れて今の芝の家に再嫁する少し以前であつた。お仙の實父がたづねて來て（今度こそおれも魂を入れかへて働くつもりだ。おれは明日東京を立つて北海道へ稼ぎに行くつもりだ。それで二年もすれば立派な男になつて東京にかへつて來るつもりだから、それまで餘所へは緣付かないで待つてゐてくれぬか。おれも今までは酒は飲む、放蕩はするで惡かつたが、お仙が可哀さうだから、お仙に免じて、もいちど一緒になつてくれ）と話した時も、かの女はたうとう訊きいれなかつた。お仙の父はたうとうすご〱と出て行つてしまつた。家を出る時父は（これはお仙に着せてくれ）と言つて友禪の振り袖だけ一揃へ新しく拵へたのを置いて行つた。お仙の父はそれつきり、何處で死んだのか、それともまだ生きてゐるのか、誰に聽き合はせてもわからない。元々、大家の若旦那であつた都會育ちの男が、北海道に行つたところで、大抵先は見えてゐる。今日まで行方不明のまゝになつてゐる。

芝の老人が何でお仙を實父にわたさないで、再嫁した芝の家にまでつれ子として行つたのか。それも母子の愛からだといふ解釋が一番正しいやうに思はれる。しかしその後の老人のお仙に對する仕打から考へ合はせると、萬一の場合自分の實子を一人連れてゐるといふことは、女の身としては心丈夫であつたからとも見られる。

（おつ母さんは、人のゐない倉の蔭などでどんなにあたしに辛くなさつたか知れない。）お仙はよくこんなことを言つては、當時を思ひ出して泣くこともある。

しかし芝の老人の方から言はすれば（お父つあんは一人あたしのためをはかつてくだされぬし、あたしはいや〱ながら再嫁をした。再嫁をした家はお前も知つてるとほり、たれ一人信ずることのできる人間もゐないぢやないか。二十

人ちかくの多勢の家族が一人一人、お互に疑り合ひ、さぐり合ひをしてゐるのぢやないか。一日だつてぼんやりして暮してゐた日には、他人のためにどんな深い暗がりに蹴落されるのか知れないんだもの。だからあたしは人の話を聴いても、直ぐそのまゝには取らないのだよ。話の直ぐ裏を考へるのさ。世渡りはなか〳〵むづかしいよ。裏ばかり見抜いたではまだ充分ではない、裏のまた裏を見なければならぬ。」芝の老人のこの人生の見方は同情を抱いて考ゆれば、ほんたうに氣の毒である。

たうとう一生涯、誰れをも信ずることができないまゝで死ぬ人である。

考へ方によつては憎むことはできない。老人がこんなひがんだ人間の見方をするやうになつた、いろ〳〵な原因があるにちがひないから。

しかし、これは俺が冷靜な知識で考察する時の心持ちであるが、俺は元々、人以上の感情家である。神經質である。愛憎の觀念が人一倍強い。俺は宗教家や、教育家や、所謂ゼントルマンリイな人たちのやうに寛大ではない。

そこで俺が實際に芝の老人を批判する時には、そこに本能のまゝに動く人間的感情が可なり強く湧いて來る。

俺はそれを抑へやう抑へやうとする。そして表面ではゼントルマンリイなお上品さを持してゐることもあるが、心のうちではひどく不愉快に思つてゐることもある。

いつたい、俺はたとへお仙の口からであつても、俺についての他人の批判はできるだけ聽かないことにしてゐる。他人が俺のことをどんなに思つてゐようと、實際言葉となつてあらはれない間は、俺は何も氣にかける必要がないからである。

胃癌にかゝつた川が、自分でも胃癌にちがひないと信じてゐながら、その醫者や、家族の者に（何うか、わたしがた

とへ胃癌であつても、胃癌だとは言明して下さるな。わたしは、お前は胃癌だと言はれたら、絶望して、その日死ぬかも知れない」と言つたことがある。

俺はその男の心持ちは推察することができる。

俺の缺點を忠告してくれた人がある。俺はありがたいと思はぬでもないが、やつぱりその忠告をうらむ。癌にかゝつた男の心持ちを考へたらこの心理はわかる筈だ。

だから自動車のなかでも、俺はできるだけ話を、老人の事から他にそらさうとつとめた。どうせ話してゐるうちには俺についての老人の不愉快な批判が出て來るにちがひないことを知つてゐたからであつた。

淵をなした水が、暗い谿の底に白く流れてゐた。溫泉地としては珍しい山の上の教會堂の尖塔が、山緣の明暗をぬきんでゝ空にほの白く見えてゐた。

『まだあたしも御飯はいたゞかないで待つてゐましたよ、一緒にいたゞきませう』と老人が言つた。老人の言葉を俺はうれしいと思つた。

『一つ前の急行列車の衝突があつたりして、今度の旅行は何だか、不安でした。』

『さうでしたつてねえ、心配してゐましたよ、怪我でもなさらんかと思つて……』

老人のこの言葉も俺にはしみじみとありがたく思はれた。

『おつ母さんてば、汽車が衝突したらあなたは頭に瘤でもこしらへただらうつて笑つてゐましたよ　ホツホツホツ……

……』お仙は笑つた。

『ホツホツホツ……』老人も笑つた。

迷つて話してゐると誰れも憎めなくなる。

俺は芝の老人を疑つてゐたことを、惡いことをしたと思つた。俺たちは愉快に晩飯を食つた。

飯がすんでから、俺は湯の方へ行つた。お仙もついて來た。老人は誘つたが、眠たいからと言つて來なかつた。

『おつ母さんたら、こゝに來てから、今夜のやうにいゝ顏をしたことはないのですよ。あなたにはあんな顏をして笑つて見せるんですが、あたしには、それは冷たい恐い顏をして見せるのですよ。』

ぼつ〳〵お仙の愚痴が出て來たと思つた。

『御飯を喰べないで待つてゐたといひましたらう。あれはさうぢやないんですよ。宿の女中が氣をきかして、あなたがいらつしやるまで御飯を出さなかつたからですよ。』

さういへばさうも考へられる。老人に對する俺の心が幾分暗くなつて來た。

『自働車で迎えに行きますがおつ母さんもいらつしやいませんかつていつたら、あたしはいやだつて。……男だものお前が迎へに行かなくつても、ひとりで乘合自働車にでも乘つて來ればいゝさつて、からなんです。』

お仙は眼を赤くしてゐた。俺は湯のなかに思ふ存分脚をのばして、一つ大きな欠伸をした。できるだけ世の中のことをいんきに考へてゐたいと思つた。

『一等いゝ自働車が準備ができましたから、御隱居さまもつて、宿の男の人がいふのでせう。さうしたらおつ母さん何といふかと思つたら、あたしはまつぴらです。お仙だけ迎へに行つておいで。亭主の好きな赤烏帽子でいゝだらうつてさ……あたし悔しくて涙が出たわ……』

俺は笑ひ出した。不愉快な心が胸のあたりに頭を突つ込みかけて來たが……。

『それでゐてあなたの顏を見ると汽車の衝突で心配したなんて、あれもさうぢやなかつたのよ。あたし、あなたが故郷にかへつたきり四日經つても、五日經つても手紙も電報も來ないから、もしか汽車が衝突したのぢやないのか知らと思つて二晩も三晩もほとんど眠れなかつたのですよ。ひとりで考へてゐるのもあまり苦しかつたので、おつ母さんに話したんですよ、さうすると、なあに大丈夫さ、衝突したら頭に瘤くらゐこしらへたでせうよといつておなかをかゝへて笑つてゐるんですよ。まるであなたのことなんか心配しないで……だからあたしさつきあんなすつぱぬきをしてやつたのよ……』

山の溫泉町の夜は靜かであつた。

俺は妙に寢そびれてしまつて眠むれなかつた。

梟が啼いた。

母が死んだ夜、梟が庭の木にとまつて啼いたことを思ひ出したので、氣が沈んでしかたがなかつた。

芝の老人はすや〳〵と眠つてゐた。お仙が時々寢ぐるしさうに寢がへりを打つてゐた。

俺はまた亡くなつた母のことを思ひ出した。母は一日でも樂しい思をしたことはなかつた　まして溫泉などといふものは一生のうち一度も覗いて見たこともなかつた。俺が大學を出て二三年經つてからであつた。俺は少しではあつたが金をこしらへて父と母に、溫泉行きをすゝめてやつた。母はもつたいないからと言つてたうとう一度も行かなかつた。

もし故郷の母が生きてゐて、俺と芝の老人と、お仙と溫泉宿に眠つてゐるのを見たら、どんな感じを抱くだらう。母は乾度、俺が他人の所有に附してしまつたやうな頼りなさを持つにちがひない。

俺は夜具の襟が、柔かい羽二重であることに氣付いた。一生ごつ〳〵の夜具しか着なかつた母のことを思ふと、ほんたうに心苦しい。」

あの、物を大切がる母が、死ぬ數日前、俺が東京から取り寄せた羽根布團だけは、輕くて心持ちがいゝと言つて、ほんたうにうれしがつて、荷が着いた夜直ぐから身から離さなかつた。

あれから想像して見ると、母の病氣はどんなに苦しかつたことであらう。俺は母の苦痛の十が一も想像することはできなかつた。

×

十月……日。

二三日雨に降りこめられてしまつたので、俺たちは何處にも出かけて行くことはできなかつた。

岩燕のやうな小鳥が、濡れた黒い岩の上をかすめて飛んでゐるのを毎日のやうに眺めてゐた。

小鳥の聲が可憐なのも、秋の雨にふさはしかつた。

雨の霽れた間を見て、俺たちは温泉町の名所をめぐつて歩いた。

少し高いところや、急なところになると老人は屹度『こんなところはおよしなさい。上つて行つたつて雨あがりで駄目ですよ』と言つた。二三年前までは、老人がまつさきになつて、登つて行つた場所であつたが。

『あんことを言はないでも、あたしは足もとがわるいから、お前方だけで見ておいでとでもいへばいゝのに……』お仙はこんなことを言つた。『やつぱり年をとると自分の弱身を人に見せたくないのだからでせうか。』

お寺の坂を上る時も、お仙は決して老人の手を取つてやらなかつた。俺はちよつと不思議に思つた。お仙は人一倍親

思ひであり、親切な人間であつたから。

俺は見かねて、老人の手を取るやうにした。しかし、ともすれば老人は俺の手を無理に突きはなすやうなことをした後には俺も老人の心持ちを感づいたので成るたけ老人の體に觸れないことにした。老人は眼が悪かつたので、平地と、階段の境を見出すことができないで、もぢ〳〵してゐることもあつた。俺はそれを見かねて、急に近づいて行つて手を取つてやつたが、老人はそれを好まなかつた。

老人の姉が死ぬ二三ケ月前、最後に東京を立つて、朝鮮の娘の家へ出かけて行く時であつた。老人は姉を見送つて新橋まで出かけて行つた。その歸り路であつた。芝の老人はこんなことを俺たちに語つて聽かせた。『姉さんはほんたうに意地が悪い。あたしが段々のとこで、手を取つてやらうとしたら、突つけんどんにあたしの手を突つぱなすんだもの…』

俺はその時の、老人の話を思ひ出したのであつた。

『あんなに小鳥がたくさん飛んで行く…』お仙と俺が空を行く鳥の影を追ふてゐた時、老人も『あゝ、ほんとに…』と言つて空を見上げたが、それはまるでちがつた見當であつた。

ベートーヴェンが聾になつた時、それを人に勘付かれないために、樂器の前に坐りながら、さうつと唱歌者の方へ耳をかたむけて行つたといふことなどを思ひ合はせると、老人の心境がいぢらしくもなる。しかし一方では、もすこし、打ちとけて老人らしく、母親らしく、なぜしてくれないのだらうとも思ふ。

『あなたは感心だわ、あれだけおつ母さんの面倒を見てくださるから。あたしは今までは隨分つくして上げたつもりですけれど、もう今度といふ今度はあまりなさけなくなつたので、何もしまいと思ひましたよ。』

山から歸つて來て、湯のなかにはいつてゐながらお仙は、いつものやうに愚痴をならべはじめた。

『あなたにしても、それほど良くおつ母さんにつとめてゐなすつても、おつ母さんはあなたのことなんか何とも思つてはゐませんよ。眞實の子であるわたしに對してさへほんたうによそよそしいんですから。』

小島の影が湯殿の硝子窓に映ることもあつた。小島がしつきりなしに鳴いてゐた。

『こなひだゞつて、あたし、あの貯金の通帳を見せたんですよ。ちやんと、あなたがわざ〱わたしの名にしてあづけて置いてくだすつたのでせう。あたりまへの母でしたらどんなによろこぶか知れませんわねえ。だのになぜお前は實家の名にして置かなかつたかつて。だつて、結婚してから誰が、實家の苗字を郵便局にだけ持ち出すものですかねえ。あたしがさう言つてやつたら、でも、もしかあなたと喧嘩でもして家を出るか、あなたが急に死ぬやうなことでもあつたら、どうするかつて！あなたの親戚の人が來て、通帳も何も持つて行かれてしまふぢやないかつて。』

お仙の話を聽いてゐると俺も可なり不愉快である。しかし考へて見ると、芝の老人のみならんやである。位置を換へて、俺の身内の者たちを想像しても、それくらゐのことは言ひかねないにちがひない。

人間であるかぎりは、生きて行かなければならぬ以上はそのくらゐの悪賢い智慧は大抵の者が持つてゐるにちがひない。でなければ食つて行けないほど、人間の生活は苦しいものとなつてゐる。殊に一生の禍福をひたすら他人にのみゆだねて來なければならなかつた女性としては、無理からぬ考へ方であるかも知れない。

俺はこんなことを考へながら湯から上つて來た。部屋にはいつて來ると、老人はひとりでぽつねんと兩肘に凭つた山を見てゐた。老人は暇さへあれば山を見てゐた。

（東京にかへれば、こんな晴々した山なんか見ることはできないんだから…）と言つては飽かず山を見てゐた。

俺がこゝの宿に來た翌日の朝であつた。三人はいつも一つの餉台で飯を食ふのであつたが、その朝は俺の席が床の間の方に置いてあつた。俺は『こゝは一番上座だから』と言つて、老人と席をかはらうとした。老人は『どつちでも同じですから』と言つて、どうしても、座をうつらなかつた。

こんなことに對しては、普段可なりやかましい人であつたから、俺はその時はちよつと不思議にも思つたが、そのまゝになつて飯を食つてしまつた。

『おつ母さんは、床の間の方に坐らない筈なんです。あたしもこなひださう言つたのですよ。床の間の方にいらつしやいつて。ところがおつ母さんは、お前は床の間の方に坐れば山が見えないから、そんなことをいふんでせう。たれだつて山が見える方に坐りたいよツていふのです。人の親切をまるであべこべにとつて考へるんですよ。』

お仙の話を聽きながら、なるほど老人になると、裏の裏を考へるものかなと、暗い心にもなつた。

俺たちが緣側でこんなことを話してゐるのも知らないで、老人は相かはらず山を眺めてゐた。そして思ひ出したやうに時々、腰のあたりを輕く叩いてゐた。

『誰をも信ずることの出來ぬ人間！自分の子の親切さへそのまゝには受け容るゝことのできぬ人間！』おつ母さんの顏には隨分皺ができた。あの美しかつた眼は、今では墓場の下を聯想させるほど冷たい。そして何だか寂しい。

故郷の母が一度、俺に〈わたしはこのごろ時々死んでしまひたいと思ふことがある。別にこの世が苦しいからとか何とかいふのではないが、ぢいつと考へ込んでゐるとたゞわけもなしに死にたうなつてくる！〉と言つたことがあつたが、芝の老人のやうに我がといふものが強い人でも、あゝやつて、自分ひとりでつくねんとしてゐる顏を見ると何うしても憎めない。憎むことなんてもつたいないやうな氣もする。人間そのものがいつたい寂しいものにちがひない。

俺の心は大分感傷的になつて來た。俺は、これではならぬと思つた。

イプセンを想へ。十年でも二十年でも親とも逢はうとはしなかつたあの強い意志を思へ。

あれだけの強さがなければ、ジョン・ガブリエル・ボルクマンも書けまい。建築師ヒルダも書けまい。ブランドも、ヘツダ・ガブレルも………。

×

十月……日

もう明日は東京にかへらなければならならぬ。俺にはほんの數日の滯在ではあつたが、芝の老人とお仙と三人で同じ屋根の下に、寢起きをしたといふことは二三年來にないことであつた。それだけに、いざ東京に歸つて、また老人とも別々になるのだと思ふと、妙な感じも湧く。

この二三年來の、そぐはぬやうなお互の心持ちも手傳つてゐたからではあつたらうが、折角溫泉場まで出かけてやつて來た老人に對して、娘として、孫として、盡してやらなければならぬことを盡さなかつたことが、あまり多過ぎはしなかつたゞらうか。そんなことを考へてゐると、せめてもう一日でもいゝから滯在してゐて、老人をよろこばせるやうなこともしてやりたいと思ふ。

旅の宿屋にゐるとよく俺はマアカス・アウレリアスの言葉を思ひ出すが、今夜は殊にさうであつた。

雨だれの音がぴしやぴしやと地に濡れた音を立てゝゐる。一層俺の心が滅入る。弱くなる。

（人生はたとへて見れば偶然にも東から、西から南から北から集まつて來た旅人たちが、今夜一と夜だけ、同じ燭の下で顔を合はせてゐるやうなものだ。明日はまたみんなが西に東にひとりひとりの旅路につかなければならぬのだ。そしてかれ等は永遠に二度と逢ふ機會は持たないのだ。何うして一夜の旅人が惜まれようぞ。）

こんな風なアウレリアスの人生の見方を想ひ出して、溫泉町の雨の音を聽いてゐると、俺も消極的ながら善人になれさうだ。

俺は、老人やお仙には、明日東京に歸るつもりだと言つて置いたが、心のうちでは、尙は一日くらゐは餘分に滯在して、せめて老人に對して、心やりな親切だけでもつくして見たいと思つてゐた。

東京の人たちへの土産物を買ひに、お仙と二人で雨のなかを町の方へ出かけて行つた。

橋の下の水は暗のなかにも白く流れてゐた。

『明日も晴れさうにもない……』橋をわたりながら、かう言つた俺の腹のなかには、（晴れてくれない方がいゝ。さうすりや、もう一日滯在して、老人にも、こつちからもすこし打ち解けた態度で行つて見よう）と思ふてゐたのであつた。

俺は寄木細工の店にはいつて行つて、玩具を買つた。東京の知る邊の子供たちにも持つて行くつもりであつたが、第一は何か遊びごともして老人をよろこばせてやりたいと思つたからであつた。老人に梅の文箱を買つてやらうかと言ひ出したが、お仙が無駄だからといつて、とめたのでそれは止めにした。

俺は輪投げだの、玉ころがしだのを買つてかへつた。そして大きな坊つちやんになつてお仙と二人で輪投げをした。玉ころがしをもした。老人は腹をかゝへて笑つた。

俺はお仙に言ひつけて、寝る前に、老人を一度湯につれて行つて、老人の背なかを流してやるやうにした。あまり二人が湯から上つて來ないので、俺も湯まで出かけて行つた。

老人がお仙の背なかを流してゐるのであつた。お仙は俯向いてゐた。老人はかほそい腕に力をこめてお仙の背なかを洗つてやつてゐた。

俺はぢいつと老人とお仙の姿を見つめてゐた。

『こんどはあたしがおつ母さんに流してもらつてるんです』と、上氣した加減のお仙が俺を見て、笑つた。

『小ひさい時、子守がこのひとを落して怪我をさせたのですが、まだこんな痕がのこつてゐますね……』老人はお仙の肩の小ひさな古い傷痕をながめてゐた。そこには娘の皮肌の傷痕を賀に辨解するやうな母親らしいやさしみと、心づかひとがあつた。ちよつとつねるやうな恰好をして、お仙の白い皮膚を指の先きで突ついてみたりした。

『でも、このころは、この人もたいへん肉がついて來ましたよ、おかげさまで丈夫になつたんですねえ。』老人は遠い過去を振りかへるやうな眼をしながら、お仙の肩の肉をさすつてゐた。『五つの時でしたらうか、ひどい病氣をしましてねえ、所詮助かりはしまいと思つたのでした。萬一助かつても、とても滿足なからだにはなるまいと思つたのですが、こんなによく肉がつきましてね……』老人はしまひにはお仙の腕から、手までも、顫へる手で洗つてやつた。

『おつ母さんてば、赤ん坊のやうに思つて、あたしをホツホツ……』くすぐつたさうにお仙がからだを避けた。

『親の目から見ればまだいつまでゝも赤ん坊だよホツホツホツ……』老人も一緒になつて笑ひこけた。

俺はその時、老人が眼に涙をためてゐるのを見た。

綿のやうな、湯氣のなかにつゝまれた母と子の姿が、落ち着いたホウズを持つてゐた。俺はそれを或る時は繪にして

見ることもあつた。或る時は大理石の彫刻にして浮ゆることもあつた。俺は『母と子』といふやうな題を拵えて、二人の女の姿を見てゐた。

不運なる母、寂しき母、不運なる子、寂しき子！、俺の頭にはいろ〳〵な過去の幻影が渦を巻いて來るのであつた。芝の老人はほんたうに、自分の一人の娘をすら信ずることのできぬ不幸な性格の人間であるかも知れない。かの女のながい苦痛な一生が、かの女の心を堅い醜い殼につゝんでしまつたのかも知れない。かの女の眼にはいつも不安、不信の冷たい光りが動いてゐる。

しかしかの女が、今、かの女のたゞ一人の娘の背なかをながしてゐる時、かの女の眼にためられた涙は何であらう！

見よ。あの老人の眼！あの老人の唇！すけなくとも、この刹那の老人の眼にはかつて嬰兒のために夜を徹して泣いた若い、そしてまだ魂を傷けられぬ母の慈愛がとりもどされてゐるではないか。あの唇には、かつて嬰兒の頬に口づけした微笑が漂ふてゐるのではないか。

『母と子！』俺はこれだけの概念を俺の頭のなかに並べて見ただけでも、涙ぐましいやうな感じになるのであつた。

雛鳥のために、自分の臓腑を破つて食はせたといふ母鳥の傳説が、俺の胸にするどく訴へて來る。

故郷の母も俺のためにあの忍苦的な一生をしづかに送つて死んで行つた。何のむくひられるところもなく。

本能的な母の愛！自分の臓腑を裂いて子のために食物をさゝぐる母の愛！

人類がどのやうに汚されてゐようと、人間の魂がどれほど醜く傷けられてゐようと、母の子に對する愛のうちだけには、恐らく神以上の尊いものが潜んでゐるかも知れない。

嬰兒を抱いてゐる母の眼ほど美しいものがあらうか、美しいものがあらうか。

たとへ、あの恐ろしい牢舎のなかであらうと、そこに嬰兒を抱いた母があれば、人間の最も美しい愛の姿が如實に表はされてゐるのだ。嬰兒を抱いた母は、囚人服を着てゐるとしても、その眼はやはり聖母の眼の美しさを持つてゐるにちがひない。

湯から上つて來た老人は、すつかり疲れたかして、几帳面な老人としてはめづらしく、片方の足をくづして火鉢の傍に坐り込んだ。

俺は『おつ母さんの肩をもみませう』と言つて、辭退する老人の肩を無理にもみはじめた。

俺は故郷の亡くなつた母の肩さへ滅多にもんでやる機會も持たなかつたし、また死ぬ折だつて、母は遠慮をして滅多にもませなかつたことなどを想ひ出した。

俺は半時間くらゐ老人の肩をもんでやつた。老人はよつぽどいゝ氣持ちになつたと見えて、ともすれば眠りこけやうとするのであつた。お仙はそれを氣付いては俺に老人の眠つた眼を指さして笑つて見せた。しかし老人は、そのやうな折でも、居眠りをしたといふやうな素振りを見せることを恐れたかして、不圖眼をさましても直ぐに驚いたやうな顔つきを巧に匿してしまふのであつた。

ちつとも油斷を見せないとする老人の心がいぢらしくもあり、憎くもあつた。こゝにも人を信ずることのできぬ人間のいたましさがあつた。

俺はそのやうな場合に、老人をいたはる心になることのできるほど寛大ではなかつた。さつきの湯のなかでの美しいイリウジョンが俄かにやぶられた。

俺は勝手にしろといふやうな薄情な心になるのであつた。俺は惡いことだと思つた。そして『虐げられたる人々』の主人公や、『カラマゾフ兄弟』のなかの長老の言葉などを思ひ出した。そして出來るだけ俺の冷酷な、利己的な心を改めやうとした。しかし俺は自分の不快な心を何うすることもできなかつた。

『お前は理屈から出發して、善いことをしようとしてるのだ。お前は、自分自身の良心の苛責をなだめるために、無理に老人の肩をもんだり、老人をよろこばせるやうな桜口を言つたりしたのだ。お前の好意そのものが最初から不純なのだ。お前はなぜ、そんな不純なことをするのだ。もし心から老人を愛することができないなら、なぜ男らしく老人に對して思ひ切つた憎惡の態度をあらはにして見せないのか。』

×

十月……日。

山の楓が幾分紅葉しかけた。朝から雨である。小鳥が濡れた翅を、時々羽叩きしながら、川の中の黒い石の上にとまつてゐる。

この雨では汽車の乘り降りも難儀だからといつて、俺はたうとう東京に歸ることを一日延ばしてしまつた。昨夜の不快さものこつてゐたが、俺は老人がつくねんと山を眺めてゐる寂しい顏を見ると、ちつとしてはをれなかつたので、朝から老人の肩をさすることにした。

『今日は面白いのよ、おつ母さんは、よつぽどうれしかつたのでせう、あなたに朝から肩をさすつてもらつたりした

ので』お仙は湯から上つて來て、欄干に凭れながら愽かな顏をしてゐた。

『そんなにうれしさうかい？』

『えゝ、一緒に今お湯にはいつてゐると、今日はあなたのことをたいへん褒めてゐるのよ。ほんたうに親切な人だなんて言つて。そしてあたしに、あなたを大事にしろ、あんないゝ人はないつていふのよ…』

『へえ……うれしいのかなあ、そんなに…』

『えゝ、芝の家にゐたつて、たれひとりおつ母さんを親身になつていたはつてやる人はないでせうからねえ。今日はあなたがよくしてくれるつていつて泣いてゐるのよ、お湯のなかで、おつ母さんが……』

話してゐるお仙も眼を赤くしながら、晴れやかに微笑んでゐるのであつた。

夜も俺は昨夜と同じやうに、お仙と二人で玉ころがしだの、輪投げだのをして老人を笑はせた。俺はあとでは、料理場の方から銚子などを借りて來て、中學時代に覺えた手品などをして見せた。老人は顏を赤くして笑ひこけた。

今度はぜひ可愛らしい赤ん坊を生まなけりや駄目だよ。さうすると、すつかり家が賑かになるよ……』

老人はうれしさうに、くしやくしやの眼をして、お仙や俺にこんなことを言つた。

戸外ではしつきりなしにしづかな雨の音が聞えてゐたが、俺たちは近ごろになく幸福な夜を送つた。

×

十一月……日

霜が急に武藏野の欅の木立を紅くしてしまつた。

久しくほとんど忘れてゐたピストルを、俺は積み重ねた古雜誌の間から取り出した。一發の彈丸が元のまゝに裝塡されてゐた。

俺はこの數日來の不愉快さからのがれるために、欅の森のなかにはいつて行つた。十姉妹がしつきりなしに高い木のてつぺんで鳴いてゐた。俺は落葉の上に佇立したまゝ小鳥の聲を聽いてゐた。來年の秋には、そして永遠に俺は小鳥の聲を聽くことができないやうになるのではあるまいかと思ふこともあつた。

俺は今日で恰度一週間、夜も晝も不安な影に追はれてゐる。

俺の魂のなかに巢くうてゐる暗い夜がふたゝび頭を擡げて來た。

俺は武藏野の秋の落葉を踏む音の靜寂を愛する。黑い武藏野の土からすくすくと、伸びた櫟や欅の木は、悲しみを持つた人間のために墓場よりも深い、鋭い、靜かな沈默の祈禱場である。

落葉を踏んで、落葉の音を聽き、遠い森のかすかな惱みの聲を感ずる者は、憂欝な武藏野の誘惑に魅せられてしまふであらう。武藏野は到るところ、いつも暗い哀愁にあえいでゐる。

俺はこのごろ欅の白い幹にもたれながら、眼をつむつていろ〳〵なことを想ふのが一つの日課のやうになつてしまつた。

武藏野の暗い、遠いさびしさは俺の心を無限な倦怠の世界にみちびいて行く。そこには何の翔望もない。同時に絶望もない。暗い木立を出れば、そこに曠野がある。刈り忘れられた黍が雨に折られたまゝ頭を黑い土に突つ込んでゐる。野を一直線に走る徑には古い轍の痕が二筋、かすかに軽い土の上につらなつて行く。

櫟の實が黏い土の上に落ちた傍には一杯の手で掬みつくされるほどの行潦が取りのこされてゐる。氣をつけて見ればそこには武藏野の靑い空の影が映つてゐる。

暗い森から、暗い森の間に、ひろい耕作地がつゞく。耕作地をつゝむ重い空氣のなかにはものなやましい秋の光りがなごむ。草葺き屋根はたいていエクスプションなしに暗い森のなかにしづかに愛撫せらるゝかのやうに保護せられてゐる。だからそこにはたゞなやましい曠地と、枯れ切つた秋の收穫と、默々として鍬を打つ男や、毛深い馬が草を食んでゐるばかりである。

女の細い、しかし甲高い聲や、赤ん坊の泣き聲や、豆太鼓の音が急に武藏野の嚴肅な沈默を壞ることがある。それはいつでも暗い森のなかの、眼に見えぬ百姓家のなかゝらである。

赤いちやん〳〵を着た嬰兒を無雜作にひつしよつた若い女が、大きな湯沸かしだの、手桶だのをさげて、森のなかゝら耕作地の方へ出かけて來ることもある。嬰兒の赤いちやんちやんと、若い女の影が、遠い地平線の上の鉛色の空に反映することもある。そこには恐らく種子を播いた人自身も打ち忘れてゐるであらうやうな寂しいコスモスが、黑い耕作地の端に、あのデリケートな顏をしてひよろ〳〵と延び上つてゐる。淡紅の花瓣が日の光りをかざして微風にゆれてゐる。俺は秋になつて武藏野のなかにあの可憐な花を見るたんびに、まだ見たこともない可憐な女を想像することもある。その長い髮を、黑い瞳を……。

俺は今日も木に凭りながら考へ込んでしまつた。

（わしは明日にもS子を連れて東京に行く。東京のお前の家は狭くて住まへぬから、新らしい家を探し出すまで上京を見合はせてくれつて、そんなことはお前の口實だ。親が子の家に行くのだ、何のかもうことがあるか。俺は直ぐに出

かけるぞ。わしとS子とお前たち夫婦だけなら六疊の部屋が一つあればたくさんぢやないか。お前は家がないないといふが廣い東京だ、家はありあまるほどあるにちがひない。お前はお仙とS姉のなかゞ、これまでのいきさつから考へてうまく行くまいといふてをるが、親がついてるぢやないか。案ずることはない。わしはS子の肩を取つてやるから、お前はお仙のを取れ。男二人で、女二人くらゐ押さへつけ得ないでたまるものか。お前は待て待てといふが、家がない家がないといふが、お前はわしらが行くのがいやなのか。しかしわしはお前の親だ。どうあつても行く。もうぐづぐづしてると雪が降る。雪が降つてはならぬ。それ前にはぜひ行く……）

俺は故郷の父からつゞけさまに三度來た手紙のことを思つた。

（なあに、お父つあまが、多勢の孫たちにわかれて東京に行きたいものか。みんなS子が尻を突つついてるのさ。わたしや、ひとりでゞも東京に出かけて行くとS子がいふてゐた。お父つあまはS子が可愛いうてならなぬのさ。T姉の言葉も思ひ出された。

母に死なれた老年の父が、一人の娘をつれてたつた二人で、日も日も頼りない思ひをしてくらしてゐるのであらうことを思ふと、たまらなくもなる。

『しかし、あの狷介の父が――故鄕の姉たちや、甥たちや、孫たちにまで困り者にされてゐる父が――そしてお仙とは最初から氣まづいことになつてしまつてゐるS姉が、俺たちと一つの屋根の下に住むとしたら……』

俺には今から、あまりに明かにその苦痛な結果が見えすいてゐる。

（故鄕の人たちにも愛想をつかされたんでせう、だから故鄕の方が面白くないので……）お仙はかういふ。

まつたくさうだ。父は、母が死んでから後は一層ひどくなつた。來る孫、來る孫を國へ一ては、孫たちが嫁ぐやうな時

まれ口ばかりたゝいてゐる。來る娘にも、來る聟にも憎まれ口ばかり利いてゐる。三度に一度は血を分けた娘たちでもむつとして當座は寄りつかなくなる。孫たちはほとんど寄りつかない。

『しかし、あれも六十年來連れ添つてゐた母が亡くなつた悲しさに撃たれたゝめに氣が狂つたからだ。』から思へばたまらなく父がいとしい。

俺は直ぐにでも飛んで行つて父と語りたい、父を連れて來たい。しかし俺の心の隅には不安の影が日に日に濃くなつて行く。

雉子笛を吹いて、口三味線で淨瑠璃を語つて、聟たちの悪口を利いて、笑つて、泣いて、妻を失つた新らしい悲しみに狂つてゐる父を想ふ。

お仙や俺のことを呪つてゐるであらうS姉や、岡山の姉の言葉が冷たいメスのやうに胸に響く。

木を伐つてゐる音が森の中から聞えて來た。間遠うに。小鳥は木のてつぺんでしつきりなしに鳴いてゐた。

俺は音のする方に歩いて行つた。

『あたしS子さんと一緒にはとても住めないと思ふのです。S子さんは學問もありなさるし、あたしはこんなに馬鹿なんですもの……あたし、これまでこんなに幾年もあなたに可愛がつていたゞいたのですから、もう死んだつていゝと思ひます。あたしあなたに心配をかけるのは心苦しいから、自分で何うかしますよ。芝のお母さんはあんなだし、みなさんが田舍から出てくれば、あなたが仲にはいつて困りなさるばかりなことは、今日から見えすいてゐますもの。あたし一人で遠い旅にでも行きますわ……』お仙の言葉が……。

『おつ母さんてば、田舍の舅や小姑と一緒に住むくらゐなら、何も貧乏な家に辛抱してるがものはないつていふんで

—（[illegible]）—

すもの、そんな不人情なことがねえ……』袖口で拭いてゐたお仙の涙が……。

焚き火の煙りが木立のなかをしづかにのぼつて行つた。す丶けた土瓶が、焚火のそばにころがされてゐた。

俺の父とおつかつだと思はれるくらゐの老人が手斧を揮つて木を伐つてゐるのであつた。四五寸の雑木であつたが、衰へた老人の手にはなか〳〵苦しさうであつた。

老人は斧を振り上げた。木は老人の弱さを冷笑するかのやうに、斧をはねかへすのであつた。わづかに葉が二三枚落ちた。

『おぢいさん、たいへんですねえ……』俺は笑ひながらうしろから聲をかけた。

『え丶、ヘツヘツヘツ……』老人は一本の歯もない口をもぐ〳〵させて笑つた。額を拭いた。

俺は老人の手から斧を受け取つた。

俺は手の皮が赤くなつて、ひりひりするまで斧を振り上げた。さあつと音を立て丶木が倒れた時、老人は溜息をついた。

『わしの半日仕事だと思つとりましたが、おかげで』老人はかう言つて、ぴよこ〳〵と頭を下げた。そして焚火のわきのす丶けた土瓶から、無理に湯を注いで飲ませてくれた。

ばさ〳〵と落葉を踏む音がした。木を伐つてゐた老人よりは少し若いかと思はれる老人がつぎはぎの袖無しを着てやつて來た。

『ひどい霜だつたのう、今朝は……』と若い方の爺さんから聲をかけた。

『あ丶、もうぢきに冬が來る……』年寄つた方の爺さんが、焚火の中に枯枝を投げ込みながら、人のよさ丶うな笑ひ

方をして、若い方の爺さんを見た。
若い方の爺さんは片手に胡弓を持つてゐた。
『ゑらいなあ、これやあでかい木ぢや……』若い方の爺さんは、胡弓と弓を股の下にかいこんで、焚火の上に手をかさしながら、伐り倒された木を見つめてゐた。
『旦那のおかげで樂に切れたヘツヘツヘツ……』爺さんは煙管をぽんとはたいて、手のひらに吸ひ殻をうけた。
『樫かなあ……』若い爺さんが煙さうに片方の眼をつむつた。
『樫ぢやねえよ……』
『何づらあ？ 椽か？』
『椽でもねえ……』
『何づらあ？……』
『何づらあ？ 堅え木ぢやつた……』
『ふうむ……ぽつ〳〵やりなされ……』
年寄つた爺さんは振り向きもしないで、倒された木の枝を落しはじめた。
『あの爺さま、息子がシベリヤに行つて今度の戰爭で死んだんでさあ。おかみから千何百圓たらお金がさがつたんですぜ。だから、朝から胡弓など彈いて遊んでゐられるんですぜ……』
老人はちよつと手をやすめて、今行つてしまつた爺さんの方を見送つてゐた。
俺は故鄕の父のことを考へながら家に歸つて來た。

霧が淡く森をつゝみはじめてゐた。

×

十二月……日

この冬初めての雪が降つた。

（雪が降るやうになつても準備さへできればＳ子をつれて、おれは東京へ出かける）と言つて寄越した父の手紙が着いてから三日になる。

芝の老人がやつて來て俺の眼を偸んではひそひそとお仙に小言らしいことを言つてゐた。俺はできるだけ顔を出さないことにしてゐた。

俺は不快でならなかつたので、森に出かけて行つた。俺が出かけて行く時、お仙が父の前で俯向いて默り込んでゐた姿が、森を歩いてゐる間、頭にこびりついてゐて離れなかつた。

薄い雪が枯草の上を掩ふてゐた。道を掩ふてゐた。

俺の頭には北の雪國の夜が映つて來た。それはお仙が二度目の男に捨てられて、間もなく、俺が入院してゐた病院に手傳ひに來てくれた日のことである。そのころお仙には芝の母からも殆んど小遣錢一つ送つて來なかつたのであつた。

枯林のやうな林檎畑の上の白い砂の丘にペンキ塗りの小ひさな病院が建つてゐた。

旅人はガタ馬車から下りて十丁ばかり手前から、その丘の上の建物を見出すことができた。病院をめぐつて、たゞ一

面にだゝつぴろい荒地がひろがつてゐた。

そこは黒い山脈の間につゝまれた盆地になつてゐたが、林檎だの櫻だのを植えつけた低い果樹園の丘が、幾つもつゞいてゐた。銀の鑛山を目がけて奥の方へはいつて行く旅稼ぎの男女らしい人たちが、落葉してしまつた小丘の間を急いで行くものもあつた。俺はそのころ、そこの中學の教師にやとはれてゐたのであつた。

病院の板の間は木の地が見えないほど黒く汚れてゐた。病室と廊下の境の障子は大抵破けてゐたので、廊下から直ぐに病室のなかを覗き込むことができた。

俺は疊の上に薄い蒲布團を布いて、その上に寢かされてゐた。夜具の上には毛がすりきれた古毛布が一枚重ねてあつた。

俺は死ぬかも知れないと思つた。俺はそれほどひどくやつれてゐた。夜具から出して藥瓶を取らうとした手は、いたましいほど痩せてもゐ、垢づいてもゐた。

俺と同じ室にはやはりこれも鑛山地から來た一人の青年と、七十ばかりの老人が寢てゐた。老人は俺が行つて一週間目に雪の中を白木綿で卷いた棺桶に入れられて病院を出て行つた。青年は俺より早く退院したが、別れる時蓄音機をかたみと言つてくれた。

お仙は小ひさな鉢植の花を病室の窓にかざるために半日雪の中を歩いて、顔を赤くして歸つて來た。

毎日雪雲が低くとぢこめてゐた。午後になつてわづか、一時間くらゐ雲のちぎれ目から太陽の光が覗くことがあつた。

病室の硝子窓に映つたかすかな光りを俺はどんなに喜んだであらう。鉢に植えた花が硝子窓の前で、かすかな冬日に

顫えてゐた。

俺は夜も晝も熱にうかされた。眼がさめた時、俺はお仙が俺の枕許に坐つてゐるのを見出した時ほどうれしいと思つたことはなかつた。

お仙は大抵毛絲の編み物をしてゐた。雪が溶けて、したしたと軒から地の雪の上に落ちて行く音が頻りなく思はれた。どのやうな眞夜中にでも、俺が眼をさます時は、大抵お仙は起きて、俺の傍に坐つてゐた。寢るにしても、床を敷いて寢るやうなことは滅多になかつた。毛布を引つかむつたまゝ俺の夜具にくつ付くやうになつて、壁にもたれて眠つてゐることもあつた。

松葉一つ屋の上に落しても響きさうな靜な雪の夜に、俺はお仙が俺の氷嚢を取りかへるために針で氷を碎いてゐる音を聽いた。

たゞわづかの金で、俺にやとはれたばかりに、夜も眠らないで氷を割つてくれてゐる若いかの女のうしろ姿を見てゐると、俺は喉の奥があつくほてつて來るのであつた。

かち、かち、かち……森を歩いてゐると、あの雪の夜の氷を割る小ひさな槌の音が響いて來るのであつた。

俺と一緒になつたことがお仙にとつて、いつたい、幸福であつたらうか。俺はお仙の一生をかへつて不幸に陷らせたのではないだらうか。

自分の一生をたゞ一人の男に賴り、たツた一人の男のためにすべてを投げ出して行く女の面影が浮かぶ

『あなたが死ねば、あたしはすぐに死にます。あなたは死んではいけません。きつと生きてゐて立派な仕事をなすつて下さい。どんなに苦しくつても生きてゐてください。あたしも生きて行きませう……』

俺はお仙がこのごろ毎日のやうに語る言葉を想ふ。

『雪やこんこん、霰やこんこん……』どこかで子供たちが集まつてうたつてゐる。木の實がはじけるやうな、樂しい笑ひ聲が聞えて來る。

俺は子供たちが笑ひながら、うたつてゐる聲を聽いてゐる間にこんなことを想つた。

『何故、子供だけがうたつて、大人になればうたはないだらう？一日一日と少年時代から遠ざかるにつれて、人間はうたふことが少くなる。かつて少年の心に知らなかつた人間生の苦惱が、俺たちの唇から歌を奪つてしまふだらう。そして墓場に入る時は、人間はまつたく啞のやうに默りこんで行かなければならぬ…』

俺は人一倍歌をうたうことを好きであつた。俺は教會でもいつも一番上手な歌ひ手であつた。俺の聲は美しかつた。

『俺はこの二三年、殊に母が死んでからこつち一度も俺の口から洩れる讃美歌の聲を聽いたことがない。』

俺は歌をうたふことをすつかり忘れてゐたのであつた。このことに氣付いた時、俺は今までになく寂しい心持ちになつた。

家に歸つて來た時は、芝の老人はゐなかつた。お仙が机に俯伏せになつたまゝ眼を赤くしてゐた。

お仙はいつもに似ず、今日は沈默つてゐた。

俺もまた芝の老人の不快な言葉を聽きたくもなかつたので強ひてたづねもしなかつた。

お仙は赤くなつた眼を、氣にして幾度も洗つたり、鏡に映して見たりして、みだれた髮を直し直し、雪の中を町まで買物に出かけて行つた。

俺はお仙の留守に西洋剃刀を隅から隅まで探して見たが、何うしても見あたらなかつた。

お仙が町から買つて來た肉を煮たが、俺たちは二人ともほとんど默り込んで飯を食つた。

急にお仙が飯を食ひかけたまゝすゝり上げて泣いた。

何とか言つて慰めてやることもできないほど、俺自身の心も疲れ切つてゐた。それでも俺はお仙の肩を撫でゝやつた。そして。

『泣くな。馬鹿……泣く奴があるか。』と叱るやうに言つた。

『…………』お仙は俯向いたまゝ茶碗を握つた。そして皿の上の肉を俺の方に集めて、喰べろといふ眼つきをした。

『お前こそたくさん喰べろ肉が好きぢやないか……』と俺は言つたがお仙はみんな肉を俺の方へ集めてくれた。

『お前は西洋剃刀を持つてゐるだらう、隠して…』お仙は俯向いたまゝ默つてゐた。俺は二三度繰りかへして言つた。

『お出し、こゝに持つておいで……』

『あなただつて、ピストルなんか持つてゐるぢやありませんか…』お仙は、はじめて口を切つた。

『持つてゐたつていゝぢやないか…』

『それぢやおんなじやありませんか…』

『何でもいゝからその剃刀をこゝにお出し…』俺は命令的な調子で言つた。

『あなたがピストルさへこゝにお出しなれば…』

お仙は無精々々に立つて剃刀を佛壇の下から取り出した。

『そんなところに置いたのかい？ちつとも見つからなかつたハツハツハツ…』俺は不圖可笑しいやうな氣になつて笑ひ出した。お仙も赤い眼をしながら、淋しく笑つた。

俺たちは西洋剃刀とピストルを飾棚の上に並べた。薄暗い電燈がその上を照らしてゐた。

俺は剃刀を手に取つて見た。俺が豫想してゐた通りにそれは獨逸製のもので、無氣味なほど深い光りを持つてゐた。

『ばかによく切れるんですつて……』とお仙が剃刀を覗き込みながら言つた。お仙はピストルを握つてゐた。俺はびつくりして、

『おい、あぶない。うつかり引鐵でも引かうものなら死んでしまふぞ…』

お仙はあわてゝピストルを飾棚の上に抛り出すやうにして置いた。

『おう、こわい…ほんとう？』そして兩肩をすぼめて、身顫ひするやうな眞似をした。

『馬鹿ツ！投げ出す奴があるか。それこそあぶないぢやないか…』

『さう……何うしていゝんだか、わからないんですもの』お仙はなほ好奇の眼をしながらピストルを見つめてゐた。

俺はピストルを取り上げて、お仙に彈倉の中を開いて見せた。そして彈丸を手のひらに乘せた、

『これが彈丸！可愛らしいんですね。手に持つても大丈夫？……』

俺はうなづいて見せた。お仙はこわさうに小さな彈丸を手のひらにかゝえて見つめてゐた。

『一つしかないんですか彈丸は？』

『さうだ。』

『初めから一つぢやないんでせう。』

『さう、三十あつたけれど、僕が森に行つては撃つたのさ』

『まあ、そんなにたくさん？』お仙はわざと眼を大きくして、驚いた表情をして見せた。

『それぢや、みんな森の中で撃つておしまひになればいゝのに、一つばかし殘して置いてあぶないぢやありませんか。』

『うむ……』俺はしばらく默り込んだ。

『ねえ、明日にでも撃つておしまひなさい…』

『うむ……』俺は、彈丸を捨てゝしまつた方がいゝとも思つた。しかし最後の一彈だけはいつも殘して置きたいと思つてゐたので、それを失つてしまふことは何となく淋しいやうな氣がしてならなかつた。俺は再び默りこんでしまつた。

お仙は剃刀とピストルをハンカチーフにつゝんで、簞笥のなかに入れた。そして鍵をかつてしまつた。

『人間つて生きてゐれば、生きてゐるほど、苦しいことばかり出てくるんですねえ……』

火鉢に手をかざしながら、お仙がしみじみした句調でかう言つた。

『そりやあ、さうさ。しかしその苦しいなかを切りぬけて行くのが、ほんたうなのさ。』

『そりや、さうでせうが……』お仙はほどけかゝつた髮を、ものうさうに指で撫でゝ見た。そして火箸の先きで、灰のなかに字を書いてゐた。

『苦しんでゐるのは、俺たちばかりぢやないのだから…何うせ生きてゐる間は誰れでも苦しんでゐるのさ…どんな人でも……』

『…………』お仙は俯向いてなほ灰をかきまぜてゐた。お仙はそうつと頰に流れて來る涙を手の中で拭いてゐた。

『しかし、何だ……人間はどんなに厭世家でも、哲學だの、思想だのといふ點から出發しては自殺をすることはできないやうだなあ………却つてはたから見れば、何でもないといつたやうなことが原因で死んだりするんだなあ…』俺はお仙に語るともなく、獨りごとのやうにして話した。

お仙は灰の中に火箸を突つ込んだまゝ考へ込んでゐた。

『一家の不和だの、折合が惡いだのいふやうな、考へ直したら何うにでも方法が見つかりさうなちよつとしたことが原因で自殺をする人があるが、何だか、このごろは俺も心からその人たちの心持ちが想像できるやうな氣もする……』

俺の頭には故鄕の父や、姉たちや、お仙の母の、だれもこれも人間的な苦しみと、人を信ずることのできぬ惱ましさとにさいなまれてゐる顏が映つて來るのであつた。

そして俺の頭にはあの忍苦的一生をしづかにこらへて行つた亡くなつた母と、お仙とがいつの間にか一つの女性になつてあらはれて來るのであつた。

『もう、寢ようぢやないか。どうにかなるだらうぢやないか……』俺は仰向きに疊の上に體を投げるやうにして寢た。二三度とんとんと輕く壁を蹴つた。そして口のうちだけで『生きてさへゐれば…』と付足した、自分自身に言ひきかせるやうに。

箪笥のなかに入れられたピストルの一つの彈丸のことが、なほ俺の頭のなかに刻み込まれてゐるのであつた。

『風をひくといけませんよ、寒いのに……』お仙が枕を持つて來て、上からそうつと、搔い卷をかけてくれた。

—一九二一•一〇—



或る男

武者小路實篤

八十一

そのことが彼になかつたら、彼は恐らく實際家になつたであらう。そして彼は野心家にならない迄も、政治家になつて、手段を問はない人間になつたであらう。少くもそのことは彼にとつて大なる打撃だけあつて、彼はそれから起き上り切るには九年か十年を用した。そして起き上つた彼は以前の彼ではなかつた。

彼はこの材料をあつかつた多くの小説や脚本をかいたが、それは彼が結婚してからあとで、傷がうすらいでからであつた。傷の強い時には彼はそれにふれることはあまりにつらかつた。一つの例外はあつたが、その時彼は涙で目がくもつてかく字がよく見へなかつた、そして一二枚かくとくたばつた。それも彼女とわかれてから七八年たつてからであつた。

しかしそのことはあとでかくことにしやう。その前に自分は彼の野心家の方面を見やうと思ふ。彼は下の級をやつけることを、彼女のことがある時も忘れなかつ

た。前年の秋の輔仁會の大會に彼はなぐられることを豫期して下の級をやつける爲に演説をした。それは亂暴者は活潑なのでなく、粗暴なのだと云ふことのあてつけであつた。活潑と粗暴と云ふ題で、活潑をほめて粗暴をけなした、そして下の級の亂暴者に一々あてつけた。

演説をすませておりてくると下の級の人が二人、彼の處に來て演説の草稿をわたしてくれと云つた。それで彼はそれを渡した。

事件が發展してくることが感じられた。しかし別にことも起らなかつた。彼は午前演説をした。午後三時頃だつた、彼の腹が急に痛み出した。彼は時々腹をいたくするので、別におどろかないで、會場の一番うしろで、しやがんで膝で腹を抑えるやうにして痛みをよはめてゐた。すると彼の級の人が二人來て、彼にすぐ歸ることをたのんだ。下の級の人が最後のホーロク合戰の時、彼をなぐることを決議した。それでもし彼がのこつてゐると彼の級の人が彼を助けなければならない。さうなると大勢見てゐる所で級と級の喧嘩をしなければならない。それは學校の不名譽だから歸つてくれと云ふのだつた。彼はなぐられると聞いて逃げたと思はれるのはいやだと云つた。しかし自分のことで級や學校に迷惑を與へることを平氣でがんばることは出來なかつた、それに腹も痛いので、二人の云ふことを聞くことにした、二人はよろこんだ。

その後、彼は下の級に自分のなぐられることを覺悟してゐたが、ついになぐられなかつた。彼は下の級が、彼の級と喧嘩をすることを恐れてゐることを感じた。そして又下の級はいろ〳〵に黨派がわかれてゐることなぞも知つた。又彼は、彼の級の人に自分が愛されてゐることも知つた。下の級の人は彼をなぐるに都合のいゝ機會があつても、こわい顔をする許りで、手出しはしなかつた。彼は組しやすい人間だと思つた。處があることで彼はなほ自信をました。

それは天皇が何處からか御歸りになる時に奉迎にゆくのをすかして、華族女學校の運動會を見に行つた者があつた。彼の級にも一人さう云ふ人があつた。それを下の級の人がなぐつた、そしてなぐる時彼の級は意氣地がないからかはつて制裁してやるのだと云つた。そしてなぐつた理由を掲示した。

彼はそれを聞いて腹を立てた。そしてMやUにそのことを云つた、MやUも怒つた、それで急に、彼の級の人は皆集ることになつた。なぐられた人はもう歸つて學校には居なかつた。その人は彼の級でもあまりすかれてゐなかつた。

Mは事實を報告した。そして奉迎しないで女學校へゆくなぞと云ふことは學生にあるまじき行爲だから、彼の級でも制裁しなければならない。たゞ自分達は知らなかつた許りだと云つた。

しかし彼は忠告してわるかつたと云へばそれでいゝと云つた。彼の目的は下の級をやつける點にあつた。下の級が彼の級を意氣地なしだと云つた點にあつた。

その時、志賀は彼に贊成した。そして下の級のなぐつた連中が、奉迎をしないで女學校の運動會を見にゆくよりももつとわるいことをしてゐた事實を知つてゐると云ふ意味のことを云つた。

それで結果、その男に忠告して改心すればそれでいゝことにし、そして下の級には彼の級を侮辱したことを掲示を出して謝罪させることに使を出すことにきめた。

彼は自分をなぐることが出來ないのでK（その男）をなぐつたのだと思つた。一番下の級に憎まれてゐるのは彼だつたから。しかし彼をなぐれば彼の級の人が怒ることを知つてゐるので、又彼の腹では彼をなぐる勇氣がないので、彼の級に評判のよくないKをなぐつたやうに思つた。其處に下の級の卑劣さを彼は感じた。

しかし下の級は中々あやまるとは云はなかつた。彼の級と下の級とはいつ喧嘩をするかわからなかつた。そして院長さん達も、學校にのこつて喧嘩がはじまつたら仲裁しやうと待つやうになつた。最上級の高等科三年の人や、先生達が仲裁をしやうとしたが、彼はそれをこばんだ。彼はその他同級の和解したがつてゐる人とも議論した。しかし彼は表面に立つてゐるよりも、知らん顔してゐる仲間に入つてゐた。そして呑氣ものと呑氣なことを云つてゐた。志賀とも、始めてその時話したが何を話したかはつ切りは覺えてゐない。志賀は内村さんの處に行つてゐたせいか、喧嘩に反對してゐた、彼は承知しなかつたことだけ覺えてゐる。

しかししまいに、下の級から掲示を出してあやまるのは許してもらいたいが、彼の級の處へ來てならあやまると云ふことでおちがついた。平和におはつたことは彼にとつてもよろこびだつた。喧嘩すれば腕力ではとても彼の級の叶はないことはわかり切つて居た。しかし彼の方が怒る理由をもつてゐたのが唯一の强身だつた。しかし平和に下の級の人をあやまらしたと云ふことは彼の級にとつては、よろこびだつた。そして彼の級はそれから實に仲がよくなつた。大勢あつまつて棒とりしたり、鬼ごつこしたり、馬のりになつておとしつこをしたりした。MやUや志賀や、彼が遊びの張本人になつてゐた。彼はその後下の級の人のことはまるで忘れた。

八十二

矢張り前年のくれのことだつた。彼は友達と本郷の南江堂へ行つた。そしてレクラムのトルストイのルチエルンを買つて來た。彼は語學の力がなかつた。學校はごまかして及第してゐる仲間なので、獨逸語は中學一年から七年の間ならつたはづだが、學校以外の本を讀んだことはなかつた。しかしトルストイがすきなのと、安いので買つて來た。

その晩、彼の兄がそれをよんですつかり感心した。あくる日彼は兄から、ルチエルンを是非よめとすゝめられた、兄

はすつかり興奮してゐた。そしてルチエルンの主人公の氣持に同感して、いろ〳〵中の面白い所を話して聞かせた。彼もすつかりよみたくなつた。

其處で彼は辭典を首びきしてよみ始めた、一行に三字位はわからない字があつた。少しでも暇があるとよみ出した。そして一ケ月程かゝつて三十何頁のルチエルンをよみあげた。

中味に隨分感心した。大道の音樂者のバイオリンの音が聞へてくる處から、萬物が生き出してくる處、音樂者が金をもとめても誰も金を出さないこと、それから主人公のあげる怒り、その理由、それ等は彼を興奮させた。

そして彼は兄にすゝめられて、いつか譯して見たいと思つた。その後、鷗外さんがスイツル館として譯してゐるのを知つたが、隨分興奮した。藝術の力、何百人の人を森んとさして動かさない力、金持にたいする罵倒、クロイチエル・ソナタをかきうる人の若い頃の燃ゆるがやうな力を、彼は心の底から感じた。

それと同時に彼はドイツ語の本がよめる自信が出來た。彼はいろ〳〵のものをむさぼりよんだ。

八十三

その時分彼を動かした出來事は日露戰爭であつた。彼はもう單なる愛國家、ことに戰爭好きな人間ではなかつた。彼は、戰爭に反對した連中に厚意をもち出した。しかしそれはもう少しあとかも知れない。

彼の家にゐた書生も二人戰爭に出て死んだ。又彼の死んだ話の處に來て、よく話してきかせた軍人も戰場で悲慘な死をとげた。三日とか戰場でのたうちまはつて餓ゑ死にしたやうに彼はきかされてゐた。

書生の一人は病氣でやられた。他の一人は士官學校を出て旅順へいつて、戰ひの最中、部下がやられた、その血で扇に日の丸をかいてそれで指揮してゐる所を彈丸がとんで來てやられたと新聞で見た。

彼はその男が彼の祖母におこられて泣いてくやしがつてゐるのを歌をかいてなぐさめたことがあつた。高石と云ふ名だつたので、一寸ぐらい打擊をうけたつて平氣でゐればいゝぢやないかと云ふ意味だつた。

しかしそれはもつとあとかも知れない。

八十四

失戀の淋しさを最も强くなぐさめてくれたのはトルストイであつた。彼は益々トルストイに夢中になつて、日本語は勿論、ドイツ語に譯されてゐるもので手に入るものは片ぱしからよんだ。アンナ・カレニナも彼は短かすぎるやうに思つた。「戰爭と平和」はレクラムにあるのが、三分の一以上ぬかしてあるので、全譯を手に入れて讀みたいと思つたので、ついよまずにしまつた。その他、手にふれるものはのこらずよんだ。雜誌に、トルストイの言葉が一行でもかいてあると、よろこんで買つて來た。

學習院でトルストイと云へば彼のことだつた。彼と云へばあのトルストイかと云へばわかる位いだつた。彼は何かに片假名でトとかいてあるのを見ると顏がほてるのをおぼへた。トルストイの夢をよく見た。

トルストイが越中フンドシをして湯に入りにゆく夢が一番滑稽な夢で、トルストイにあつて寫眞をもらつてよろこんでかくしにしまいこんでなくなると大變と手でおさへてゐる時、目がさめた夢は、隨分彼をがつかりさせた。トルストイの惡口を云ふ奴があると心から腹を立てた。

彼の失戀の精神的方面のおぎないはトルストイによつて一番おぎないを得た。

彼の下の級の人はアンナ・カレニナをよんで學校の先生からおこられたが、彼はトルストイをよむことでは少しもおこられずにすんだ。學習院には又珍らしく、トルストイの獨譯は多かつた。現代の奴隷とか、愛國心と耶蘇敎（？）

なぞと云ふ中でも危險なものが、學習院の圖書館にあつた。その他トルストイの傳記があつた。彼はそれを借りて全部寫したことがあつた。しかしそれはその時分から二三年あとでの事實だ。

八十五

彼は益々眞劍にならないでは生てゆけなくなつた。彼は段々、法科にゆくのがいやになつて、文科にゆく氣になつて來た。精神的な要求が強くなつて、その他のものは空になつた。同時に彼はトルストイの影響をうけて段々、物慾を輕蔑することになり、自分の生活のまちがいを知り、現代の制度があやまつた基礎の上になりたつてゐることを知つた。

彼は自分の生活をどうかしてしつかりした基礎の上におきたく思つた。しかし何をしたら一番いゝか彼にはわからなかつた。習慣的に學校へ行つた。しかし學校の稽古は彼にとつてあまりに無意味であつた。腹を滿してくれなかつた。落第しない程度でなまけた。そしてトルストイの本は勿論、イプセン、ハウプトマン、ズーダーマン、ドストエフスキーその他社會主義の本なぞをよんだ。イプセンはトルストイに次で彼をよろこばした。

「一人で立つものは最も強い」

と云ふ「社會の敵」の最後の言葉なぞは彼をよろこばした。眞理の他、何にも恐るゝものなし。

だが彼は時々居ても立つてもゐられない程淋しかつた。彼は友達を求めた。彼は又よく郊外を一人で歩いた。彼はよく涙ぐんだ。しかし誰にもそのことはうちあけなかつた。

彼はその時分、自分を慰めるために、脚本をかいた。しかしそれは誰にも見せずに、消えていつた。

彼は自分に勇氣をつけなければ生てゆくのが苦しかつた。しかし自殺しやうとは思はなかつた。彼は自分を最も優れ

た人間にしたかつた。彼のことを何にも知らないものが彼のそばによると淋しさをうけた。

その時分か、その一二年あとに藤村操が華嚴の瀧で自殺した。「學校で華嚴の瀧にとびこむものがあれば武者だ」とある人は云つた。兄の友達が彼の顏を見て、「滿足することを知らない顏だ」と云つた。七八年のち、彼の妻になつた女が彼を見た時、あまり淋しい顏してゐるので泣きたくなつたと云つた。彼には淋しさがつきまとつてゐた。しかしその淋しさで洗禮を受けなかつたら、彼は野心家として一生を終つたかも知れない。

八十六

彼はこうしてゐると氣ちがいになりはしないかとよく思つた。彼は母とよく衝突した。

彼は藝術に慰めを求めた。畫家や、文學者を尊敬し出した。彼の嫌ひなものは軍人と政治家になつた。金持も嫌ひだつた。殊に女の貞操を弄ぶことを自慢にするものを嫌つた。

不良少年や、不良青年の顏を見ると胸がわるくなつた。人間を侮辱してゐると思つた。

下等な話を嫌つた。彼を知つてゐるものは彼のそばでは下等なことを云はなくなつた。彼は學校の雜誌にも何かかき出した。演說は相かわらずやつた。彼は臭いものにはふたをしない主義だつた。彼にとつては學校の名譽よりも人間の方が大事であつた。

彼は眞劍だつたから皆、よけて通つた。冗談で怒られては馬鹿氣てゐる。それで彼のそばでは冗談をやめた。

しかし彼は一方溫和しい者より溫和しく、呑氣ものより呑氣だつた。學校の勉强しない點で、彼は誰にもまけなかつた。

彼は偉さうなことは云つてゐたが、成績は益々わるく、びりの方におちかゝつた。しかし馬鹿者以外からは馬鹿にさ

れなかつた。

或時、先生が、學校の勉强をしないで、他の本をよんで偉さうなことを云ふことを彼にあてつけて非難した。しかし彼は例によつて氣がつかない顏してゐた。そして腹の底で思つた。「この先生は、本當の要求で本をよむことがわからないと見へる」

しかしその時分、學習院は、院長さんの勢力がなかつただけ呑氣だつた。ドイツ語の教科書には、イブセンのロスメルス・ホルムやハウプトマンの沈鐘や、ズーデルマンの名譽なぞが撰ばれた。輔仁會の大會に、下の級の人はモンナ・ヴンナの一部をやつた。かの美しい人がヴンナになつた。科外講義にヘルマンとドロテアをやつてもらつたり、教科書でエミリヤ・ガロワチをやつたのは今でも彼は覺えてゐる。

その時分文壇も段々動き出して來た。あらゆる方面から精神的の要求が生き出して來た。彼はそれを取り入れることで勇氣を得た。

淋しいのは自分許りではない。

八十七

彼は文學好きな友達を求めた。正親町の處へは遠慮しながら出かけた。一緒に展覽會にも出かけた。彼は畫家の名前は一人も知らなかつた。そしてどれ見てもよくわからなかつた。うまいと思へばうまくも見へ、何にもないと云へば何にもないやうに見へた。それが評判な畫だと聞かされてさうかなと思つた。しかし何となく展覽會を見ると云ふ感じが、簡單な意味で彼をよろこばした。彼は一々私かに批判して見るが、口に出す勇氣はなかつた。たまに自分の思つてゐる通りのことを正親町が云ふと、自分も少しはわかるのだなと思つた。そして展覽會を出て外の空氣にふれるとほつ

とした、自然は矢張り美しいと思つた。

しかし彼は藝術を何と云ふことなしに愛した。本當にわかつて愛したのではなく、わからずにたゞ愛すべきものとして愛した。其處には先入生も多かつた。同時に藝術的な要求も次第に目ざめていつた。しかし特に感心したものはなかつた。黒田清輝とか。中川八郎なぞと云ふ名を彼は覺えた位のものだつた。それも何處がいゝのか彼にはわからなかつた。

志賀とも段々知りあいになつた。或日志賀から鏡花湯島詣をかりて隨分感心した。日本語でもこんなに自由に生かせるものかと思つた。このことはあとに夏目さんのものをよんだ時にも感じたことがあつた。その他では感じたことのない感じだつた。

その後又志賀から多情多恨をかりてよんだ、之にも感心した。よく人情のこまかい處がかけてゐると思つた。文章もよくあてはまつておちついてゐるやうに思つた。

夏目さんの坊ちやんもその時分出たのかと思ふ。志賀がすつかり感心して、皆にすゝめて歩いてゐた。彼も借りてよんで隨分笑つて痛快にも思ひ、その自由さにおどろいた。

しかし彼は矢張りトルストイ一點張りだつた。二十才二十一才の時位い、いろ／＼の本をむさぼりよんだ時はなかつた。彼は又偉い人の傳記をよろこんでよんだ。

眞理より他、何ものも頭をさげない人々、それは彼を眞劍にさせ、ありがたがらした。

ソクラテス、エピテート、聖フランシス、ダンテ、近代ではエマーソン、カーライル、ラスキン、ゾラの傳記は彼を元氣づけた。

社會主義者には勞働者の爲に働く熱誠には尊敬を拂つたが、人間に生れたよろこびを増してくれない點と、個人の存

在を無視する価で彼を淋しくさせた。

彼はニイチエにも厚意をもつてゐた。それは自己を生かす爲に必要な要素がふくまれてゐたからである。

日本人では夏目さん、内村さん、樗牛を愛した。秋水には厚意をもつてゐたが、枯川にはその皮肉の淺さゝに愛想をつかしだした。

彼は平民新聞を定號とつてゐた。又その時分出た無我愛に注意をした。しかし彼は兩方にあきたらなかつた。彼を導くものはトルストイであつた。

八十八

その時分彼の級には文藝に興味をもつてゐる人が多かつた、志賀、正親町、木下（利玄）、の他四五人ゐた。彼はその仲間には入つてゐなかつたが、その仲間はよく芝居の話や、義太夫の話や、讀んだもの丶話をしてゐた。又授業の時間に紙切れに何かかいてはぐる〱まわしてよろこんでゐた。

當時の學習院程、呑氣な學校は少ないかと思ふ。殊に彼の級は呑氣もの丶あつまりで、席順の爭そひなぞする人はまるでなかつた、皆、たのしんでゐた、自分のしたいことをしてゐた。先生は先生で勝手に講義をする、生徒は生徒で勝手によみたいものをよんだり、考へたいことを考へたり、書きたいことをかいたりしてゐた。あてられて立つても、何處をよんでいゝか知らない連中が多かつた。彼もその一人だつた。

法學通論の先生が、彼に何か聞く、

「今日は調べて來ませんでした」と云ふと先生は笑つて、

「今日も、だらう」と云つた。

皆その先生をつかまへてはよく芝居の話をしてゐた。彼は芝居に行つたことは四つの時以後なかつたが、しかしさう云ふ話をきくのはすきだつた。

八十九

いつの時かはつ切り覺えてゐないが、彼と志賀とが邦語部の委員に撰ばれた。辯論部のことを學校では邦語部と云つてゐた。このことはなほ志賀と彼の間を近づけた。

ある輔仁會の大會の時だつた。

これはもう餘程あとのことだつたかも知れない。志賀は内村さんか夏目さんに演說をたのみたがつたが、學校で承知しまいと云ふので、上田敏氏ならいゝだらうと云ふので、他の人を通して演說をたのんだ。心地よく承諾を受けた。處が菊地院長から彼等はよばれた。そして文科の人の演說はどんなことを云ふかわからないから斷つて來てくれと云はれた。

二人は腹を立てたが、斷るより仕方がなくなつた。それで、志賀が彼の家にさそいに來て一諸に上田さんの處へことわりに出かけることにした。

その時、始めて志賀が、有島が西洋へ行つてから、本當に心を打ちあけて話す友達がゐないので、彼にさう云ふ友達になつてほしいやうなことを、何かの話のついでゞ云つた。

このことは彼には意外であつたと同時にうれしかつた。彼は志賀にはよき友の多いことを知つてゐた。志賀と有島の友情については彼は深かく傾徹してゐた。あれでこそ本當の友達だと思つてゐた。しかし志賀には有島以外にも多くの友があつて、親身になつてお互に助けあつてゐることを彼は知つてゐた。

處がその志賀から、彼は信用されたので、彼はよろこんだ。そして二人で興奮して、雨がざあ〳〵降る仲を、番傘一つをさして、話しつゞけて出かけた。電車にもわざとのらなかつた。

上田さんは氣持ちよく逢つて下さつた、彼等は來意を話した。上田さんは少しがつかりしたやうに見えた。「文學と貴族」と云ふ題で無難なことを饒舌らうと思つてゐたのにと云はれた。しかし學生の諸君には何とも思はないと云はれた。

そして彼はその時、西洋の文學の話を聞いて、マーテルリンクと云ふ偉い人のゐることを教へられた。二人は一時間許りゐて、又一緒に四十分程歩いて別れた。志賀とはその後よくゆきゝするやうになつた。

一方正親町ともよく行き來した。

九十

日露戰爭は段々ひどくなつた。或る日志賀は彼に「田村の處にトルストイから返事が來て、田村はすつかりよろこんでゐた」と聞かされた。

彼は隨分羨やましい氣がした。そしてトルストイが田村によんでくれと云つた本は大概彼のよんでゐる本だつた。自分の方が返事をもらう資格があるやうに彼は私かに思つた。

手紙を出すことさへ自分には恐ろしいが。

又或る時、眞面目になつて志賀は云つた。

「君は戰爭にとられたらどうする」

「僕はゆくより仕方がないと思ふ」

「僕は殺される方が本當ぢやないかと思ふ」
志賀はさう云つた。
彼は今志賀に死なれては困ると思つた。
志賀が自分よりも本氣なのに一方感心もしたが、
「だつて僕達はまだ生きてしてゆきたいことが多すぎる。今死んでも始まらない氣がする。死んで生るだけの力がまだない氣がする。戰爭で死ぬかも知れないが生きられるだけ生きたい。」
「しかし殺されるのが本當ぢやないだらうか」
それから志賀と最後の審判なぞについても話した。彼はそれを信じてゐなかつた。
內村さんの處に行つてゐた志賀は、七分か八分最後の審判を信じてゐた。
「最後の審判が本當なら、愛する人間は殺してゞも改宗さゝなければならない、しかし耶蘇教を知らずに生ゐてる人間が、地獄にゆくとは考へられない。そんな無情な神なら僕は愛するものと一緒に地獄に行つた方がいゝ」
彼はその時、お貞さんのことを考へてゐた。
志賀は何と云つたか、彼は覺えてゐない、
しかし戰爭は、彼等をとつかまへずにすんだ。しかしトルストイの日露戰爭についての論文や、ツウホボアの話なぞは彼に强い刺戟を與へた。
彼は人間が、人間と殺しあふことを是認するものを恐れた。
非戰論者よ。汝等こそ最先に戰爭へゆけ、

そして餓へよ、渇へよ、疲れ切れよ。目がさめたら、許してあげる。

九十一

彼は一時、性慾を惡と思ひすぎた時、人間を見ると、それ等が、兩親の性慾を滿したことを證明して歩いてゐる、はぢさらしのやうに思へたことがあつた。そして自分もその一人であると、思つたことがあつた。それは自然と云ふよりは概念にとらはれてゐたにしろ、さう思つてしまへば、さう思ふより仕方がなかつた。彼は今や、軍人を見るのが、淋しかつた。それは人間の價値を、おとして歩くものゝやうに思つた。軍人がふへなければ、平和がたもてないと云ふことは人間にとつて大なる侮辱である。又人命を重じられないことは、自分の生命を無視されてゐることを意味してゐた。それで武科の時軍人が參觀にくると彼は、武科をやすんで、圖書館のなかに逃げ込んだ。

彼は又分隊長になつて、下級生に武課を教へる時も、なるべく遊戲化したく思つてゐた。

彼は皆に走け足をさせた。そしてくたびれたものは片ばしからぬけていゝと云つた。

そしたら彼の怒らないことを知つてゐる、十三四の子供は、面白がつて一人ぬけ、二人ぬけして、とう／＼しまいに彼のあとをついてくるのは一人だけになつた。彼は内心よろこんだ。一人つれてかけてゐたが、それをもの好きすぎて氣を好むやうになるのが、いやなので、その一人に皆をよびにやつた。すると皆で列つくつて、彼の居ない方へどん／＼歩いていつた。

或時、彼は圓をかゝして歩かしてゐる時、右を外にして圓をかいてゐるのを見た時、いきなり、「右ぎ向け前へ」の號令をかけた。之は彼が夜目がさめた時、考へた遊びであつた。

左まわりに圓をかゝしてゐる時、右向け前へすれば、圓が大きくならなければならなかつた。開いたり、つぼんだ

り、大きい圓をつくつたり、小さい圓をつくつたりして遊ばうと思つた。

しかしそんな號令をかけたものはないので皆、噴き出してとまつてしまつた。

「云はれた通り右へゆけばいゝのだ」と彼は云つた。

そして皆、合點がゆくとよろこんだ。そして皆廣がつていつた時「廻り右き」をしたり、「右向け前へ」や「左向け前へ」をしたりした。

彼の小隊長や、中隊長は、彼と同級の人が多かつた、志賀や、木下が彼の方の小隊長だつたこともあつた。

彼は皆を歩かしてゐると、今まで出鱈目だつたのが、急に眞正面になつた。可笑しいなと思つたら、向ふから學生監がくるのだつた。彼は天探女の癖が出た。

「學生監が來たからと云つて態度をかへるのはよくない」と云つた。

中隊長の德川慶久が、彼に學生監の前だけはちやんとしてほしいと云つた。

「そんなことは出來ないよ」と彼は云つた。

木下が點をつける役だつた。

「君のは何點つけやう」

「八十點でいゝよ」

分隊長は八十點から九十點の間に相場がきまつてゐた。すると木下は正直に彼の點を「八十點」とつけた。

彼は自分の生活について益々考へるやうになつた。食客的生活、寄生的の生活、さう彼は自分の生活をよろこんでゐた。その生活が、彼の心を狹しくさせた。彼は狹しくない、耻かしくない生活がしたかつた。

それに又彼は時々耐えられない淋しさをうけた。お貞さんの夢を見た時は、どうしていゝかわからない程、淋しかつた。人間は失戀するものでないと心から思つた。しかし彼はそれを他の方法でまぎらすことは出來なかつた、たゞ眞劍になつて、人類の爲に役立つ生活に入ることでのみ、それにうち勝ちたかつた。トルストイは彼に彼の生活のまちがつてゐることをよく知らせてくれた。彼の尊敬する人々は皆、自分の確信の道を歩く人であつた。不正なことを知りながら不正の生活をつゞけてゆくことの出來ない人達だつた。

彼は最も優れた人間に自分を築き上げないでは我慢の出來ない人間だつた。三つ兒の魂は百迄と云ふが、彼は、自己を最も偉れた人間にしないではおかない氣は子供の時からもつてゐた。子供の時は大將になるつもりであつた。少年の時は中央亞細亞の王さんになることであつた。それから大宰相と文豪とを兼ねるつもりでゐた。今は彼は人道上の偉人になることであつた。文豪にも、大思想家にもなりたかつた。しかし彼はその方に十分の自信がなかつた。正しい人間になりたかつた。神と人によしと見られる生活がしたかつた。少くも砂の上の家に住んで呑氣にしてゐたくなかつた。まちがいのない土臺にたつて、そしてこの世のまちがいを助けない生活に入りたくなつた。しかしそれはどうしたらいゝかわからなかつた。

勞働者になりたいと思つたこともあつた、しかし彼の身體がゆるさないことを知つた。坊主にならうかとも思つた。しかしお經をよむのが馬鹿氣てゐた。乞食になることも考へた。しかし乞食になつて自分を生かし切れる自信はなかつ

た。何やつても、中途半端な人間になつて、一人前の人間になれさうもなく思つた。又自分の一分は生かせても、自分の全體は生かせないやうに思つた。

彼は熟す前に木からおちることを恐れた。其處に無理が出來、虚僞が生れ、長がもちがしないでは困ると思つた。その方へ行つてぬきんで、世界に一人の人のなすべきことだけなせると云ふ自信はもてなかつた。又自分の生活をかへることが恐ろしくもあつた。その恐れから生活をかへられないことが、又彼をよろこばさなかつた。

しかしその内に日はたつていつた。

彼はいろ／＼の本をよんだ、そして又何か常に書かうとした。しかし自信のあるものはかけなかつた。彼は日本にも今に偉い人が出るだらうと云ふことを恐れながら待つた。そして新しく出る本や、新しく出る雜誌は必ずよんで見た。しかし彼の求める人は見出せなかつた。彼は自分の師にすべき人を求めたがそれは見出せなかつた

或人、それは學習院の人ではなかつたが、内村さんの處へゆくことをすゝめられたが彼は斷つた。切角本をよむことをたのしみにしてゐる日曜にかゝさずに出かけるのはいやだつたから、又無責任な弟子になるのもいやだつたから、その時間でトルストイのものを二三頁でもよむ方が爲になると彼は思つてゐた。彼はトルストイのものを飜譯するのを自分の仕事にしたく思つてゐた。そしてトルストイ主義を人々につたへたく思つた。その時分、もし自分が今死んだら、葬式の金のかはりにトルストイの論文、「神の國は汝等のうちにあり」などを、譯してもらつて出版することにしてほしいと遺言しやうと思つた。

彼の友の一人は彼からトルストイのことを聞いて、トルストイの本をよんだ爲に家の人と議論して、衝突を起し、それも元因になつて隨分長い間神經衰弱になつた。

あとの話だが、彼がその人の母をたづねて、その人の容態を聞きにいつたら、

「あなたが武者小路さんですか」

とその母は云つた。

「あなたの處ではおよろしいかも知れませんが、私の處ではあんな考へを持たれては本當に困ります」とゝらまれたことがあつた。

しかし彼も、トルストイ主義では、母をよろこばしはしなかつた。（つゞく）



妓李十

室生犀星

一

金陵はもとより花のみやこなれば、町すぢ正しく家家のいらか鱗のごとく光り、赤亞白屋まぶしきまでなり。されば大門口武定橋をわたれば公達若殿おもひおもひに衣裳を凝らし、やむごともなき茶莉花（ちやらんくわ）の香をしたひ集りぬ。家家の風雅なる玄關の半ばは開かれ、珠箔を懸け、式臺には鳥兒の聰しげなる黒瞳がうごき、椽廊のかたへに籠中せる鸚鵡は客あるごとに茶もつて來おと啼く。まづ假母はしり出で迎へ、これを丫鬟にわたし、丫鬟は重く柔らかき緞張のとばりより、美しき纒足こよなく小さき太夫を引いて、しづかに座にさだまる。太夫はすでに蘭湯に入りたる後なれば、ほのかにも妙なる蘭花茶莉の匂ひ、あたりの空氣にもつれ、紅き耳のみぞ灯に榮えたる……。

むかし秦淮のほとり、倭汝晶といふ眉目秀麗の青年がゐた。金陵の妓李十といふ、耳の紅い女と一夜したしんでから、ほとんど毎夜のやうに李十の方から逼つてきたのである。十二時のひけ過ぎから、彼女はいつも倭汝晶の裏門をほとほと細く叩いて、一夜として訪ねてこないことがなかつた。ふしぎにその肌を合すごとに、いつも冷たく、むかし洛中を串して引いて歩いた人魚のやうな、ひやりとした潤澤の氣を感じた。

倭汝晶は、その肌の冷たいのは、多くの客席の數重なるためと、ほとんど温まることのない忙化の生活がさういふ風にするのであらうと考へてゐた。がその不本意は止みがたい焦燥によつて抱きすくめる毎に強まつた。ときとすると珠玉のやうに滑らかではあつたが、又それのやうに冷たさが滲み透つてゐた。ときには凝え、ときには氷のやうに鋭どく、金屬のやうに心まで冷やりとした。倭汝晶は、それを感じるごとに深い哀感と物足りなさとを彌增すばかりであつた。

鷄籠や西寺の山の上に、白い寂しい點綴を朝暮にながめるやうになつてから、彼女の肌といはず、手や足、耳まで凍みつくやうになつて、逢ふごとに倭汝晶の心を傷めた。秦淮の農家の庭に飼ふ鷄は夜々鋭い冬來の喉を冴えさせ、さぶしい村落の蒼い夜ぞらにひびくやうな夜がつづいた。

倭汝晶は、或る夜、卵のやうに美しい女の肌を抱きながら、しかも卵のやうに冷たさを感じながら、ほそほそと李十の耳にささやいた。

「おん身の肌はなぜこのやうに冷たいのだ。殆、ひと夜として温かくあつたことがない。忙化の席に苛まれてか。それともおん身は既うその温かみを永く失さしてしまつたのか。」

李十は、魚のやうにするどい目を上げ、倭汝晶を打ち眺めた。この國の可憐な女のもつ優しい寂しげな光は、もは

や李十の眼底にはなかつた。苦勞と隱忍と、妓だちがもつ深い執念とが、この男の前では、むしろ純にあらはれてゐた。

「そのやうなことは訊ねてくださいますな。どうぞ。」

「何故。」

「どうしてもお答へはできません。」

倭汝晶は、さういふ李十がうつ向いて、夜目白な皮膚に滲つたものをおとし、やがて泣き出したのをなだめた。

「わしが惡かつた。毎夜二時間しか眠らないおんみが、その時間をわたしのところへ持つてきてくれるのに、……わしはつまらぬことを云ふた。どうかゆるしてくれ。」

「いいえ。」

李十は、濡れた目で、哀しげに瞬き、凄艶として凭れかかつた。

「あたくしはよく眠ります。そのやうな勿體ないことを仰有つてくださいますな。あなたこそ秦淮の荒い夜露に徐晩のやうにお打たせしてすみません。」

若い倭汝晶は、豪家に育つたものの有つ蒼白な皮膚を、彼女に寄せ愍しがつた。自分の體のあらんかぎり憐れなこの女體をしばらくでも溫めてやりたいといふ、細微な思ひやり深い戀人同士の相知る感情を、その冷たい肢體にあててやつた。數多い金陵の素客のすげなく彼女を扱ふことを考へると、このやうに冷え亘るのも理りのやうに思はれた。倭汝晶の永い抱擁はしだいに彼女をあたためたが、はんたいに倭汝晶の肌はうつすりとつめたさが行き亘つた。

「はじめて板橋で會つたとき、おん身は溫かいからだをもつてゐた。わたしは、あのころのおん身をかうしてゐても

存りに考へられてならぬ。」

「そのことを云ふて下さいますな。」

倭汝晶は、ふたたび口を噤んだ。女は、絶え絶えな蟲のやうにやさしげに欷り泣いた。倭汝晶は、その肩に手を遣つて靜かにたづねた。

「なぜ云ふてはならぬ。おん身よ。これほど愛しと思つてゐるわたしに、ただ一つ、そのことが氣がかりだ。米麾山がまだ青かつたころから唯の一夜として逢ひにきてくれなかつた晩とてはないが、いつほんのりした温氣さへあつたことがない……。」

李十は、うつ向いたなり、自分の肌の冷えを自分で感じてゐたが、どうしてもその譯がいへなかつた。

「いまにきつと温かになります。きつと。それまでお待ち下さいまし。」

彼女は、さういふと悲しげに微笑んで、黑子がふしぎに脣端の紅みにうかんでゐるのを、しづかに倭汝晶によせて見せた。

倭汝晶は、やつと氣付いた。

「脣だけが温かい。おん身よ。わたしは既うそれだけでもよい。」

李十の顔はすこし明るくなつた。男のままにさせながら、低い聲で幾度も訊ねてくれるなとささやいた。倭汝晶は、やつと生きてゐるやうな思ひで、新しい舌裏から滲み出る唾液の、みづみづした生きをむさぼつた。

いつの間にか、水の上に乳いろと藍とをまぜた夜あけがたのあかるみが、最うそろそろ這ひはじめてゐた。

李十は、いそいで男のそばを離れた。そのとき倭汝晶は、この上ない蒼褪めた李十の顔をいまさらのやうに夜明けち

かい光の裡にながめた。

「また明晩。」

「………。」

倭汝晶は、あたらしく頬ずりしたあと、いつもの約束どほりに、わざと見送りをせずに裏門へはいつた。そのとき李十はまだ垣外からうす暗い姿を立たしてゐた。水蓮の腐れかかつた酸い枯葉の匂ひが、母屋へわたらうとする庭のあたりに、佗しくかれをおそふた。

二

倭汝晶の親しい友人は、或日、光巷の艶話をつづけながら、そのかみ一緒に招じた李十のことに及んで恁う付け加へた。

「あの女は毎夜この村へ忍んでくるさうだ。對手は誰だか知らないが、引け過ぎから夜明方まで男に逢ふために彼の女は殆一睡もしないさうだ。其のためか彼の女は蒼い顔をしてゐる。」

倭汝晶は、さういふ友人の皮肉な蔑視に、思はず顔をそむけながら、やはりさり氣ない態をよそほふた。

「さうか、おれは初めて聞くくらゐだ。對手は誰だらう。」

「對手は？」

友人は、さもしい一笑の後、わざと、顔を振つて見せた。

「それはおれも知らない。唯、あの女は毎晩河を渡つてくるのださうだ。それを見たものさへある。」

「どうして河をわたるのだ。」

倭汝晶は、からだが冷たくなつた。

「どうしてつて渡船の綱を手頼つて此岸へ泳ぎつくのださうだ。寂光の常夜燈をめあてに。」

友人は、倭汝晶の、それとなく蒼ざめた顔を見ながら、益々皮肉に顔をゆがめて微笑した。光巷で、この友人と張り合つて、李十をお互ひの手に入れようとした幾夜とない苦しい散財をつづけたことを、倭汝晶は思ひうかべた。

「それゆえ彼の渡船の綱を切つてしまへば來なくなるわけだ。」

倭汝晶は、さういふ友人の顔をいまは露骨にきびしい眼ざしで眺めた。

「それで君はそれを切る氣かい。」

友人は、倭汝晶の明らかに焦々してゐるのとは反對に落着いて、むしろ冷か過ぎる口調で答へた。

「いや人間にはさういふ氣持ちもあるといふことに過ぎない。別に切りはしない。」

倭汝晶は默つてゐるうち、友人は、さう言ひ棄てて歩み去つた。

倭汝晶の心は沈んだ。あのやうな急奔の瀬を能く渡つてきたものだ。ひと足ちがへばそれきりだ。それゆえ、あのやうに李十の肌は冷たかつたのか、かれは左う思ふと、最う晩景の沈丁色にしづんだ光巷の街を伏し拜むやうな溫かい感謝の熱を體内に感じた。

その夜、定刻よりずつと遲れ、しかも非常な勞れを感じさせるやうな呼吸づかひで、李十は、悄然と待つてゐる倭汝晶の肩にもたれた。かれは、いつもより優しげに女をいとしがつた。

「よく來てくれた。變化りはなかつたか。」

何氣なくさう言つた倭汝晶を、李十は、ふしぎさうな、れいの、びつくりしたやうな鮒のやうな黑い瞳ざしで見上げ、

しづかに頭をふつて見せた。

「いいえ、どうしてそのやうなことをお訊ねになります。」

倭汝晶は、暫らく考へた後、けふ友人から聞いた話をした。

「おん身がそのやうにしてまでわしに逢ひにきてくれるとは知らなんだ。それゆえ心なくおん身の肌の冷たいことまでを責めたのだ。」

倭汝晶は、また附け加へた。「どうか今までのことはゆるして呉れ。」

李十は、うつ向いて、何にもこたへずにさめざめと啼き出した。せつかく自分が隠れてしてゐることを露かれた嬉しさと恥かしさに、最う泣くより外にしかたがなかつた。それが柔しい女性の本當であるやうに、かの女はしくしく、草叢の蟲にもまがふやうな聲で噎び泣きをした。

「そのやうな無理をしてくれると、しまひにからだをこはして了ふ。」

倭汝晶の感激は、さぶしい詠嘆にちかいまで滅入り込んでゐた。そのほそぼそとか弱い頸足や肩すぢを撫で、冷厳な荒水に砥ぎつけられた肌を、自分のそれによつて温めなぐさめた。

「おん身の失ふたものを、このわたしから受け取つて呉れ。おん身よ。それがわたしの望みだ。」

李十は、冷えた肌をよせ、その温かい倭汝晶のからだに取縋つた。そして再たあらたに啼き出した。かの女に、ただ氷魚のやうに冷たくなつてゐた。

「何故、そのことをわたしに話してくれなかつた。してくれればわたしは彼の様におん身を責めるやうなことが無かつたのだ。」

倭汝晶の此の問ひは、李十の面を染めさせた。

「いいえ、あたくしは唯はづかしくて申されませんでした。女の身として河をわたることなぞ……。」

「なぜ恥かしいことがあるものか。」

かれは再び李十に頬ずりをした。精神から入つた恍惚とした瞬間は、ふたりの眼ざしを閉ぢしめた。相抱擁の後、すべての戀人同士がするやうに、美しい夜ぞらの星をかぞへたり、馴れる雜草の穗を拔いたりした。なにごともこの優柔しい可憐な女の身の上に起るな、倭汝晶の心は、それを幾たびも繰り返しながら呼んだ。

三

その翌晩、倭汝晶は、渡船の綱のあるあたりへ出かけた。かれの心の奥には、李十がどうして渡河するものであるかを知りたかつたのである。彼女にまつはるさまざまな細部まで知り悉したいやさしい心は、倭汝晶のなかにうづまいてゐた。

向岸に人影がした。それが暗い水あかりにまつはる空あかりのなかに、靜かに盃平として動いてゐた。倭汝晶の心は悸ついた。靑冷な川波は、一本の綱を縫ふやうにして泳いでくる白い肉體を映したからである。白裸は波と波との間にべつべつに影をおとすため、影は影でまたいろいろな飛沫ともつれ合つて白く冴え鋭い白鶴の長い首すぢのそれのやうに、柔らかくしんなりと二本の腕は、縫ひゆく女針のやうに綱をわたつてくるのであつた。

倭汝晶は、呼吸を飲んで、曾つてみたことのない戀人の白裸をながめた。ところどころ不思議な明りに浮き出された輪廓は、きらりとした刄がしらのやうに光つては濡れ消され、また鮮明な盛りあがるにくたいを描いてゐた。倭汝晶は、高い昂奮と感激のために、いまは草むらに隱れてゐられなくなつた。かれは、小高い石の上に立つて、かの女の名

前を呼んだのである。

李十は、綱のなかばで、その美しいからだを凝乎と停めた。それが自分の戀人であるといふ確かに認められなかつたため、あまりの恥かしさに、渡河をなかばにして引き返さうとしたのである。そのとき倭汝品はなほ鋭どく幾たびとなく叫んで見せた。すると川の瀬に揉み消されながらも低い笛のやうな李十のこゑがこたへた。倭汝品は、なほ高く叫んでみた。

李十は、岸につくと、すぐ高い草叢の片かげに身をかくし、頭にむすんだ着衣をとり下ろした。夜がふくむ蒼みある暗のあいまに、美しい肢體が、燦然と、濡れてゐるため、瓔玉のやうな光を束の間ちらつかせた。

「こちらへおいでになつてはなりません。いえ、なりません。」

李十の、そのこゑがあえぎながらして來た。倭汝品は、もの言へず宇頂天になつて、石の上から聲をかけた。

「なぜ行つてはならない。わたしは始めておん身を見た。うつくしいおん身を見たのに。なぜ近づいてはならないのだ。」

「…………」

「わたしはそばに行きたい。おん身はどうしてそれを止めるのか。」

李十は、それには答へずに、その着衣をからだに纏はせ、草むらからしづかに姿をあらはした。倭汝品は、走り寄るとその冷たい手を把つた。

「なぜかういふ恥かしいところを見てくださいました。」

李十は、さういふと蒼白い顔に微笑はうかべてゐたが、恥かんで、すぐうつ向いてしまつた。

「こんなに冷たい水に、おん身はよくもからだを浸したものだ。」

かれは蹲んで、その靑冷の水にふれてみた。指頭は、いちどきに痺れるやうな冷たさに、じんとうづいた。

「あたくしはもう慣れてしまひました。何とも思ひませぬ。」

倭汝晶は、今夜は、ふしぎに李十の脣までが冷えてゐるのを憐れにかんじた。かれは自分の體溫を、ふうはりと毛布のやうに、李十のそれに纏はせた。

そのとき空に雁行の影がした。李十は、それをみると震えた。なぜか倭汝晶も同樣の悪寒をそのうす暗い影と、あたりの荒涼とした風景の枯淡とから感じた。ふたりは期せずしてしつかり身を寄せた。

「冬が來たら――。」

倭汝晶は、云ふまいと思ひながら、つい口辷りした。

「寒くなつても何とも思ひません。あたくしはやはりあそこから參ります。いままでのやうに。」

李十は、長い一條の、逡巡した渡船の綱をゆび指して見せ、嫣然とした。倭汝晶は、わけのわからない恐ろしさを、李十からでなく、別なそこらのくら闇に蹲まつてゐるものから感じるやうな氣がした。それほど漠然とした恐怖がはじめて、なにものかの執念から分割され、自れを刺すのをかんじた。かれは不思議な對手からうつつてくる冷たさのために、しくしくした腹痛をさへ感じるやうになつたのである。

「水が氷つてしまふ。とてもあそこからは來られない。」

さういふ倭汝晶を、彼女は、そつとおさへるやうな底強い語氣でさへぎつた。

「いいえ、あたくしは參ります。きつと。」

李十の、きらきらした眼底には、もの怖ぢしない光が沈湎して動かなかつた。その答へは倭汝晶をむげに寂しがらせた。言葉でつくせない或るしつこさが、かれを默つて仰倘かせた。

李十は、倭汝晶の默つてゐるのを見ると、そつと耳もとに口をつけ、低いこゑでささやいた。

「あたくし參つては惡うございますの。それとも。」

「さういふことはない。唯、冬が來て凍つたらおん身はどんなに酷からうと、わたしはそれを憂慮してゐるのだ。」

倭汝晶は、周章ててさういふと、こんどは正面に李十の顏をみぬやうにした。すうと蒼白い顏が絕えずうづまいてゐるやうな氣がして、すこし、ややうそ寒さをかんじた。

二人は、いつになく緘默して、穗枯れした菅立たしい一叢を隔てて、氣まづく相對してゐた。わけのわからない寂しい氣持ちで、それがコヂれたまま、心の底に沈んで浮きあがらなかつた。

李十は、しくしく啼き出した。倭汝晶は、肩に手を置きながら何を言つても、かの女の啼く聲がとまらなかつた。かれは、手のつけやうのない李十を茫然とながめ出した。ずつとからだの奥からさして來た倦怠の氣が、生ぬるくかれを覆ふた。

「そのやうに啼かないでください。人がくるといけない。」

「……」

李十は、襦子袖口で、くちを覆ふたが、なほ悲しげに低う絕え絕えにすすり啼いてゐた。倭汝晶は、ボツンと佇立したまま、自らを哀しむやうな表情をしてゐた。

四

しぐれの雨があられになり、氷はいたるところの涂の上に光る夜が、一日づゝ深くなつて來た。それでも、李十は、一夜としてたづねてこないことがなかつた。倭汝晶は、その氷のやうな手にふれることさへ、いまは恐ろしい氣がした。かれは最早裏門を閉ざして、垣外に出ぬやうな晩があつた。水鷄のやうな忍びやかな、ほとほと細かく忍びやかに戸叩く音がつづいたが、倭汝晶は、居間深く籠つて、その蒼白な魚體のやうな冷たい李十を厭ふ心に充ちてゐたのである。

さういふ晩は、絶えがちな音をつづかせると、夜明方近くなつて、默つてかへつてゆくらしかつた。門前に小さな靴音をかぞへながら、倭汝晶は、それに目を移すさへ厭な氣もちのことが多かつた。逢へば別れるまで啼くばかり、それの豫感のためにも、倭汝晶の心は冷えた。が、それにも拘はらず繁く來る女は、ほとんど逢はずにかへることが多かつた。その事に慣れてしまつた倭汝晶は、温かい床中で、凍えふるえる女の聲を、裏門にすさぶ木枯の風のあいまに聞きとがめてゐた。

或る朝、川下で一人の女體の溺れてゐることが、かれの下僕に依つて、かれの寢床へつたへられた。倭汝晶は、それを何氣なく聞いてゐた。果してあの女であるかないかも判らなかつた。昨夜たづねて來たかどうかさへ、深々と寢込んでゐたかれには覺えてゐなかつたのである。

五

倭汝晶は、れいの渡船の綱を、その朝、始めて手にふれて見た。それは氷つてつるつるしてゐた。かれは、自分の掌がもんどり打つて、綱から反れたとき、惡寒をかんじた。瀬は迅く蒼かつた。――倭汝晶は、夜のくらみのなかに流された李十のからだを、いまは完全に目にえがくことができたのである。そのとき不思議な安々した廣い氣持ちが、すがすがしい新鮮な空氣のやうにかれのからだを流れた。かれは不思議に哀感なしに川の上をながめたのである。

(十月十一日田端にて)

編輯を了へて

□射透すやうな秋の輝いた日の光、我等が澄み切つた理想、一徹な心意氣を表象するやうに見える。

□下劣な地上の醜惡、それは權力に餓えたるロイド・ジョージ如きものそれである、その日、その日を榮躍らしく、得意らしく暮す彼等の心には詩の世界はない、理想の憧憬はない、自由の生活はない、特に來らんとするノースクリフなぞは何の理想があるか、彼の經營せる數十の新聞に統一もなく、渾純もなく、それは權力の權化であつて、眞理の權威ではない、我等はこれを卑む。

□それよりは、力こそ弱けれ思想こそ新らしくなけれ、詩の世界に生きるクローデルの東京入りが雅びておる。

□德川、加藤の兩全權は十月十五日、我等の期待の一つも持たずに鹿島丸に乘船してしまつた、眞に我等の理想とは丸つ切り沒交涉に。そしてその船の中には日本の偉大と云ふもの一つも加へずに。

□我等は少くとも、波多野精一、戶田海市兩氏の一人、就中波多野氏が全權の一人に加えらるることを祈つた、それは氏の如き世界的思想に富みそして宗教的に、哲人的に歐米の政治家を指導し得る權威者を特派したかつた、然るに加藤、德川の如き世界人として何等の抱負なく、實力なき人を特派するなぞ、現代政治には先づ、柄相應のことか。

□教育費の削減で、其處、此處の教員連中が青息吐息の姿だこれで大かた中橋タンもお暇が出る幕ぢやないか、ダガ今の教員諸君が血の出るやうな現代の世相に當面して、そして何等の活氣のないのは事實だ。

□賀川豐彦君の東京に於ける九月から十月にかけての活動は目覺しいものであつた、帝大、慶大、早大、青山學院、明治學院、三崎會館、青年會館（三回）富士見町教會等約二十回位の講演、それも五十錢の會費を徵收して札止めの盛況、北海道でも農大その他にて七八回の講演を試みた。

□同人室伏は目下巴里にあり彼は十月に入つてから獨逸で大活動を始めた、その露國入りはドウやら危いものだが、しかしそれに變る大快報を齎らすだらうと思ふ。橫關も病息つて十月の始めに退院したしかし當分は湘南の假設を伴として徐々に病を養ふつもりだ。他の社員は元氣過ぎるほどの元氣だ、いつもハチ切れるやうな勇氣を漲えておる。

改造定價

册數	定價	郵稅
壹册	八拾錢	貳錢
半ケ年	五圓六拾錢	增大號共郵稅不要
壹ケ年	拾壹圓廿錢	增大號共郵稅不要

註文の注意

▲御注文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す
▲增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す
▼外國よりの御注文は壹部につき郵稅金拾錢を申受く
▲見本御請求の向は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用一割增の事
▲御拂込は振替によらるゝを最も便利とす

大正拾年拾月廿日印刷納本
大正拾年拾壹月一日發行
（定價八拾錢）

編輯兼發行者　東京市芝區伊皿子町四十番地　平田貫一郎
印刷所　東京市京橋區西紺屋町二十七番地　秀英舍
發行所　東京芝區櫻田備前町一　改造社
電話銀座二九五四
振替東京八四〇二

神戸勞働運動の立役者賀川豐彦君入京、

東京朝日著者を評して曰く

大持ての人氣なりと、一時簇出せし自薦爭議リーダーの類は漸く自然淘汰せられて、眞摯なる分子の認められ來たるは勞働界の爲め喜ふべし。（大正十年九月二十日）

讀賣新聞曰く

原敬氏を豪くした現代と、賀川豐彦氏を有名にした現代とは、同じ現代であるから不思議のやうであるが、それは華盛頓會議を冷やかに眺める人々に、全く反對の思想と感じとがあるやうな不思議さであらう。

「死線を越えて」といふ小說が洛陽の紙價を支へる力はなかつたが、僅か一年に百五十版といふ賣行を示してゐることに一の重大な社會的意義を發見しない政治家は現代の政治家でない。

賀川氏の小說は小說といふよりも寧ろ勞働經典である。勞働者に對する

◇東京芝區櫻田備前町　改造

愛と犧牲とが態とらしい迄に英雄化されてゐるが、夫れが悉く實生活の裏書があるから吾人の『我』が折れて自然に頭を低れざるを得ない。藝術的の價値をいふ人にはいふべき理由もあらう。實は吾人も賀川氏の人道的生活が文字に飜譯して見れば幾らか價値を減ずるのを遺憾とする意味に於て、此の小說に少しく不滿を感ずるに過ぎない。

官僚や資本家等は今の勞働者は本當に覺めてゐないといふ。然し彼等は勞働者が小說を讀むことを知らない。所謂危險思想の書物や雜誌よりも、勞働者の小說によつて教育される程度は却つて深みもあり、徹底味もある。『死線を越えて』が賣れるのは此の意義に於て、驚異すべき事柄である。

賀川氏は目下續篇を書いてゐるがコレには貧民窟にあらはれた十年間の日本の經濟生活が描かれるといふ。コレだけでも神戸の勞働爭議は無意義に了つたのでないであらう。（大正十年九月廿三日）

新社會の基礎

中澤臨川著
山本鼎裝釘
定價金貳圓卅錢
書留送料拾五錢

東京芝櫻田備前町壹番地
改造社
振替東京八四〇二番

科學者の立場より新たらしく出現さるべき社會に對して考察された權威ある著書である「嵐の前」の姉妹篇として、より科學的に、より條理正しくかゝれた本書は正に中澤君の全人格を打込んだ生涯中の尤も力の籠つた論策である、社會各方面の改造を高唱せんとするものは先づ秩序的條理の整然たる本書を閲讀するの要がある。

璧の哲學書出づ◇

阿部次郎

執筆者

リッカートの歴史哲學（目下印刷中 十二月發賣）	文學博士	米田庄太郎
ニイチエの文化哲學	文學士	和辻哲郎
新ヘーゲル派の法律哲學	法學士	恒藤恭
ラッセルの哲學及社會思想	文學士	土田杏村
ディルタイの哲學	文學士	勝部謙造
リッカートの哲學	商學士	杉村廣藏
題未定	文學士	錦田義富
コーエンの哲學	文學士	岡野留次郎
新カント派の歴史哲學	文學士	板垣鷹穗
近代の藝術哲學	文學士	植田壽藏
マイノング對象論	文學士	務臺理作
ヴインデルバント リッカート價値論	文學士	河瀬憲次
マッハの哲學	理學博士	桑木彧雄

中澤臨川著

◆四六版函入天金
◆定價金貳圓
◆送料金拾四錢

東京市芝區櫻田備前町
改造社
振替東京四八〇二

嵐の前

好評拾版

人格の人として、熱情の思想家であつた中澤君の「嵐の前」は本日遂に第十版を發行するに至つた、こんな氣高く戀愛を取扱つた小説が他にあらうか、そしてこんな情熱の迸りが滾々と流れる才筆が又と世にあらうか、そこに描き出だされた情熱の思想家ニイチエの一面が天才的に——純人的に——全紙に躍動してゐる姿は全く臨川天來の筆にあらずんばよく能はざる所である、日本ニイチエ——中澤君の遺稿はこの一篇によつて北斗の星の如く高く光るやうになつた。

THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF POLITICS. LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS. ETC.
PRICE: EIGHTY SEN A COPY. TWELVE YEN A YEAR
OFFICE: KAIZOSHA, 1 SAKURADABIZEN-CHO SHIBA, TOKIO

大正八年三月廿一日第三種郵便物認可
大正拾年拾壹月一日發行（毎月一回一日）
大正拾年拾月廿日印刷納本　第參卷第拾貳號　拾壹月號
定價　金八拾錢